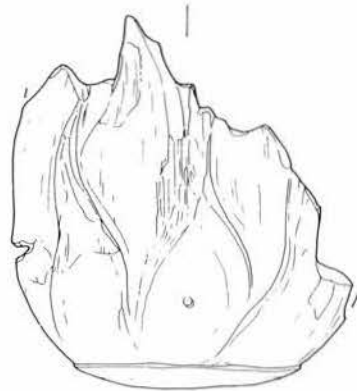


鎌倉市二階堂
国指定史跡

永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備
事業に係る発掘調査概要報告書
—平成6・7年度—



平成8年3月

鎌倉市教育委員会

序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 米倉雄二郎

鎌倉は海と山に囲まれた美しい自然の中に、中世を始めとする豊かな歴史的遺産を伝えています。

この恵まれた環境は、私たち鎌倉に住みあるいは関わりを持つものにとって、大きな誇りとなっています。これらを後世に正しく伝え、また現在の生活の中に活かしていくことは、私たちの責務と考えています。

史跡永福寺跡は鎌倉幕府を開いた源頼朝が建立した寺院の跡であり、その規模や歴史的な性格から中世鎌倉を代表する遺跡といわれています。

この貴重な遺跡を永く保存していくため、鎌倉市教育委員会では史跡の公有化をはかってきました。さらに昭和57年度からは、史跡永福寺跡整備委員会を設置し、環境整備事業に取り組んでいます。

現在はその第一段階として、昭和58年度から発掘調査を行っています。これまでに中心的な堂である三堂等の建物の跡と、広大な苑池の様子の一部が明らかになりました。

今回は平成6年度と7年度の報告を収録しています。6年度調査では、橋の北側の汀線と庭石列、遣り水・阿弥陀堂背後の堀と道路・溝を確認することができました。また7年度調査では二階堂川からの取水溝・釣殿前面に延びる巨石を配した岬を検出しました。岬に置かれた石は一つが2mもの大きさがあり、中世前半の庭園遺構としては国内随一の規模を誇るものです。鎌倉幕府の力がいかに大きかったか知られるようです。

今年度はこの他「史跡永福寺跡保存整備基本計画」の検討を行ってきました。今後どのように整備を進めて行くかの具体的指針となるものです。基本計画については平成8年度中にまとめて行きたいと考えています。

今後も発掘調査を行って永福寺の全容を明らかにすると共に、基本構想を踏まえて整備事業を行い、できるだけ早い時期にみなさんに利用していただけるよう努力してまいります。

今年度は従来に増して多くの方々のご助力を賜りました。整備委員会の各委員・文化庁・神奈川県教育委員会文化財保護課をはじめ関係各位には、ご指導、ご助力を賜りましたことを厚くお礼申し上げますとともに、来年度以降も引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

例 言

1. 本報は国庫及び県費補助を受けて、平成6・7年度に実施した神奈川県鎌倉市二階堂所在「国指定史跡永福寺跡」の環境整備事業に係る発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施し、史跡永福寺跡整備委員会・文化庁・神奈川県教育委員会文化財保護課の指導・助言を受けた。
3. 本報の執筆は、平成6年度分の第1章、2章を福田 誠が、第3章一瓦・石塔を菊川 泉が、かわらけ・陶磁器・木製品・金属製品を神山晶子が、第4章は調査員全員の討議のもと福田が文責を負った。平成7年度分の第1章、2章を福田が、第3章を菊川・神山が分担し、第4章は調査員の討議のもと福田が文責を負った。本報使用の挿図及び図版作成は、調査員・調査補助員が分担しこれにあたり、編集は福田が行った。
4. 本報に使用した遺構の全景写真は、主に木村美代治がリモコン式高所撮影装置を使い撮影した。平成6年の第1・3調査区、平成7年度の真上からの全景写真は(株)シン技術コンサルが撮影したものを使用した。また遺構の個別写真は福田、菊川が撮影し、遺物写真は木村、菊川が撮影した。
5. 平成6年度・平成7年度の各附編は、各年度の調査に伴う苑池内堆積土の花粉分析と、出土材の樹種鑑定を(株)パレオ・ラボに委託したものである。
6. 平成6年度の第1調査区、第2調査区、第3調査区の遺構の平面実測原図(S=1/20・1/100)及び第3調査区の景石立面原図(S=1/20・1/100)、平成7年度調査区の平面実測原図(S=1/20・1/100)及び取水遺構と景石の立面原図(S=1/20・1/100)は、(株)シン技術コンサルに委託したものである。
7. 本報中で使用している岩石の名称は、鎌倉で一般的に呼ばれている俗称を使用した。
土丹…泥岩、鎌倉石…凝灰砂岩、伊豆石…安山岩
8. 本報中で使用している遺構名等の名称は、昭和58年度より毎年刊行している『永福寺跡発掘調査概要報告書』中で統一して使用している名称と同一のものである。
9. 表紙の蓮華蕾(花卉部木質黒漆塗り萼部金銅製)は、平成6年度第3調査区池中で出土したものである。S=1/2

10. 発掘調査の体制

平成6年度

調査主体 鎌倉市教育委員会(担当 三橋嘉孝、玉林美男)

主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会囑託)、木村美代治

調査員 菊川 泉、神山晶子、本城 裕

調査補助員 小西さつき、竹村栄子、梅野麗子、橋本陽子、立上 修、藤崎由里

作業員 (財)鎌倉市シルバー人材センター

平成7年度

調査主体 鎌倉市教育委員会(担当 三橋嘉孝、玉林美男)

主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会囑託)、原 廣志、木村美代治

調査員 菊川 泉、神山晶子、本城 裕、小林重子、須佐直子

調査補助員 小西さつき、汐見尚子、加藤恵子

作業員 (財)鎌倉市シルバー人材センター



遣水（東から）



苑池汀



蓮華蕾 (花卉部木質黒漆塗り) 萼部金銅製)



全景



取水遺構



岬の石組み

— 平成6年度分本文目次 —

第1章 調査の経過	1
第1節 調査区の設定	1
第2節 各調査区の層序及び概要	1
第2章 検出された遺構	3
第1節 第1調査区で検出された遺構	3
第1面の遺構	3
(1) 溝	3
a. 2溝最上層	3
b. 2溝上層	3
c. 5溝	4
第2面の遺構	4
(1) 溝	4
a. 2溝下層	4
b. 3溝	4
c. 4溝	4
d. 5溝(Ⅲ期以降の遺水)	6
e. 7溝(Ⅰ期・Ⅱ期の遺水)	6
(2) 柱穴	6
第2節 第2調査区で検出された遺構	6
(1) 溝	6
a. 2溝	6
b. 3溝	8
(2) 目隠し堀	8
(3) 道路	8
(4) 雨落ち溝	10
第3節 第3調査区で検出された遺構	10
(1) 苑池	10
a. Ⅳ期の苑池	10
b. Ⅲ期の苑池	10
c. Ⅱ期の苑池	10
e. Ⅰ期の苑池	13
(2) 切石の溝	13
第3章 出土した遺物	13
第1節 第1調査区出土遺物	13
(1) 瓦	13
(2) 瓦以外の遺物	22

a. かわらけ・陶磁器・砥石・木製品	22
b. 石塔	28
第2節 第2調査区出土遺物	28
(1) 瓦	28
(2) 瓦以外の遺物	28
a. かわらけ	28
第3節 第3調査区出土遺物	29
(1) 瓦	29
(2) 瓦以外の遺物	29
a. かわらけ・陶磁器・金属製品・石製品・漆製品	29
b. 木製品・漆製品	32
c. 部材	37
第4章 まとめ	37
附編 史跡永福寺跡の花粉化石	40

— 平成6年度分挿図目次 —

図1 調査地点及び周辺地形図	1
図2 第1調査区土層断面模式図	3
図3 第1調査区、2・3・4・5溝土層断面図及び水溜め遺構図	5
図4 第1調査区、遣水流路と北翼廊合成図	7
図5 第2調査区土層断面模式図	8
図6 第2調査区、複廊・阿弥陀堂・南翼廊合成図	9
図7 第3調査区土層断面模式図	10
図8 第3調査区、苑池汀・切石溝と橋遺構合成図	11
図9 第2・3調査区・第3調査区I期汀確認トレンチ土層断面図	12
図10 第1調査区A面まで 瓦	14
図11 第1調査区A面まで 瓦	15
図12 第1調査区瓦溜り 瓦	16
図13 第1調査区B面まで 2溝（水溜遺構北側）	17
図14 第1調査区2溝上層・3溝 瓦	18
図15 第1調査区2溝最上層・2溝下層 瓦	19
図16 第1調査区 石塔	21
図17 第1調査区A面上層遺物包含層・A面構成土及びB面	23
図18 第1調査区2溝上層、下層・2、3溝上流 瓦以外	24
図19 第1調査区3溝・2区 瓦以外	25
図20 第2調査区 瓦	27
図21 第3調査区A面まで 瓦	30

図22	第3調査区A面まで 瓦	31
図23	第3調査区A面まで 瓦以外	33
図24	第3調査区トレンチ 瓦以外	34
図25	第3調査区 木製品	35
図26	第3調査区 部材	36
図27	各調査区位置図	41
図28	試料採集位置図	41
図29	第2調査区2溝の試料採集位置図	42
図30	苑池部(第3調査区)の主要花粉化石分布図	48
図31	3溝(第1調査区)の花粉化石分布図	50
図32	3溝(第2調査区)の花粉化石分布図	50
図33	2溝(第2調査区)の花粉化石分布図	51
図34	遣水部(第1調査区)の花粉化石分布図	51
表1	永福寺跡出土材の樹種	43
表2	史跡永福寺跡の産出花粉化石一覧表(その1:苑池堆積物)	46
表3	史跡永福寺跡の産出花粉化石(その2:2溝、他)	47
附図	平成6年度、第1調査区・第2調査区・第3調査区全測図	

— 平成7年度分本文目次 —

第1章	調査の経過	57
第1節	調査区の設定	57
第2節	層序及び概要	57
第2章	検出された遺構	57
第1節	検出された遺構	
庭園		57
a.	IV期-1面	59
b.	IV期-2面	59
c.	IV期-3面	60
d.	I期・II期・III期	60
第3章	出土した遺物	62
(1)a.	宝永面覆土・IV期-1面覆土、直上出土遺物	62
b.	IV期-2面覆土、直上出土遺物	64
c.	IV期-3面覆土、直上出土遺物	70
d.	池中覆土・取水遺構・トレンチ出土遺物	72
(2)	瓦	76

第4章 まとめ	79
附編 史跡永福寺跡の花粉化石	80

— 平成7年度分挿図目次 —

図35 調査地点及び周辺地形図	58
図36 土層断面模式図	59
図37 取水遺構・岬（Ⅳ期－2面・Ⅳ期3面）変遷図	61
図38 宝永・Ⅳ期－1面覆土出土遺物	63
図39 Ⅳ期－2面覆土出土遺物（かわらけ）	65
図40 Ⅳ期－2面覆土出土遺物（国産陶器）	66
図41 Ⅳ期－2面覆土出土遺物（漆器・木製品）	67
図42 Ⅳ期－2・3面覆土出土遺物（かわらけ・舶載陶磁器・手あぶり・その他の遺物）	69
図43 Ⅳ期－3面覆土出土遺物（漆器・木製品）	71
図44 池中覆土・取水遺構・トレンチ出土遺物	73
図45 瓦	77
図46 瓦	78
図47 試料採取位置図	80
図48 深掘部の土層断面図	81
図49 試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準	81
図50 A地点の主要花粉化石分布図	84
図51 B、C地点の主要花粉化石分布図	85
図52 D地点の主要花粉化石分布図	86
図53 苑池D地点における珪藻化石群のダイアグラム	89
表4 苑池堆積物の算出花粉化石一覧表	83
表5 苑池D地点における珪藻化石の算出状況	88
表6 苑池D地点算出の大形植物化石一覧表	91

附 図 平成7年度、全測図

— 写 真 図 版 —

平成6年度

- 口絵1 遺水
- 口絵2-1 苑池汀
- 口絵2-2 蓮華蕾（花卉部木質黒漆塗り萼部金銅製）

平成7年度

- 口絵3 全景
- 口絵4-1 取水口
- 口絵4-2 岬の石組み

平成6年度

- 図版1 第1・2・3調査区、調査区開始前現況
- 図版2 第1調査区、A面全景・瓦溜り
- 図版3 第1調査区、B面全景
- 図版4 遣水
- 図版5 2・3・4溝
- 図版6 第2調査区全景・目隠し塀・道路・複廊雨落ち溝
- 図版7 第2調査区、2・3溝
- 図版8 第3調査区全景
- 図版9 第3調査区全景
- 図版10 苑池汀、景石、蓮華蕾（花卉部木質黒漆塗り萼部金銅製）出土状況
- 図版11 IV期苑池
- 図版12 III期苑池汀・埋められたII期苑池汀
- 図版13 第3調査区内トレンチ
- 図版14 第1調査区、A面上層遺物包含層 瓦
- 図版15 第1調査区、A面上層遺物包含層 瓦
- 図版16 第1調査区、A面瓦溜り
- 図版17 第1調査区、A面構成土及びB面上層・2溝最下層 瓦
- 図版18 第1調査区、2溝（水溜遺構北） 瓦
- 図版19 第1調査区、2溝上層 瓦
- 図版20 第1調査区、2溝最上層・3溝 瓦
- 図版21 第1調査区、石塔
- 図版22 第1調査区、A面遺物包含層・A面構成土及びB面上層 瓦以外
- 図版23 第1調査区、2溝（水溜遺構北）・2溝最上層 瓦以外
- 図版24 第1調査区、2溝最下層 瓦以外
- 図版25 第1調査区、3溝 瓦以外・第2調査区、瓦以外
- 図版26 第2調査区、瓦
- 図版27 第3調査区、瓦
- 図版28 第3調査区、池中A面上層遺物包含層 瓦以外
- 図版29 第3調査区、トレンチ上層・下層
- 図版30 第3調査区、木製品
- 図版31 第3調査区、部材
- 図版32 第3調査区、部材
- 図版33 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石

- 図版34 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石
- 図版35 永福寺跡出土木材樹種の顕微鏡写真
- 図版36 永福寺跡出土木材樹種の顕微鏡写真

平成7年度

- 図版37 永福寺跡・調査地全景
- 図版38 取水遺構
- 図版39 岬石組み
- 図版40 岬石組み・遺物出土状況
- 図版41 調査完了時の全景
- 図版42 出土遺物(かわらけ)
- 図版43 出土遺物(手あぶり・国産陶器)
- 図版44 出土遺物(舶載陶磁器・その他の遺物)
- 図版45 出土遺物(木製品・漆器)
- 図版46 出土遺物(瓦)
- 図版47 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石
- 図版48 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石
- 図版49 珪藻化石
- 図版50 永福寺池の大型植物化石1.
- 図版51 永福寺池の大型植物化石2.
- 図版52 永福寺出土木材の樹種

— 平成6年度の調査 —

第1章 調査の経過

第1節 調査区の設定

平成6年度の発掘調査は、整備委員会の指導助言に基づき、「苑池の調査」「遣水の調査」「堂舎背後の調査」を主な目的に、3ヶ所（第1調査区、第2調査区、第3調査区）の調査地点を設定した。

第1調査区は昭和62・63年度に調査を行った北翼廊の北側に設定した。この位置は昭和62年度と平成元年度、4年度に確認した堂舎背後を北から南に流れる2本の溝と道路、63年度に2ヶ所の注ぎ口を確認した遣水の流路が確認できるものと推定した地点である。この第1調査区は整備地内に20m方眼で設定している測量グリッド杭のA-2、B-2・3・4に囲まれた平面三角形の範囲で、調査対象面積は478.9㎡である。

第2調査区は昭和59・60年度に調査を行った南複廊、阿弥陀堂、南翼廊の西側に設定した。この位置は南北に連なる伽藍と西側の山に挟まれ、第1調査区と同じように昭和62年度と平成元年度に確認した伽藍背後を北から南に流れる2本の溝と道路、目隠し塀等が確認されると推定した地点である。この第2調査区は測量グリッド杭G-3、H-3、I-3に囲まれた範囲で、調査対象面積は184.1㎡である。

第3調査区は昨年、平成5年度の調査区の北側に設定した。この位置は、昨年度確認した苑池を横断する橋の北側にあたり、東側汀線が引き続き確認できると推定した地点である。第3調査区はグリッド杭D-5・6・7、F-5・6・7に囲まれた範囲で、調査対象面積は337.8㎡である。

3ヶ所設定した各調査区の面積の合計は1040.8㎡である。

整備計画地内に6地点設定してある『永福寺跡測量基準点』（平成元年度設置）の内、第1調査区と2調査区はNo.2 ($X=-74891.062$ $Y=-23790.173$ $H=19.680$)、No.5 ($X=-74875.810$ $Y=-23882.056$ $H=21.532$)、第3調査区はNo.6 ($X=-74812.178$ $Y=-23894.588$ $H=22.882$)を今年度の測量原点と定め、各調査区の測量グリッド杭を設定した。

平成6年8月1日より、第1～第3調査地点の位置出し測量等の現地調査を開始した。そして平成7年2月6日までに機材を撤収し調査を終了した。

第2節 各調査区の層序及び概要

第1調査区

遺構埋没深度は地表から約1.2～1.4mである。表土の下には、近年まで営まれていた水田の耕作土・床土（極めが細かく粘性に富んだ灰色粘土）が約1mの厚さで堆積している。耕作土・床土の下には、北西に位置する西ヶ谷から流水によって運ばれた青灰色の土砂、砂泥、小砂利が複雑に入り組んで堆積している。この耕作土中の海拔20.3m前後（調査区中央付近）と21.2m前後（北西隅、西ヶ谷入口部）のほぼ全域で、宝永年間（18世紀初頭）に噴火した富士山のスコリア（F-HO-1）が検出されている。

第2調査区

遺構埋没深度は地表から約1m程で、岩盤を削りだして平坦にした遺構面の海拔19mは前後である。ただし岩盤面直上まで、後世の耕作土である灰色粘質土に覆われ遺構面の遺存状況は悪い。第1調査区と同じように、第2調査区でも遺構面直上で宝永年間の富士山スコリアが観察されていることから、この場所で遺構そのものを削平してしまうような大規模な耕作は、永福寺廃絶から宝永年間の富士山噴火までの約300年間に行われたと推察される。

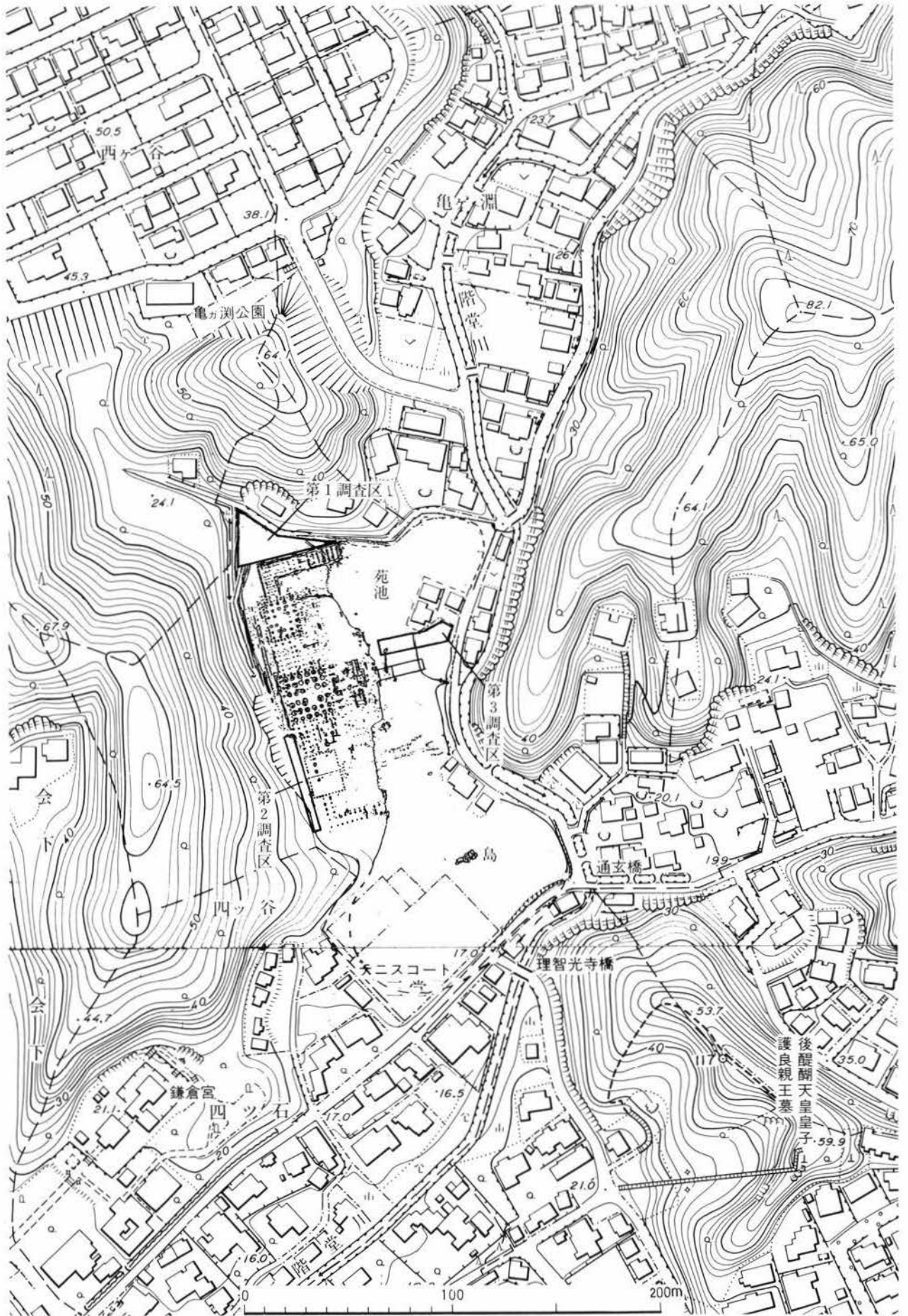


図1 調査地点及び周辺地形図

第3 調査区

遺構埋没深度は地表から約1.2～1.6mである。表土の下には近年、宅地造成のために盛られた盛土と、昭和40年代まで営まれていた水田の耕作土・床土が堆積している。宝永年間の富士山スコリアが、海拔19.1m前後で、調査区のほぼ全域で確認されている。この遺構面上に堆積する土砂の大半が永福寺廃絶以後、中世から近世にかけての水田及び畑の耕作土である。また苑池遺構の堆積土の大半は、池中に流れ込んだきめの細かい灰色の砂質土、粘質土等で非常に柔らかく粘性が強い。

第2章 検出された遺構

第1節 第1 調査区で検出された遺構

第1面の遺構

(1) 溝

a. 2 溝最上層

調査区の西側の山裾に沿って幅約1m、深さ30cmの溝状の窪みを長さ約20mに渡って検出した。位置から考えて2溝の最終末の姿と考えられる。新旧の遺物が混在し溝の時期は決めにくいが、Ⅲ期の瓦・15世紀代のかわけが出土し、また浅く埋まった部分が多いところから永福寺の廃絶期間際、15世紀中頃以降の流路と考えたい。

b. 2 溝上層(新)

主要伽藍の背後、西側の山裾に沿って幅約1.7m、深さ約70cmの断面箱形の溝を調査区の西壁沿いに南北約20mに渡って検出した。Ⅲ期に開削された2溝は、14世紀中頃に溝底を人頭大の土丹を敷き詰めて埋め立て全体を浅くしている。この溝は山裾に沿って延び、断面形が箱形になることから、これまでの調査で(昭和62年度、平成元年度、平成4年度)検出・確認している2溝と考えられる。2溝は伽藍背後を北から南に流れる排水のための溝である。

・瓦溜り

2溝上層の時期に伴う遺構で、北から南に流れる2溝の東側の土手に瓦を敷き込んでいたものである。この瓦溜りの中からⅢ期の剣頭文字瓦が出土したことから、14世紀中頃に土手の補修のために瓦を敷き

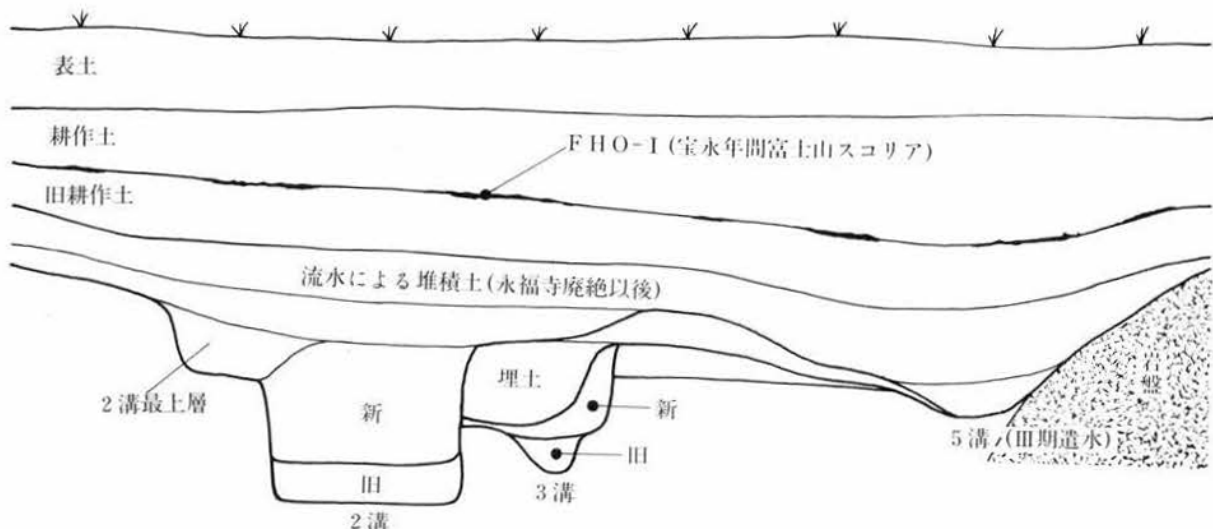


図2 第1 調査区土層模式図

込んだものと思われる。

c. 5溝(Ⅲ期以降の遣水)

Ⅲ期に創建期からの流路(7溝→5溝)を付け替えた遣水は、14世紀中頃以降(2溝の上層に伴う時期)には水が流れていた痕跡があるが遣水として機能していたかは不明である。永福寺廃絶以降は、遺構面全体が流水による土砂で覆われて急速に埋没したようである。この流水による土砂の中から五輪塔の石材が出土し、中に明德3年正月26日(1392年)銘の地輪がある。

第2面の遺構

(1) 溝

a. 2溝下層(旧)

2溝上層は人頭大の土丹塊を敷き詰めて溝底を埋めかさ上げしていた。この土丹塊を取り除き、幅約1.7m、深さ約1mの断面箱形の溝を南北約20mに渡って検出した。これまでの調査で検出した2溝は岩盤面を断面箱形に穿っていたが、第1調査区で検出した2溝は岩盤上面に堆積している黒色及び灰黄色の地山を箱形に掘り窪め、西側の山裾に沿って水流を北から南に流していたと思われる。西ヶ谷の入口にあたる調査区の北端の溝の底面レベルは19.7m、南端の底面レベルは18.8mで、北端と南端の落差は90cm程である。

この2溝下層からⅡ期の瓦が出土することから、開削されたのは13世紀末～14前葉(下層の時期)で、溝底を土丹塊で埋め立て、溝を浅くして使用した14世紀中頃以降(上層の時期)の2時期に大きく分けられる。そして永福寺が廃絶した15世紀中頃(最上層の時期)まで使われた溝と考えられる。

b. 3溝

2溝に平行して西側の山裾に沿って、幅約1.3m、深さ約80cmの断面V字形の溝を南北約20mに渡って検出した。2溝にほぼ平行していること、断面の観察から2溝に先行して開削された溝で、2溝の開削時に埋め立てられたことから、これまでの発掘調査(昭和62年度、平成元年度、平成4年度)で検出、確認した3溝であると考えられる。3溝は2溝と同じく伽藍背後の排水のためと考えられる溝で、西側の山裾に沿って水流を北から南に流している。西ヶ谷の入口にあたる調査区の北端の溝の底面レベルは19.7m、南端の底面レベルは19.3mで、北端と南端の落差は40cm程である。

・沈殿遺構

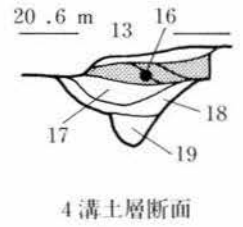
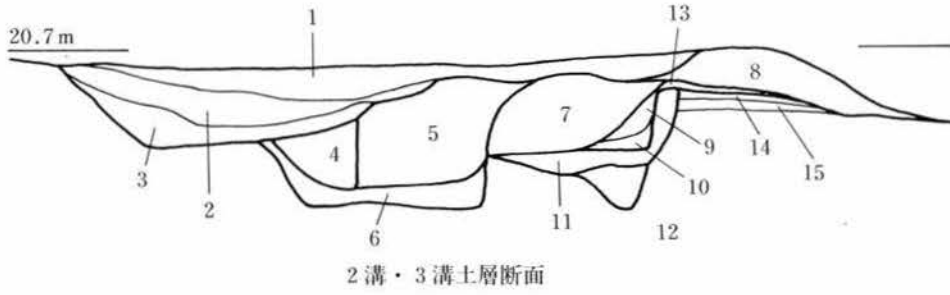
3溝の始まる北端で長径約1.3m、短径約1mの、平面楕円形で、深さ約1.6mの井戸状の遺構が検出された。内部はフラスコ状に広がり、粗い砂、水摩して角の取れた土丹、同じく水摩して角の取れたⅠ期の瓦片が堆積していた。遺構の上部は埋め戻された時に投げ込まれた30～50cm大の土丹塊が多く見られた。内部は流水によって浸食されてフラスコ状に広がり、粗い砂、水摩した土丹、瓦が堆積していること、3溝の始まり部分に位置することから、用途は西ヶ谷の流水中の土砂を取り除くことを目的に、掘り込まれた沈殿槽の可能性が考えられる。

・堰

3溝の沈殿遺構の東の脇で、1辺の長さ16cmの断面四角形の柱根と1辺の長さ24cmで面取りのある柱根が検出された。この2本の柱根は3溝に伴うものと考えられる。脇にある井戸状の沈殿遺構と組み合わせ水溜め、遣水に水を流す等水量調整を行った「堰」に関係したものと考えられる。しかし沈殿遺構の西側は2溝の開削時に削平され、堰の柱根等のこの他の遺構は確認していない。

c. 4溝(創建期に伴う排水溝)

堰の柱根の東側で黒色粘質土の地山面を断面V字形に切り込んだ溝を検出した。この溝は地山面を掘



2 溝・3 溝土層断面

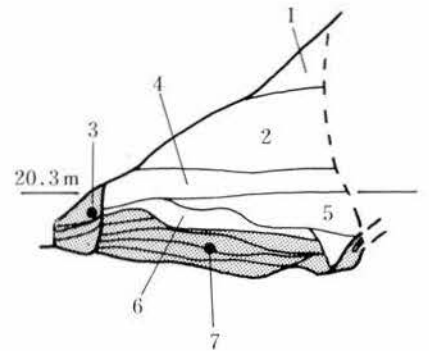
4 溝土層断面

- 1 明茶灰色粘質土層(土丹粒、砂利を含む)
- 2 茶灰色土層(5~10cm大の土丹を含む)
- 3 暗灰色砂質土層(締め良い)
- 4 暗茶褐色土層(やや粘性が強いが締め悪い)
- 5 茶灰色粘質土層(1~2cm大の土丹粒含む)
- 6 黒色砂泥層(2~30cm大の土丹、及び瓦片、砂利含む)
- 7 茶灰色砂質土層(拳大の土丹を多く含む)
- 8 暗褐色粘質土層

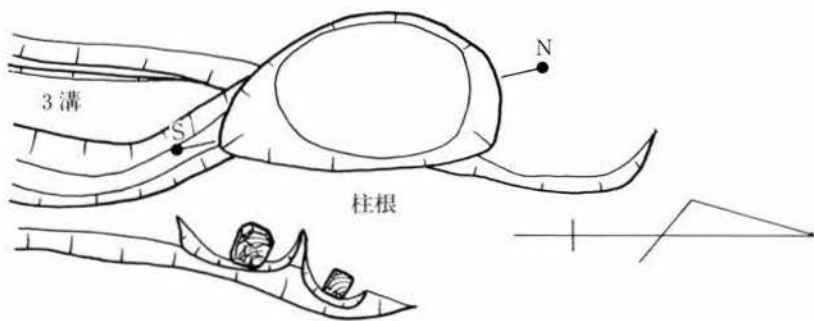
- 9 黒灰色土層
- 10 灰色粘質土層
- 11 暗灰色砂質土
- 12 暗褐色砂質土層
- 13 明茶灰色砂質
- 14 黒色粘質土層
- 15 暗褐色粘質土層
- 16 暗灰色砂層の互層
- 17 暗茶灰色土層
- 18 黒色土層
- 19 黒色弱粘質土層



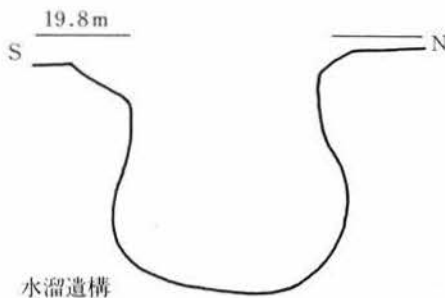
2 溝



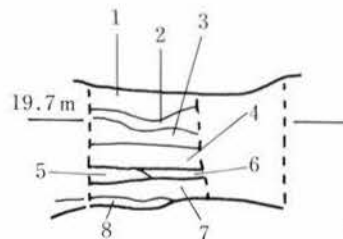
5 溝土層断面



- 1 表土
- 2 明茶灰色土層
- 3 明茶灰色粘質土層(水田水路)
- 4 明茶灰色粘質土層
- 5 暗灰褐色粘質土層・砂
- 6 10cm大までの土丹粒と砂層
- 7 暗灰色砂層の互層
- 8 黒灰色砂層



水溜遺構



7 溝土層断面

図3 第1調査区、2・3・4・5・7 溝土層断面図及び水溜遺構

り込んでいること、遺物を含まないことから昭和62年度と昭和63年度の調査で検出確認した創建期に伴う4溝と推察した。しかし遺構面保護のため、溝の流路は掘り上げていないことから委細は不明である。

d. 5溝（Ⅲ期の遺水）

調査区の北壁に沿い、S字状に蛇行するごく浅い溝を長さ約30mに渡って検出した。溝は西ヶ谷の流水を苑池まで引き込んだ遺水と思われる。溝は素堀で、幅は広い所で約3m、狭い所で約1.8m、深さは約15～20cm程と浅く、翼廊に近い下流部には所々に1m前後の大きさの景石、庭木（松の根株）が据えられ、上流部でも蛇行する溝の曲がり角の位置に景石を据えていたと思われる浅い窪みが見られることから、遺水の廃棄後に岸边にあった多くの景石は抜き取られたものと推察される。この溝は北翼廊の先端部手前で廊の下に潜り込んで行った。Ⅰ期（12世紀末）、Ⅱ期（13世紀中）に北翼廊の北側から苑池にそそぎ込んでいた遺水の流路を、Ⅲ期になって、北翼廊の下を通すように流路を変更していることが昭和63年度の調査で確認されている。このことから今回検出された溝は、廊の下に潜り込んで行くⅢ期の遺水の流路であると考えられる。

遺水は調査区の北西端で確認した西ヶ谷の入口部分の水路に端を発するものと思われる。この水路は岩盤を穿った幅約30cm、深さ20cm程の溝である。途中伽藍背後の溝（2・3溝）と分流されるが、分流してから遺水が始まると考える。遺水の始まる上流付近（グリッドB-3杭の北側）の溝底の海拔レベルは約19.8m、昭和63年度に調査した翼廊の下から苑池にそそぎ込む落とし口の海拔レベルは約18.7mで、遺水の始まる上流部分との高低差は約1.1mである。この間の直線距離は約35mであることから、遺水はおおよそ100分3勾配で作られたものと考えられる。

e. 7溝（Ⅰ期・Ⅱ期の遺水）

昭和63年度に苑池に突き出す北翼廊の北側で、石を組み合わせた落ち口を検出・確認した溝である。今年度の調査区の東端から流路の続きが検出されるものと思われた。しかしⅢ期に流路を変更したときに埋め込まれ、上に貼られたⅢ期地業面の遺存状況が良好なため、整備委員会の指導により小さなトレンチを入れ確認しただけに留めた。この第1調査区の東隅に設定したトレンチ内でも、7溝の流路は堅固なⅢ期地業面の下に埋め込まれ、北側の溝に向かって浅く落ち込んで行くのが確認されただけである。このことから、北翼廊の先端から北西方向に延びて行くと思われる7溝の本流は、北翼廊の脇から調査区の北壁の下を通り、Ⅲ期遺水の流路が中門の脇で廊の下に潜り込む位置で合流するものと推察した。

（2） 柱穴

B-3グリッド周辺で、蛇行して流れるⅢ期遺水の脇で検出した柱穴群である。小規模の掘立柱建物等になる可能性もあるが、柱間等均一でないことから仮設の小屋（作業所、資材置き場）もしくは、棧敷の様なものかもしれない。

第2節 第2調査区で検出された遺構

（1） 溝

a. 2溝

第1調査区でも検出した2溝を、第2調査区の南西隅で、東側の肩のみ南北15mに渡って検出した。南端で確認した2溝の底面のレベルは海拔17.8mで、第1調査区の北端の海拔（19.7m）と比べると、2点間の距離は直線で約120m、標高差は約1.9mになる。

西側の山裾は斜面が崩落する危険があるために掘削を行わなかった。第2調査区で2溝を検出したことにより、昭和62年度、平成元年度、平成4年度調査と併せてほぼ伽藍背後の山裾の調査が完了した。

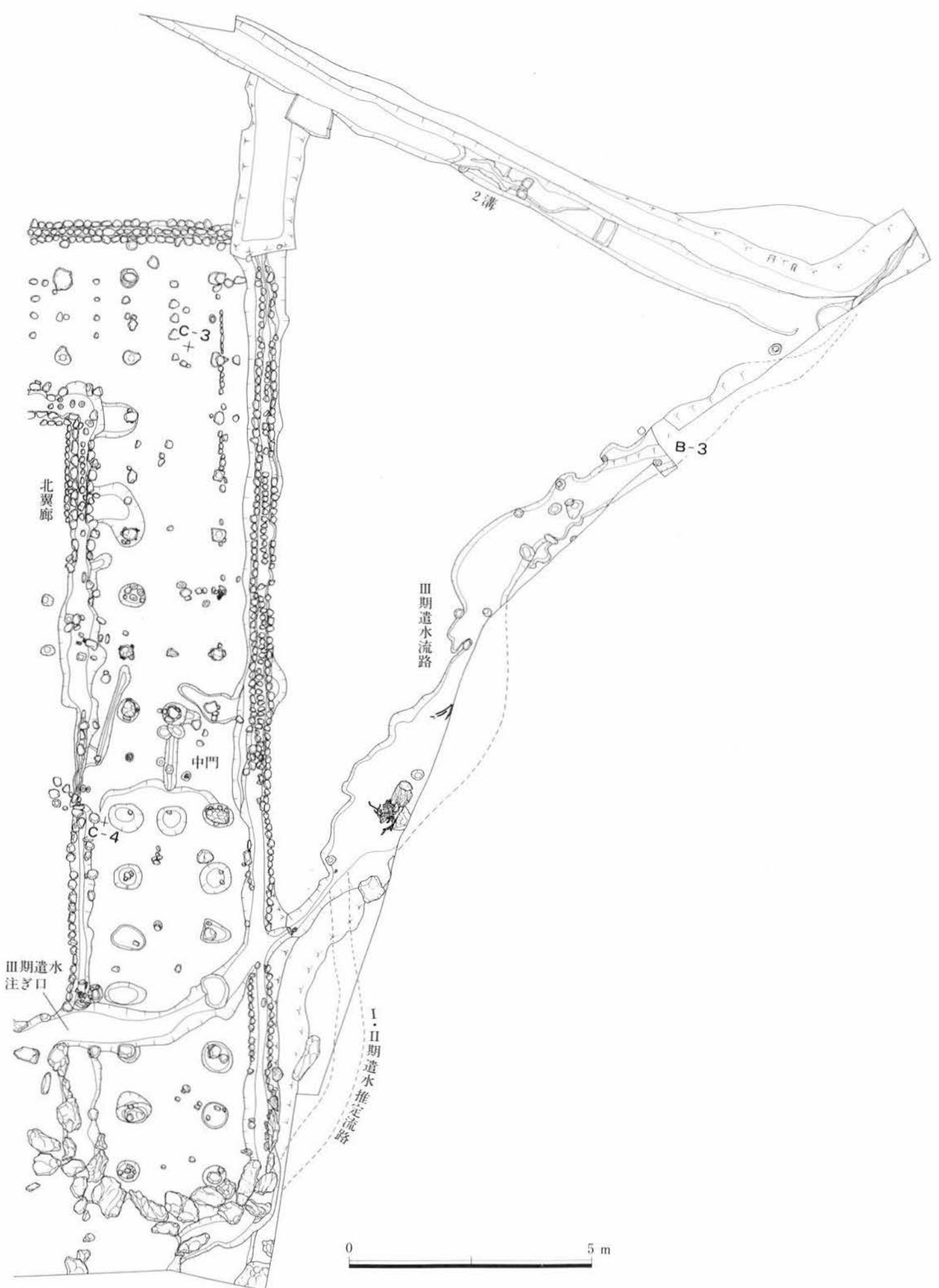


図4 第1調査区、遺水流路と北翼廊合成図

2 溝は山裾に沿って直線的に北から南に延びていることが確認された。

b. 3 溝

第2調査区の南西端で長さ約6m検出した。しかし流路の大半は、3溝より規模が大きい2溝が開削されたときに削平されてしまったものと思われる。

溝の規模は、幅1.2m、深さ約40cm、断面U字形の溝で、溝の底面レベルは海拔18.6mである。第2調査区で3溝を検出したことにより、これまでの調査で確認している3溝が、伽藍背後を北から南に延びていることが確認された。

(2) 目隠し塀

第2調査区の中央部で、南北方向に延びる柱穴列を約35m検出した。柱穴の間隔は2.0~2.1mで一直線に17穴検出確認した。柱穴は直径約30cm前後、深さ約70cmで、岩盤面を穿ち柱を立てていたようである。伽藍背後の空間を二分するよう南北方向に直線で延びて行く柱穴列は、平成2年度の調査時にも確認されている。このときに検出確認した柱穴も、伽藍に平行して南北方向に直線的に設定されていた。柱穴列は南複廊から阿弥陀堂の背後にかけて検出されているが、南翼廊の背後では検出されていない。

(3) 道路

第2調査区の北側、平坦な岩盤面上に長さ約13m、幅約3mの南北に細長い範囲で遺存する砂利敷き面を検出した。この検出した砂利敷き面は、平坦に削りだした岩盤面の上に貝混じりの砂を敷き詰め、この上面に砂利を撒き散らし叩き締めたものである。叩き締められた砂利敷き面は、伽藍に平行して南北に延びる目隠し塀の柱穴間を結んだ線より東側（伽藍側）には広がらない。またこの砂利敷き面の西側には、北から南に向かって流れる2・3溝がある。平行して塀と溝が南北方向に向かって築かれてい

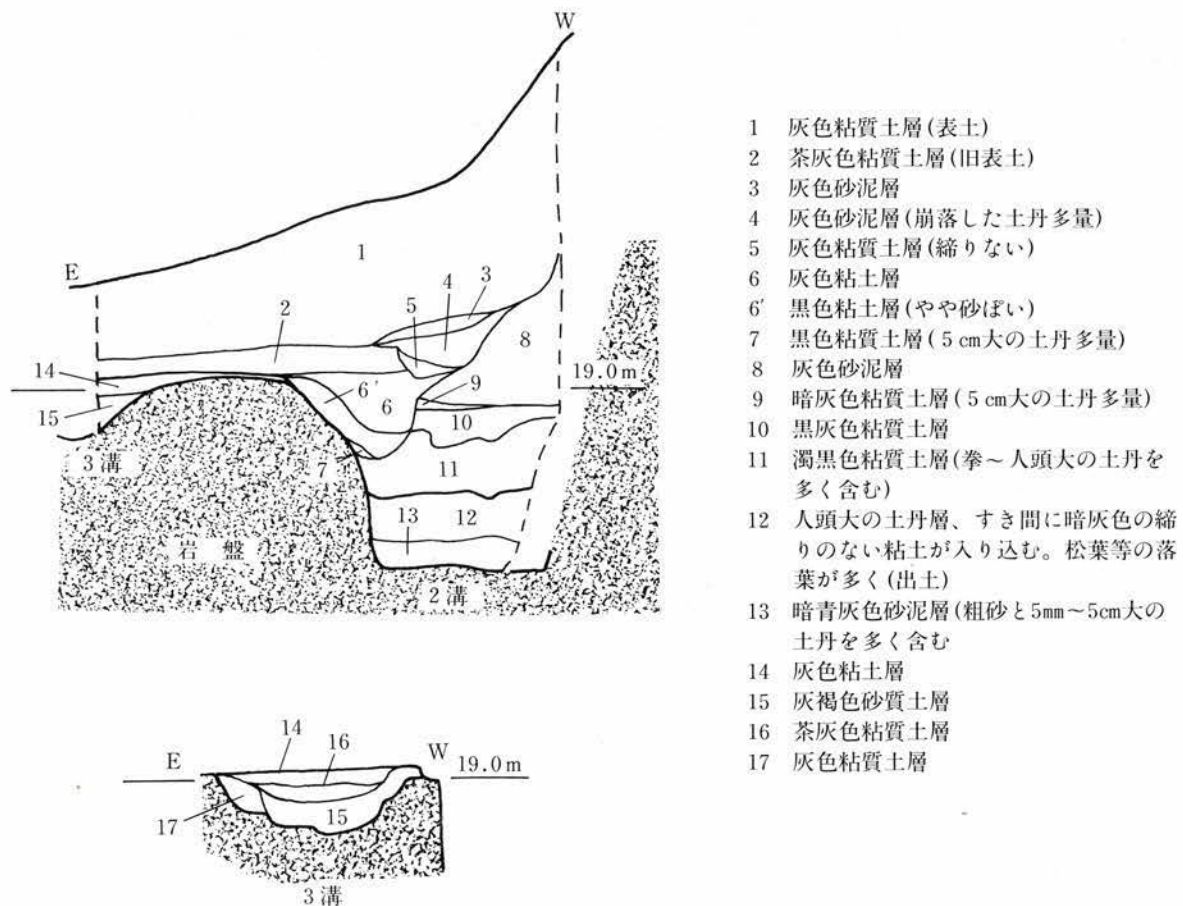


図5 第2調査区、2・3溝土層断面図

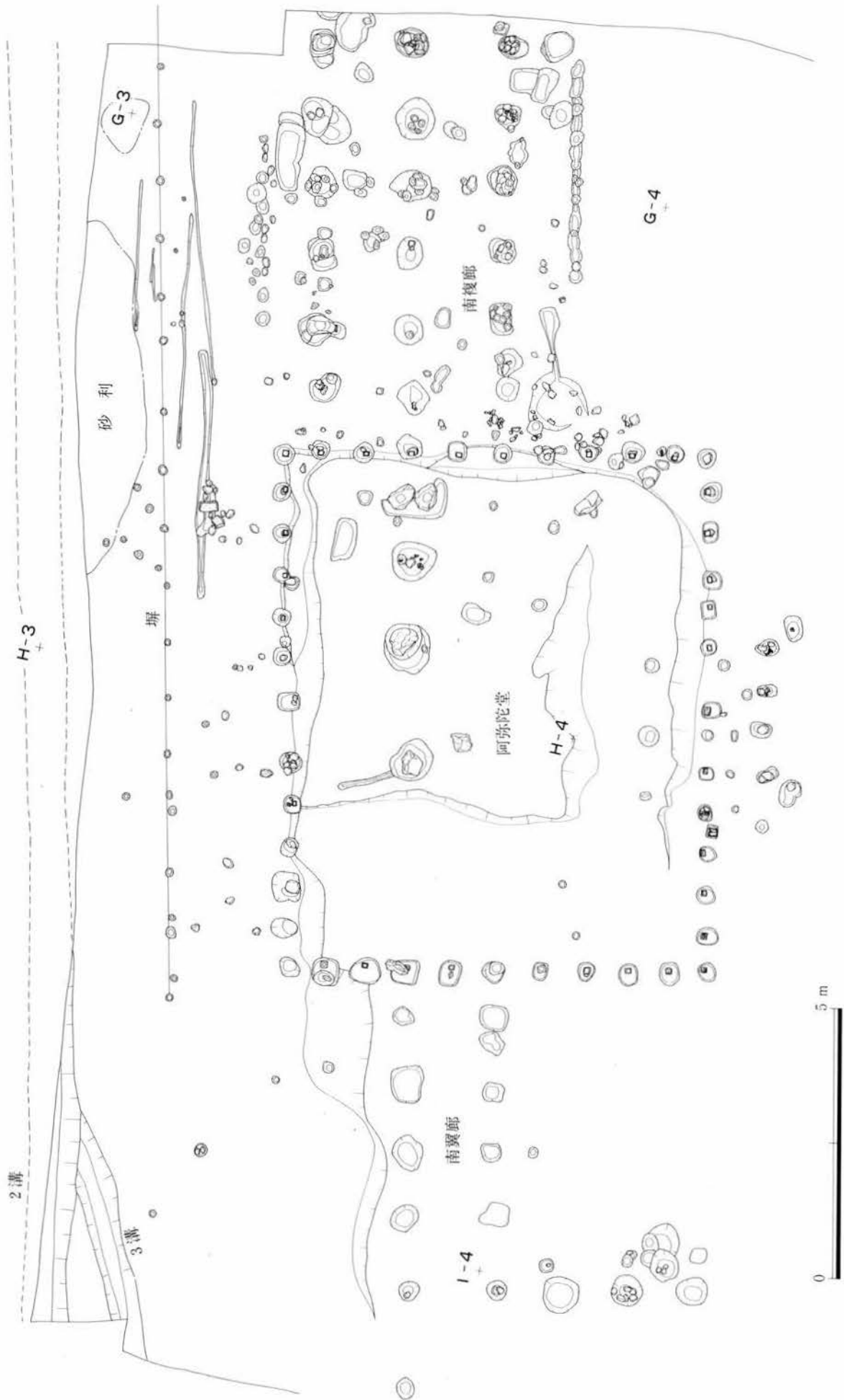


图6 第2調査区、南複廊・阿弥陀堂・南複廊合成図

ることから、砂利敷き面は溝と塀に挟まれていることになる。現在岩盤が露出している面にも、砂利が敷き詰められていたものと推察できることから、この砂利敷き面は伽藍背後を南北方向に抜ける道路と考えられる。道路の幅は、2溝と目隠し塀の間隔から約4m程であると考ええる。

(4) 雨落ち溝

第2調査区の北東隅部分で、東壁に沿って南北方向に、計8個の、直径30cm大の伊豆石を並べた石列とこの石列間に浅い窪みが多く検出した。この位置は二階堂と阿弥陀堂を結ぶ南複廊の雨落ち溝にあたる。南複廊は昭和59年度に調査され、東側の雨落ち溝は検出確認されていたが、西側の雨落ち溝は未調査であった。今回確認した石列は南複廊の西辺桁行きから約8尺離れた位置で、西辺に平行して据えられたものであることから、この石列は南複廊の雨落ち溝の一部であると考えられる。

第3節 第3調査区で検出された遺構

(1) 苑池

a. IV期の苑池

第3調査区内の基準グリッド、E-7杭より西に約10m地点で南北方向に並ぶ伊豆石、鎌倉石を検出した。昨年度の調査で検出したIV期汀線の北側の延長線上にあることから、南北に並ぶ伊豆石、鎌倉石はいずれも苑池の汀に並べられた景石であると考えられる。また景石の西側の池中には細かい1cm大の土丹を多く含んだ積み増し面が見られた。IV期の汀はIII期の汀に積み増しを行い整備していることから、今回検出した積み増し面を伴う景石と汀はIV期に相当するものと考ええる。

b. III期の苑池

IV期の池中の積み増し面を掘り下げると、水際から池中に向かって約2m程の幅で瓦を敷き込み水際を補修していた。IV期で顔を出していた景石も、積み増し面を掘り下げたため全体を露出する事ができた。景石の周囲は大きな土丹を使って脇を固め、固定している事が確認された。

この時期の池底の堆積土中には多くの炭化物が混入し、焼け残りと思われる先端が炭化している、花弁部木質黒漆塗り萼部金銅製の蓮蕾、板や杭状の木材が出土している。多くの炭化物が堆積土中に混入することから、この時期(弘安の火災)に大きな火災に遭っていることが窺える。

c. II期の苑池

III期の汀の約3m東側、北壁中に顔を出す景石と、この景石から南に向かって5cm大の砂利が直線的

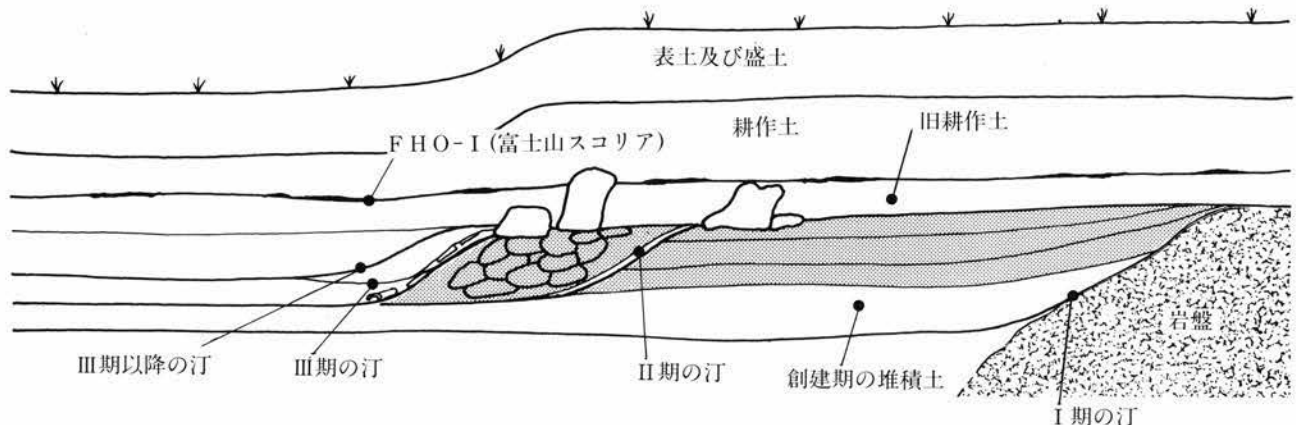


図7 第3調査区土層模式図

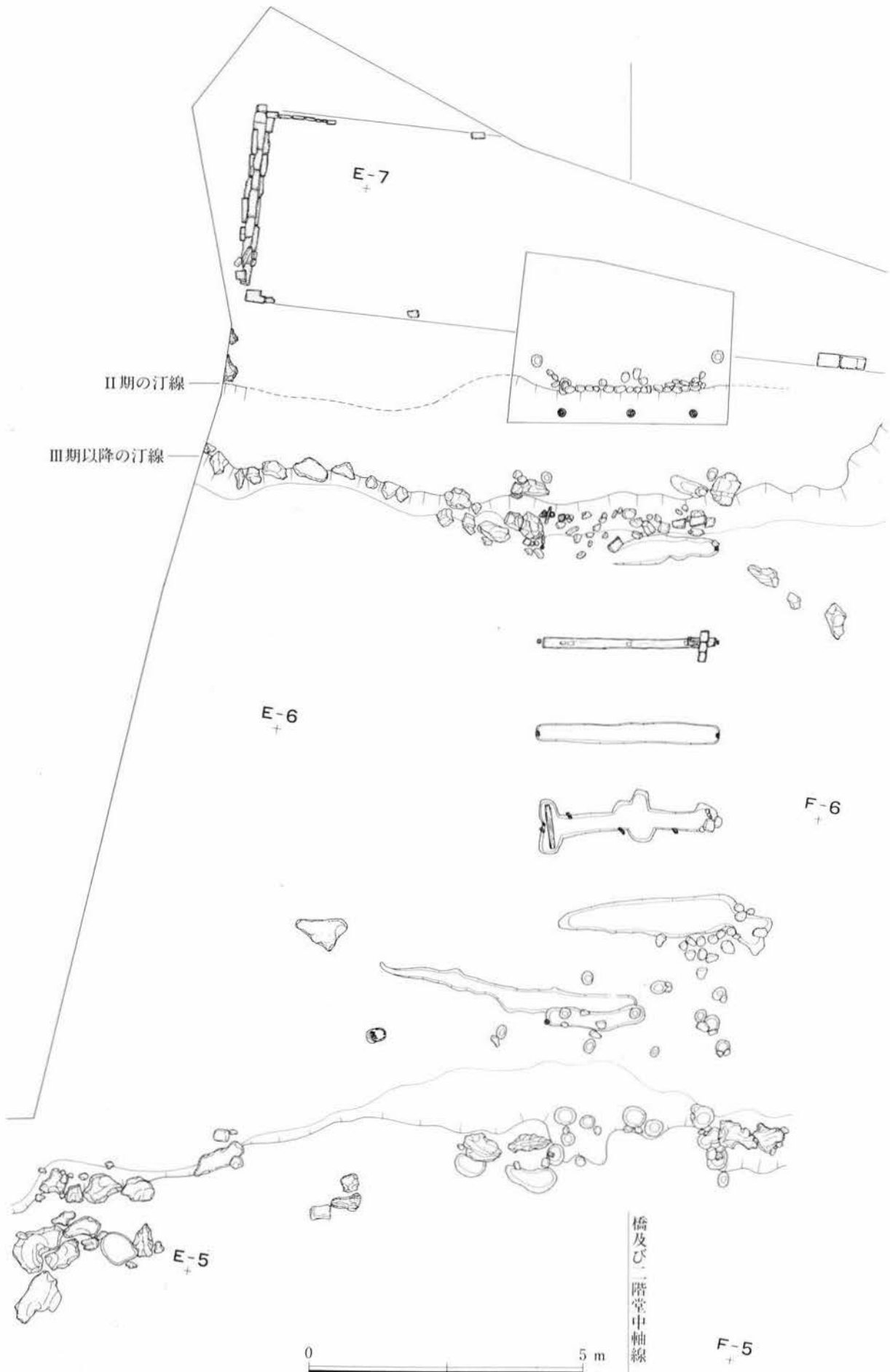


図8 第3調査区、苑池汀・切石溝と橋遺構合成図

に検出された。撒かれている砂利の範囲を精査すると、西の池中に向かって落ち込んで行くことが確認された。このことからこの砂利の撒かれた落ち込みはII期の汀に相当するものと考えられる。

d. I期の苑池

平成4年から開始した苑池の東側の調査で、I期の汀は現市道の下に潜り込んでしまう事が確認されている。II期～IV期までの汀を保護するために、I期の汀の調査は、昭和57年度に実施した試掘調査のトレンチを利用して実施した。トレンチ内の記録を取りながらさらに掘り下げ、I期の池底とII期に行われた池の埋め立ての地業面を確認した。

I期の池はこれまでの調査結果と同じく、南北に通る現市道の下に潜り込んでいることが確認され、この地点でもII期～III期にかけて約12～15mも苑池を埋め立てて狭めたことになる。

(2) 切石の溝

E-7グリッド杭の北約5mの地点で、鎌倉石を使い東西方向に築かれた幅約40cm、深さ25cmの溝を7m検出した。また溝の東端から直角に南北方向に点々と鎌倉石が検出されたが、溝にはならない石列である。この溝と石列の時期はIII期からIV期のものと考えられる。

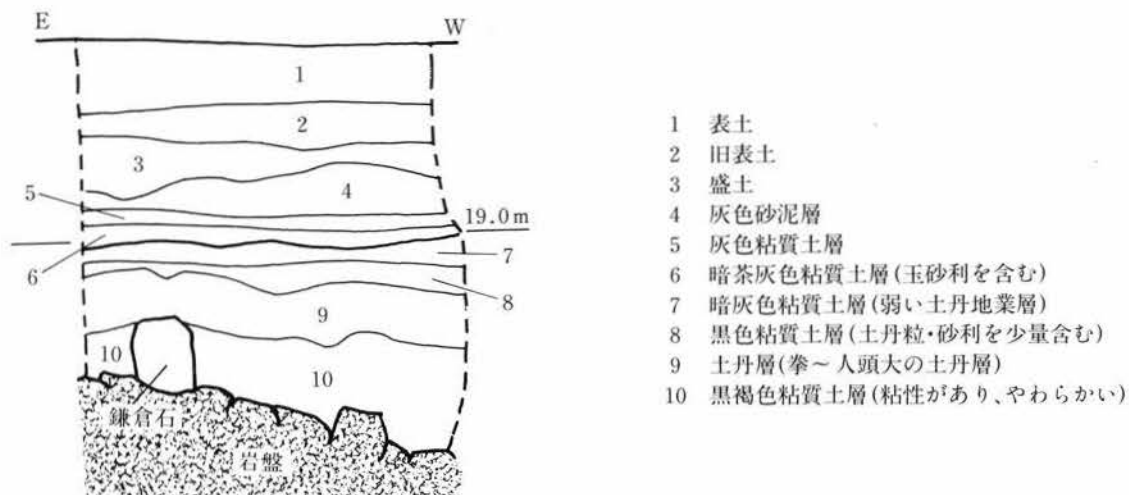


図9 第3調査区I期汀確認トレンチ土層断面図

第3章 出土した遺物

第1節 第1調査区出土遺物

(1) 瓦

瓦は多く出土したもののなかから、瓦当を中心に、鬼瓦、法量を知り得る男瓦・女瓦を選んで図示した。図10・図11は1区A面上層遺物包含層より出土したものである。

図10-1~10はいずれも唐草文字瓦でI期のもの。5は女瓦部分に「文長」(又は「支長」か)のスタンプが施されている。瓦当面の型式はYN I 01 bであるが、これに「文長」のスタンプが施されたものは、過去の当遺跡の調査では2例報告されている。従来この組み合わせをYN I 01 h 型式として扱ってきたので、図中の表記はこれに従った。

I期の唐草文字瓦は、瓦当面の縦幅が約7cmのYN I 01型式のもの、図1-8・9に示した縦幅5cm強のYN I 03型式の二種類に大別できる。小型のYN I 03は当遺跡では一種類の範だけしか確認されていない。この型式の字瓦は焼成が弱く、大型のものに比べ軟質のものが多く、瓦当面が摩滅している場合も多いが、残存状態の良好なものの中には唐草部分に布目痕が認められるものが含まれる。また、瓦当部分は薄く、折曲げによって作られていると考えられる。

11・12は巴文鏡瓦。やはり両者ともI期のものである。瓦当径は13cm程度と推定される。

13・14は蓮華文鏡瓦。13が瓦当径約17.5cmであるのに対し、14・15は11や12と同様に径の小さいタイプである。

図11-1~5は鬼瓦。このうち1~4は精良な胎土からなりI期のものと考えられる。鬼瓦はこれまでの調査で得た資料もI期のものが圧倒的に多い。数回にわたる堂舎の改修の後も鬼瓦はI期のものが使われ続けた可能性が大きい。なおI期の鬼瓦は、その全体を範で作っていると思われるもの、一点ずつ成形していると思われるものなど、製作方法も形状も多様である。なかには4のように範で型取った粘土塊に更に粘土をはり付けて盛り上げ成形されているものもある。4はその珠文の剝離した部分から、こうした製作過程が顕著に窺える。また、ほかの製品が裏面を丁寧ななどで成形しているのに対し、この4は草のような圧痕が著しく残る。5は粗胎から成り、II期以後の製品と考えられる希少なものだが、珠文は竹管状のものを押付けているのみで、I期のものと比べ立体感に貧しく粗雑なつくりといえる。

図12は1区A面瓦溜りの瓦。図に示したものはいずれもI期のものであるが、瓦溜りには他にII期の瓦片も含まれていた。

1~4は唐草文字瓦。

5は蓮華文鏡瓦。今回の調査で初めて出土した型式である。文様形態はYA I 01 b・eに近似しているが、小型で、前述した径13cm程度の規格に属すると考えられる。

6~9は巴文鏡瓦。

10は鬼瓦。珠文部分は範抜けが悪く楕円形を呈する。これは当遺跡で出土した鬼瓦のなかでもかなり大型のもの破片であるが、珠文部分のみを範で作っていると考えられる。

図13-1~8は1区A面構成土以下B面上層で出土したものである。

1~4はI期の蓮華文鏡瓦。

5・6はI期の巴文鏡瓦。これまで6のタイプのことをYA III 1として報告してきたが、今年度の調査

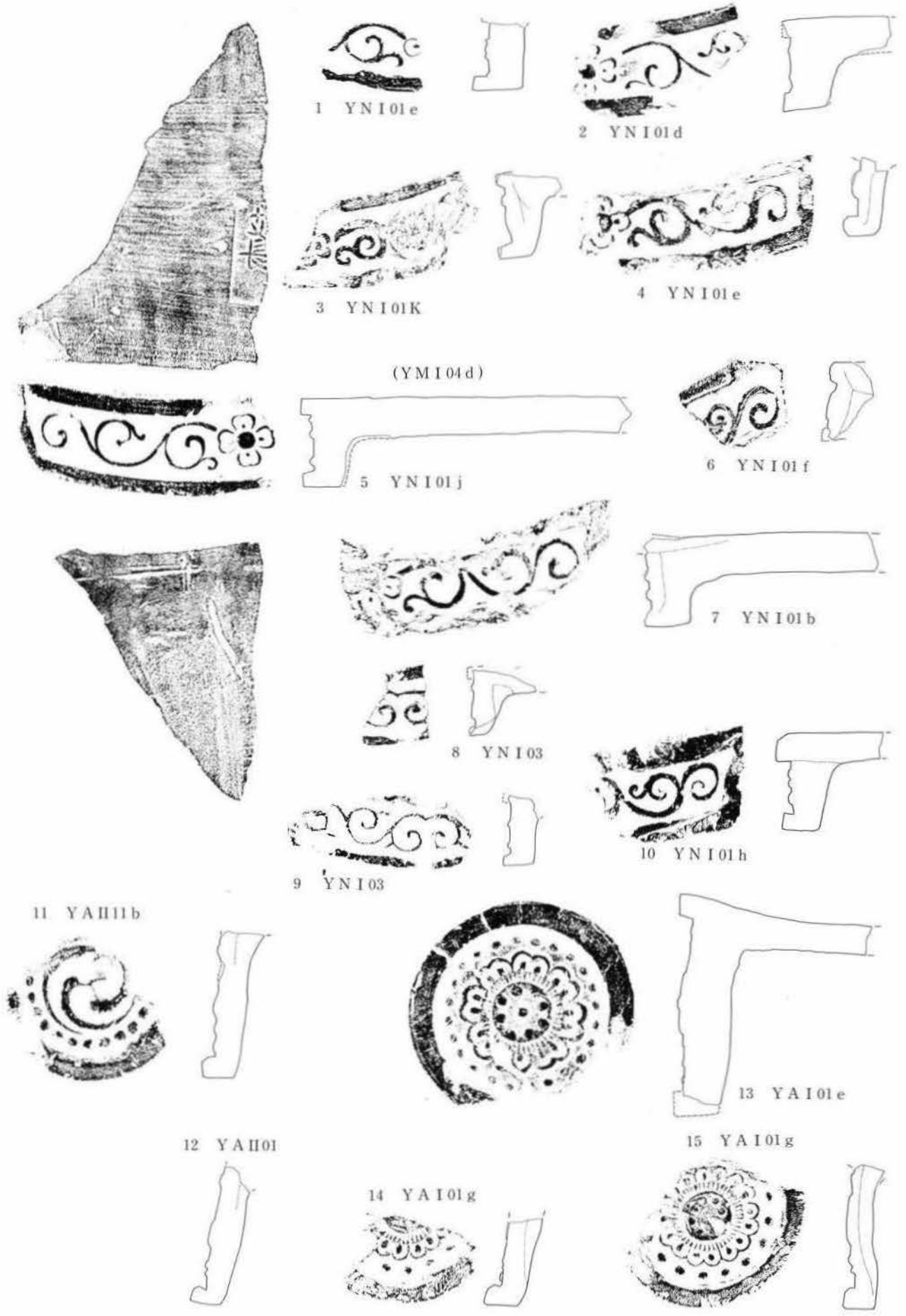


图10 第1调查区 A面瓦

ではこれに似た5のタイプが多く出土したので、6をYAII11a、5をYAII11bとした。aは珠文が小さく周縁の幅が細い特徴をもつ。これに対しbは珠文が大きく、巴凸部が中心でつながっているのが特徴である。径は両者とも約13cmで、I期の巴文鏡瓦としてはYAII01と同じ規格といえよう。

7はII期の巴文鏡瓦。

8はII期の剣頭文字瓦。

9~19は2溝の水溜め遺構より北側の覆土中より出土したものである。図示したものは19をのぞいていずれもI期のものである。

9~12は唐草文字瓦。12は右に二回反転した唐草の先端がつぶれている。12と同じYN I 01 f 型式の宇瓦はこれまでも多く出土しており、このなかには同じ箇所がつぶれているものが数点含まれている。永福寺への供給の過程で范が破損したことが推定される。埼玉県本庄市の大久保山遺跡(浅見山I遺跡)では、この唐草の先端がつぶれた同范の宇瓦が出土している。これは左右に二回唐草が反転したところで切り狭められた范で作られている。

13は蓮華文鏡瓦。

14~18は巴文鏡瓦。16・18は今回の調査で初めて出土した型式である。16はYAII02a・bと比べて凸部の盛り上がり浅い。18はやはり凸部の盛り上がり浅く、巴部分凸部は平らなのが特徴である。こ

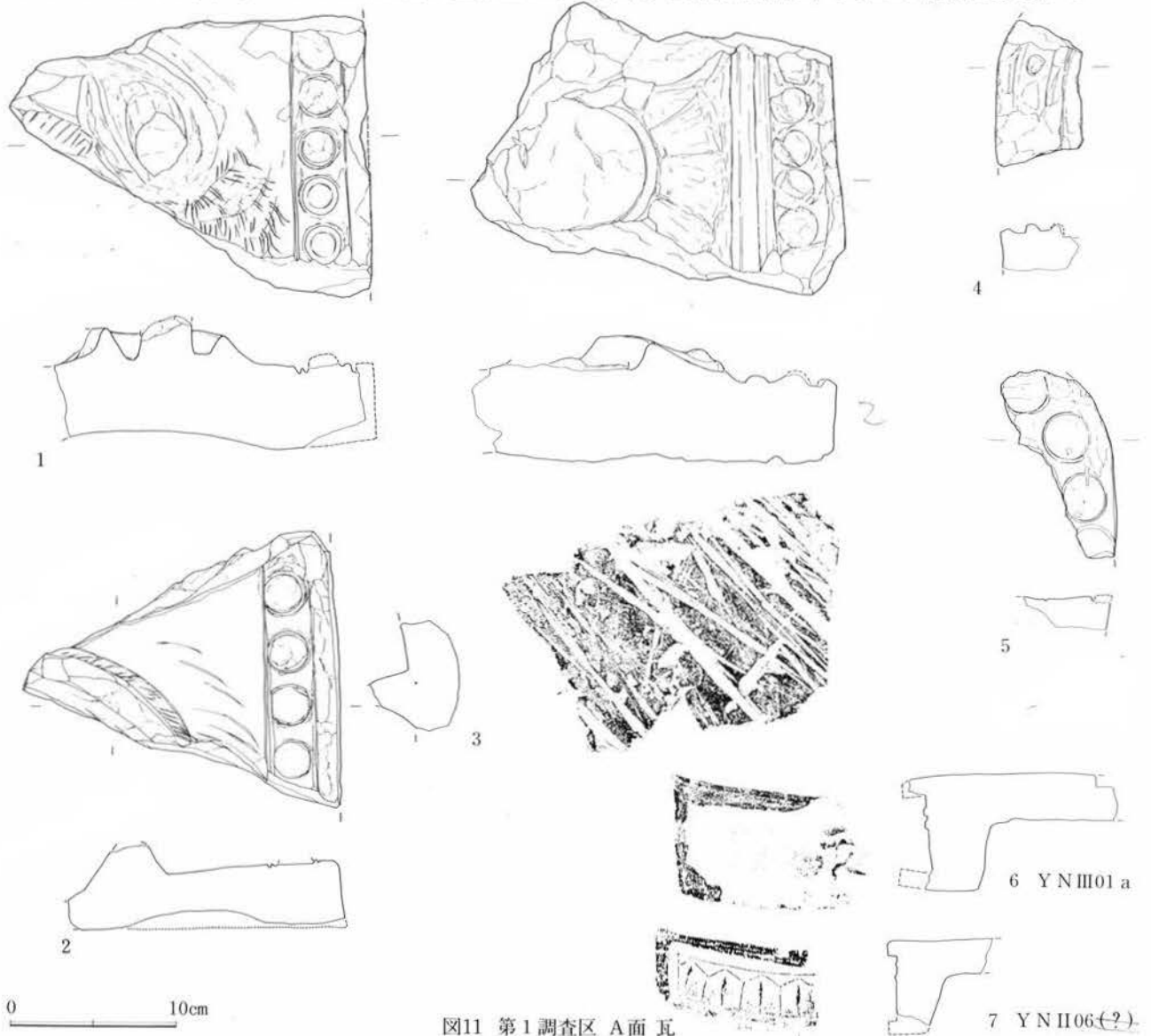


図11 第1調査区 A面瓦

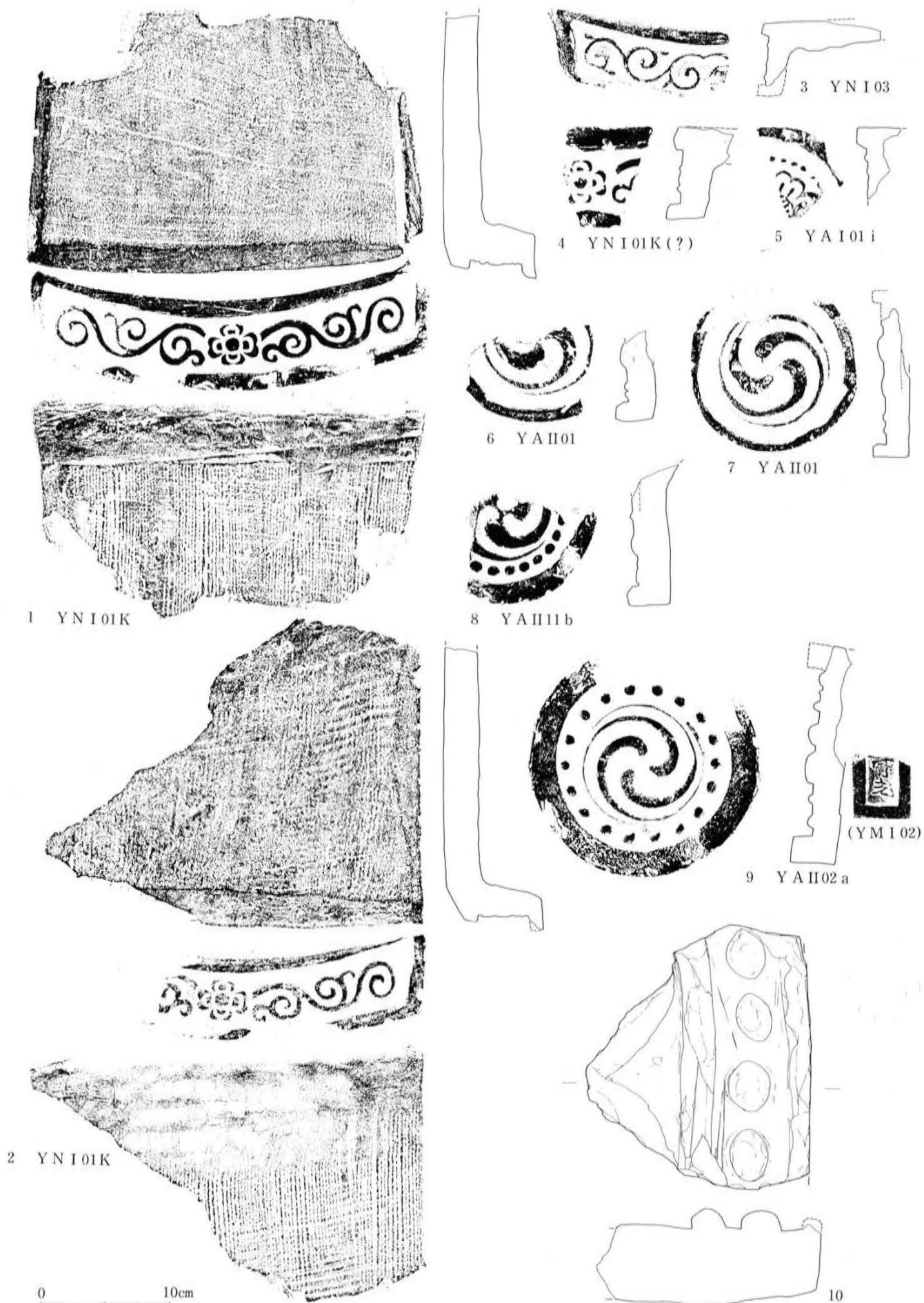


图12 第1調査区 瓦溜り瓦

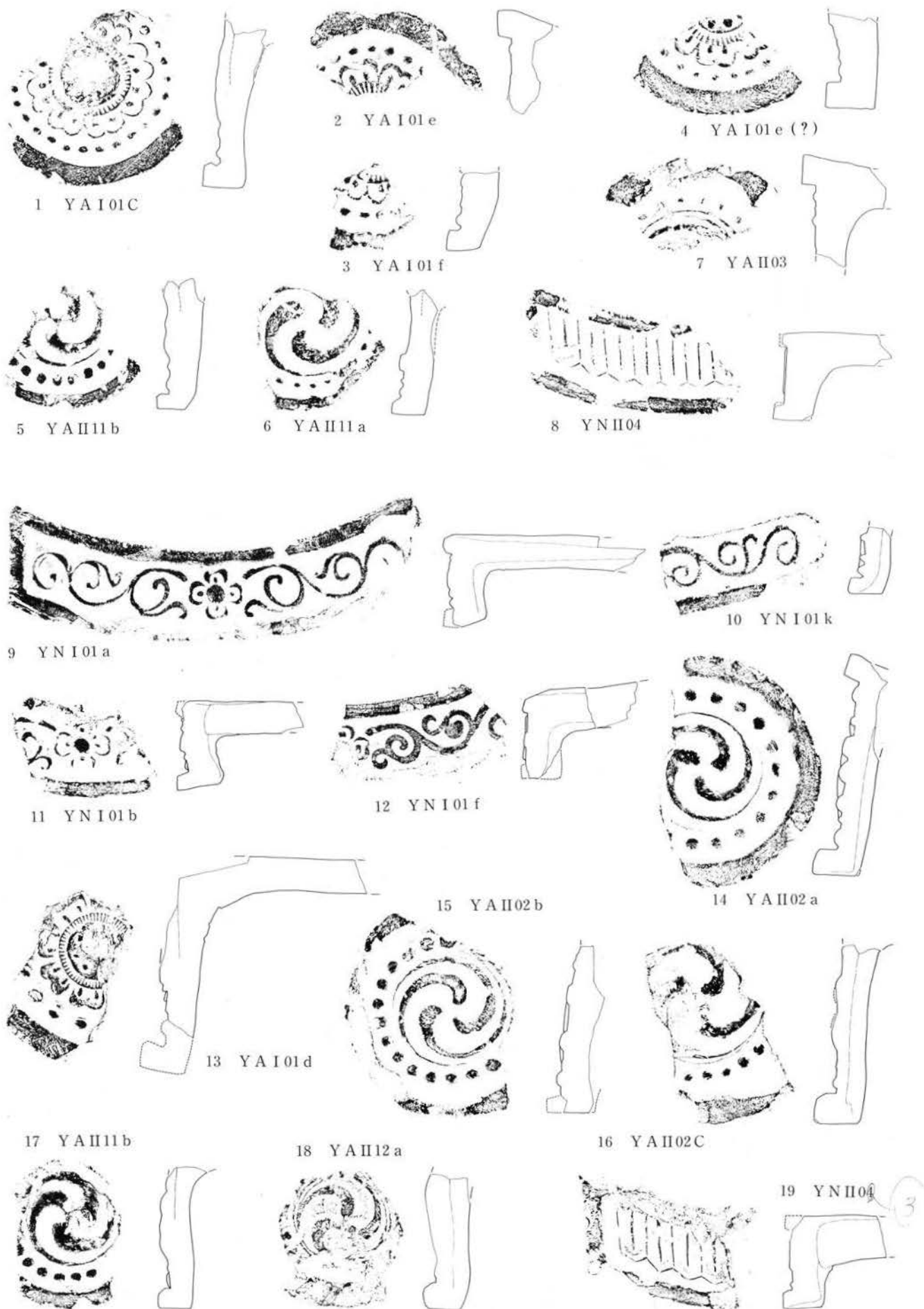
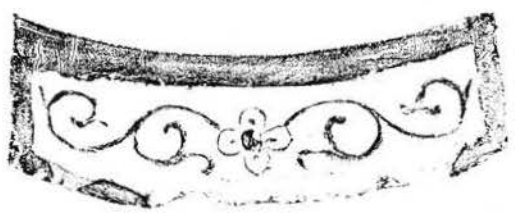
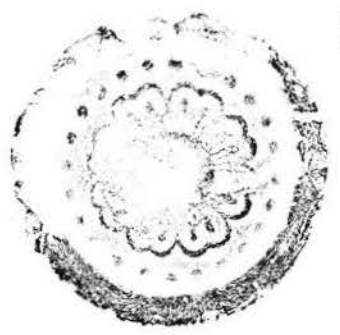
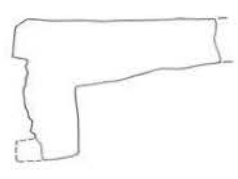


图13 第1調査区 B面・2溝(水溜遺構北側)瓦



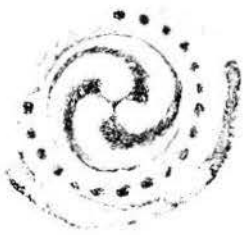
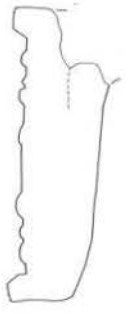
1 YNI01C



2 YAI01e



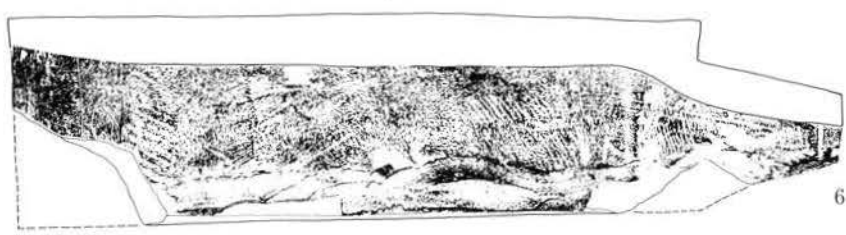
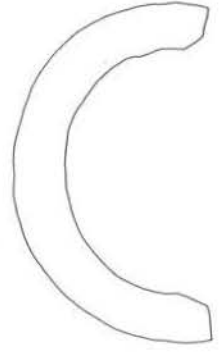
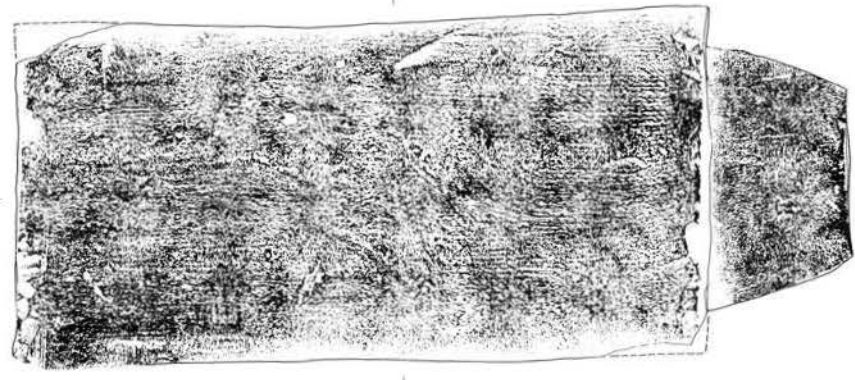
4 YAI02b



5 YAI11b



3 YAI01a

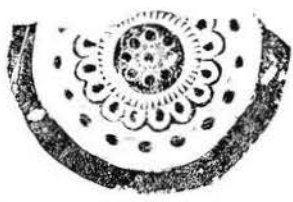


6 B種

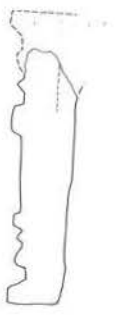
7 YNI01k



8 YAI01g



9 YAI02b



0 10cm

图14 第1調査区 2溝上層・3溝瓦

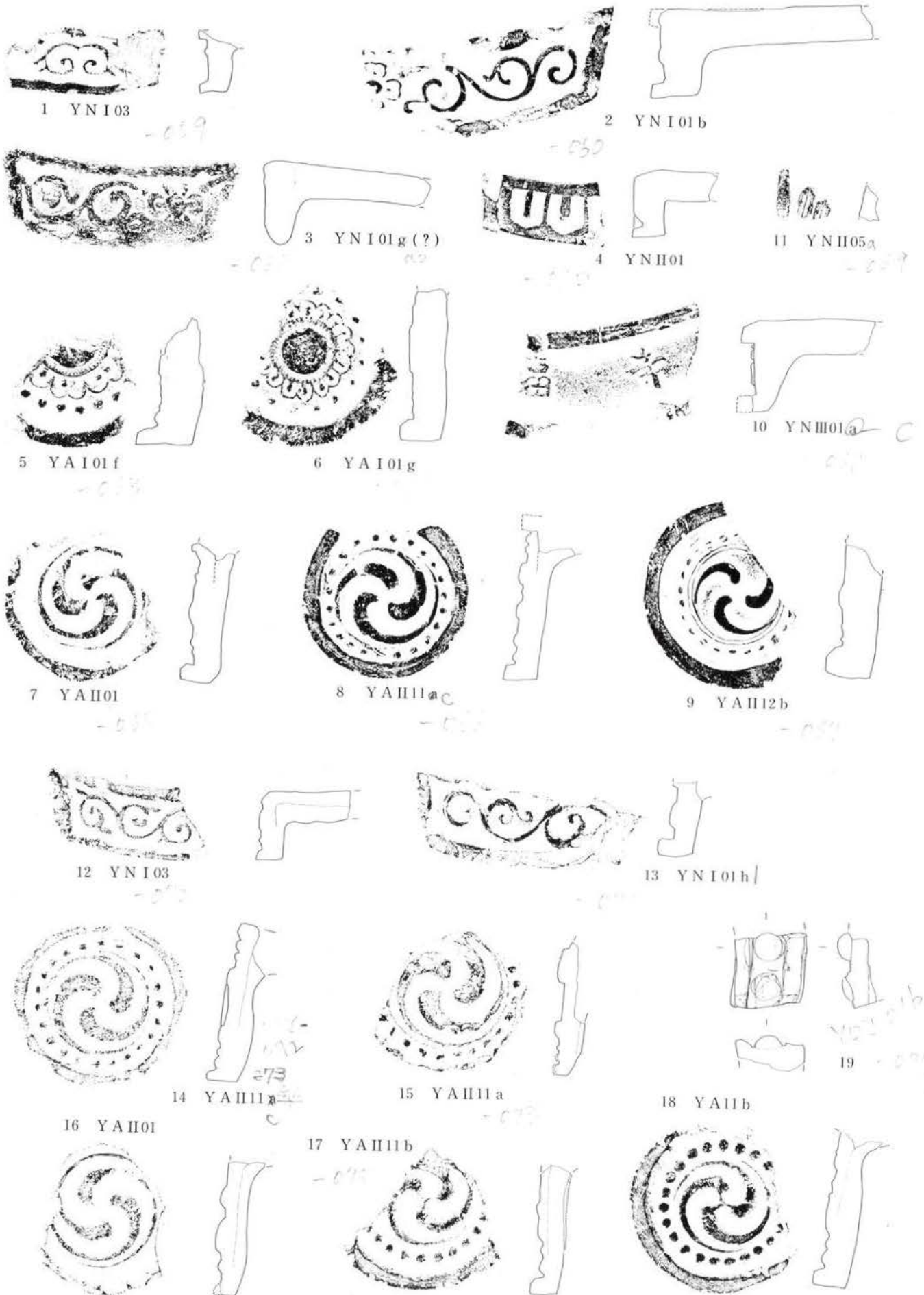


图15 第1調査区 2溝最上層・2溝下層 瓦

ちらは径13cm程度と考えられる。また、これに似たYA II 12 b が2溝最上層でも出土している(図6-9)が、図6-9は巴部分凸部が丸みをもつ。

19はII期の剣頭文字瓦。

図15-1~11は2溝最上層より検出したもの。1~3はI期の唐草文字瓦。2は著しく水摩されている。4はI期の剣頭文字瓦。

5・6はI期の蓮華文鏡瓦。7~9はI期の巴文鏡瓦。9は今年度の調査で初めて得られた型式である。

10はII期の寺銘字瓦。11はIII期以後の剣頭文字瓦。

図14-1~6は2溝上層より出土したもの。1はI期の唐草文字瓦。もとはYN I 01 e 型式の範の左右両端を詰めた範で作っているもの。このように幅詰めをした範で作られた製品は他にYN I 01 a を詰めたYN I 01 g、YN I 01 h を詰めたYN I 01 j がこれまで確認されている。また、前述した浅見山 I 遺跡出土の製品もYN I 01 f の両端が詰められている。こうした複数の製品の存在は、唐草が左右に三回反転する幅広に対して、二回反転の幅狭の規格が存在することを窺わせる。

2・3はI期の蓮華文鏡瓦。4・5はI期の巴文鏡瓦。

6は男瓦。幅約18cm、長さ約44cm。男瓦は胎土の良悪によってA種・B種に分類しているが、これは粗胎のB種でII期のものと思われる。

図15-12~19は2溝下層より出土したもの。12・13は唐草文字瓦。14~18は巴文鏡瓦。19は鬼瓦。いずれもI期のものだが、2溝下層からは他にII期の瓦の小片も出土している。

図14-7~9は3溝覆土より検出したもの。7は唐草文字瓦、8は蓮華文鏡瓦、9は巴文鏡瓦。いずれもI期のものだが、3溝覆土からは他にII期の瓦の小片も出土している。

(1) 『本庄市史』通史編 I 昭和61年3月 本庄市

(2) 瓦以外の遺物

a. かわらけ・陶磁器・砥石・木製品

1区A面まで(図17-1~13)

1~4はいずれも轆轤成形のかわらけである。

1は復元口径7.3cm、底径5.5cm、器高1.8cm。体部の立ち上がりが急である。2は復元口径8.1cm、底径5.1cm、器高1.5cm。体部は緩やかに広がる。3は復元口径12.5cm、底径8cm、器高2.7cm。4は復元口径11.9cm、底径6.5cm、器高3.2cm。口縁部がやや外反する。ここに並べたものは13世紀後半~15世紀中にあたるものであるが、出土した小片のかわらけの中には14世紀代のものも見うけられる。

5は砥石である。残存長は縦8.5cm×横4.6cm、幅2.2cm。図正面及び右側面に砥いた痕跡が見うけられる。

6は瀬戸折縁鉢の破片。内面には線刻の文様と思われるものが施され、薄く灰釉がかかる。

7は瀬戸壺。口縁から頸部にかけての一部である。素地、焼成とも比較的良質で、外側面及び口端部より約8mmの所まで薄く灰釉が施される。

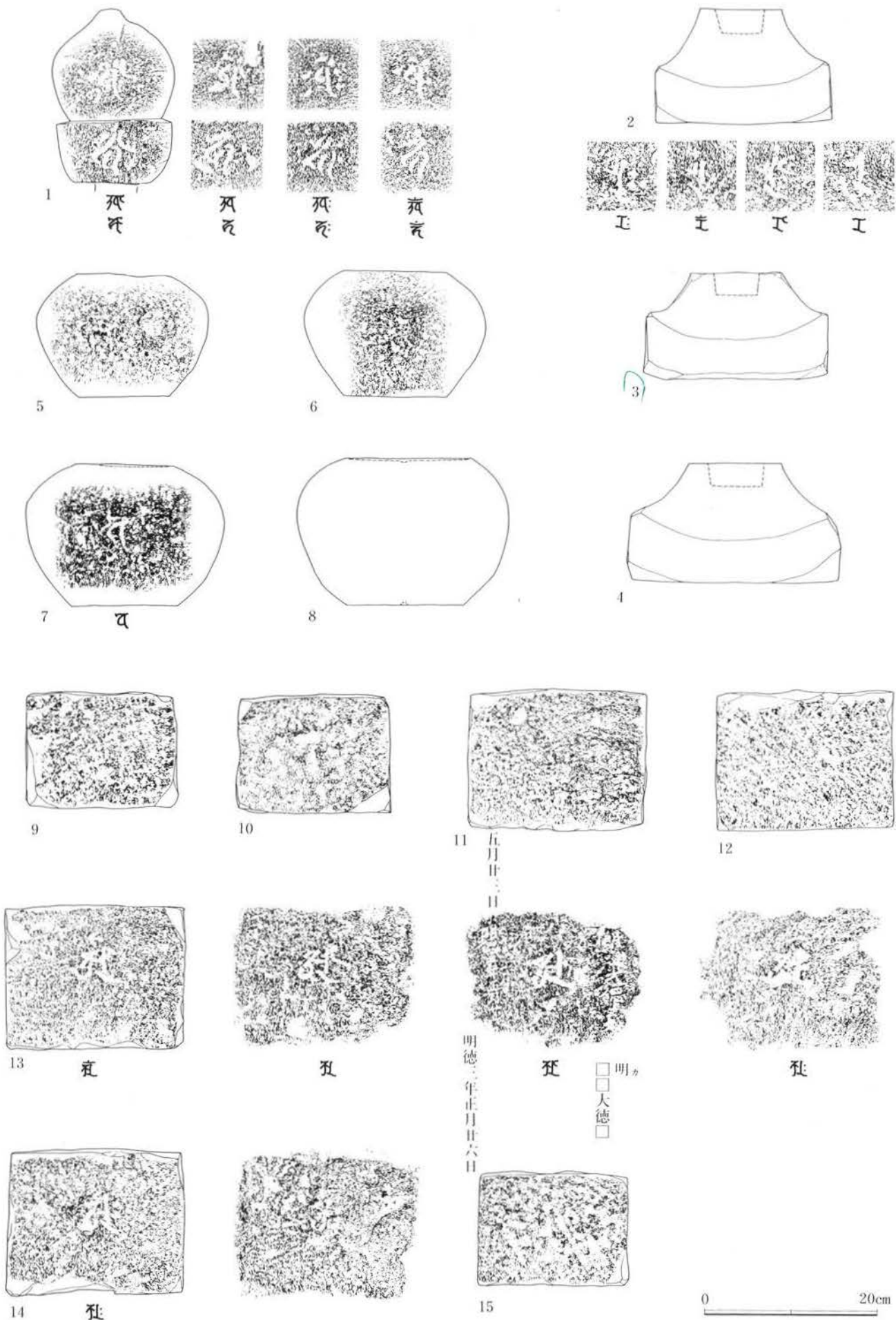


图16 第1調査区 石塔

8は瀬戸碗の底部片である。素地は細かく精良で内底面及び体部下半に淡黄灰色の釉を施す。

9は瀬戸仏華瓶の脚部。やや砂質の素地だが灰釉が施され焼成は良好。

10は常滑甕の破片。口縁部がN字状を呈し、縁帯部の幅は狭い。

11は青磁鉢の底部。素地は淡乳灰色で非常に精良緻密。釉は灰緑色を呈する。

12・13は青磁連弁文碗の口縁部片。12の素地は精良で淡灰色、釉は暗緑灰色。13の素地は灰白色。釉は淡緑色で無文である。

14は銅の地金に渦巻き状の銀を象眼した製品である。直径1.3cm。仏像の白毫と考えられる。

b. 1区B面まで (図17—15~24)

15から19はいずれも轆轤成形のかわらけである。15は復元口径7.4cm、底径5cm、器高1.6cm。厚みは均一で緩やかに立ち上がる体部を持つ。16・17は灯明皿として使用されていたものである。16はほぼ完形に近く、口径8cm、底径5.3cm、器高1.7cm。器壁はあまり均一でない。17は復元口径8.1cm、底径5.5cm、器高1.9cm。やや丸みを帯びた体部を持つ。18は復元口径7.9cm、底径6.8cm、器高1.5cm。体部外壁はやや角度を持ち立ち上がり、内壁は緩やかである。19は復元口径8.3cm、底径6.1cm、器高1.7cm。体部は僅かに広がり、やや角度を持ち立ち上がる。以上およそ13世紀から14世紀の形態を保つ。

20はせとの蓋である。直径4cm、高さ1.7cm。素地は精良で焼成も良好。外面に暗緑色の釉が施される。

21は瀬戸深鉢。張り付けの靱殻高台を持ち、底径は6.8cm。内底面には重ね焼きの痕が残る。体部下半には6mmの幅で丁寧なへら削りがなされ、灰釉が施されている。

22は火舎。口縁部片で、素地には砂と2mm大の小石を含み軟質であるが、締まりは良い。口縁内側が僅かに突出する。23は青白磁小皿である。底部で約3mmと非常に薄く、素地は灰白色で微細な砂を含むが、締まり焼成等は良好である。釉は淡青色を呈する。24は青白磁梅瓶片。素地は灰白色で精良緻密。内面はへら削りで成形される。淡青緑灰色の釉を呈する。

1区2溝 (図17—25~36)

25~36はいずれも轆轤成形のかわらけである。

25~27は復元口径7~8cm、底径5cm、器高約1.5cm。器壁は厚めである。14世紀前葉の形態を呈する。28~31は復元口径約7cm、底径約4.5cm、器高約2.2cmの製品である。総じて底部から器壁にわたり薄手に作られており、14世紀中葉の様相を呈する。32は復元口径10.5cm、底径5.3cm、器高3.2cm。器壁は滑らかなカーブを描き、14世紀前半に見られる形態である。

33は山茶碗窯系捏鉢底部片。高台の復元径は約9cm。素地は淡茶灰色を呈し、小砂、長石を含み堅く焼き締まる。

34は手焙り口縁部片。口縁に向かって次第に薄くなり、珠文、スタンプの渦巻文を呈する。素地は小砂を含むが滑らかで焼成も良好である。35は常滑壺の口縁部片である。復元口径は22cm、比較的垂直に立ち上がる頸部から丸みを帯び、口縁へと外反する。素地は粘質で長石粒を含み、精良緻密で緑灰色の釉を呈する。

1区2溝上層 (図18—1~10)

1~8は轆轤成形のかわらけである。

1は復元口径6.9cm、底径4cm、器高2.1cm。器壁の薄い深めの様相を呈する。2は復元口径7.4cm、底径5cm、器高1.7cm。体部はややえぐれながら広がり、途中から垂直に立ち上がる。3は復元口径8cm、底径6.5cm、器高1.5cm。体部は口縁に向かって薄くなる。4は復元口径7.7cm、底径5.2cm、器高1.8cm。口縁に向かって薄くなりながら、緩やかに内湾する。5は完形で、口径8.2cm、底径5cm、器高2.1cm。

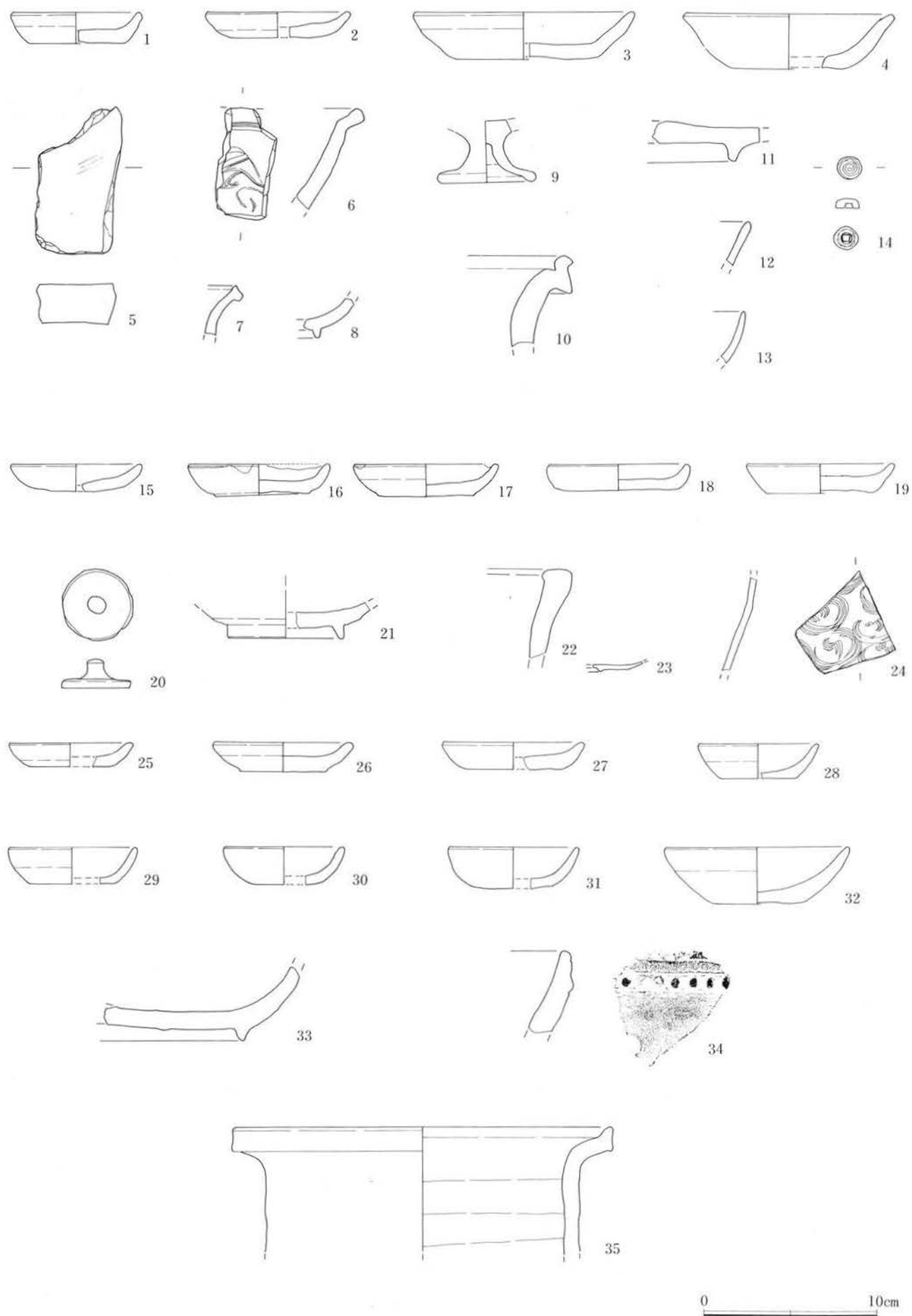


図17 第1調査区A面上層遺物包含層・A面構成土及びB面上層・2溝最上層 瓦以外

底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁はわずかに外反する。6は復元口径12.8cm、底径7.1cm、器高3.3cm。体部は口縁に向かって緩やかに開いてゆく。7は復元口径12.7cm、底径7.6cm、器高3.5cm。全体的に器壁の厚みが均一的で、丸みを帯びた様相を呈する。8は復元口径14.3cm、底径7.5cm、器高4.3cm。体部は緩やかに立ち上がり、口縁でやや外反する。

かわらけは全体的に13世紀末から14世紀中葉までの様相を呈する。

9は瀬戸壺の肩部片。素地は淡黄灰色で細かいが僅かに気泡が入る。5本の稜線が巡り、淡黄灰色の釉が施される。

10は常滑甕の口縁部片である。外反した口縁には幅の狭い緑帯が巡る。

1区2溝下層

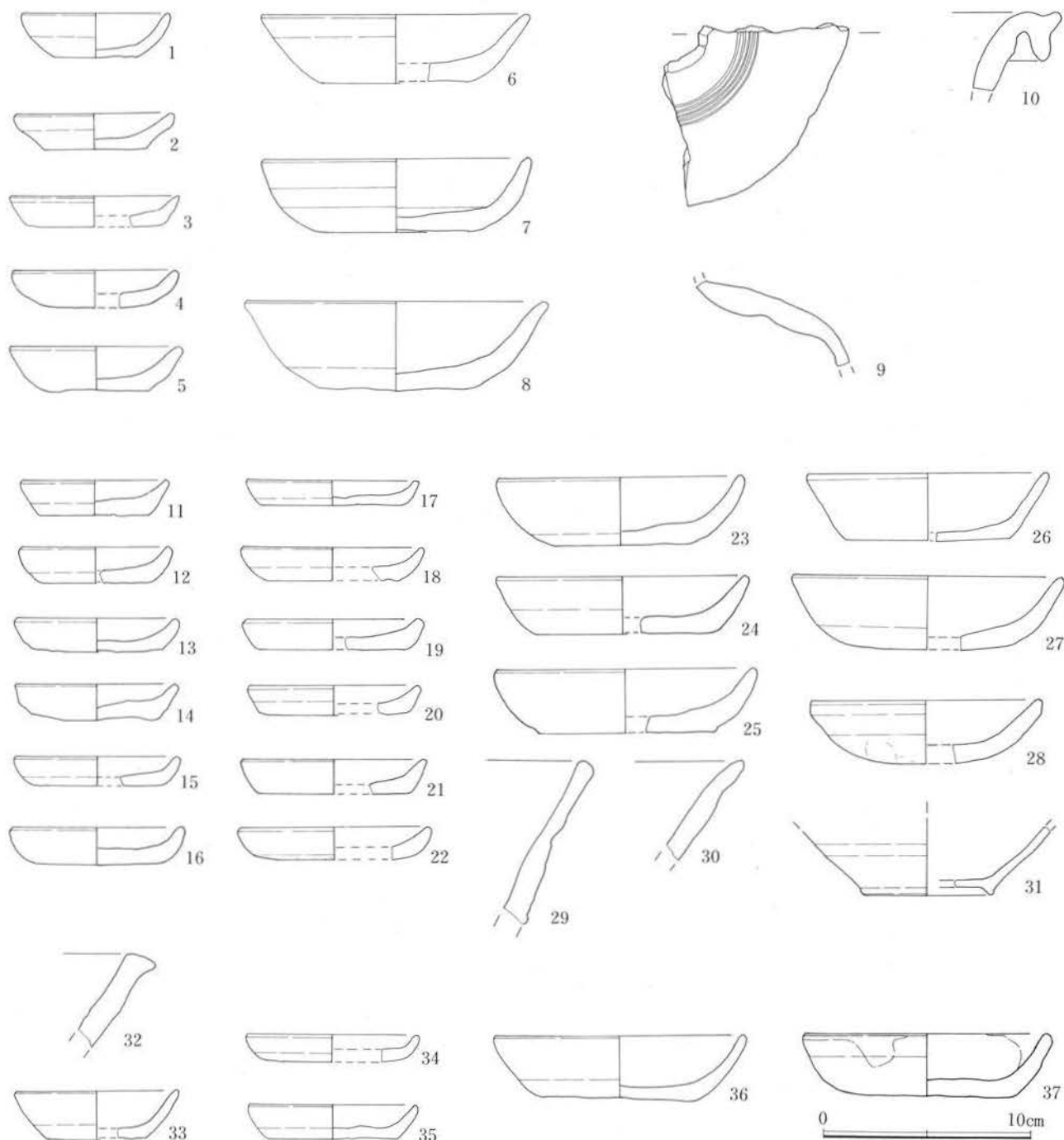


図18 第1調査区 2溝上層・下層・2溝(水溜遺構北側) 瓦以外

11~21、23~27は轆轤成形のかわらけである。

11は復元口径6.9cm、底径5.2cm、器高1.7cm。12は復元口径7cm、底径5.3cm、器高1.8cm。14は口径7.6cm、底径6.2cm、器高1.8cm。16は復元口径8.1cm、底径6.1cm、器高1.8cm。18は復元口径8.6cm、底径6.3cm、器高1.8cm。これらは底部がやや厚く、器壁が口縁に向かって薄くなる傾向を持つ。

13は復元口径7.6cm、底径6.2cm、器高1.4cm。17は復元口径8.1cm、底径6.8cm、器高1.2cm。この2点は全体的に薄手である。19は復元口径8.3cm、底径7.1cm、器高1.5cm。20は復元口径8cm、器高1.5cm。21は復元口径8.7cm、底径7.3cm、器高1.7cm。

23~27は口径が約12cm前後のやや大ぶりのかわらけである。23は復元口径11.6cm、底径6.6cm、器高3.3cm。器壁は丸みを帯び口縁に向け薄くなる。24は復元口径11.9cm、底径8.5cm、器高2.8cm。器壁は23より直線的に立ち上がる。25は復元口径12.3cm、底径8.5cm、器高3.1cm。体部下半に丸みを帯びる。26は復元口径11.9cm、底径8.8cm、器高3.2cm。27は復元口径12.8cm、底径8.2cm、器高3.5cm。

轆轤成形のかわらけは全体的に13世紀後半代の様相を呈すると思われる。

22、28は手捏ね成形かわらけ。22は復元口径9cm、器高1.6cm。28は復元口径11cm、器高3cm。

手捏ね成形のかわらけは13世紀前半代の様相を呈する。

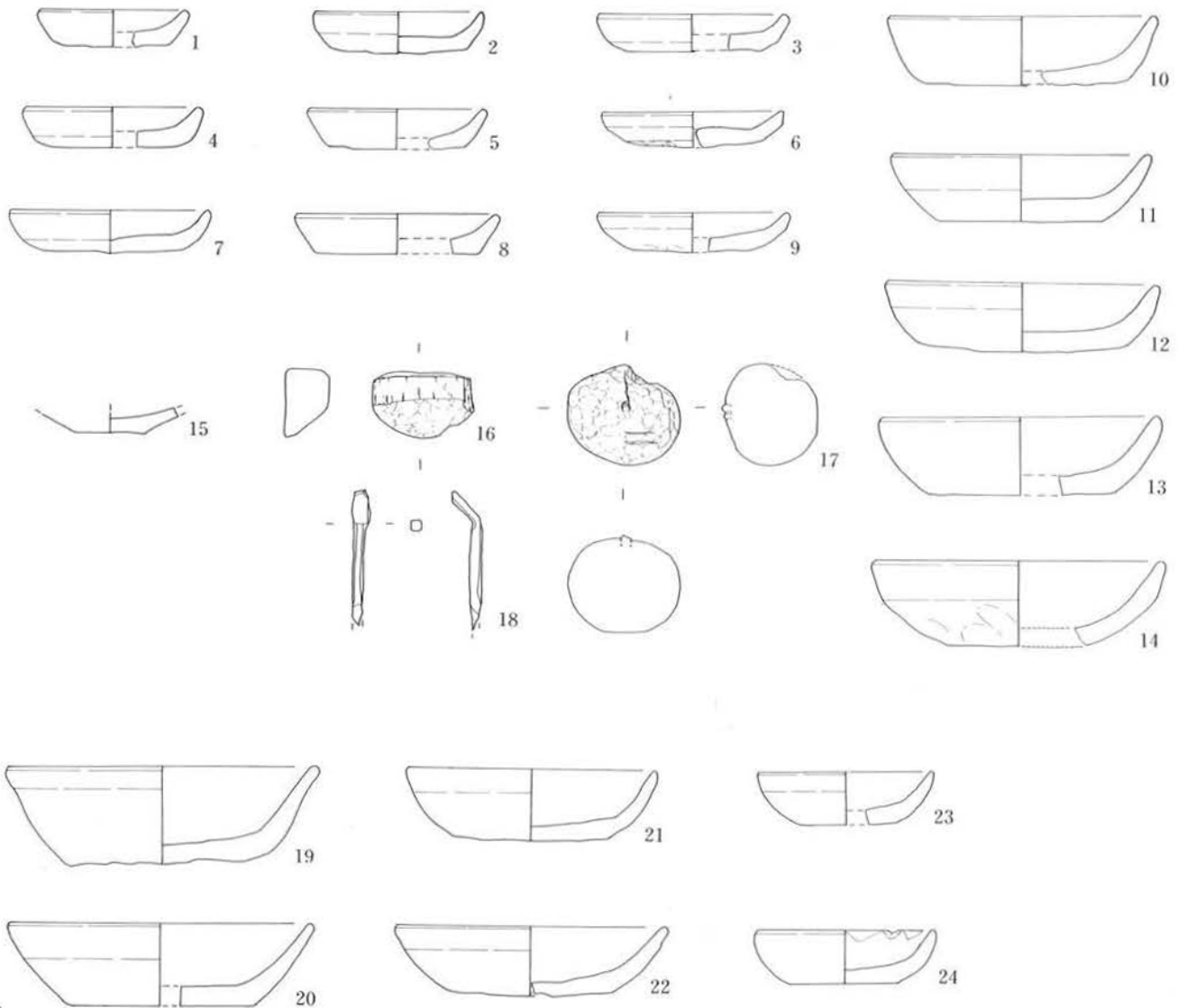


図19 第1調査区 3溝・2区 瓦以外

29、30は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片である。29は3～5mm大の長石を多く含み、焼成は比較的良好。30は2mm大の長石を含み、よく締まり焼成も良好である。

31は山茶碗。高台に靫がら痕を残す。素地は精良緻密。焼成も良好である。

1区2・3溝

32～37は2・3溝出土の遺物である。

33は復元口径7.8cm、底径4.8cm、器高2.3cm。器壁は薄く、器高が深めの14世紀中葉の様相を呈する。34は復元口径8.1cm、底径6.1cm、器高1.3cm。35は復元口径8cm、底径6.2cm、器高1.7cm。36は口径11.9cm、底径7.3cm、器高3cm。この3点は、底部から均一の厚みで口縁まで緩やかに開く14世紀前葉の様相を呈する。

37は口径11.6cm、底径7.5cm、器高3cm。灯明皿に使用されたかわらけである。底部から体部にかけ、均一の厚みを持つ13世紀末の様相を呈する。

32は常滑の捏鉢である。素地は細かく1～2mm大の長石粒を多く含む。焼成も良好である。

1区3溝 (図19-1～18)

1～18は3溝より出土した遺物である。

1～5、7、8、10～13は轆轤成形のかわらけである。1は復元口径6.4cm、底径4.6cm、器高1.7cm。2は復元口径7.3cm、底径6cm、器高1.9cm。3は復元口径8.2cm、底径5.8cm、器高1.7cm。4は復元口径7.6cm、底径5.6cm、器高1.8cm。5は復元口径7.7cm、底径6cm、器高1.7cm。7は復元口径8.7cm、底径6cm、器高1.9cm。8は復元口径8.8cm、底径7.2cm、器高1.8cm。10は復元口径11.7cm、底径8.9cm、器高3.1cm。11は復元口径11.3cm、底径7.2cm、器高3cm。12は復元口径11.8cm、底径9.2cm、器高3.1cm。13は復元口径12.1cm、底径8.2cm、器高3.5cm。

6、9、14は手捏ね成形のかわらけである。6は復元口径7.9cm、器高1.6cm。9は復元口径8.3cm、器高1.8cm。14は復元口径12.6cm、器高3.8cm。

3溝のかわらけは、いずれも13世紀代の様相を呈するものである。

15は青白磁の皿か。素地は精良緻密。淡青白色の釉が施される。

16、17は木製品である。16は独楽半片。残存径4.5cm、高さ3cmである。白木の製品か塗漆かは定かではない。17は蜜柑状の製品。残存径4.5cm×5cm、高さ4.3cm(金属部含)。中央の蜜柑のへたにあたる場所には鉄製の吊り金具が打ち込まれている。成形の削りが顕著であり、漆が施されていたものか。

18は釘状鉄製品。残存長約6cm、幅5mm。

b. 石塔 (図16)

1区からは五輪塔の空風輪1点、火輪3点、水輪4点、地輪7点が出土している。石材はいずれも安山岩と思われる。

1～3・5・6は西ヶ谷入口堆積土より出土。

1は空風輪。四面に梵字「**𑖀𑖄𑖅𑖆**・**𑖀𑖄𑖅𑖆**・**𑖀𑖄𑖅𑖆**・**𑖀𑖄𑖅𑖆**」を彫っている。(図に示した拓影は右に向かって逆時計回りに転回させたもの。)

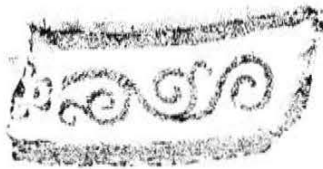
2～4は火輪。2は四面に梵字「**𑖀𑖄𑖅𑖆**・**𑖀𑖄𑖅𑖆**・**𑖀𑖄𑖅𑖆**・**𑖀𑖄𑖅𑖆**」を彫っている。

4・7・9～14は2溝の水溜め遺構より北側の覆土より出土。

5～8は水輪。7は梵字「**𑖀𑖄**」が彫られている。8はpit1より出土。梵字は彫られていないようである。9～15は地輪。9・10・12は梵字又は銘をもつか否か不明瞭なもの。11は一面の左隅に「五月廿三日」の銘が認められる。他にも文字らしい刻みがわずかに認められるが、不明瞭である。13は四面に



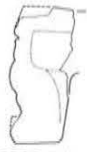
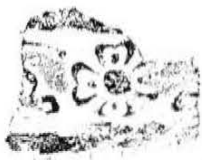
1 YN101a



2 YN101K



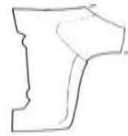
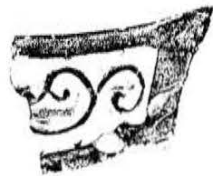
8 YN101C



3 YN101d



4 YN101b(?)



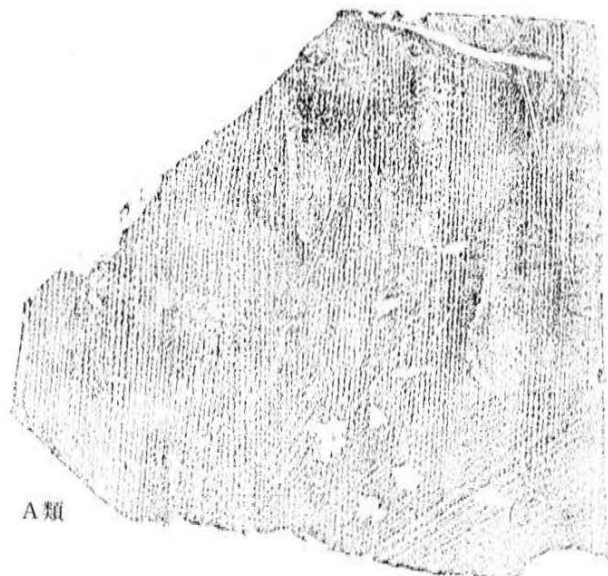
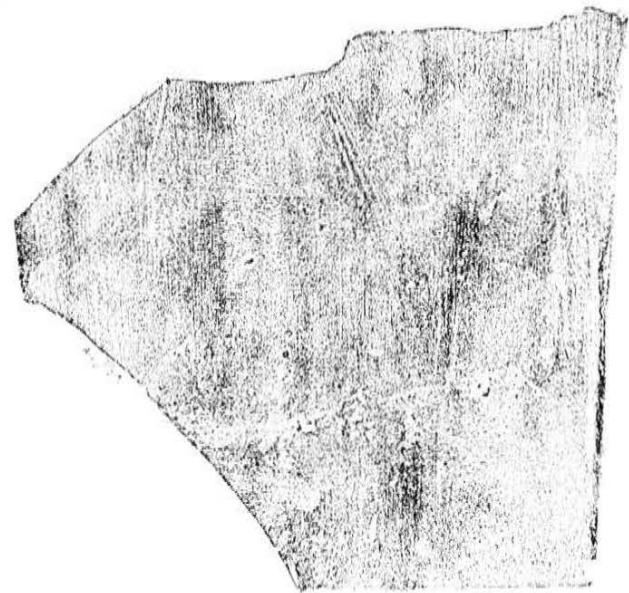
5 YN101d(?)



6 YN101b(?)



7 YN101d



NY6-006

9 A類

0 10cm

图20 第2調査区 瓦

梵字「𑖀・𑖂・𑖄・𑖆」がそれぞれ刻まれている。このうち東に面すると考えられる「𑖄」の面には銘が刻まれており、「明徳三年正月廿六日」が明瞭に読みとれる。14は一面に「𑖄」が刻まれているが、他の面は摩滅している。

15は2溝下層より出土。摩滅が激しく、種子は読取れない。

第2節 第2調査区出土遺物

(1) 瓦

図20-1～7は遺構面上層遺物包含層より出土。このうち1～6はI期の唐草文字瓦である。焼成後、女瓦部分右側を斜めに意図的に欠いており、隅切瓦として用いられたものと思われる。

7はII期の剣頭文字瓦。

8・9は2溝覆土より出土したもの。8はI期の唐草文字瓦。範はもともとYN I 01 e型式で、この左右を狭めた型式YN I 01 cである。9はI期の女瓦。端部が欠損しているが、ほぼ中央で幅約30cm、厚さ約2.5cm。

(2) 瓦以外の遺物

a. かわらけ

2区2溝(図19-19～23)

19～23は2溝出土の轆轤成形のかわらけである。

19は復元口径13.5cm、底径7.7cm、器高4.4cm。素地は粗く、器壁も厚い。口端部が外反する。14世紀末～15世紀前葉の様相を呈する。20は復元口径13.3cm、底径8cm、器高3.7cm。22は復元口径11.8cm、底径7.3cm、器高3.1cm。2点とも口縁の広がった器壁の薄くなる14世紀中～後半の様相を呈する。23は復元口径7.6cm、底径4.4cm、器高2.4cm。底部のやや小さく全体的に丸みを帯びた14世紀中葉以降の様相を呈する。

2区遺構面まで(図19-24)

24は2区の遺構面までに出土したかわらけである。他にも出土しているが小片のため1点のみにとどめた。口径7.7cm、底径4.8cm、器高2.4cmの轆轤成形のかわらけである。灯明皿として使用されたもので、口縁部には灯心を安定させるための打ち欠きと煤が付着する。素地はやや粗く、器壁は厚く14世紀前葉の様相を呈する。

第3節 第3調査区出土遺物

(1) 瓦

図21・図22に示したものはA面上層遺物包含層で検出したものである。

図21-1はI期の女瓦。長さ約41cm、厚さ約2.5cm。このように女瓦がほぼ縦半分に分かれた状態で出土することは多く、熨斗瓦として使用されたとも考えられる。

2はI期の鬼瓦。裏面に引掛け状の凸器をもつのが特徴である。当遺跡では出土した鬼瓦で、このような引掛けの設けられた製品はこれまでなかった。他に鬼の鼻の部分に穴を貫通させている製品も見られたが、こうした穿孔が無い製品もあり、鬼瓦が屋根に固定される方法が多様であったことを窺わせる。

3はII期の剣頭文字瓦。

4・5はII期の寺銘字瓦。

図22-1はI期の唐草文字瓦。女瓦部分中央に釘穴が貫通している。これは焼成以前に穿たれた穴だ

が、この他に後方右側には焼成以後に穿たれた穴をもつ。また女瓦部分左側の割れ口は意図的に欠いた痕跡があり、隅切瓦として用いられたものか。

3はⅡ期の巴文鏡瓦。

4はⅡ期の男瓦。長さ約40cm、幅約19cm。

(2) 瓦以外の遺物

a. かわらけ・陶磁器・金属製品・石製品・漆製品

3区A面まで(図23-1~14)

1~3は轆轤成形のかわらけ。

1は口径7.8cm、底径4.9cm、器高2.6cm。底部はやや小さく、体部は丸みを帯び内湾する。素地は精良、灯明皿として使用された。14世紀中葉の様相を呈する。2は復元口径11.2cm、底径6.4cm、器高3.9cm。素地は非常に粗く、底部も小さい。体部は口縁に向かって大きく外反して行く。14世紀後半~15世紀初等にかけての様相を呈している。3は復元口径13.6cm、底径8cm、器高3.7cm。器壁は薄く、素地も精良14世紀中葉の形態である。

4、5は常滑の捏鉢である。4の素地は精良、色調は赤みがやや強い。口縁部が外側に突出する。5の素地は精良だが2~5mm大の長石が多く含まれる。焼成も良好。体部内面にスタンプによる文様の断片が見うけられる。器高は11.5cm。

6は褐釉の壺。口径2.6cm、底径2.6cm、体部最大径5.1cm、器高3.9cm。素地は灰白色精良緻密で器壁は薄い。底部から約1mmを残し釉が施されている。

7は青磁碗片。復元口径10.6cm、高台径4.8cm、器高3.3cm。素地は精良緻密、灰白色を呈する。糸尻を除き青緑灰色の釉が施され、貫入が見うけられる。

8は瀬戸鉢の口縁部片。素地は黄灰白色で精良、口縁が内湾し褐釉が施される。割れ口には麦漆が付着することから、一度修復されているものと推測される。

9、10は鉄製品である。

9は鉄釘である。途中から折れ曲がるが、長さ約13cm、幅約7mm。頭頂部は潰されて折り曲げられている。

10は刀子。残存長12.1cm、幅2cm。片切刃で目貫穴が穿たれている。

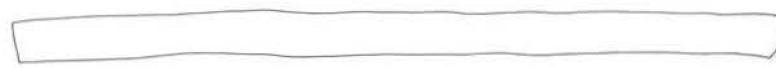
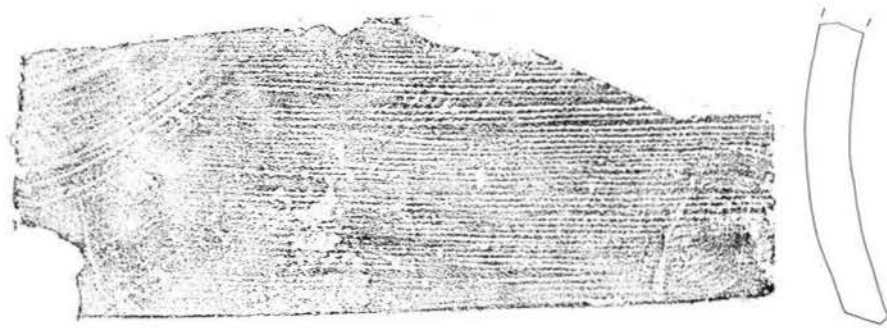
11は砥石片。残存長11.5cm、最大幅2cm。主に図正面、及び左側面を使用したと思われる。

12~14は漆製品。

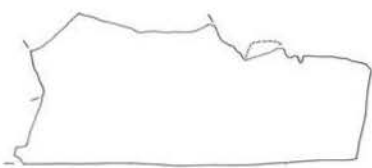
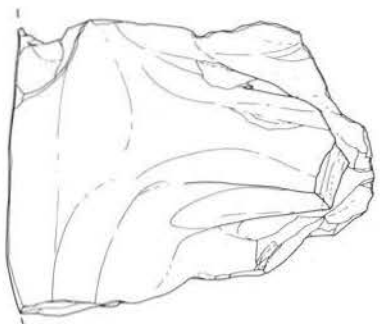
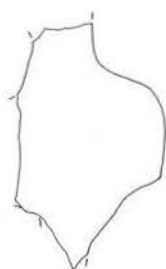
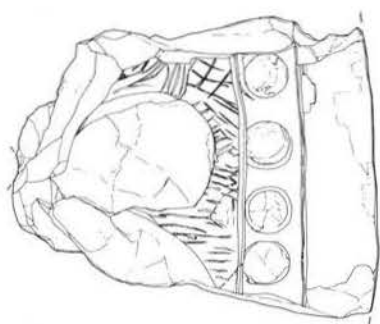
12は用途・形態は不明である。表面の形態は全面に黒漆塗りで、頸部に珠文を巡らし一見香炉のようにも見受けられる。この塗漆の上に、金箔が押されていたと思われ部分的に金箔が遺存している。裏面は焼損している。残存長は最大で6.1cm×5cm。

13は螺鈿製品。残存部は7.7cm×2.2cm。螺鈿自体は残っていないが、文様は螺鈿が埋め込まれた部分の形から宝相華文と思われる。周囲には黒漆が施されている。昭和63年度調査時に、池中から出土した焼損した螺鈿器物の文様も宝相華文であった。

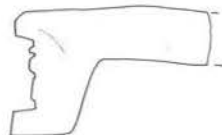
14は蓮華の蕾である。花卉部分は木質黒漆塗り。最大径は9.5cm、残存長は10.2cm、縦方向で合わせる形に2分割して製作されている。これを、幅2.5cm、釘部分の長さ5mmの鉄製の錠を、蕾の中ほどに2箇所打ち込んで接合している。蕾の外表面は黒漆塗りで、金箔が施されていた可能性もある。内面は空洞であったものか焼損している。萼部分は金銅製である。最大径9.8cm、厚さ約3mm。表面に花卉状の文様が浮彫され、裏面と蕾部分が接する所に鍍金が顕著に遺存する事から、焼損前は全面に鍍金が施されてい



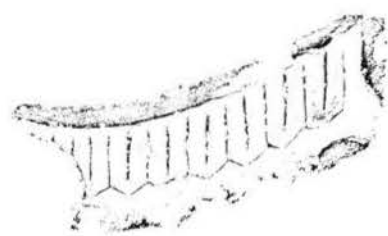
1 A類



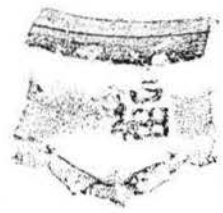
2



4 YNIII01 b



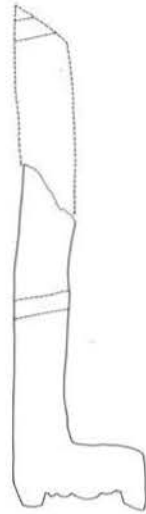
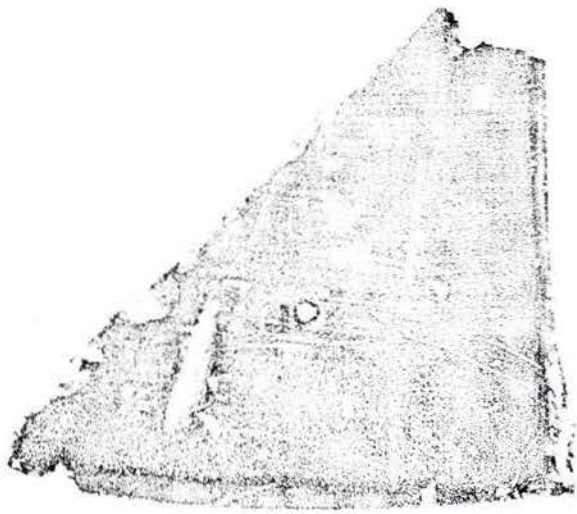
3 YNII04



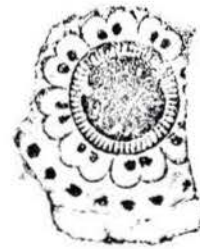
5 YNIII01 a



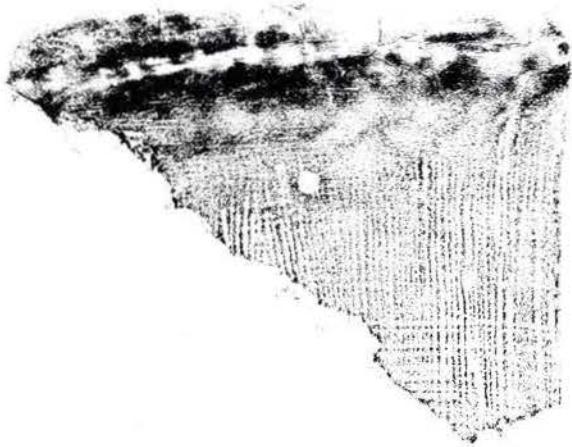
图21 第3調査区 A面 瓦



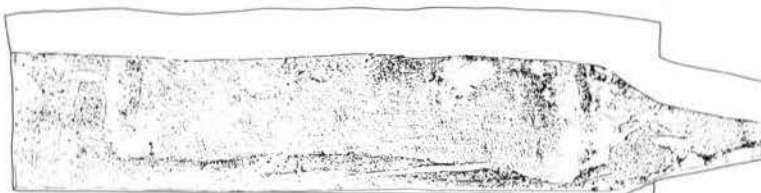
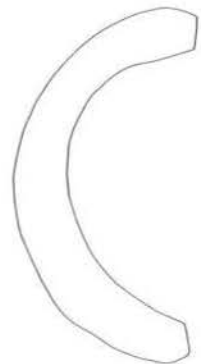
1 YN101f



2 YA101f



3 YA1104a(?)



4 B種

図22 第3調査区 A面 瓦

たと思われる。また、蕾と萼の取り付けには長さ1.6cm～1.8cmの銅製の釘が4本使用されている。

3区トレンチ上層 (図24-1~11)

1~3は轆轤成形のかわらけ。1は復元口径8.6cm、底径6cm、器高1.5cm。2は復元口径8.7cm、底径6.4cm、器高1.4cm。3は復元口径8.5cm、底径6.4cm、器高1.7cm。いずれも砂を多く含む粗い素地だが、焼成は良好である。底部が大きく、器高が低い。

4~11は手捏ね成形かわらけである。4は復元口径8.6cm、器高1.9cm。5は復元口径8.7cm、器高1.9cm。6は口径8cm、器高1.8cm。7は復元口径8.6cm、器高1.9cm。8は口径8.4cm、器高1.8cm。9は口径9.3cm、器高2.1cm。いずれも素地は精良で底部は厚く、体部の断面が三角形になる。4、6、8は底部の形状が糸切りを意識するように平らである。10は復元口径11.7cm、器高3cm。11は復元口径13.8cm、器高3.7cm。

トレンチ上層のかわらけは13世紀中頃の様相を呈しているものと思われる。

3区トレンチ下層 (図24-12~15)

12~14は手捏ね成形かわらけ。12は口径13.2cm、器高3.4cm。13は復元口径14.1cm、器高3.9cm。14は復元口径13.8cm、器高3.7cm。13はやや砂が多いが、他は素地精良緻密。体部には手捏ね部分とナデ部分との境が明瞭。

15は轆轤成形のかわらけ。復元口径16.6cm、底径11cm、器高4.8cm。素地は精良で、非常に大ぶりの製品である。

これらトレンチ下層のかわらけは、いずれも13世紀前半の様相を呈していると考えられる。

b. 木製品・漆製品

3区A面まで (図25-1~9)

1は塗漆の製品である。残存長17.3cm、幅5.1cm、厚さ6mm。表、裏面ともに塗漆であるが、裏面は両端と中央部のみの残存である。

2は残存長15.4cm幅9cm、厚さ9mm。端より約2.5cmに位置に木皮を使ったつまみが付けられている。それぞれ蓋物と思われる。

3は最大径6.1cm、厚さ1.5cmの円形の製品である。側面の削りが顕著で、筒状の物の底部と思われる。

4は用途不明。上部が斜めに削られ、漆が付着する。当初は全面に施されていたものと考えられる。裏面はすべて焼損。

5は形状不明。最大残存長10.5cm、幅6.7cm、厚さ1.2mm(ただし裏面は焼損)。成形のための削り痕が認められる。現状では明らかではないが、塗漆の可能性もある。

6は形状不明。最大残存長13.5cm、幅10cm、厚さ3.3cm(ただし裏面は損傷)。表面は丁寧な下地塗りの上に漆が施されている。仏像の残欠か。

7は木製の剣である。材質は針葉樹で、長さ51.5cm、最大幅3.5cm、最大厚1.7cm。両刃で中央に鑄が入る。現状では白木だが、塗漆もしくは金箔が押されていた可能性もある。文殊菩薩等の仏像に付属する宝剣か。

8は形状不明品。残存長17.7cm、幅6.7cm、厚さ1.9cm(ただし裏面は焼損)。現状で漆が、僅かだが残り下地塗りの痕跡が認められることから、表面全体に漆が施されていたと思われる。

9は形状不明品。残存長約14.7cm、幅約9cm、厚さ(最大)2.2cm。外面は連弁状に彫り込まれ、塗漆のための下地が残る。内面は器状に削られ、やはり下地が残ることから両面とも塗漆であったと推測される。

c. 部材 (図26-1~7)

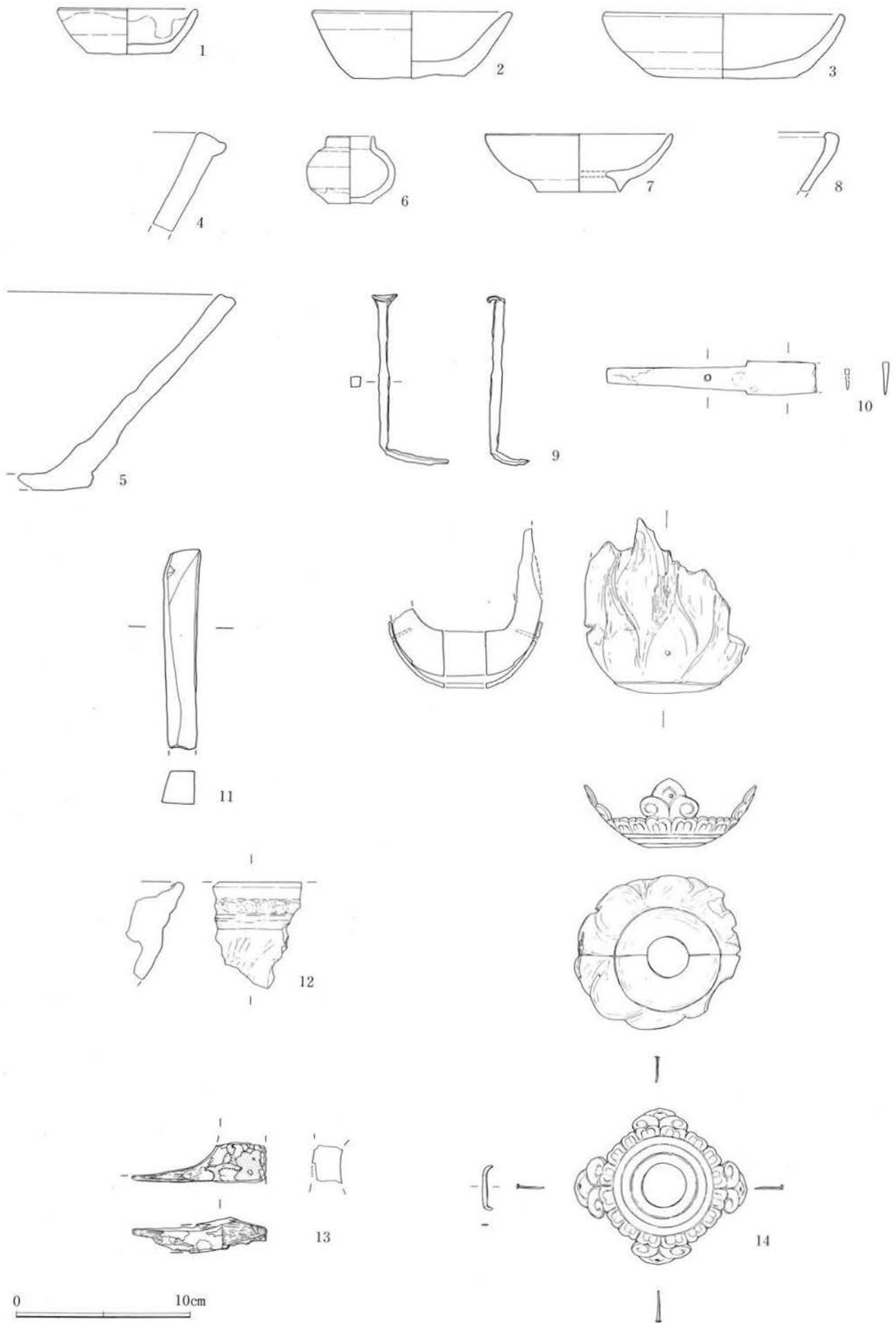


图23 第3调查区 A面上层遗物包含层 瓦以外

1～7は、3区出土の木製部材である。

1は長さ41cm、幅3.2cm、厚さ3.1cm。両端がL字形に成形され、側面に深さ1cmの溝が37.5cmに渡り施されている。両端には1.7cm幅の木片が差し込まれている。建築部材か。

2は残存長41.8cm、幅2.4cm、厚さ1.4cm。角は面取りされ、片側が細く削り込まれる。

3は残存長27cm、最大幅3.1cm、厚さ4mm。片端は鉤状に刻まれ、中央部は弧を描くように、成形される。表、裏の両面とも下地及び部分的に漆が遺存している。用途は不明。

4は残存長24cm、幅3.6cm、厚さ2.8cm。半分は焼損し、形状、用途ともに不明である。

5は残存長24.1cm、幅5.1cm、厚さ2.8cm。中心に穿孔有り。

6は最大長73.8cm、残存幅14cm、厚さ1.6cmの板状の材で、両端は鋭角に加工されている。

7は残存長63.6cm、幅7.8cm、厚さ4.4cm。片端は斜めに、もう片端はL字状に加工され、5本の釘が残る。中央の一部が焼損している。建築部材と考えられるが使用箇所等は不明である。

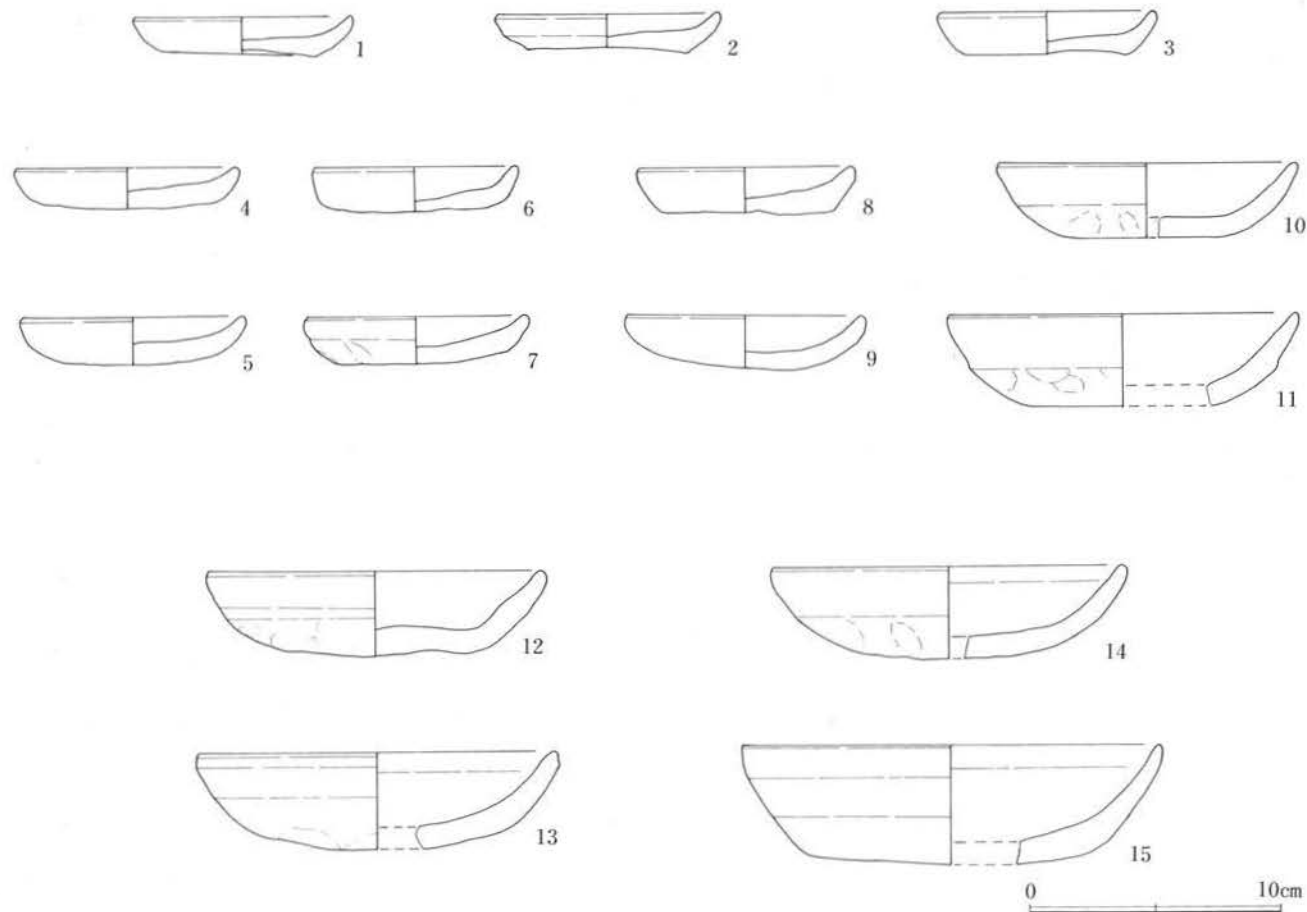


図24 第3調査区 トレンチ上層・下層 瓦以外



图25 第3調査区 木製品

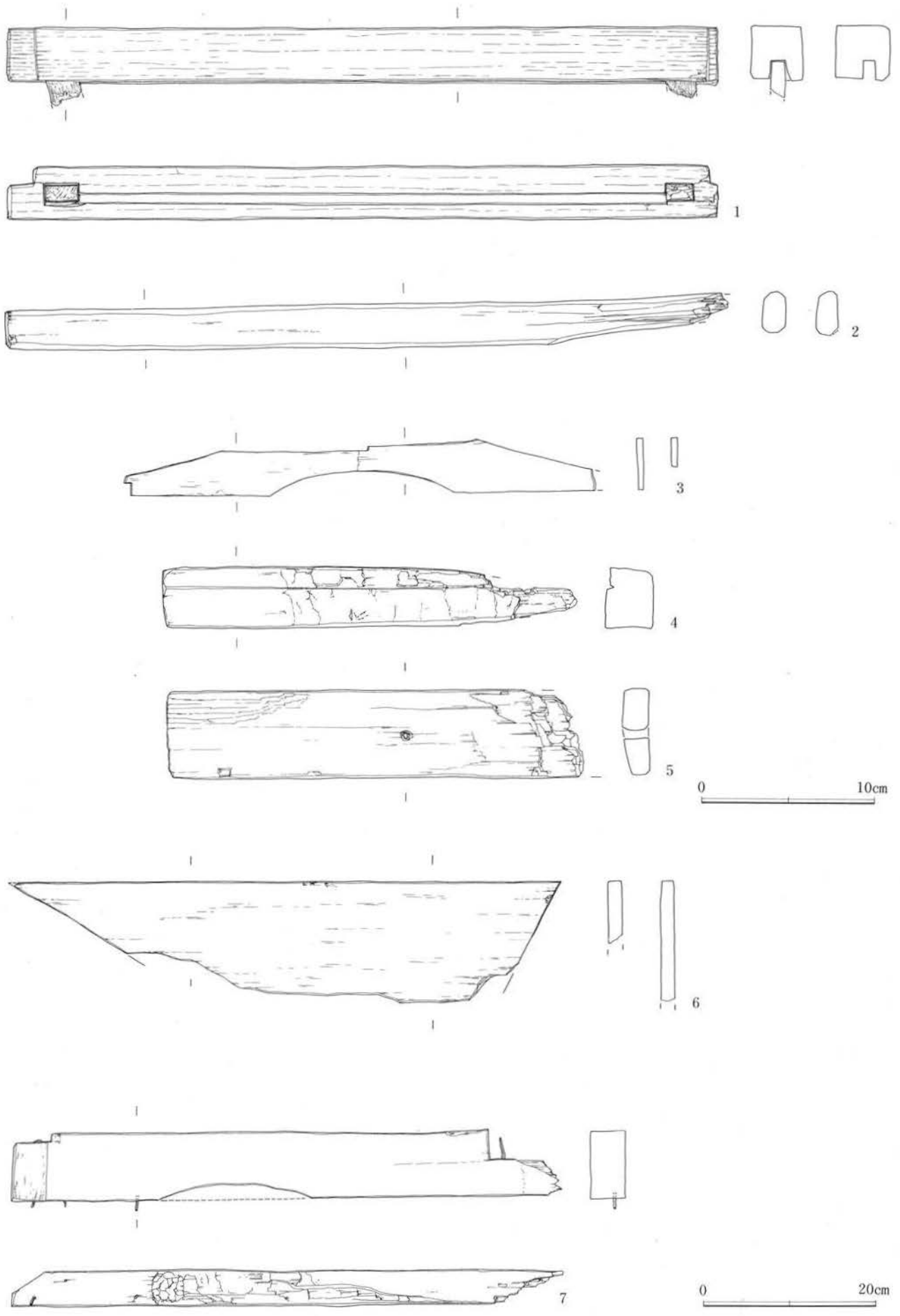


图26 第3调查区 部材

第4章 まとめ

今年度の調査は整備委員会の指導助言に基づき、「遺水の調査」昭和63年度調査時に確認した遺水の流路の確認。「堂舎背後の調査」南複廊、阿弥陀堂背後の確認。「苑池の調査」昨年度検出した東側汀線北側の続き等を主眼として、第1調査区、第2調査区、第3調査区の3ヶ所の調査を実施した。各調査区で検出確認した主な調査成果を調査区ごとにまとめてみる。

第1調査区

2・3・5溝の始まりを調査区の北西隅、西ヶ谷の入口部分で確認した。この場所で2・3溝と5溝を分け、2・3溝は伽藍背後、西側の山裾を北から南に向かって深く、直線的に開削されているのに対し、5溝は北側の山裾を東の苑池に向かって浅く蛇行する形で掘られていた。これはそれぞれの溝の性格が異なるためと考えられる。2・3溝は伽藍背後に配され、規模も大きいことから主に排水を目的とした溝と考えられる。5溝は浅く蛇行し所々に景石、庭木根株等が検出されたことから遺水と考えられ、昭和63年度調査時に確認されている北翼廊の先端、釣殿的建物の下を潜り苑池にそそぎ込む5溝（Ⅲ期以降の遺水）と考えられる。この時に合わせて確認されている7溝（創建期・Ⅱ期の遺水）は、調査区外では現在北翼廊の先端部分から北側の山裾、市道の下に潜り込み、調査区内ではⅢ期に流路を付け替えた時に、埋め込まれてしまったため完全な形で検出されなかったが、中門の脇で5溝と合流しているものと推察された。

調査区の北西、5溝の上流部分で底面レベルが確認されているのはグリッド杭B-3脇で海拔19.8mである。苑池の注ぎ口では18.7mで、この間の高低差は約1.1mある。遺水の上流から苑池にそそぎ込む地点までの直線距離は約35mあり、高低差と直線距離から5溝は約100分3勾配で作られたものと考えられる。作庭記の「遺水の事」中に記されている遺水の水路の勾配の数値も（水路の高下を定めて、水を流し下すに就いて、一尺につき三分、一丈につき三寸、十丈につき三尺を下げたならば、水が滞りなくせせらぎ流れるのである。）100分3勾配である。

第2調査区

調査区の北東隅で検出した直線に並ぶ伊豆石の石列は、南複廊の図面と合成すると複廊の梁行き方向の柱列に平行し、西に約8尺離れ所に位置する事から複廊の雨落ち溝の底石と思われる。

また目隠し塀と溝が平成2年度に続いて確認され、併せて砂利敷きの道路（幅約4m）が確認されたことは、伽藍背後の様子を明らかにする資料を与えてくれた。

第3調査区

鎌倉石の切石を敷き並べた溝と石列は、昨年度の調査で検出した滝口の北側脇の2個の鎌倉石切石と橋遺構の脇で、橋脚とは関係ない直径約30cmの掘立柱が2本検出されているが、図面を合成してみると、溝の西端で南に直角に曲がった切石の線上に位置する事が確認された。この結果、東西の幅約7m、南北の長さ約23m以上の南北に細長い空間が確認された。南の限界はおそらく滝口までと思われる。

この溝と切石、掘立柱で囲まれた空間は周囲より10cm程高く海拔18.8mである。精査しても礎石を据えた痕跡、柱穴等は確認されず建造物があったとは考えにくい。Ⅱ期から苑池の大規模な埋め立てが行われているが、この溝と切石、掘立柱で囲まれた空間を造るために埋め立てが行われたとも考えられる。

昨年度の調査で検出した橋遺構の調査から、二階堂正面の苑池には島がないことが確認されている。「作庭記」中に行事の行う際、苑池の中に島がある場合、これを利用して舞台、楽人の控え等の場所を作る

事が記されている。永福寺の場合にも様々な文献から数々の行事が行われた事が知られているが、二階堂正面には島がないことから、正面对岸に当たる苑池東側で確認した切石溝と石列に囲まれた空間(7×23m以上の範囲)に、舞台や幄舎等行事のための施設を設けたとも考えらる。

宇治平等院でも後に、苑池の対岸に小御所が設けられていたことが近年の調査で確認されたが、同じように永福寺でも創建当初に造られていない施設が、II期頃までに設けられたと考えられる。

源頼朝は、永福寺を攻め滅ぼした平泉藤原氏を始め、戦いで死んだ将兵の鎮魂(怨霊鎮護)のために造営し法要しか行わなかったのに、頼朝の死後、頼家・実朝の頃から舍利会(舞楽)、宴会、蹴鞠等様々な華やかな行事を行うようになり、使われ方に変化が見られるようになった。永福寺の持つ性格が年代とともに変化していったことを窺うことができる。

今年度も諸先生、諸先輩から多くの貴重な御教授を受け、周辺住民のみなさまの深いご理解を賜り、遣水、目隠し塀、道路、苑池汀等の確認という大きな成果を上げ、また事故もなく6ヶ月間に渡る調査を無事終了することができたことを記し深く感謝する次第である。

1. 『作庭記の世界』 森 蘊 NHK Books カラー版c-27。

遣水の事

一、第1に、水の源の方向を定めねばならない。経に、東から南に迎えて西へ流すのを順流とするとある。西から東へ流すのを逆流とするとある。故に東から西へ流すのが常である。また、東方から出して舎屋の下を通して、未申(南西)の方へ出すのが最も吉である。それは青竜(東)の水で、諸々の悪気を白虎(西)の道へ洗い出すからである。その家の主人は疫気や悪瘡の病にかからないで、心身が安楽寿命が長遠であると言っている。

四神相応の地を選ぶ時に、左から水の流れるのを青竜の地とする。そうであるから、遣水も殿舎或は寝殿の東から出て、南に向けて西へ流すべきである。…略

水が東に流れている例は、天王寺の亀井の水である。太子伝に、青竜の常にまもるれい水は東へ流れるとある。この説の様であるならば、逆流の水であっても東方にあれば吉である。…略

一、水路の高下を定めて、水を流し下すに就いて、一尺につき三分、一丈につき三寸、十丈につき三尺を下げたならば、水が滞りなくせせらぎ流れるのである。

但し末になれば、勾配をつけない所でも、上の水に押されて流れ下るものである。現在ほり流して水路の高下を見ることがむつかしいならば、竹を割って地面に仰向けに伏せて、水を流して高下を定むべきである。この様に用意しないで、構わず家屋を建てることは、いわれを知らないのである。水の水上が格別に高い場所については、特に言う必要がない。それは山水の便を得た地である。

遣水はどの方向から流し出しても、あまり凝らないで、このはしあのはし、或いは、こちらの山際に、必要に応じてほりよせほりよせして、面白く流してやるべきである。…略

島について

略…、後の方に諸行事の舞楽を演奏する舞台や楽人のための帷舎などが設けられるように用意せねばならない。楽屋は7、8丈にも及ぶことがあるから、島は予め用意して広めに置きたいのである。

2. 宗教法人平等院『平等院庭園発掘調査概要報告書II』1993年。

IV. 検出した遺構 B. 第IIトレンチ

3. 舞楽の初見 全譯『吾妻鏡』第3巻 新人物往来社

巻第23 健保5年(1217)9月30日

「永福寺に始めて舍利会を行はる。尼御壹所・將軍家ならびに御壹所御出。法会の次第、舞楽已

下美を盡し、善を盡す。」

4. 宴会の初見 全譯『吾妻鏡』第2巻 新人物往来社

卷第16 正治2年(1200) 閏2月29日

「…略、永福寺において郢曲あり。僧・稚児等釣殿に参り、しきりに盃酒を申し行ふ。御供に候ずるの輩、すこぶるもって酩酊す。」

5. 蹴鞠の初見 全譯『吾妻鏡』第2巻 新人物往来社

卷第16 正治元年(1199) 9月23日

「…略、中将家(頼家)永福寺に渡御。御鞠あるべきところ、雨によつて止められをはんぬ。」

附編 史跡永福寺後の花粉化石（平成6年度）

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

平成6年度における発掘調査は1～3地区に大きく分かれ、そのうち、第3調査区においては各時期（I、II、III期以降）の池の汀線跡が検出された。また、それにともない各時期の堆積物も採取することができた。昨年度においてもほぼ同様の堆積物が採取されたが、II期の堆積物については状態がよくなく、この時期の植生について検討することができなかった。この点、今年度の報告においては各時期の堆積物がそろい、池が存在していた時期を通しての池周辺の古植生についての検討が可能である。また、第1、第2調査区においては、2溝、3溝、および遣水が検出され、それらを埋積している堆積物を採取し、それらについても花粉分析を行った。この、2溝、3溝は永福寺の主要建立物の裏手を通っており、裏手丘陵部の植生について、池堆積物とは違った情報も得られることが期待される。

こうした観点から、採取された各試料について花粉分析を行い、その結果、考察を以下に示す。また、発掘調査の際、検出・採取された倒木や杭などの木材遺体について、それらの樹種についてもあわせて検討した。

1. 試料

花粉分析用試料は、第1～第3調査区（図27）において検出された池や溝堆積物について柱状、およびスポットで採取した。これら試料の採取位置を図28に示した。以下に、試料採取層準についての土層記載を示すが、詳しい土層断面や記載については本論を参照して頂きたい。

1) 第1調査区

本調査区においては、調査区南壁より2溝、3溝の、調査区北壁より遣水の埋積土を花粉分析用試料として採取した（図28）。

2溝（試料12～15）は、全体に土丹（泥岩）を主体とした砂レキが多く、花粉分析試料としてはこれら土丹塊の間を埋める粘土質（黒灰色粘土）の部分で採取した。

3溝（試料9～11）の埋積土は、全体に褐色を帯びた黒灰色を呈し、試料9層は砂レキ混じりの粘土、その上位層は粘土質の砂レキ（土丹）層、下位も粘土質砂レキ層である。試料10層は砂質粘土で、材片が認められる。試料11層は粘土質の砂レキ層である。

遣水（試料16～18）の埋積土は、試料16層が青灰色の砂質シルト～シルト質砂で、カワラ片や玉砂利（緑色凝灰岩）、土丹が多く認められる。この上位層は褐色を帯びた青灰色の粘土～シルトで、最上部には富士宝永テフラとみられる黒色スコリアがレンズ状に認められる。試料17層は黒灰色の砂質粘土、試料18層は粘土質砂で、土丹が散在している。

本調査区の材試料は、3溝に沿って認められた杭列のうちの2試料（材1、材2）、3溝がはじまる溜りの脇で検出された柱材（材7、材8）、および遣水内より検出された根株（材9）の計5試料である（図28）。

2) 第2調査区

2溝試料（試料22～24）は本調査区南壁断面（図29）より、3溝試料（試料19～21）は東壁より採取した。

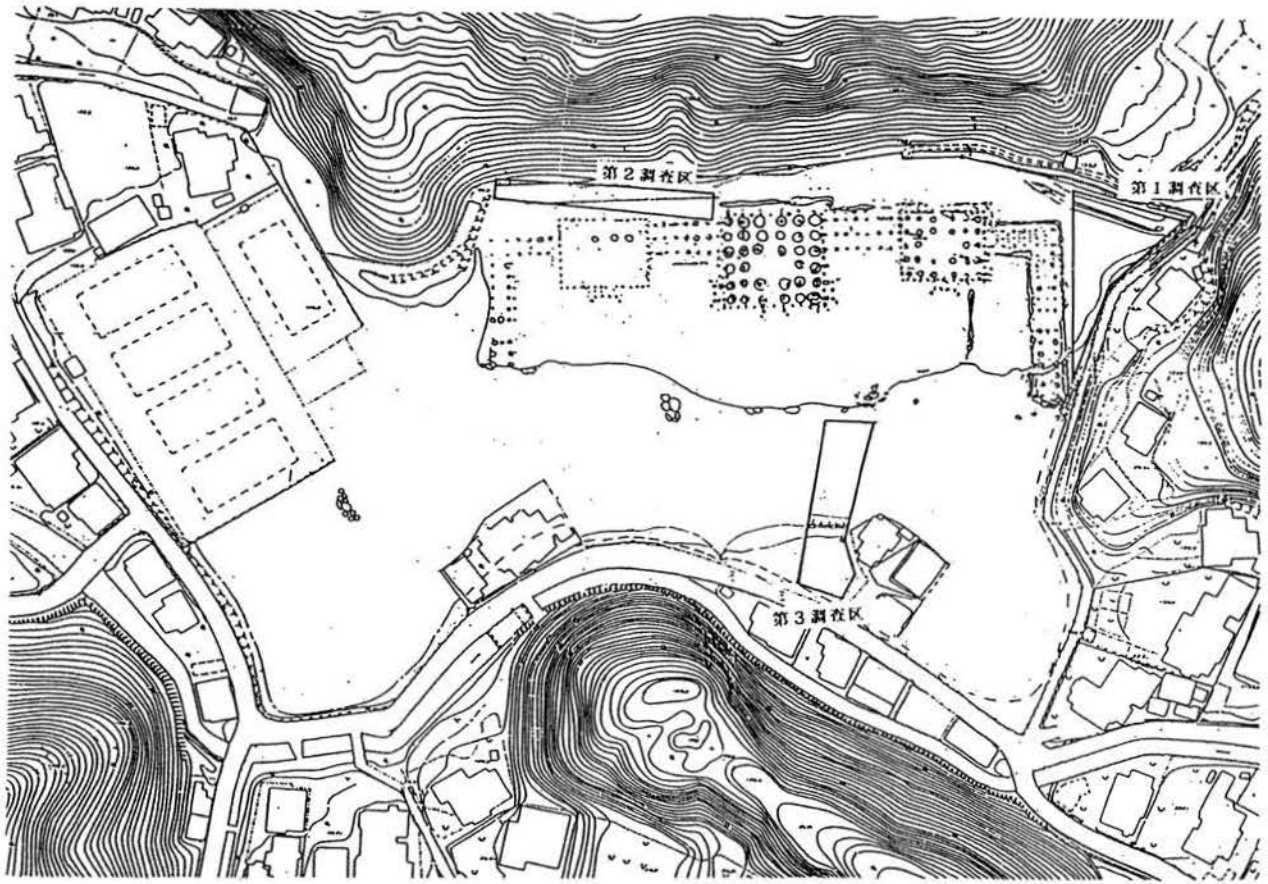


図27 各調査区位置図

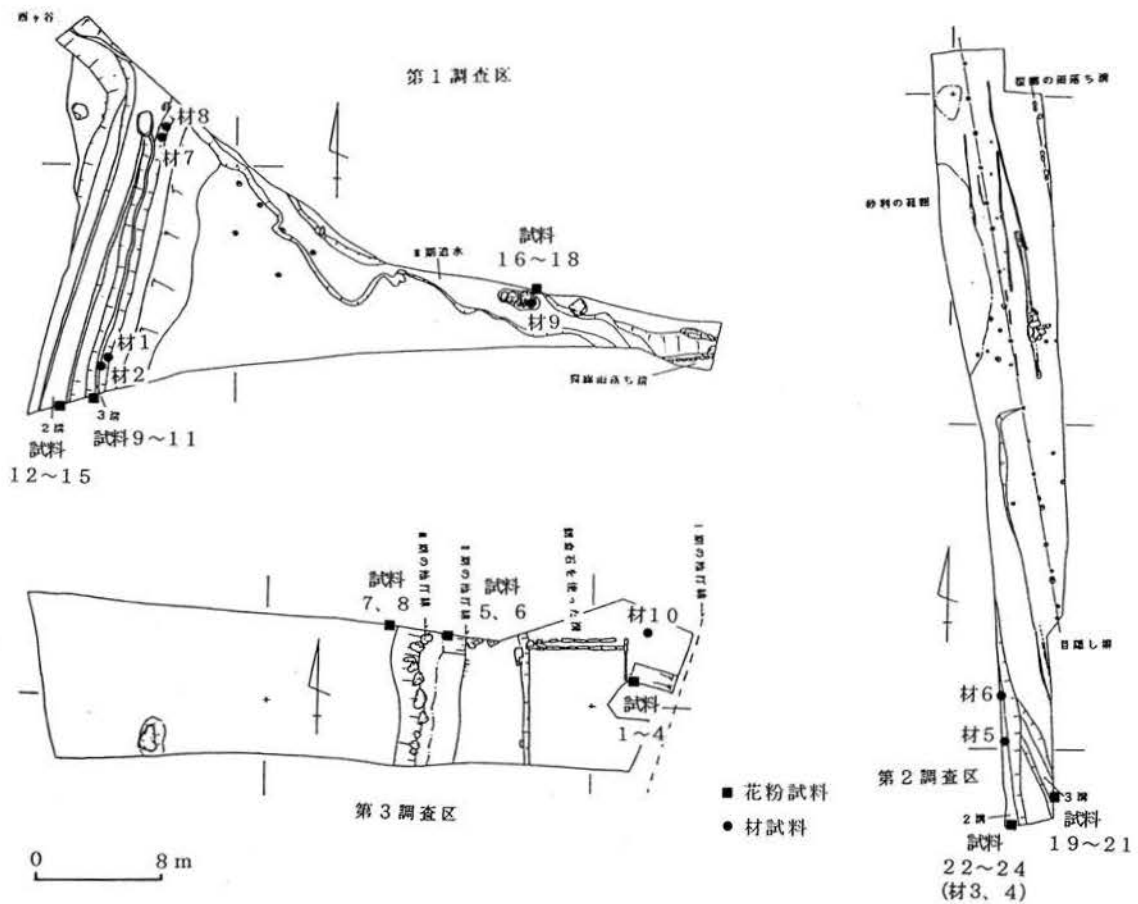


図28 試料採取位置図

2溝の埋積土は、本地点においても土丹が非常に多く、試料22、23は土丹の間を埋めている黒灰色粘土である。また、試料23には多くのニヨウマツ類の葉が含まれるが、保存状態が悪く、アカマツかクロマツかなどについては検討できなかった。試料24層は最下部の黒灰色粘土混じり砂レキ層である。

3溝について、試料19層は黒青灰色粘土で、土丹や玉砂利が多く認められる。この上位層は、土丹粒が多量にはいる黒褐色粘土層である。また、下位の試料20層は、青灰褐色の粘土で、土丹小片が認められる。試料21層は青灰色の土丹小片が主体の層で、上位と同様の粘土が含まれる。この下位は基盤の泥岩層で、2溝や3溝は基盤を削って造られている。

本地区の材試料は、調査区南壁の2溝埋積物中に認められた材3、材4（図29）、および、西壁より突き出たかたちで検出された材5、材6の4試料である（図28）。

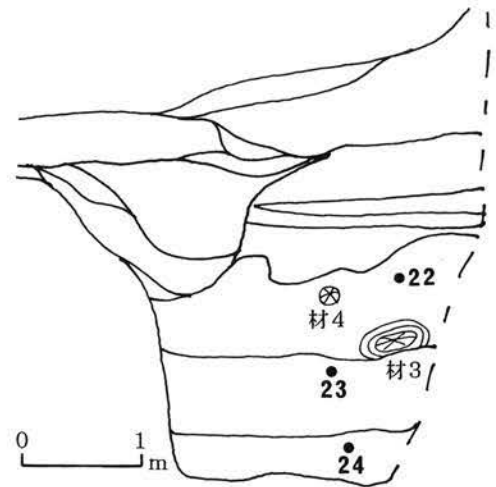


図29 第2調査区2溝の試料採取位置図

3) 第3調査区

花粉分析用試料は苑池の堆積物で、調査区東壁に近い部分で掘られたトレンチ（試料1～4）、および北壁の2地点の計3地点より採取された（図28）。

試料1～4は黒灰色の粘土で、やわらかく、植物片が点在している。また、下部はやや塊状で、亀裂がはいりやすい特徴がみられる。この堆積層は苑池I期の時期（12世紀末～13世紀前半）のもので、上位の青灰色土丹層にも、その間を埋めるように認められる。

試料5、6層は黒灰色の砂質シルト～粘土で、植物遺体が散在している。本層は苑池II期（13世紀中頃）の堆積層で、その下位（池底）は黒灰色のシルト質砂、上位は黒褐色粘土で、土丹塊が点在している。

試料7、8は青灰色の砂質粘土で、下部は植物遺体や土丹小片が多く、貝殻片も認められる。その上位層は褐色を帯びたやや砂質の黒色粘土で、玉砂利や土丹小片が点在しており、これらは苑池のIII期以降（13世紀後半以降）の堆積層である。また、下位層は青灰色の粘土質砂で、池底にあたる。

本調査区の材試料は、I期池堆積物を覆う層の上位より検出されたもので（材10：図28）、13世紀後半以降と考えられているものである。

2. 分析方法

以上、3調査区より採取された、計24試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。なお、試料1～8については体積（約1cc）を測定してから分析に供した。他の試料9～24については、3～5gを、試料が砂レキ質のものについては湿重約20gを用い、また酢酸処理の前に重液分離（臭化亜鉛溶液（比重2.1）を加え遠心分離）を行い、残渣の濃集を図った。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サ

フラニンにて染色を施した。

3. 出土木材の樹種同定

発掘調査の際に検出された木材遺体のうち、10試料について樹種同定を行った。これら10試料の採取位置については図28および図29に示した。なお、同定作業は藤根（パレオ・ラボ）が担当した。

1) 方法および結果

木材は、片刃カミソリを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柁目と同義）の3断面をつくり、ガムクロラル（Gum Chloral）で封入し、永久標本を作成する。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に各標本の記載を述べ、その結果を表1に示す。

表1 永福寺跡出土材の樹種

試料	用途など	出土位置	樹種
1	杭材	I区3溝脇	マツ属複維管束亜属
2	杭材	I区3溝脇	エノキ属
3	倒木	II区2溝	ヒノキ属
4	倒木	II区2溝	サクラ属
5	倒木	II区西壁2溝	スギ
6	倒木	II区西壁2溝	スギ
7	柱材	I区溜り脇（南側）	ヒノキ属
8	柱材	I区溜り脇（北側）	ヒノキ属
9	根株	I区遣水内	アカマツ
10	根株	3区池脇	クロマツ

2) 記載

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版35、1a~1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である（横断面）。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している（放射断面）。放射組織は、エピセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~16細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科マツ属のアカマツの材と同定される。アカマツは、本州・四国・九州などの暖帯および温帯下部に分布する樹高30m、幹径1.5mに達する常緑針葉樹である。

クロマツ Pinus thunbergii Parlat. マツ科 図版35、2a~2c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である（横断面）。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に突出している（放射断面）。放射組織は、エピセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~14細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科マツ属のクロマツの材と同定される。クロマツは、本州（青森県以南）・四国・九州などの海岸沿いに多く分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹である。

マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon マツ科

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である（横断面）。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は、不明瞭ではあるが、内側に向かって鋸歯状に突出している（放射断面）。放射組織は、エピセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~13細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科マツ属のマツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属には、前述のアカマツ (P. densiflora) とクロマツ (P. thunbergii) があるが、組織の保存が悪いため識別できない。

スギ Cryptomeria japonica (Linn. fil.) D. Don スギ科 図版35、3a~3c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行はゆるやかである（横断面）。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、1分野に2個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、単列で2~13細胞高からなる（接線断面）。

以上の形質から、スギ科のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけての温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

ヒノキ属 Chamaecyparis ヒノキ科 図版36、4a~4c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1~2個ある（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり2~14細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ (C. Obtusa) とサワラ (C. pisifera) があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

エノキ属 Celtis ニレ科 図版36、5a~5c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小管孔な内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面）。放射組織は、異性1~11細胞幅、3~71細胞高で鞘細胞をもつ（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ (C. sinensis) や、温帯に分布するエゾエノキ (C. jessoensis) などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版36、6a~6c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が数個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある(放射断面)。放射組織は、同性に近い異性で、1~5細胞幅、2~86細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科サクラ属のうちヤマザクラとモモ以外のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、イヌザクラ (*P. buergeriana*) やウメ (*P. mume*) など数種類ある。

4. 花粉分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、池堆積物(試料1~8)が、樹木花粉38、草本花粉33、形態分類で示したシダ植物胞子2、藻類1の計74、溝部(試料9~24)が、樹木花粉38、草本花粉32、形態分類を含むシダ植物胞子3の計73である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表1(池堆積物)、表2(溝部)に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図30(池堆積物:第3調査区)、図31(3溝:第1調査区)、図32(3溝:第2調査区)、図33(2溝:第2調査区)、図34(遣水:第1調査区)に示した。なお、第1調査区の2溝試料(12~15)については、分析の結果、ほとんど残渣が得られず、検鏡は行っていない。分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また花粉化石の単体標本(花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート)を作成し各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

1) 池堆積物(試料1~8)

I期(12世紀末~13世紀前半)においては、針葉樹のスギ属が30%を越える出現率を示し最も多く検出されているが、I期上部の試料1ではやや出現率を下げている。同様の傾向がイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)にも認められる。反対の傾向がマツ属複雑管束亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)にみられ、下部では1%ほどであるが、上部の試料4では22%の出現率を示している。広葉樹類では、コナラ属アカガシ亜属が最も多く得られているが、出現率としては10%前後で、上部でやや出現率を下げている。シイノキ属-マテバシイ属(以後シイ類と略す)も最下部で10%弱であるが上部でやや出現率を下げている。その他、クマシテ属-アサダ属やコナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などが1%を越えて連続して得られており、試料1、2ではカキ属花粉が観察される。草本類ではイネ科が10~20%と最も多く得られている。ヨモギ属(10%前後)も比較的検出されており、その他、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科-ヒユ科、カラマツソウ属、キンミズヒキ属などが連続して得られている。また、試料3より1点ではあるが、ベニバナ属近似種が検出されている。

II期にはいると、スギ属は10%以下と急激に出現率を下げ、ヒノキ類も同様の傾向を示している。代わって、ニヨウマツ類やコナラ亜属が20%の出現率を示し、最も多く得られている。その他では、クマシテ属-アサダ属、コナラ亜属、クリ属などが5%前後検出されている。草本類の占める割合はI期に比べ小さくなり、イネ科の出現率も10%以下に減少している。ヨモギ属も同様の傾向を示している。このII期においてのみ、水生植物(浮葉植物)のアサザ属アサザ型が検出されており、特徴的である。

III期以降においては、ニヨウマツ類が圧倒的に多く、出現率は60%を越えている。その他は、エノキ

表2 史跡永福寺跡の産出花粉化石一覧表(その1: 苑池堆積物)

和名	学名	I期				II期		III期以降	
		1	2	3	4	5	6	7	8
樹木									
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	-	1	-	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	1	-	2	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	2	4	1	2	1	3	1	1
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	28	8	1	1	43	80	173	244
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2	1	1	1	9	12	16	11
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	2	1	1	-	-	1	1	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	27	49	46	35	24	18	12	8
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	6	10	18	8	4	2	2	1
ヤナギ属	<i>Salix</i>	3	-	1	-	1	-	-	3
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	2	-	2	2	1	2	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	4	13	5	3	13	16	5	10
カバノキ属	<i>Betula</i>	3	4	4	1	-	2	-	2
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	4	4	3	-	3	-	2	1
ブナ属	<i>Fagus</i>	1	1	2	1	3	1	1	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	13	5	8	5	68	59	9	15
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	9	15	27	15	39	27	3	12
クリ属	<i>Castanea</i>	1	2	2	1	15	18	5	2
シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	3	4	14	10	24	13	2	1
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	4	2	4	5	10	5	4	19
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	-	1	-	8	11	23	30
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	5	5	1	1	1	1	1	5
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	2	-	-	-	2	-	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	3	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	-	-	-	1	3	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	1	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	4	3	1	2
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	2	-	1	1	-	-	3	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	1	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	2	-	1	-	4	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	2	-	1	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-
カキ属	<i>Diospyros</i>	1	1	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	1	2	1	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	2	1	2	1	-	1
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	-	-	1	-	-	-	-
草本									
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	-	4	-	1643	1
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	2	1	-	3	-	-	-	1
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	-	-	-	-	2	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	-	2	4	-	-	21	-
イネ科	Gramineae	78	74	82	45	51	45	56	36
カヤツリグサ科	Cyperaceae	23	17	27	9	21	15	67	7
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	-	-	1	-	1	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	1	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	7	4	11	7	17	9	18	5
ギンギン属	<i>Rumex</i>	1	-	1	-	-	1	-	-
イブキトラノオ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	1	1	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	4	-	-	-	-	1	2	1
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	15	7	3	3	25	22	20	19
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	2	2	-	-	2	2	1
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	3	7	8	8	-	1	2	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	2	3	3	3	2	1	-	2
アブラナ科	Cruciferae	11	2	4	1	7	7	17	7
ユキノシタ科	Saxifragaceae	8	5	8	8	3	2	1	1
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	-	-	-	-	1	-
キンミズヒキ属近似種	cf. <i>Agrimonia</i>	7	8	6	3	4	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	-	1	1	-	3	-
マメ科	Leguminosae	7	4	13	6	4	2	5	1
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	4	8	3	3	-	1	5	-
セリ科	Umbelliferae	-	5	4	10	5	1	10	-
アサザ型	<i>Nymphoides peltata</i> type	-	-	-	-	1	1	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	1	1	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	2	2	4	-	5	4	3	3
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	2	-	-	1	-	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
ペニバナ属近似種	cf. <i>Carthamus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	44	59	40	36	27	32	20	11
他のキク亜科	other Tubuliflorae	7	4	3	5	3	2	2	-
タンポポ科	Liguliflorae	7	6	5	7	3	3	4	2
シダ植物									
単条型胞子	Monolete spore	55	79	59	44	66	64	30	29
三条型胞子	Trilete spore	11	8	7	4	4	3	2	2
緑藻類									
クンショウモ属	<i>Pediastrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	14
樹木花粉									
樹木花粉	Arboreal pollen	124	134	152	99	280	286	265	369
草本花粉	Nonarboreal pollen	239	221	230	164	183	154	1905	99
シダ植物胞子	Spores	66	87	66	48	70	67	32	31
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	429	442	448	311	533	507	2202	499
不明花粉									
不明花粉	Unknown pollen	39	57	80	27	83	58	29	23

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

表3 史跡永福寺跡の産出花粉化石一覧表(その2: 2溝、他)

和名	学名	第1区			第2区		第2区		第1区		
		3溝			3溝		2溝		遺溝部		
		9	10	11	20	21	22	23	24	17	18
樹木											
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1
モミ属	<i>Abies</i>	2	2	-	-	3	-	-	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	2	6	-	2	1	-	-	-	9
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	174	74	118	113	74	50	10	97	68	118
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	15	16	20	15	4	22	3	8	3	25
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	6	21	11	27	7	28	3	19	5	24
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	-	-	1	-	-	-	1	-	2
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ペカン属	<i>Carya</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	1	1	-	2	-	1	-	2	1	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	1	2	-	1	2	-	-	1	1	2
カバノキ属	<i>Betula</i>	2	-	1	2	2	-	-	1	-	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	2	3	-	4	1	1	2	-	1
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	-	2	1	-	-	3	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	18	18	16	7	8	2	-	3	1	9
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	6	5	2	10	3	1	-	1	-	11
クリ属	<i>Castanea</i>	3	2	-	1	-	1	-	-	-	-
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	1	2	3	1	3	1	-	2	-	2
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	5	1	3	2	1	-	3	1	8
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	-	-	2	8	-	1	16	2	1
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	-	-	1	2	1	1	-	2	-	1
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	2	4	-	-	-	-	1
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	6	9	2	-	3	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	3	-	-	-	22	-	-
草本											
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	6	5	-	-	1	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	25	29	64	34	47	27	4	71	9	36
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	1	7	11	6	4	5	1	-	4
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	6	4	2	13	-	-	21	-	3
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	2	3	1	1	-	-	-	1	-	-
ミズヒキ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Tovara</i>	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-
イブキトラノオ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	1	-	2	30	1	-	-	-	-	-
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	3	15	15	13	4	6	1	13	4	29
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	3	-	1	1	2	-	1	2	4
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	1	2	2	2	3	-	3	-	2
他のキンボウグ科	other Ranunculaceae	1	-	-	2	-	1	-	2	-	-
アブラナ科	Cruciferae	3	4	6	13	8	3	-	3	-	2
キンミズヒキ属近似種	cf. <i>Agrimonia</i>	-	1	-	-	3	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	1	1	-	-	-	2	-	1
マメ科	Leguminosae	1	-	1	17	-	-	1	4	-	2
フウロソウ属	<i>Geranium</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	18	12	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	1	-	30	76	-	-	-	-	1
シソ科	Labiatae	-	-	1	2	1	-	-	2	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	2	1	2	-	-	-	4	2	-	2
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
ベニバナ属近似種	cf. <i>Carthamus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4	13	22	17	25	17	1	27	-	23
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	3	7	4	3	1	-	-	-	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	10	9	5	7	5	11	-	3	1	4
シダ植物											
アカウキクサ属	<i>Azolla</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
単条型胞子	Monolete spore	9	31	38	746	645	157	29	66	5	16
三条型胞子	Trilete spore	2	1	2	3	2	1	-	1	-	2
樹木花粉											
樹木花粉	Arboreal pollen	234	154	184	209	137	115	18	192	84	225
草本花粉	Nonarboreal pollen	57	90	143	229	224	75	16	157	17	117
シダ植物胞子	Spores	11	32	40	749	647	158	29	68	5	18
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	302	276	367	1187	1008	348	63	417	106	360
不明花粉											
不明花粉	Unknown pollen	9	28	14	31	25	22	3	12	4	26

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

樹木花粉

草本花粉・シダ植物胞子



図30 苑池部(第3調査区)の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

属—ムクノキ属を除いて5%以下と低率である。エノキ属—ムクノキ属はII期より増加の傾向がみられ、III期以降では8%の出現率を示している。草本類では、試料7においてガマ属が突出的に多く検出されており、出現率は75%近くに達している。その他はいずれも3%以下と低率である。

この池堆積物試料においては1cc当りの花粉粒量についても検討したが、樹木花粉総数についてみると、I期では約2,600~5,000、II期では7,000前後、III期以降では、試料8では14,000を越え突出して多く、試料7では約7,000であった。堆積物の物理的性質などについては検討していないが、II期以降花粉粒量が増加する傾向にあると推測され、これは、ニヨウマツ類の急激な増加が強く影響していると思われる。

2) 3溝 (試料9~11、19~21)

3溝については6試料について分析を行ったが、試料19についてはほとんど残渣が得られず、検鏡は行っていない。

大きな傾向としては、ニヨウマツ類の高率出現で特徴づけられ、試料10 (48%) 以外は60%を越える高い出現率を示している。スギ属は10%前後とそれほど多く検出されてはいない。第1と第2調査区では多少違いがみられ、第1調査区 (図31) では、コナラ亜属が10%前後とニヨウマツ類に次いで多く得られている。第2調査区ではカエデ属は5%前後と比較的多く検出され、その他、コナラ亜属、アカガシ亜属、エノキ属—ムクノキ属なども5%前後の出現率を示している。また、単条型胞子が非常に多く得られている。

この3溝はI期~II期 (12世紀末~13世紀後半) の期間において存続しており、上記の花化石の傾向はこの時期に当たると考えられる。

3) 2溝 (試料12~15、22~24)

2溝については7試料について分析を行ったが、第1調査区の試料12~15についてはほとんど残渣が得られず、検鏡は行っていない。また、第2調査区の試料23においては得られた花粉粒数が少なく、分布図として示すことができなかった。

第2調査区の分析結果 (図7) をみると、ニヨウマツ類が40%を越える高い出現率を示し、最も多く得られている。スギ属は試料24では10%弱であるが、試料22では24%と多く検出されている。広葉樹類はいずれも低率であるが、最下部の試料24ではエノキ属—ムクノキ属、ニシキギ科、ガマズミ属が特徴的に検出されている。草本類はいずれも低率で、その中ではイネ科が10%前後得られている。また、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属が1%を越えて得られ、単条型胞子は試料22で45%と多く検出されている。

この2溝はII期末~IV期初め (13世紀後半~14世紀前半) の期間存続しており、第2調査区では3溝を切って2溝が造られているのが観察される。

4) 遺水 (試料16~18)

16~18の3試料について分析を行ったが、試料16においてはほとんど残渣が得られず、検鏡は行っていない。

検鏡の結果、ニヨウマツ類が高い出現率を示し、試料17では80%を越えている。スギ属は10%前後検出されているが、その他、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属などは5%以下である。草本類は検出個数が少なく、試料18においてイネ科の10%が最高である。そのなかで、アカザ科—ヒユ科は

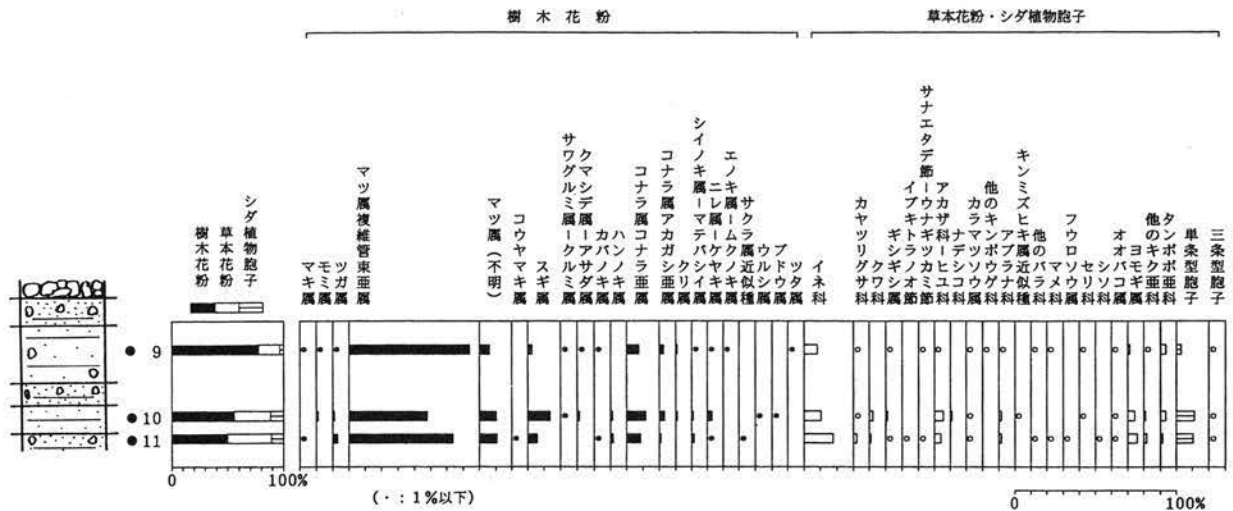


図31 3溝(第1調査区)の花粉化石分布図
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

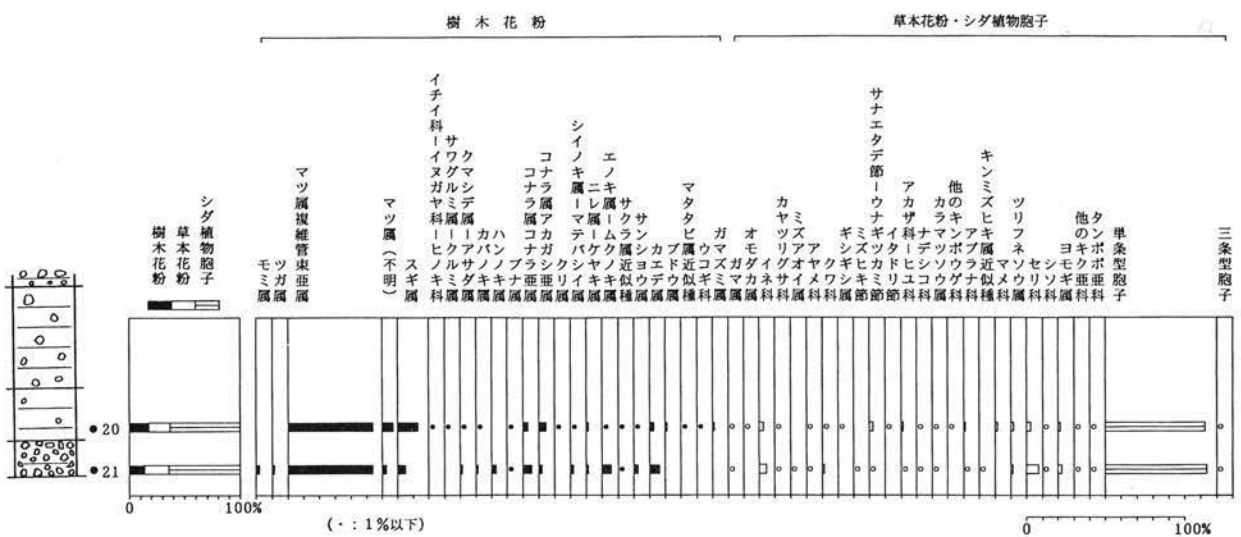


図32 3溝(第2調査区)の花粉化石分布図
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

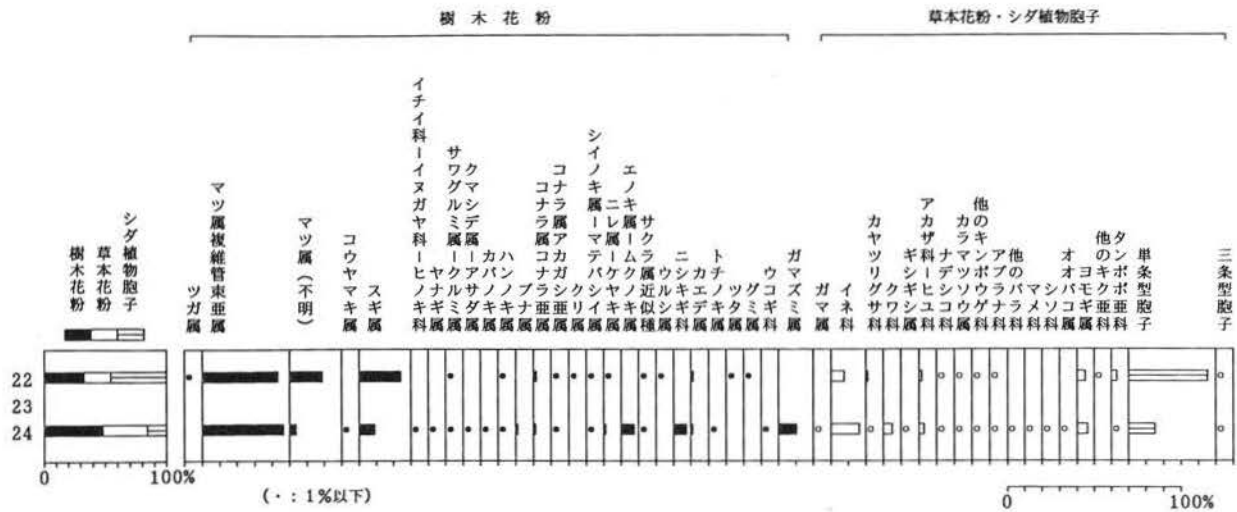


図33 2溝(第2調査区)の花粉化石分布図
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

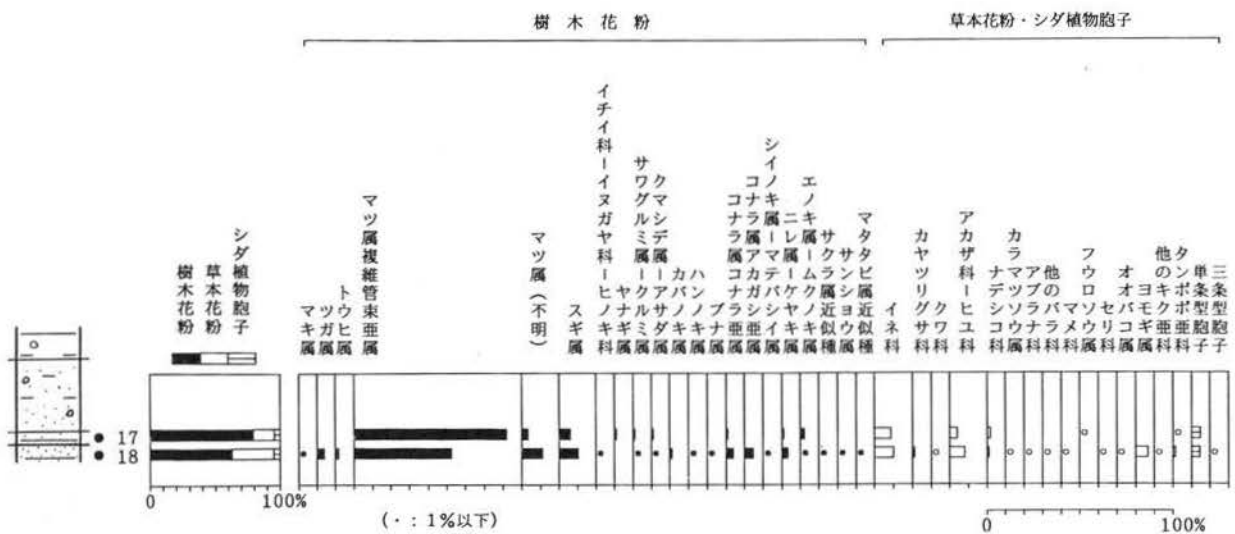


図34 遺水部(第1調査区)の花粉化石分布図
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

他の試料と比べ比較的多く検出されており、また、試料18からベニバナ属近似種が1点ではあるが検出されている。

5. 永福寺周辺の古植生変遷

今年度の分析においては永福寺の各時期について行われており、以下にこの時期にそって遺跡周辺の古植生について検討した。

I期(12世紀末～13世紀前半)：池試料において、スギ属が最も多く検出されており、スギを主体にヒノキ類なども交えた温帯性針葉樹林が永福寺周辺に広く分布していた。また、アカガシ亜属やシイ類を中心とした照葉樹林も周辺丘陵部に多く生育していた。これら針葉樹林や照葉樹林はI期の終わり頃(上部)には減少する傾向にあり、代わって、ニヨウマツ類やコナラ亜属といった二次林要素が増加する傾向がみられる。時期は異なるが、第2調査区の2溝にはスギの倒木がみられ、市内の佐助ヶ谷遺跡においては大量のハシが検出されており、その樹種について一部ではあるが検討した結果、全てがスギと同定されている(藤根 1993)。また、昨年度の発掘調査により検出された橋の構造材にヒノキ属が使われている(藤根 1994)。このように、スギやヒノキ属は有用材として多量に使用されたとみられ、永福寺周辺においてもこれらの樹木は伐採されたことが考えられる。こうしたことから永福寺周辺ではスギ林などは縮小し、代わってニヨウマツ類やコナラ亜属が二次林として分布を広げたものと推測される。また、池周辺においてはこれまでの分析調査から、クロマツが植栽されていたのではないかと推測されており(鈴木 1994など)、ニヨウマツ類の増加はそうした影響も示しているであろう。

今回の分析においてはじめてカキ属花粉が検出され、池周辺においてこの時期にカキ属の存在も推測される。

このI期においてはイネ科やヨモギ属などの草本類が比較的多く検出されている。その他、カラムツソウ属やキンミズヒキ属、ツリフネソウ属なども連続して検出されており、少なくとも永福寺建立物とは対岸部分においてはこれら雑草類が多く生育していたとみられる。

試料3よりベニバナ属近似種が検出されている。また、時期は異なるが遺水試料(試料18：Ⅲ期以降)からも検出されている。ベニバナは日本にはなかった分類群で、金原・粉川(1989)は、奈良県桜井市の上之宮遺跡第5次調査において6世紀代まで遡るとされる遺構よりベニバナ花粉を検出している。これまでベニバナやこれを含めたベニバナ属花粉の形態についての検討例はなく、ここではベニバナ属近似種としたが、現生花粉との比較からベニバナである可能性が高いと考えている。このベニバナは花冠を採集して染料や紅に使用しており、当時永福寺周辺において栽培されていたことが推測される。

Ⅱ期(13世紀中頃)：I期の終わり頃からみられたが、ニヨウマツ類とコナラ亜属の二次林要素が永福寺周辺では目立つ存在となり、スギやヒノキ類を主体とした針葉樹林は急激にその分布域を狭めた。3溝は12世紀末から13世紀後半まで存続していたとみられているが、今回の分析結果では下部試料よりニヨウマツ類が非常に多く検出され、池試料とは多少異なる結果が得られている。これについて一つには、永福寺建立に際して裏手丘陵部は削られるなどかなり影響をうけていたとみられ、それにより、早い段階でニヨウマツ類がこの部分に侵入したことが予想される。また一つには、下部試料においてもI期の堆積物ではなく、ニヨウマツ類が目立って多くなるⅡ期の時期のものである可能性も考えられよう。先に行った4溝堆積物の花粉分析結果(鈴木 1991a)では、ニヨウマツ類は殆ど検出されておらず、スギ属やアカガシ亜属が優勢で、この時期の永福寺周辺はスギ林や照葉樹林が優占していたと考えられて

いる。こうしたことから、今回の分析試料については少なくともⅠ期のものではない可能性も考えられるのではないかと思われ、これについてはさらに検討する必要があるだろう。

池試料をみると、この時期のみより浮葉植物のアサザ属アサザ型が検出されている。この花粉は昨年度調査においても検出されており、時期は13世紀後半頃と考えられている(鈴木 1994)。今回はⅡ期の13世紀中頃と考えられ、こうした時期において、苑池にはアサザ属アサザ型(アサザ、ヒメシロアサザなど)が生育していたであろう。

また、この第2調査区の3溝においてはカエデ属やセリ科が比較的検出されており、単条型孢子も非常に多く検出されている。おそらく、試料採取地点付近の丘陵部においては当時、カエデ属の存在が予想され、セリ科やシダ植物が多く生育していたと思われる。

Ⅲ期以降(13世紀後半~14世紀前半)：この時期においては、池堆積物をはじめ、2溝、遣水試料ともにニヨウマツ類が圧倒的に多く検出されており、永福寺周辺はニヨウマツ類がさらに目立つ存在となった。このニヨウマツ類についてはこれまで検出された葉や根株の分析結果(鈴木 1991a, 1991bなど)から、クロマツであろうと考えられていた。しかしながら、今回の調査で遣水内より検出された根株はアカマツと同定され、はじめてアカマツの存在が明かとなった。第2調査区の2溝においては、試料24においてニシキギ科やガマズミ属の特徴的な産出が認められ、試料22においては単条型孢子が非常に多く検出されている。ニシキギ科やガマズミ属は虫媒花であり、花粉が散布される範囲はそれほど広くはないと思われ、これらが試料採取地点付近の丘陵部に生育していたと予想される。また、シダ植物も前の時期より引続き多く生育していたと推測される。

池試料の試料7において非常に多くのガマ属が得られている。ガマ属の多産については吉川(1990)や鈴木(1991b)にも認められ、一時期苑池においてガマ属が多く生育するようになった。

6. まとめ

1) Ⅰ期(12世紀末~13世紀前半)の永福寺周辺ではスギ林や照葉樹林が優勢であったが、Ⅰ期の終わり頃にはニヨウマツ類の増加がみられる。また、永福寺裏手においては早い時期にニヨウマツ類の侵入も一部には予想される。

2) Ⅱ期(13世紀中頃)においては、ニヨウマツ類やコナラ亜属などの二次林要素が目立つようになった。また、苑池にはアサザ属アサザ型の浮葉植物が生育していた。

3) Ⅲ期以降(13世紀後半~14世紀前半)の永福寺周辺は、ニヨウマツ類がさらに多くみられるようになった。また、苑池には一時期ガマ属が多くみられた。

4) 遣水内よりアカマツの根材が検出され、これまで行われてきた植物遺体分析ではじめてアカマツの存在が明かとなった。

5) ベニバナ属近似種が検出され、永福寺周辺においてベニバナの栽培の可能性も考えられる。

引用文献

- 藤根 久(1993) 佐助ヶ谷遺跡出土木製品の樹種同定。 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団, P.389-396.
藤根 久(1994) 永福寺跡から出土した橋構造材樹種。 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成5年度—, 鎌倉市教育委員会, P.40-42.

佐助ヶ谷遺跡発掘調査団（1993）佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書－第2分冊－
456P.

鈴木 茂（1991a）平成元年度史跡永福寺跡の溝内堆積物の花粉化石。 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成2年度－， 鎌倉市教育委員会， P.26-32.

鈴木 茂（1991b）平成2年度史跡永福寺跡の苑池堆積物の花粉化石。 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成2年度－， 鎌倉市教育委員会， P.26-32.

鈴木 茂（1994）史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石。 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成5年度－， 鎌倉市教育委員会， P.17-25.

吉川昌伸（1990）史跡永福寺跡における花粉化石。 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成元年度－， 鎌倉市教育委員会， P.20-34.

— 平成7年度の調査 —

第1章 調査の経過

第1節 調査区の設定

平成7年度の発掘調査は、整備委員会の指導助言に基づき、「苑池の取水遺構の確認」を主な目的に、調査地点を設定した。この地点は、永福寺跡整備地域の北東隅にあたり、昨年度まで調査事務所の置かれていた場所である。整備計画地内に、6地点設置してある『永福寺跡測量基準点』(平成元年度設置)の内、No.2 ($X=-74891.062$ $Y=-23790.173$ $H=19.680$)、No.5($X=-74875.810$ $Y=-23882.056$ $H=21.532$)、No.6 ($X=-74812.178$ $Y=-23894.588$ $H=22.882$)を今年度の測量原点と定め、調査区の測量グリッド杭を設定した。この調査地点は整備地内に、20m方眼で設定している測量グリッド杭の、C-6・7・8、D-6に囲まれた範囲で、調査対象面積は1,310m²である。

平成7年9月1日より、調査地点の位置出し測量等の現地調査を開始した。そして平成8年1月31日までに機材を撤収し、現地調査を終了した。

第2節 層序及び概要

遺構埋没深度は現地表下約1.5~2.3mである。表土の下には近年、宅地造成のために客土された盛土が約70cmと、昭和40年代まで営まれていた、水田の耕作土・床土が約80cmの厚さで堆積している。

宝永年間の富士山スコリア (F-HO-1) が、海拔19.5m前後で、調査区のほぼ全域で確認されている。遺構面の上に堆積する土砂の大半が永福寺廃絶以後、中世から近世にかけての水田及び畑の耕作土と思われる。また苑池遺構の堆積土の大半は、池中に流れ込んだきめの細かい灰色の砂質土、粘質土等の非常に柔らかく粘性が強い土と、粗い砂と水摩した土丹が混じる土の二種類に分けられる。柔らかく粘性の強い土は澱んだ状態で堆積したものと推測され、粗い砂と水摩した土丹の混じる土は、強い流れがあったことが推察される土層である。

今年度の調査地点は整備地域の北東隅にあたり、南北に広がる永福寺庭園の北東の隅に位置するものと考えられる。調査地点の北側一帯が亀ヶ淵と呼ばれ、また奥深くに延びる杉ヶ谷の入口である。

永福寺建立以前は、杉ヶ谷から流れ出る二階堂川と北西に位置する西ヶ谷からの流路が合流して、平坦地を形成していたと考えられる。永福寺建立のため、敷地の中央を北から南に流れていた二階堂川を、東の山裾に沿った流路に付け替え苑池を作ったと考えられる。また付け替えた地点より、庭園に水を取り入れていたとも推察されることから、調査の主眼が庭園の取水遺構の確認に絞られた。

第2章 検出された遺構

庭園

調査区の全域で、池に景石を配した庭園とこの庭園に水を取り込むための取水遺構を検出した。景石を配していたのは主に調査区の西側で、北側の丘陵の先端を利用し、岬状に削り残した地山に沿って凝灰砂岩質の景石を組み合わせ並べていた。

記録を取りながら全体を掘り下げる調査は、Ⅳ期-1面からⅣ期-3面までとして、これ以下のⅢ期・Ⅱ期・Ⅰ期の調査は、Ⅳ期-3面までに確認した遺構を保護するために、一番影響の少ない地点を選び部分的に掘り下げるトレンチ調査に切り替えた。

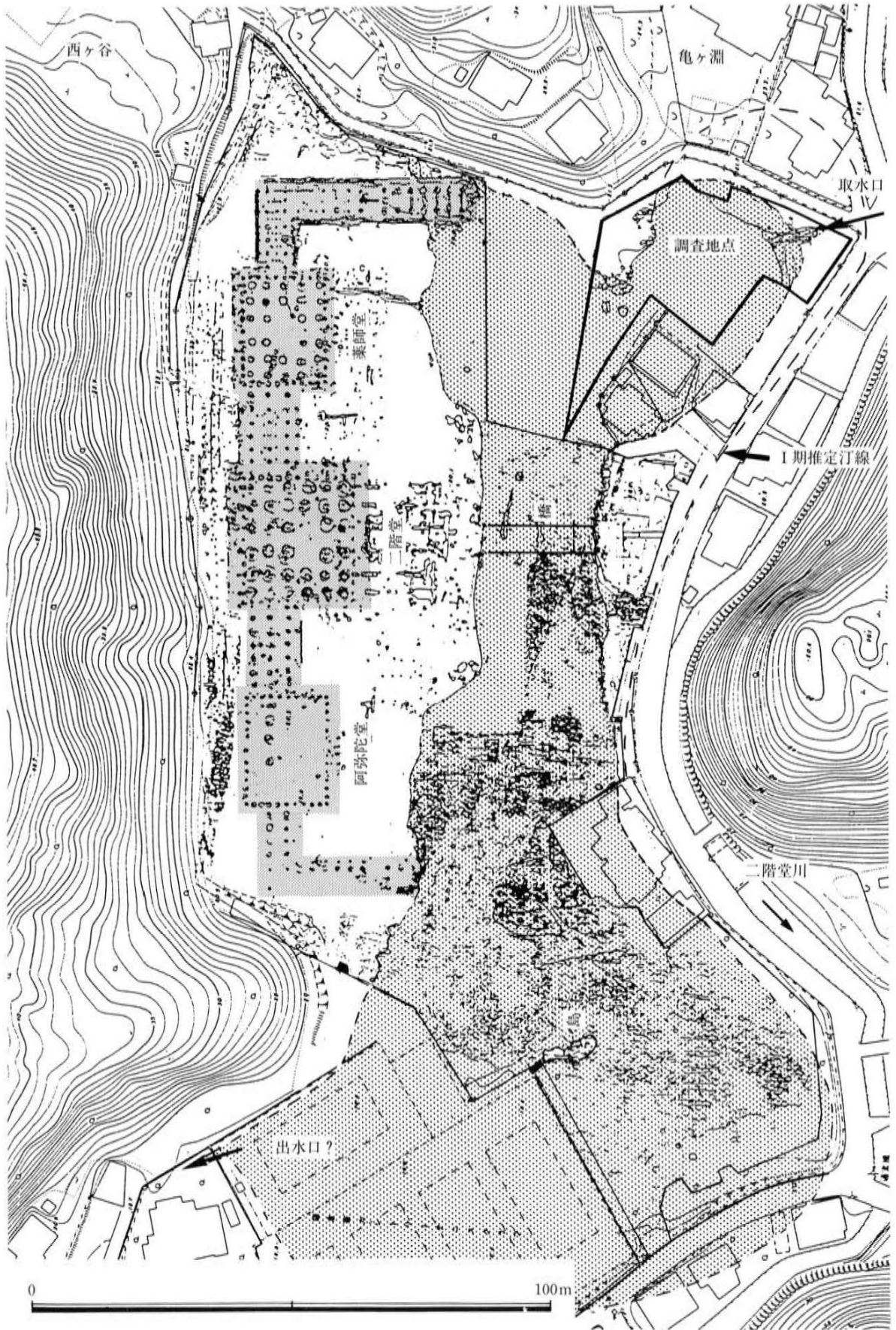


図35 調査地点及び周辺地形図とⅢ期苑池の範囲

a. IV期-1面

調査区内で、(海拔約19.7~19.4m) 富士山宝永年間のスコリア (F-HO-I) を検出した。このスコリアの下 (海拔19.6~19m) のほぼ全域で、灰茶褐色砂質土 (粘質土) 層のIV期-1面を検出した。

調査区の北東隅の面上には鎌倉石の切石が18個、30cm大の伊豆石が1個、計19個の石が寄せ集められたり散乱した状態で検出され、検出した石材の上面にスコリアが見られた。また調査区の西側では景石が多数検出されたが、そのほとんどはIV期-1面の構成土中に埋もれた状態であった。この状況は昭和63年度に調査した、北側翼廊先端部でIV期以降の遺構とした面の検出状況に類似している。この時期の苑池はかなり縮小していたものと考えられる。

b. IV期-2面

IV期-1面を約30~90cm掘り下げる (海拔19.6~18.5m) と、下のIV期-3面の池汀線周辺を灰褐色土で貼り増したIV期-2面を検出した。池中には約60cmの堆積土があり、大きく上層と下層に分層出来る。上層には澱んだ水の堆積と考えられるきめの細かい暗茶褐色の粘質土が、下層には多量の水が流れ込み堆積したと考えられる粗い砂、水摩した土丹礫、砂利が互層に堆積してる。

取水遺構

調査区の北西部でIV期-1面で確認した鎌倉石の石材の下から、調査区の北東隅から南西方向の池に向かって延びる長さ約60cm、幅約30cm、厚さ約45cmの鎌倉石の石材を断面箱形に組み合わせた長さ2m、幅約26cm、深さ30cmの水路と、これに続く長さ約9m、幅約1.6m、深さ約60cmの土丹で護岸した水路を検出した。この一連の水路 (合計の長さ約11m) が、二階堂川からの水の導水路になるものと考えられる。

鎌倉石を組み合わせた水路の落ち口、土丹で護岸した水路の底には粗い砂、水摩した土丹粒が厚く堆積しかなりの水量があった事がうかがえる。水が池に流れ込む位置には中州があり、景石が据えられていた。池中に流れ込む水流を、景石を利用して二手に分けていたものと考えられる。

取水遺構周辺の水際 (海拔18.7m前後) に沿って、点々と長さ80cm程の景石が並べられている。景石はただ面の上に置かれるだけで根石などは使われていない。溶岩、海辺の岩が使われていた。

岬部分

IV期-1面では頂部だけが見えていた景石は、IV期-1面の構成土を掘り下げたために全体を露出する事ができた。景石は据え方に大きな土丹を使って脇を固めて固定しているもの、景石の据え方に瓦を

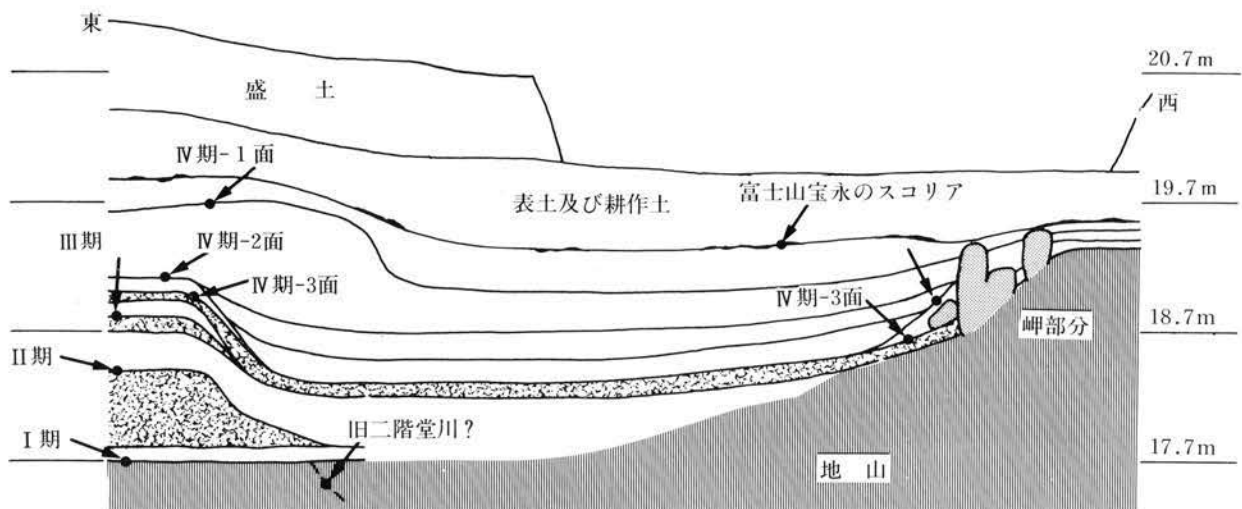


図36 調査地東西土層断面模式図

差し込んでいるもの、大きな景石の上に重ねられているものなどが確認された。岬の周辺は水際から3 m位の幅で灰褐色砂質土を使い貼り増され、なだらかな洲浜を形成している。

この時期の池底の堆積土中には多くの木片、植物遺体が混入し、見た限りでは松葉が多いように思われる。

c. IV期-3面

IV期-2面の構成土である、灰褐色砂質土を掘り下げると10~20cm下(海拔19~18.3m)で、拳~人頭大の土丹を使って丁寧に地業された面を検出した。この検出した面は、調査区北東のB-8グリッドの陸部、調査区西側のB・C-6グリッドの岬部分、調査区中央部のB・C-7グリッドの池中全体に広がっていた。ただし岬部分の池中に据えられている景石より約2m以南、調査区南部では、土丹を突き固めたIV期-3面の地業層は徐々になくなってしまふ。この事からIV期-3面は、I期(創建時)に地山を削りだして掘り窪めた池の岬部分東部から、取水遺構周辺一帯に新しく大規模に貼り増された池底と考えられる。

取水遺構

IV期-3面で確認した取水遺構の水路の長さは、鎌倉石の石材を組み合わせたおそらく断面箱形の幅推定1.5m、深さ推定30cm、長さ約2mの水路と、土丹で護岸した幅約3m、深さ60cm、長さ約4mの水路の合計約6mと考えられる。これは上層のIV期-2面の時期の水路より約5m短いことになる。IV期-3面では池底の貼り増しと水際の貼り増しが行われ、池の範囲を3~5m狭めたため、逆に水路の長さが延びたものと考えられる。

この時期の水際は、3ヶ所入れたトレンチ調査でIV期-2面の水際より約3~5m広がった位置で確認され、中から合計5個の景石が出土している。狭いトレンチ内の観察だが、景石はIV期-3面の上に置かれているだけのようである。安山岩と近在の海辺で見ることのできる海食を受けた凝灰砂岩を使用していた。

岬部分

岬部分の東側の水際、洲浜状に貼り増されていたIV期-2面の構成土を10~40cm掘り下げると、拳大の土丹で貼り増した上面に砂利と木片を比較的多く含むIV期-3面を検出した。この面まで掘り下げて初めて確認できた景石もある。多くの景石はIV期-2面の構成土を掘り下げたため、全体が露出してより立体的になった。B-7グリッド、調査区の北壁際でIV期-2面構成土中から3本の塔婆が立ち腐れた状態で出土している。また岬の東側の付け根部で五輪塔婆「出離往生極楽世界為也」1本、笹塔婆「南無大日如來」が6本出土している。

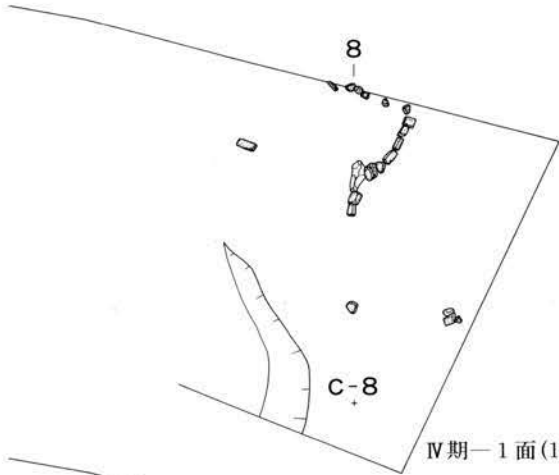
d. I期・II期・III期

基準線Cグリッドラインに沿って、I期からIII期の池の範囲を土層断面から観察するために、C-8グリッド杭の南に沿って東西方向に約10mの長さのトレンチを設定した。

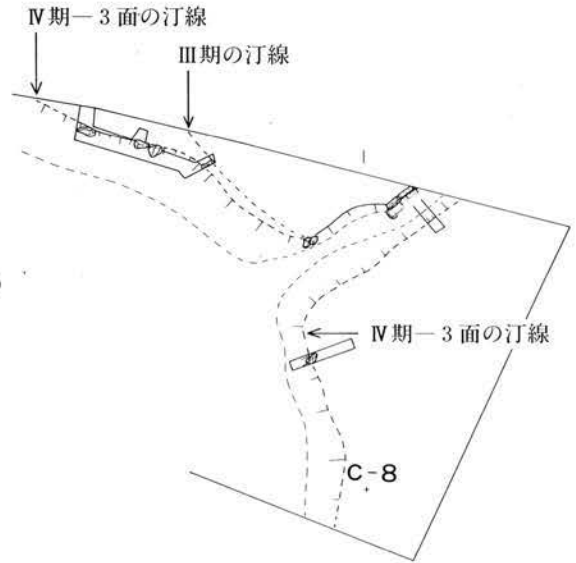
IV期-3面の下で土丹を貼り増した二時期の地業層と地山面を確認した。

二時期確認した地業層のうち、上部の地業層は、IV期-3面の約20cm下(海拔18.8~18.1m)で検出したもので、合わせて出土した遺物からIII期と思われる。土層断面の観察からIV期に見られる池の輪郭線の基本はこのIII期の地業で作られている。ただしIV期-3面に行われた池底の貼り増し程大規模な地業ではない。

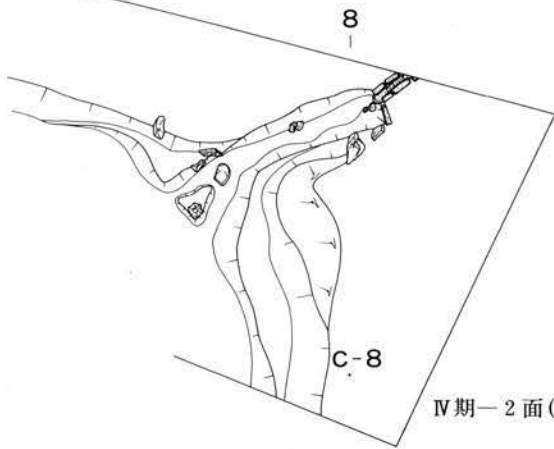
下層の地業層は、上層III期の地業層の約40cm下(海拔18.4m~17.8m)で検出したものである。地業層の土丹の厚みが約60cmもある大規模な地業層で、平成4年度・5年度・6年度の調査で確認している



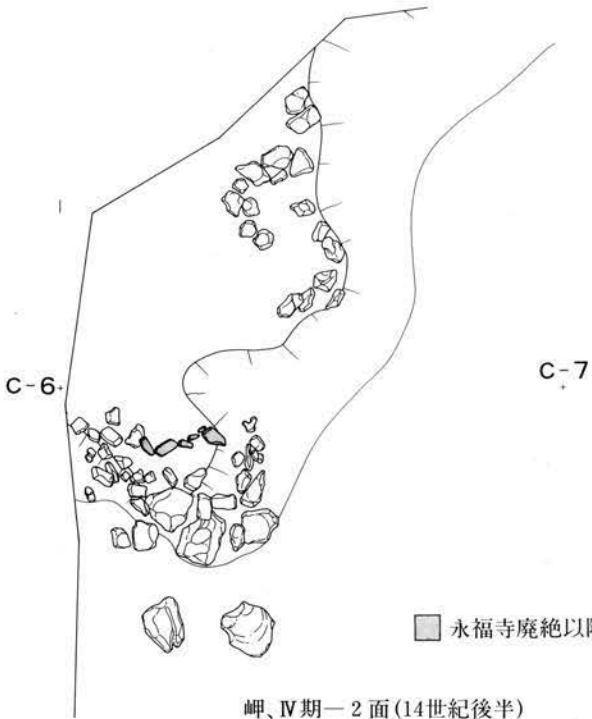
IV期-1面(15世紀代)



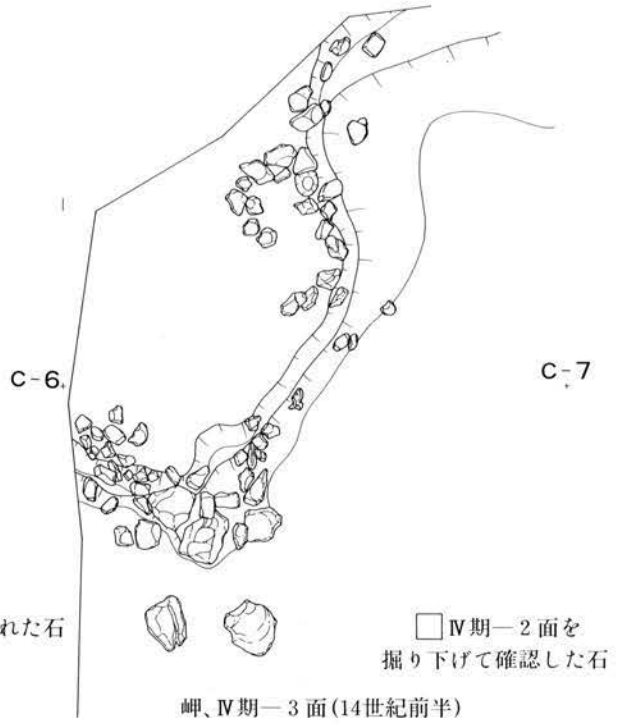
III期・IV期-3面(13世紀末・14世紀前半)



IV期-2面(14世紀後半)



岬、IV期-2面(14世紀後半)



岬、IV期-3面(14世紀前半)

図37 取水遺構・岬 (IV期-2面・IV期3面) 変遷図

苑池東側のⅡ期の大規模な地業と考えられる。トレンチの位置は、検出した地業面の海拔（海拔18.4m）から考えて汀までは達していないようで、池底は東側の市道の下に延びて行くことが確認された。この時期の堆積土から僅かだが手捏ねのかわらけ片が出土している。

最下層の地山面（海拔約17.7m）はほぼ平坦に、トレンチの東側を南北に延びる市道の下に延びて行くことが観察された。地山面上にⅠ期の堆積土と考えられる、きめの細かい暗茶灰色の柔らかい粘土が堆積していることから、Ⅱ期の地業層と同じく、これまでに確認しているⅠ期池中の様相と考えられる。今年度の調査地点でもこの時期の汀は市道の下に広がることが確認された。Ⅰ期の堆積土中からは遺物は出土していない。

舌状の岬先端と池中に据えられている大きな三つの景石の下は、トレンチ調査の結果北側の丘陵から延びる岩盤面であることがわかった。そのため特に景石の下を掘り窪めたり、根石等を使って脇を固めずに、削りだした岩盤面の上に置かれているだけのようである。その他の景石は、岩盤面の上の中世地山にもたせかけ脇を土丹で固めているものもあった。

第3章 出土した遺物

a. 宝永・Ⅳ期－1面覆土出土遺物（図38）

1～13は宝永面までに出土した遺物である。

1・2は共に瓦質の瓦燈下体部。1は灰色を呈し、内外面ともに強い横なでが施される。最大径12.4cm、残存高6.7cm。2は青灰色を呈し、1ほど強くないが内外面に横なでが認められる。最大径13.3cm、残存高8.5cm。瓦燈は中世後期から使用し始めたとされ、江戸時代には庶民に普及していたようであるが、鎌倉市内の中世の遺跡から出土した例は少ない。

3～6はかわらけ。3・4は14世紀中、後半、5は手捏ね成形のかわらけで、13世紀中頃のものか。6は13世紀後半の様相を呈する。

7は山茶碗窯系捏鉢。体部外面に稜線が認められ、口縁端部には一条の沈線がめぐる。

8は瀬戸の折縁鉢。素地は精良で堅緻。淡乳灰色を呈し、淡緑色の釉が刷毛塗りされる。

9は常滑の捏鉢。暗茶褐色を呈し、胎土は精良緻密である。

10・11は焙烙。10の復元口径は25cm。11の復元口径は25.8cm。いずれも素焼きで明赤灰色を呈する。

12は砥石。残存長13.4cm。

13は骨製品。残存長5.7cm、幅8mm。用途不明品である。

14～39まではⅣ期－1面覆土より出土したものである。

14～20は舶載磁器である。14は白磁口瓦皿。口径8.2cm、底径4.7cm、器高1.4cm。内外面共に灰白色を呈する。15は青白磁の水注と思われる底部片である。釉は淡水色を呈し、二次焼成を受けている。16は壺の口縁部片。17・18・19は青磁碗。外面に鎬蓮華文を有し、釉は青緑色を呈する。胎土は堅緻。20は青白磁梅瓶の体部片である。淡水色の透明な釉が施されている。

21は瀬戸の四耳壺肩部片である。耳の上部に四条の沈線がめぐる。

22は瀬戸の華瓶か。外面に段を持ち、器壁を菊花文のスタンプで飾る。

23は瀬戸の卸し皿。復元口径13.3cm、灰釉が薄く施されている。

24は北部系瀬戸の碗。胎土はきめ細かく堅緻。

25～28はかわらけ。28は口径16.8cmにもなる大振りのかわらけである。

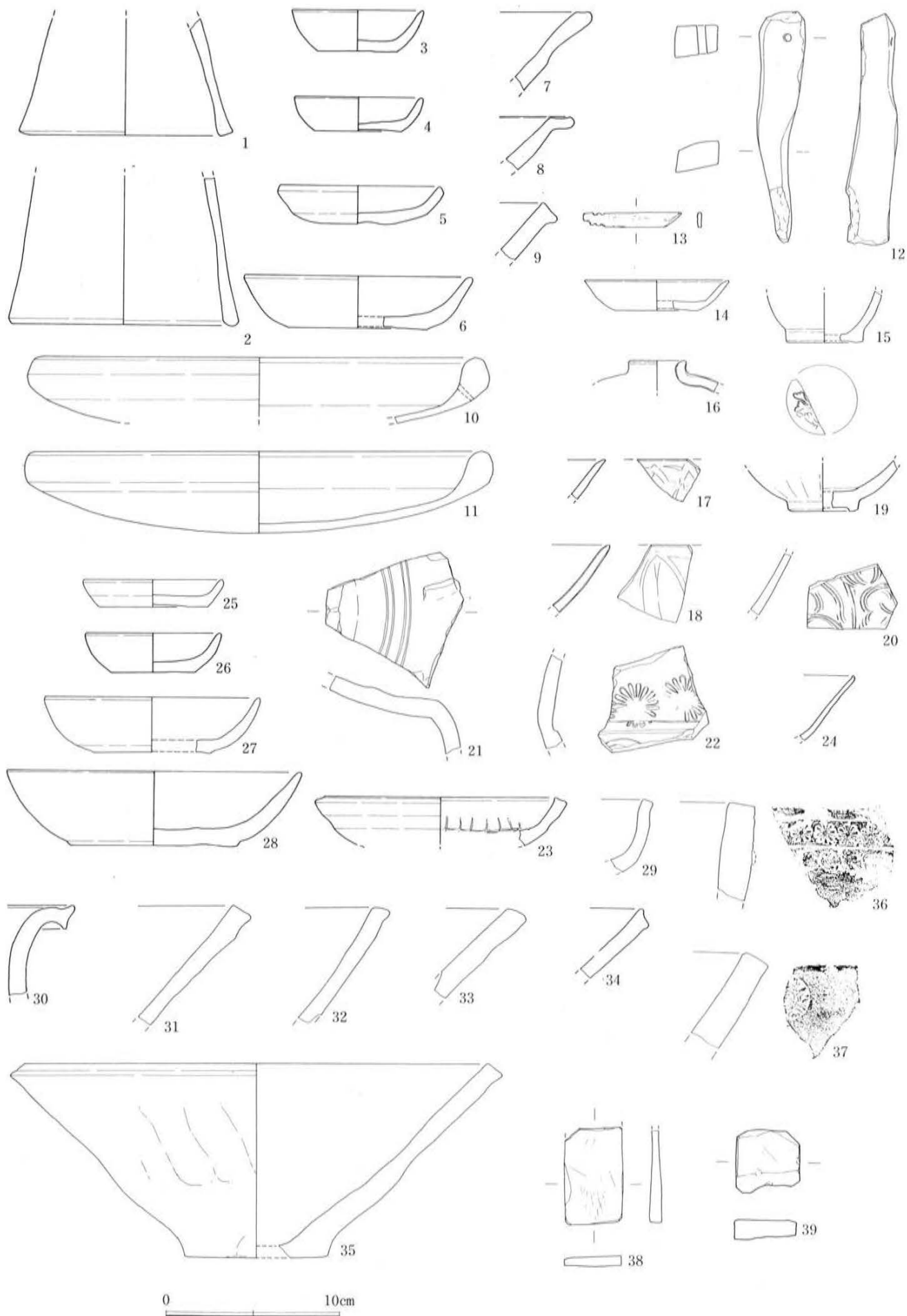


图38 宝永・IV期-1面覆土出土遺物

29～34は常滑の製品である。29は鉢、30は甕、31～34は捏鉢。

36・37は手焙り。36はスタンプによる花文と二条の沈線で外面を飾る。37は亀甲文様のスタンプが押印される。

38・39は砥石。38は残存長5.5cm、幅3.4cm、厚み6mm。39は残存長3.6cm、幅3.6cm、厚み1.2cm。

b. IV期-2面覆土・直上出土遺物

かわらけ (図39)

14・16・18・33・36・39は、IV期-2面の覆土でも面直上で出土したものである。この層位で出土したかわらけは14世紀前葉のものと思われる製品を中心に、異なる形状のものが混入し、時代にはばらつきがある。最も時代の下るものとして、27が挙げられる。これは比較的深みのある器形で口縁部が外反するのが特徴であり、15世紀中葉のものと思われる。小型のかわらけでは、12がやや深形の器形で、この時期の大形に該当するのが37・40のタイプと思われる。おそらく14世紀中葉の製品であろう。また、33・38・41のようにやや外反して立ち上がる下体部が、口縁部にかけてまっすぐに引き上げられている形態のものもこの時期のものと思われる。

3・4は図示したものの中では比較的厚手で、厚みのある下体部が口縁にかけて薄く成る形態で、13世紀中～後葉のものかと思われる。この層位から出土したかわらけの中では最も古いものであろう。

かわらけの年代観で考える限り、この層位も新旧の遺物が混入し、年代を決定的に把握できる出土状況ではないと言えよう。

国産陶器 (図40)

特記しないものはIV期-2面覆土より出土したものである。

1は瀬戸の鉢。胎土は明黄灰色を呈し、ややしまりが悪い。体部は内外面ともに灰釉が施され明灰緑色を呈す。IV期-2面直上より出土。2～5は卸し皿。2の胎土は明黄灰色を呈し緻密。口縁部に若干灰釉が施されている。3・4はごく精良な胎土から成り、ごく緻密。残存部全体に灰釉が施され、明灰緑色を呈す。内体部にも内底部に施された卸し目を刻むかきめが及んでいる。4の復元径は16.0cm。

6は白かわらけ。手づくね成形によるものか、外体面下部は指頭による調整が認められ、口縁部付近にやや強い横なでをめぐらす。

7は瓦器。外体面下部は指頭調整痕が残り、横方向の暗文は上部のみごくあらく認められる。内面もあらい横方向の暗文が認められ、内底面にも菊花の暗文を有する。小片であるが器形は輪花を呈すると思われる。

8は伊勢系羽釜。表面は灰色、中心部は暗灰色を呈す。胎土は粗い砂を多く含み、堅緻。罫下部には細かい叩き目が認められる。

9～11は瀬戸の天目碗。9の胎土は明黄灰色を呈し、比較的緻密。褐釉は下体部の稜線の辺りまで施されている。10の復元径は15.0cmと大振り、釉は灰緑色を呈し、下体部の条線辺りまで施されている。胎土は明灰色を呈し、ごく堅緻である。11の胎土は明灰色を呈し、堅緻。褐釉。

12は北部系瀬戸の碗。胎土は明灰色を呈し、ごく精良で緻密である。内体面には斑点状に降灰釉が白色に付着する。復元径11.0cm。

13は瀬戸の鉢の底部。内底面には花文が刻まれており、底面には卸し目状の刻みが施される。高台部外面まで明灰緑色の灰釉が施されている。IV期-2面直上より出土。

14は瀬戸の水注。八弁の蓮弁様の文様を押印によって外体面に加飾しており、口縁部から下体部にかけて褐釉が施される。注ぎ口が僅かに欠損するが、ほぼ完形で、口径2.0cm、底径3.1cm、器高3.3cm。

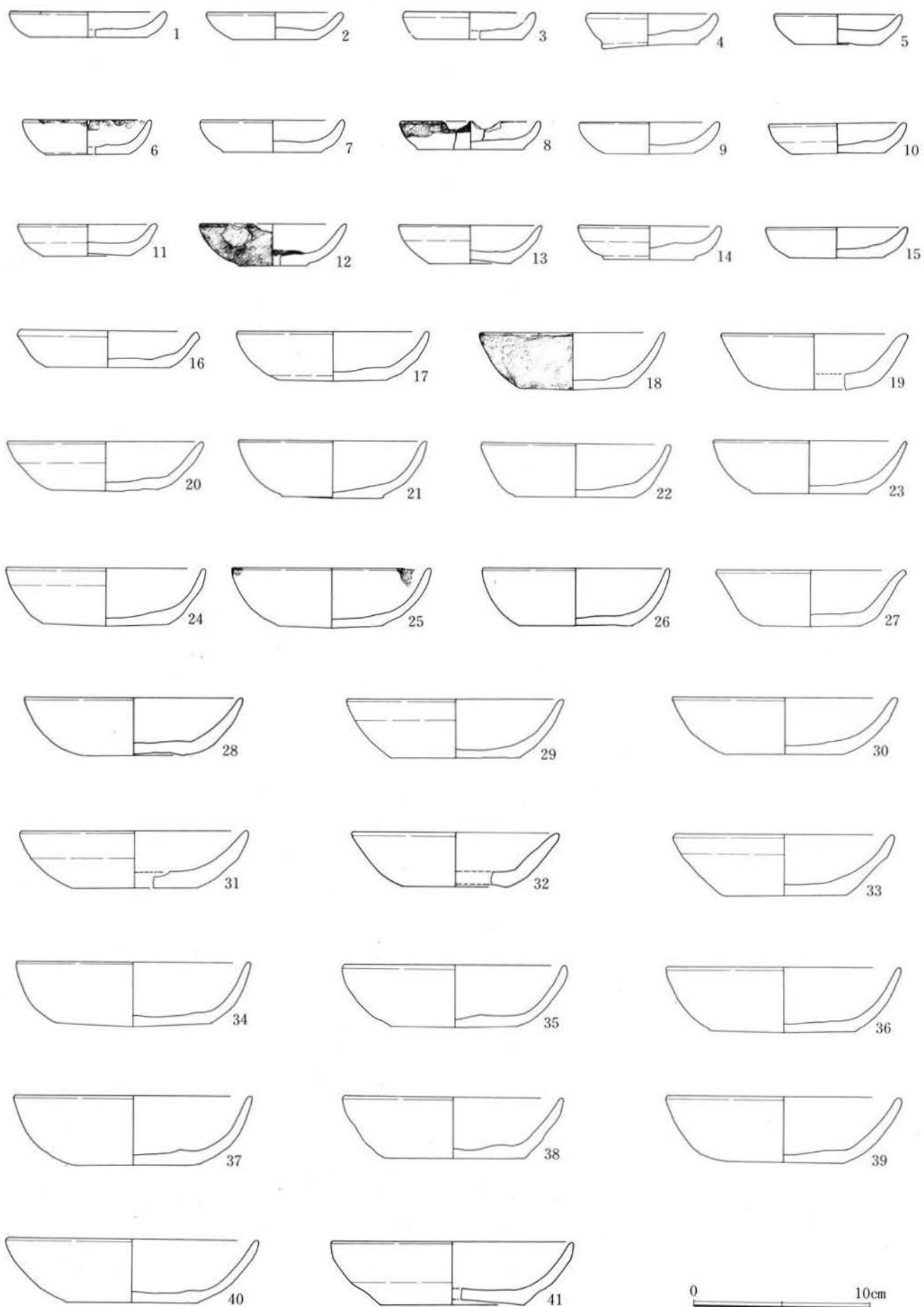


図39 IV期-2面覆土出土遺物(かわらけ)

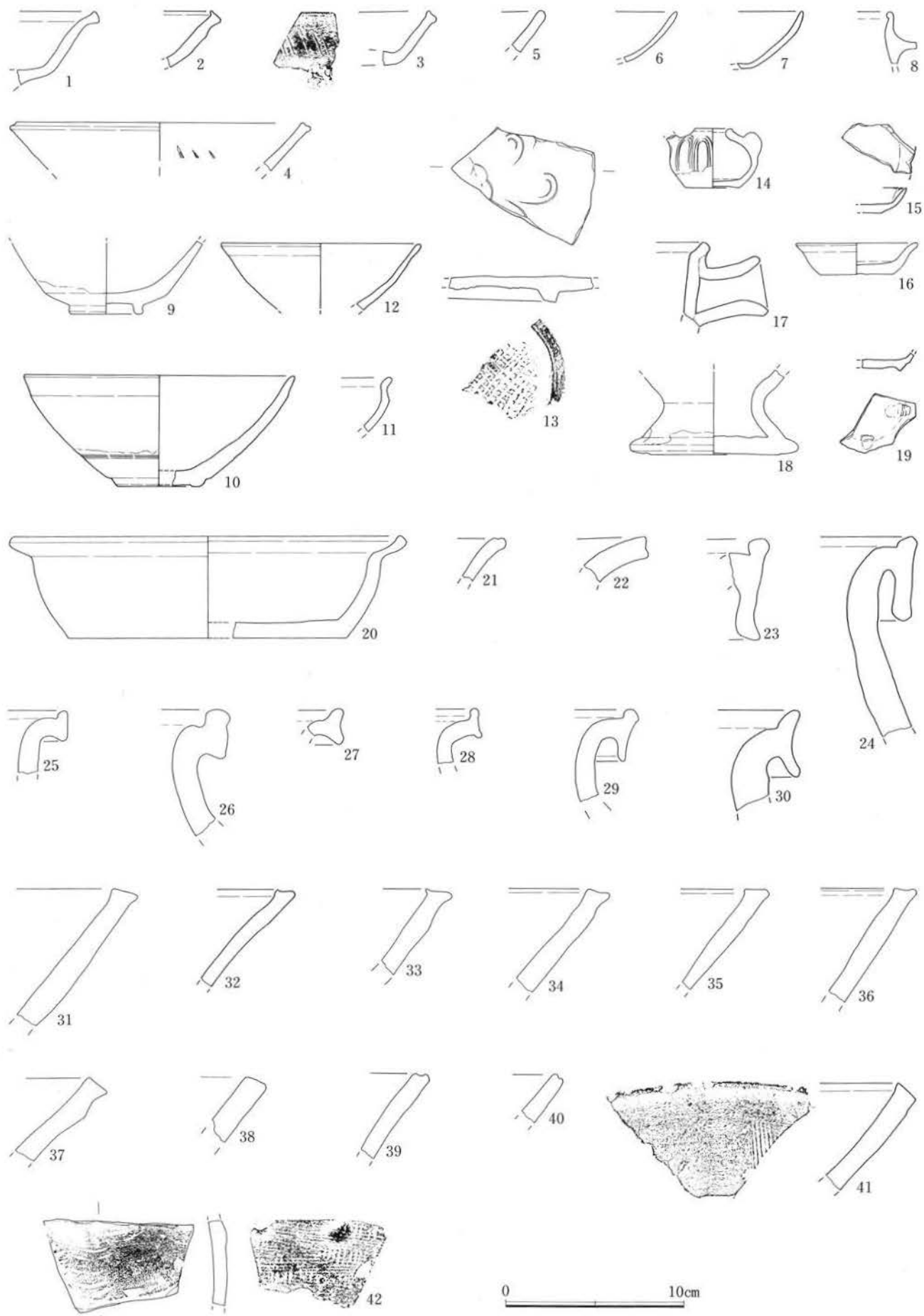


图40 IV期-2面覆土出土遗物(国产陶器)



图41 IV期—2面覆土出土遺物（漆器·木製品）

15は瀬戸の入子。胎土は明黄灰色を呈し、堅緻。口縁部及び内体面に僅かに降灰釉が付着する。器形は輪花を呈すると思われる。16は瀬戸の小皿。胎土は明灰色を呈し、緻密。内面に明灰緑色の灰釉が施されている。

17は瀬戸の行平鍋。胎土は明黄灰色を呈し、比較的堅緻。残存部全体に明灰緑色の灰釉が施されているが持手の下部には及んでいない。

18は瀬戸の花瓶。底径7.3cm。胎土は明灰色を呈し、ごく緻密。明灰緑色の灰釉が、外面に施される。

19は瀬戸の皿。底部に器壁を指先でつまみ出して作られたような脚が付いている。残存部には二箇所あるが、本来は四箇所設けられていたと思われる。胎土は明黄灰色を呈し、内面にはごく僅かに白色の降灰釉が斑点状に付着する。

20は瀬戸の鉢。胎土は明灰色を呈し、緻密。内外面全体に、灰釉が丁重に施されており、明灰緑色を呈す。復元口径21.6cm、底径15.5cm、器高5.7cm。

21は山茶碗窯系捏鉢。長石粒を多く含み胎土から成り緻密である。

22は常滑。きめの細かい精良な胎土から成り、緻密。甕の口縁部片と思われるが、断面四角形を呈し、かなり特異な形状である。

23～30はやはり常滑の甕。25・26のような口縁端部を上部につまみ上げた13世紀中頃の様相を呈する製品から、23・24のような帯状に張り付けた口縁をもつ、14世紀後葉の製品までが混然と出土している。

31～40は常滑の捏鉢。これも13世紀後半頃と思われる、31・34・36・37のような口縁部の断面が四角形を呈する製品から、39・40のような14世紀中葉と思われる製品までが混入している。33はⅣ期—2面直上より出土。

41は備前のすり鉢。橙灰色を呈し、胎土は精良で緻密。掻き目には八本の刻みが認められるが、残存部分が少ないので当初の状態は不明である。

42は須恵器の転用硯。やや紫味を帯びた暗灰色を呈す胎土で、同心円文の叩き目のある甕の内面を硯面として磨いている。外面は櫛目状の刷毛目が見られ、降灰釉がかかり、黒灰色を呈す。

漆器・木製品 (図41)

図41は、Ⅳ期—2面覆土(1～3、5～9、12)及びⅣ期—2面直上(4、10、11、13)より出土した漆器・木製品である。

1は球状の木製品。毬打の毬の芯かと思われる。直径約6.3cm。

2は円形の蓋状の木製品。片面の縁が面取りされ、もう片面には掻いたような痕が残る。中心に斜めに差し込まれた0.3cm大の孔が穿たれる。径7.6cm。

3は用途不明。建築部材の一部か。長さ10.6cm、幅4.5cm、厚み大3.4cm、小1.5cm。

5は用途不明。残存長5.3cm、幅2.5cm、厚み0.45cm。図の上部は緩やかなカーブをとり、片面のみカーブの端から1.4cmの所に小さな切り込みを持つ。

6は用途不明の円形木製品。径3.5cm、厚み0.1cmと薄く、中心に0.15cmの孔を穿つ。

7・8は漆器皿。7は黒地に朱で松らしき文様を手描きしている。口径9.5cm、底径7.7cm、器高1.25cm。底部も施漆される。8は底部のみであるが、やはり黒地に朱で菊の文様を手描きする。底部には高台の痕跡が認められる。

9は漆器椀。見込み部分、内・外側面に、黒地に朱で文様が施される。底部は高台を持ち、2ヶ所に痕が認められ、その上から施漆される。底径7.0cm、残存高3.7cm。

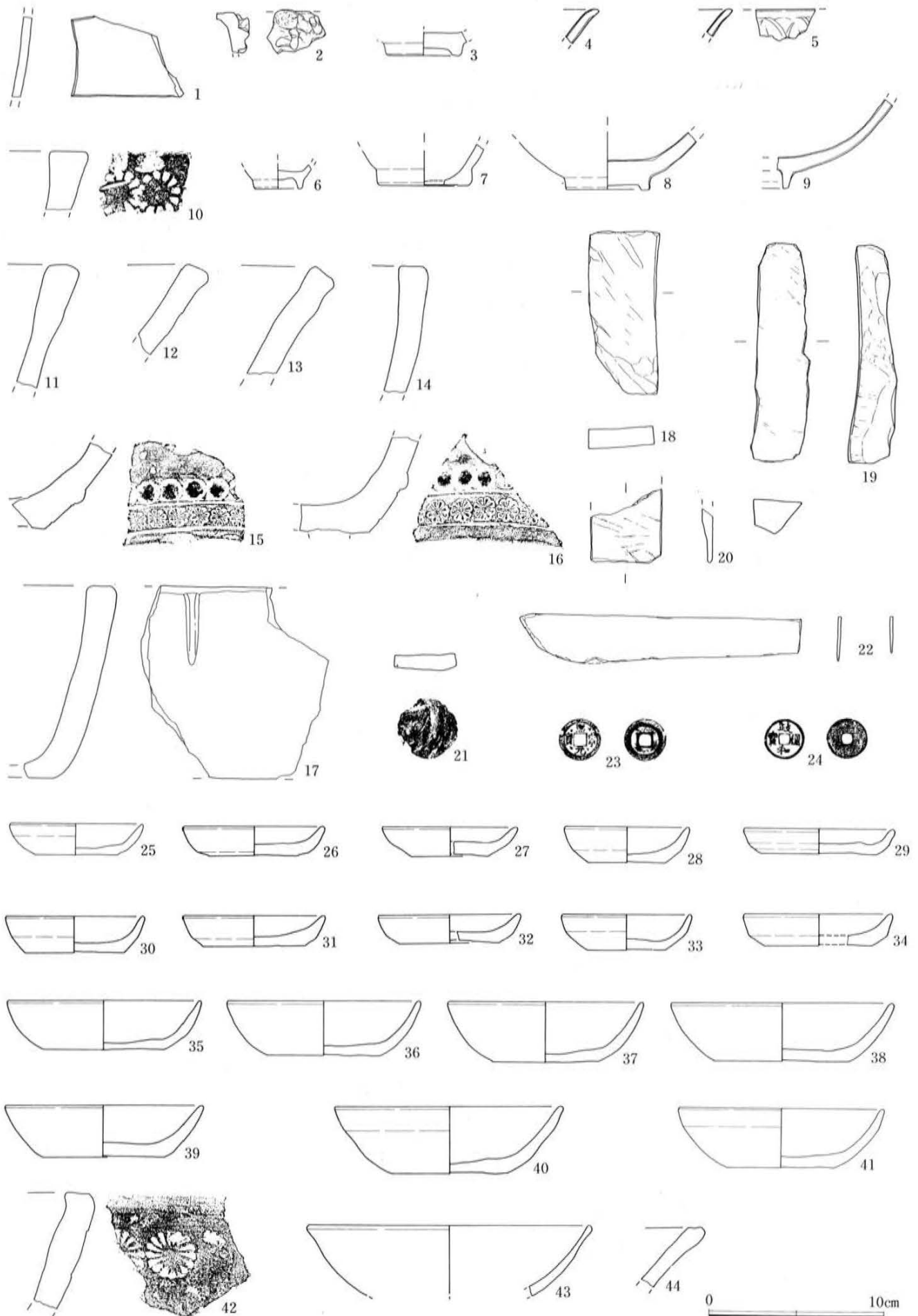


図42 IV期-2・3面覆土出土遺物 (かわらけ・船載陶磁器・手あぶり・その他の遺物)

12は用途不明。建築部材か。残存長35.0cm、幅4.9cm、厚み約2.0cm。中心、端から4.0cmの所に0.9cm大の孔が穿たれる。

Ⅳ期 2面直上の遺物

4は木製蓮華の中房。5弁の花びらを想定させ、種子を模した削り込みを10個持つ。側面は上から3分の2の部分に細かく線状の削りが入る。中心には途中で段のつく穿孔があり、最大径1.5cm、最小径0.8cm。全体の直径は9.3cm、厚みは2.65cm。

10、11は笹塔婆である。2枚とも片面に大日如来の種子「バン」の下に「南無大日如来」と墨書される。10は残存長31.5cm、幅2.4cm、厚み0.2cm。11は長さ32.6cm、幅2.6cm、厚み0.2cm。ほかにも同地区より同様の笹塔婆が4本出土している。

13は五輪塔婆である。火、水輪の一部が欠損しているが、ほぼ完全な形で出土した。火輪から地輪の間に確認される墨書は、「出離生死往生極□□為也」の文字が認められ、恐らくは「出離生死往生極樂世界為也」（煩惱を断ち、生死の苦界を離脱し、常往安樂の涅槃に入る）という願文であると推測される。長さ51.1cm、最大幅7.4cm、厚み0.8cm。地輪の下に続く部分に三ヶ所の穿孔があり、そのうちの1つに鉄釘が残存していることから、いずれも釘穴であると思われる。

舶載陶磁器・手あぶり・その他の遺物（図42）

1は南蛮壺。胎土は細かい長石粒を少量含み堅緻。表側に褐釉がうすく施されている。

2は青白磁、香炉の小片か。胎土は灰白色、精良で緻密。釉は水青色。口縁部から外部に施される。

3～5・8・9は青磁。3は碗の底部で、胎土は明灰色を呈し、ごく精良で堅緻。釉は暗灰緑色を呈し透明。底径4cm。4は碗の口縁部。胎土は灰白色、ややしまりが悪い。釉は淡緑色で不透明。5は蓮弁文碗の口縁部。胎土は灰白色、精良で堅緻。釉は淡緑色透明。8は蓮弁文碗の底部から下体部片。胎土は灰色を呈し精良で堅緻だが、若干気泡を生じる。釉は暗灰緑色を呈し透明で、釉層はごくうすい。復元底径4.8cm。9は鉢。胎土は明灰色を呈し、精良で堅緻。釉は明青緑色で不透明。釉層はごく厚い。二次焼成による変色が著しい。6・7は青白磁。6は壺の底部と思われる。二次焼成を受け、胎土は明黄灰色、釉は明灰色を呈す。高台径2.4cm。7は水注の底部か。やはり二次焼成を受けており、胎土は灰白色、釉は水青色を呈するが、表面に粗い気泡を生じている。外面に文様が施されているが不鮮明。

10～17は手あぶり。10は外側に菊花のスタンプで文様が施されているもの。11～14は残存部分に文様は認められない。15・16は下体部片で珠文と菊花文様をスタンプで施している。近似した文様であるが、15の方が若干菊花が小さい。なおこの15は外面に黒漆が塗られている。17は輪花を呈する。

18～20は砥石。18は長さ9.3cm、最大幅4.2cm。下端部にむかってうすくなる形状で、もっとも厚い箇所は厚さで2.3cm。19は長さ12.5cm、最大幅3.1cm。不成形で、片面は粗く削ったままの状態。裏面の研磨面は狭く曲面を成す。20は幅4cm。表面、裏面とも、研磨は弱く曲面を成す。

21はかわらけの底部を加工し、円盤形にしたもの。側面は丁寧に研かれている。胎土は橙灰色を呈し、精良で堅緻。

22は刀子。残存長16.2cm、最大幅2.7cm。23は熙寧元宝

c. Ⅳ期—3面覆土、直上出土遺物

かわらけ・その他の遺物（図42）

25～41はかわらけ。このうち、29は最も古い形状を呈するものと思われ、口径と底径の差が少なくごく浅型。13世紀前葉のものか。また、31・34・39は、下体部がやや厚みを持ち、口縁部に向かって器壁がうすくなる特徴を備えており、13世紀後葉のものと思われる。40は大ぶりで体部の器壁の厚さが均一

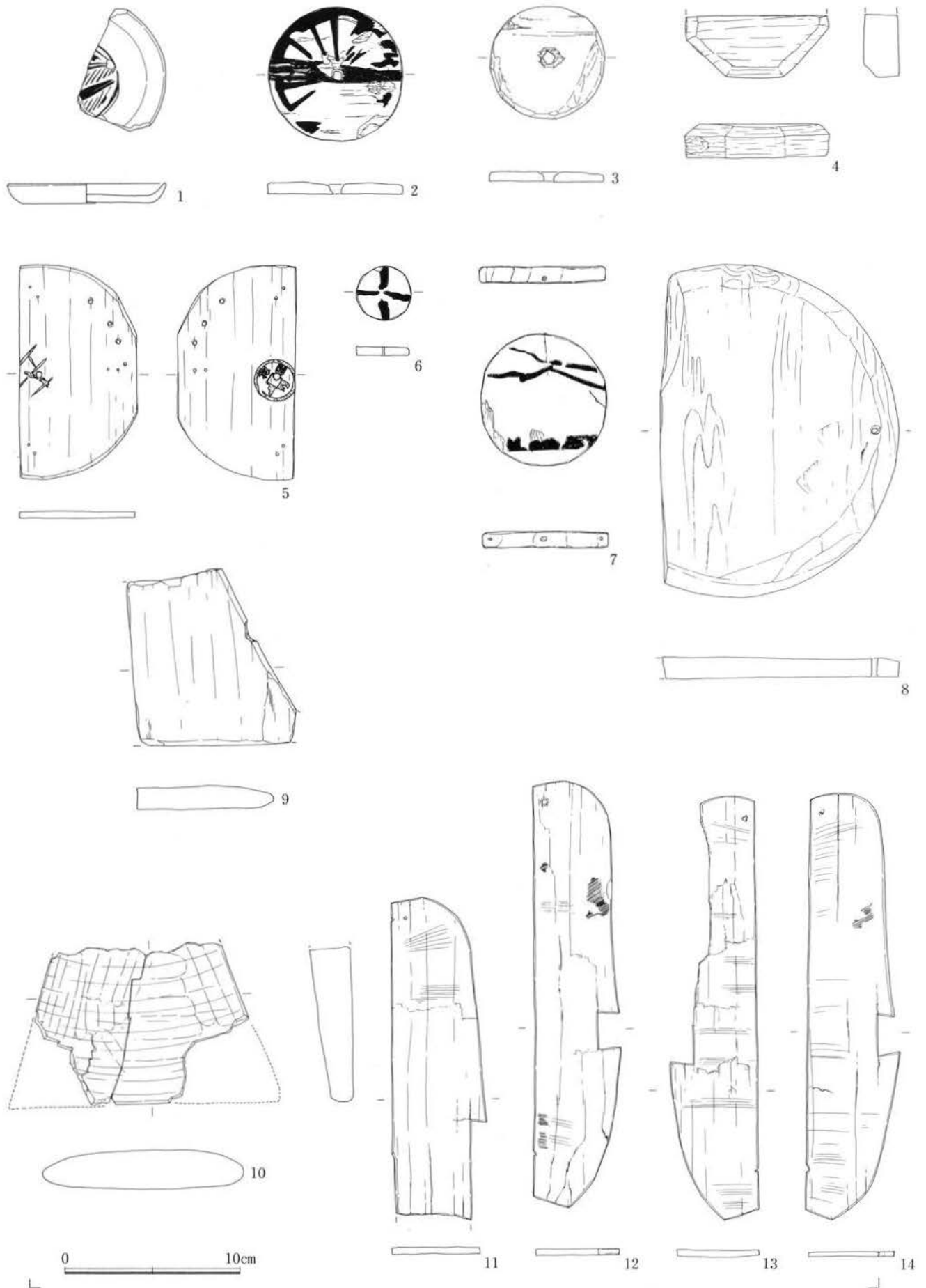


图43 IV期-3面覆土出土遺物(漆器·木製品)

的でなく、口縁部はわずかに外反する。14世紀後葉のものか。他はおおむね、14世紀前葉のものと思われる製品が多く、器壁が均一的にうすく、体部が丸みをもって立ち上がる特徴を備えている。

42は手あぶり。口縁部の辺りの内外面は横方向に丁寧に研かれている。43は瓦器。復元径16.1cm。口縁部のみがくすべ状に暗灰色を呈する。暗文は認められない。44は山茶碗窯系捏鉢。胎土は長石の粗い粒を多く含み堅緻である。

漆器・木製品 (図43)

1は漆器皿。黒地に朱で文様を手描き。口径8.9cm、底径7.4cm、器高1.1cm。底部も施漆される。

2は車輪状木製品。片面のみ車輪文様の描かれた墨痕と、中央に圧痕が認められる。中心に約5mm大の孔が穿たれる。径7.7cm、厚み0.7cm。独楽の可能性が考えられる。

3は2と同様な車輪状木製品。縁が面取りするように成形される。中心には0.7cmの孔が穿たれ、径は6.6cm、厚みは約0.55cm。これもまた独楽の可能性が考えられる。

4は用途不明の木製品。長さ8.2cm、残存幅3.5cm、厚み2.0cm。

5は円盤残欠。径12.3cm、厚み0.4cm。11個の穴が認められるが、そのうち1個は貫通していない。片面の中央には火箸状のものを押しつけた焼印、裏面の中央にも銭を使った焼印らしきものが施される。

6は径3.1cm、厚み0.5cmの円形木製品。十字状に墨痕が認められ、中心に径0.1cmの木針が差し込まれる。2、3同様、これも独楽の可能性がある。

7は径7.5cm、厚み0.9cmの円形木製品。表面の筋痕は墨書もしくは付着物によるものか。側面には4ヶ所の木釘痕(内1ヶ所には遺存)が認められる。

8は径19.0cm、厚み1.1cmの円形木製品。0.3cmの穴が1ヶ所穿たれる。

9・10は下駄の歯。9は長さ10.1cm、残存幅9.2cm、厚み1.3cm。10は残存長8.9cm、最大幅12.0cm、厚み2.2cm。表面の仕上げが丁寧である。

11~14は金剛草履芯である。11は残存長18.0cm、残存幅5.4cm、厚み0.4cm。表面に繊維の圧痕が認められる。12は長さ24.2cm、残存幅5.0cm、厚み0.35cm。表面に繊維が付着し、また繊維の圧痕も残る。13は長さ24.1cm、残存幅5.1cm、厚み0.4cm。表面には繊維の圧痕が認められる。14は長さ24.2cm、残存幅5.3cm、厚み0.2cm。表面に繊維が付着し、また繊維の圧痕も認められる。

d. 池中覆土・取水遺構・トレンチ出土遺物 (図44)

1~9は池中覆土より出土した遺物である。

1~5はかわらけ。1は灯明皿。全体的に厚手で底部は小さく口縁へ向けて開く。素地も粗い。2は器高が低く、厚さも均一である。3は薄手で素地・焼成ともに良質なもので、14世紀前半から中頃までに見られる口径11.0cm前後のサイズのかわらけである。4も3よりやや古い、やはり同サイズの部類に含まれる。全体的に均一の厚みで口縁がわずかに外反する。5は土丹を含むきめの細かい素地を持ち、口縁に向けて比較的緩やかに立ち上がる。

6は常滑捏鉢の口縁部片。口縁は内外に突出する。素地は細かく1mm大の長石を含むが精良である。

7は摺りかわらけ。用途は不明、かわらけの底部を転用したもので、縁は磨耗し、片面には線状の搔痕が認められる。

8は人の形代である。側面を向き、烏帽子から頭、肩までの部分である。形のみを彫り表情はない。残存長8.1cm、幅2.2cm、厚み0.3cm。

9は用途不明の木製品。灰搔きかとも思われる。長さ14.6cm、幅3.8cm、厚み0.6cm。背の方はやや薄く削られ、鋸状の歯は0.3cmないし0.4cmに削り出される。中心に0.4×0.3cm角の木釘が遺存する。

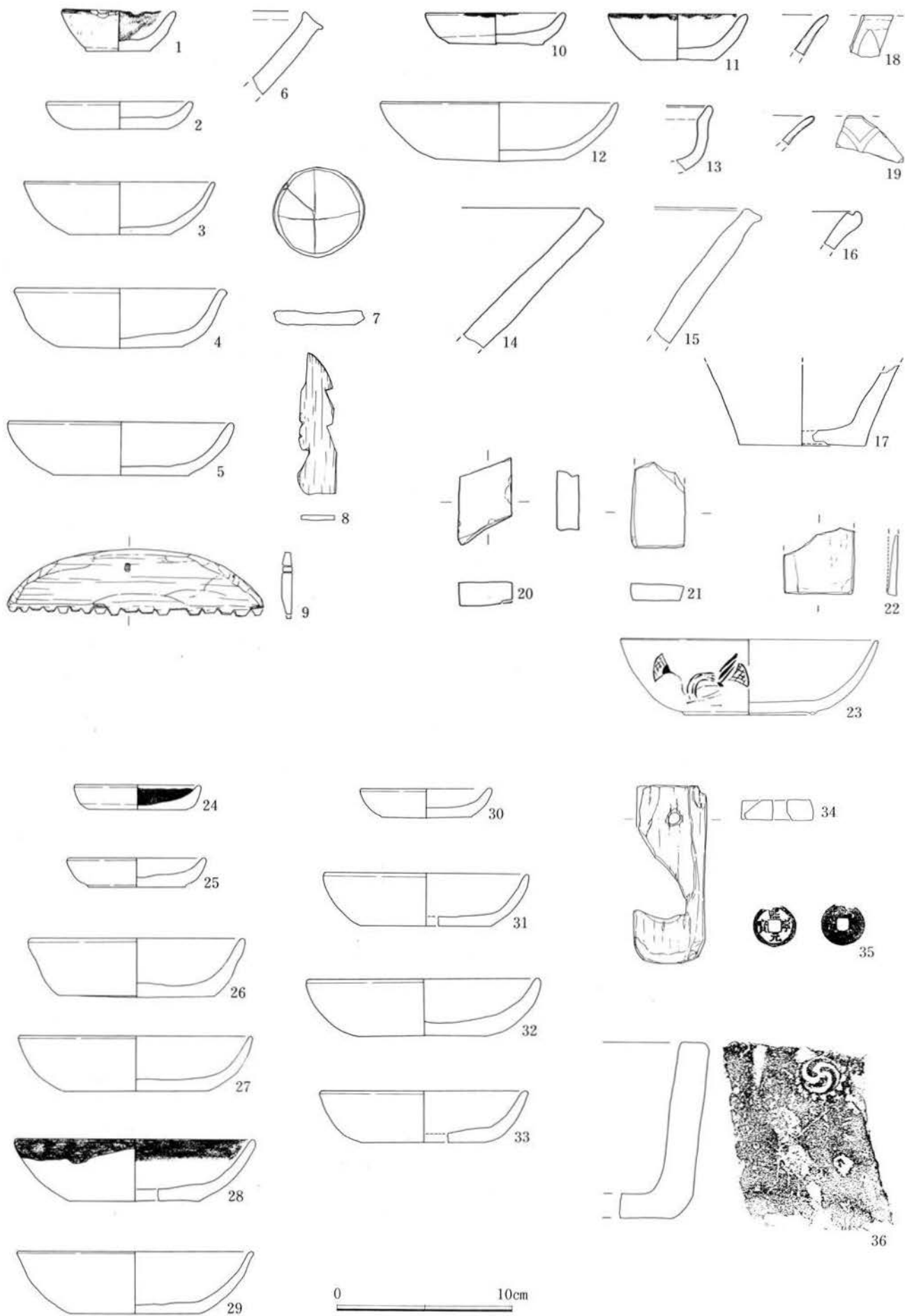


図44 池中覆土・取水遺構・トレンチ出土遺物

10～23は取水遺構より出土した遺物である。

10～12はかわらけ。10・11は灯明皿である。10は器高が低く、底部が広く、厚みは均一で、14世紀前半の様相を呈する。11は口縁全体に油煙が付着し、底部が小さくやや深めの15世紀前半の様相を呈する。12は素地細かく、器肉のやや薄手な14世紀前半代の口径13cm前後の大ぶりタイプのかわらけである。

13は山茶碗窯系胎土を持つ短頸壺か。体部は丸みを持ち、口縁は外反する。長石粒を多く含み、ざっくりした胎土で硬質である。

14・15は常滑捏鉢の口縁部片。14は硬質な素地で5～8mm大の長石粒を多く含む。口縁は角形に張る。15は軟質の素地。口縁が外側に突出する。内側は摺れている。

16は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片である。口縁に向けてやや肥厚し、端部に5mm幅の沈線を巡らす。

17は瀬戸瓶子の下体部より底部にかけての断片である。外体部及び底面には淡緑色の釉が施され、見込み部分には自然釉がかかる。

18・19は青磁碗。両方とも蓮華文が施される。素地は精良。18はやや黄緑灰色、19は緑灰色の釉が施される。

20～22は砥石。20は残存長5.0cm、幅3.0cm、厚み1.3cm。横方向にかすかに研ぎ痕が認められる。21は残存長5.0cm、幅3.0cm、厚み1.0cm。これは縦に研ぎ痕が残る。22は残存長3.8cm、幅4.0cm、厚み0.5cm。縦方向に向け薄くなる。

23は漆器碗。内側は朱塗り。外側は黒地に朱で手描きによる扇状の文様が施される。器肉は底部から体部立ち上がりにつけて0.6cmの厚さ、口縁に向け薄くなる。底面も塗漆され、高台を持つ。口径14.3cm、高台径7.3cm、器高4.3cmである。

24～29はトレンチ1より出土したかわらけである。24は灯明皿。26と共に13世紀末の製品か。25は下体部に丸みを帯びた成形がなされている。27は口縁に向け器肉が薄くなり、素地はクサリ礫を含み粗めだが焼成は良好である。28は灯明皿として使用されたもの。口縁から器壁の内外ともに油煙が付着する。素地は非常に細くなめらか。29は全体的に器肉が薄く、硬く焼き締まっている。

30～32はトレンチ7から出土したかわらけである。30は灯明皿。底部が広く、厚みは均一である。32も厚手で、砂の多く混入した素地を持つ。この2点は13世紀末の様相と思われる。31は器肉が薄く、素地のなめらかな14世紀前半に見られる中型サイズのかわらけである。

33はトレンチ2より出土したかわらけである。素地は細かく、31のかわらけと同様の製品である。

34はトレンチ10より出土した木製の鉤である。鉤状の下の部分に火を受けていることから、自在鉤のような用途のものと思われる。長さ10.2cm、幅4.1cm、厚み1.2cm。

35はトレンチ5より出土した銭。一部欠損しているが、北宋の熙寧元宝（楷書）、初鑄年1068年。

36はトレンチ4より出土した手あぶり片。器壁上部にスタンプで押した巴の文様が施される。全体形は輪花状になるとと思われる。

図38 宝永・宝永下IV期-1面まで (かわらけの法量)

単位はcm

NO.	口 径	底 径	器 高	NO.	口 径	底 径	器 高
3	7.4	4.6	2.4	25	7.9	6.3	1.6
4	7.3	5.0	2.0	26	7.6	4.7	2.3
5	9.1	3.7	2.2	27	12.2	6.6	3.2
6	12.8	7.9	3.1	28	16.6	9.5	4.3

図39 IV期-1面下IV期-2面まで (かわらけの法量)

単位はcm

NO.	口 径	底 径	器 高	NO.	口 径	底 径	器 高
1	8.7	6.6	1.4	22	10.6	6.8	3.0
2	7.5	4.8	1.5	23	10.8	6.5	3.0
3	7.3	6.0	1.5	24	11.2	7.1	3.3
4	7.2	5.4	1.8	25	11.1	6.0	3.4
5	7.1	4.7	1.7	26	10.5	6.4	3.3
6	7.1	4.7	2.0	27	10.5	5.6	3.2
7	8.0	5.5	1.8	28	12.3	5.6	3.3
8	7.8	6.0	1.6	29	12.2	7.4	3.3
9	7.8	5.0	1.8	30	12.6	6.7	3.2
10	7.6	5.2	1.7	31	12.7	7.1	3.2
11	7.7	5.0	1.8	32	11.6	5.9	3.1
12	8.2	3.9	2.4	33	12.2	6.4	3.5
13	8.0	4.6	2.2	34	13.1	8.8	3.6
14	8.0	5.1	1.9	35	12.4	7.2	3.5
15	7.9	5.3	1.8	36	13.1	8.2	3.7
16	10.0	6.9	2.1	37	13.3	7.7	4.0
17	10.7	6.1	2.8	38	12.3	8.3	3.5
18	10.4	6.0	3.2	39	13.1	6.6	3.7
19	10.4	6.3	3.2	40	14.1	7.4	3.5
20	11.1	6.6	2.8	41	13.6	8.1	3.6
21	10.6	5.7	3.3				

図42 IV期-2面下IV期-3面まで (かわらけの法量)

単位はcm

NO.	口 径	底 径	器 高	NO.	口 径	底 径	器 高
26	7.4	4.6	1.8	35	8.3	6.1	1.9
27	7.9	5.1	1.7	36	10.7	6.9	2.9
28	7.5	4.4	1.7	37	10.9	6.4	3.1
29	6.9	4.4	2.1	38	10.9	6.0	3.5
30	8.4	6.5	1.5	39	12.5	7.7	3.4
31	7.7	5.6	2.1	40	11.0	6.9	3.0

32	7.9	5.9	1.8	41	12.7	6.5	3.9
33	8.0	5.6	1.7	42	11.5	6.0	3.4
34	7.2	4.4	2.1				

図44 池中・取水遺構・トレンチ (かわらけの法量)

単位はcm

NO.	口 径	底 径	器 高	NO.	口 径	底 径	器 高
1	6.2	3.6	2.3	25	7.6	5.5	1.7
2	8.0	5.4	1.6	26	12.0	8.8	3.3
3	10.6	5.7	3.0	27	13.0	8.2	3.2
4	11.6	7.6	3.4	28	13.3	7.4	3.6
5	12.5	7.7	3.1	29	13.3	7.4	3.5
10	7.7	5.4	1.8	30	7.2	5.1	1.7
11	7.6	4.2	2.6	31	11.4	7.4	3.0
12	13.2	7.2	3.4	32	12.5	7.3	3.2
24	6.9	5.5	1.4	33	11.4	7.0	2.9

(2) 瓦

瓦は図に示した他にも破片が多く出土しているが、各層位から混然と多種が出土する状況であった。瓦当・鬼瓦・法量のわかる女瓦と男瓦・人名の押印をもつ女瓦を選んで図示した。型式は図45-9を除いて、いずれも前年度までに報告してきたものである。

図45-1～3はI期の唐草文字瓦。1はIV期-1面池中覆土より出土。2はIV期-2面直上より出土。3はIV期-2面覆土より出土。4はI期の剣頭文字瓦。折り曲げ技法によって作られている。IV期-1面覆土より出土。

5～8はI期の蓮華文鏡瓦。5・8はIV期-2面覆土より出土。6・7はIV期-2面直上より出土。

9は文様部分が欠損しているが、珠文に廻線があり、蓮華文と思われる。胎土の特徴から東海地方窯産の瓦と考えられ、I期のもの。東海地方窯産の瓦はこれまでも女瓦・男瓦の出土は確認しているが、瓦当の出土はこれが初めてである。

10・11は鬼瓦。いずれもI期のもので、IV期-2面覆土より出土。両者は同じくらいの大きさの鬼瓦を成していたと思われる。

12はII期の剣頭文字瓦。池中覆土より出土。

13～16はII期の寺銘字瓦。いずれもIV期-2面覆土より出土。

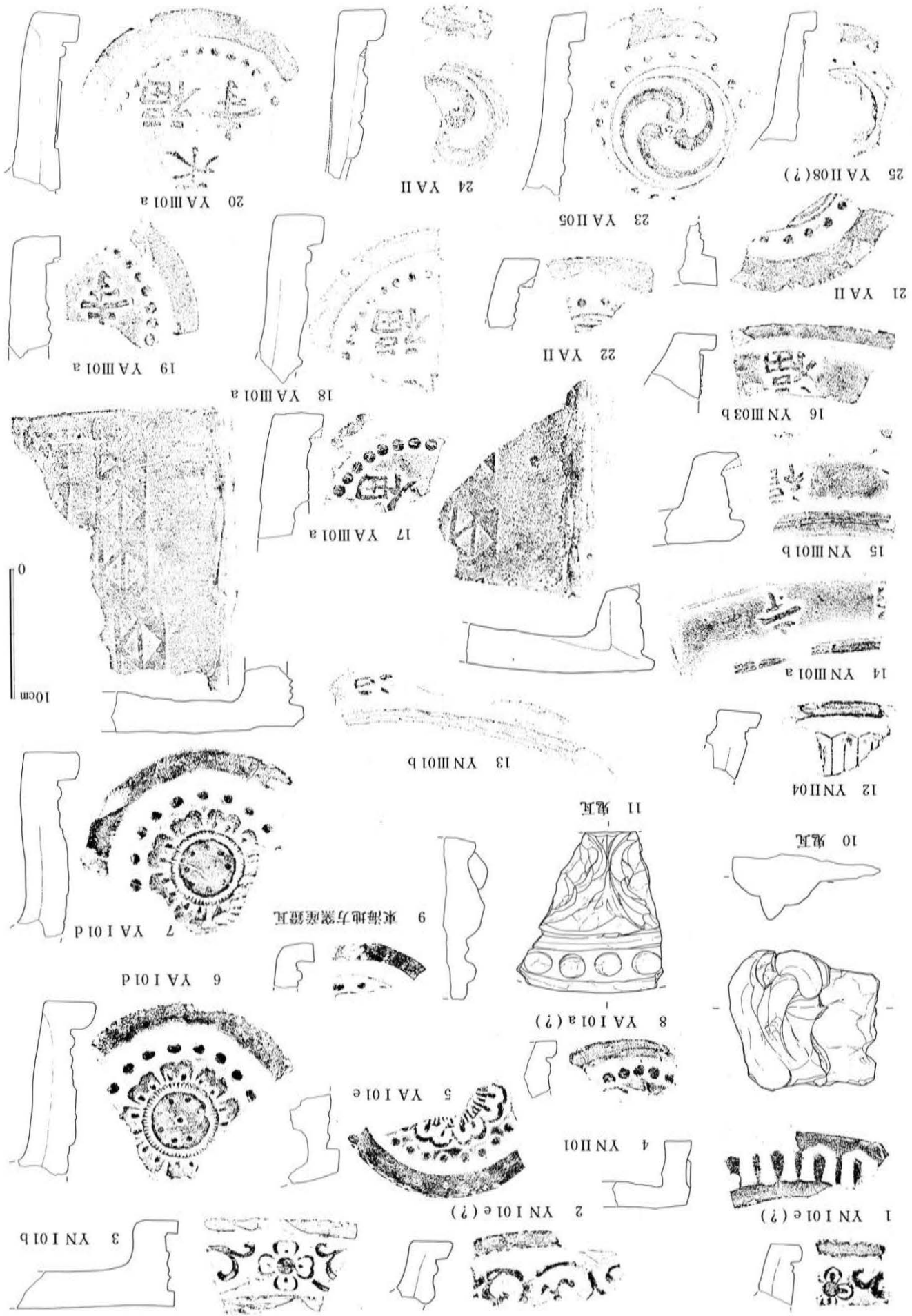
17～20は同じくII期の寺銘鏡瓦。17・19・20はIV期-2面覆土より出土。18は池中覆土より出土。

21～24はII期の巴文鏡瓦。23を除いて型式は判別できなかった。21はIV期-2面覆土より出土。22・23はIV期3面覆土より出土。24は池中覆土より出土。

25はIII期以後の巴文鏡瓦。IV期-2面覆土より出土。

図46に載せたものはいずれもI期のもの。女瓦は裏面に縄目の叩きが認められるA類である。1は峽端部の幅約24cm、厚さ約2cm。池中IV期-1面覆土より出土。2は長さ約41cm、厚さ約2.5cm。縦にほぼ真二つに割れた女瓦はこれまでも多く出土しており、熨斗瓦として用いられた可能性も考えられる。

图45 瓦



1 YN101e(?)



4 YN101



2 YN101e(?)

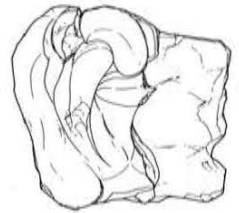


5 YA101e

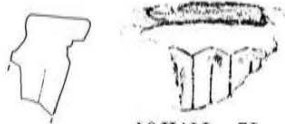
8 YA101a(?)



11 鬼瓦



10 鬼瓦



12 YN104



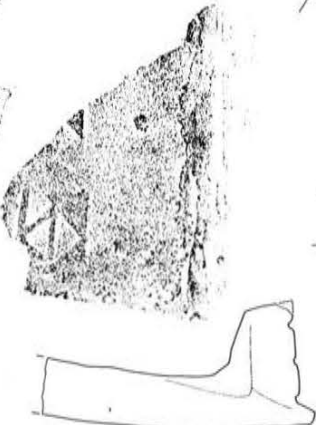
13 YN101b



14 YN101a



15 YN101b



16 YN103b



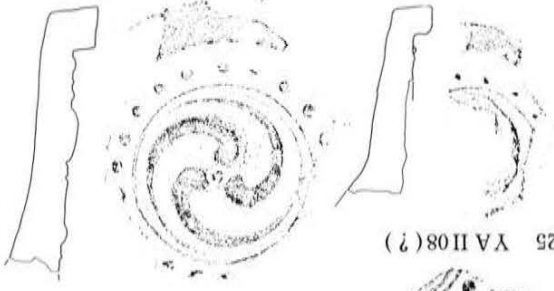
17 YA101a



22 YA11



21 YA11

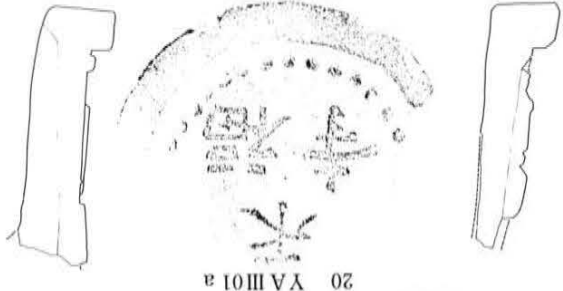


23 YA1105

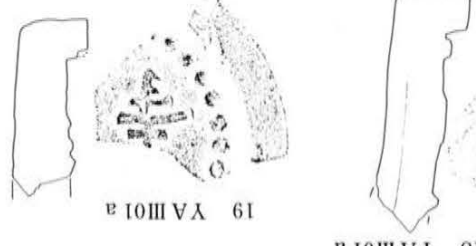


24 YA11

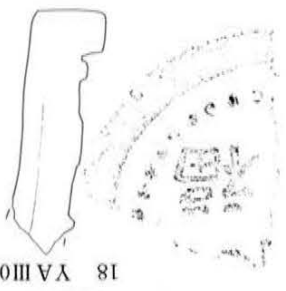
25 YA1108(?)



20 YA1101a



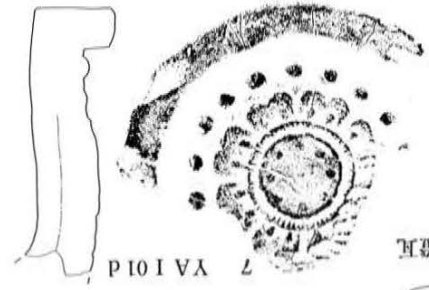
19 YA1101a



18 YA1101a



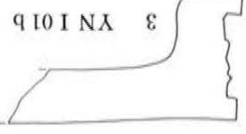
7 YA101D



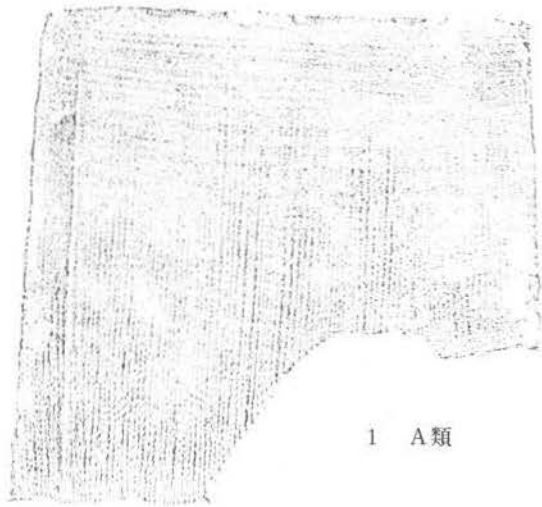
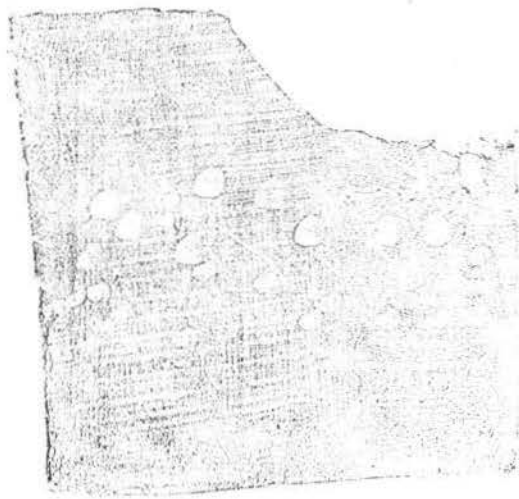
6 YA101D



9 東海地方窯産鏡瓦



3 YN101b



1 A類



2 A類



3 A類((YMI04d)



5 A類



4 A類(YMI01a)

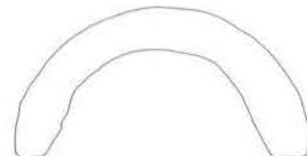


図46 瓦

Ⅳ期-2面より出土。3・4は人名の押印を持つ女瓦。3は「支(または友)長」、4は「宗清」。共にⅣ期-2面覆土より出土。5は男瓦。幅約15.5cm。長さ約41.5cm。取水遺構覆土より出土。

第4章 まとめ

今年度の調査は、苑池の8.8北東の限界と取水遺構の確認に主眼を置いて行われた。従来の時期区分の内、延慶3年(1310)の火災の再建以降廃絶までをⅣ期としていたものが、今年度の調査によってⅣ期を更に、Ⅳ期-3面(14世紀前半)、Ⅳ期-2面(14世紀後半)、Ⅳ期-1面(15世紀以降)の三つに区分することが出来た。

苑池の範囲と取水遺構

苑池の北東の限界は、室町時代のⅣ期(おそらく鎌倉時代末のⅢ期も)には、調査した範囲に収まるものと考えられる。確認した取水遺構はⅣ期-2面、Ⅳ期-3面(一部Ⅲ期も顔を出しているか?)に伴うものであった。基本の形は、鎌倉石の石材を組んだ溝で二階堂川から導いた水を、土丹で護岸した水路に落としこむといったものであった。苑池への注ぎ口には景石を置いた中州を築き、流れ込む水流を二手に分けるといった工夫が見られた。Ⅰ期(創建)からⅡ期(鎌倉時代中頃)の苑池の範囲はトレンチ調査の結果、現在の整備地域を超えて更に北から北東に広がっていたと考えられる。今年度の調査地域の北側、杉ヶ谷の入口にあたる場所の一带の呼び名を亀ヶ淵という。呼び名が霊地を指し示す四神に由来して、永福寺が建てられてからの地名とすると、北に位置する「玄武」、また「亀」と「淵」という名前から、深く大きく北に広がった鎌倉時代(Ⅰ期、Ⅱ期)の苑池を想像することも出来よう。この時期の取水遺構は、苑池の範囲が更に北から北東に広がっていることから、今年度の調査地域の中では確認されなかった。

各面の時期

Ⅰ期 創建(12世紀末)	東側市道の下に池底が延びて行く。立ち上がる気配なし。
Ⅱ期 寛元宝治年間(13世紀中頃)	約60cmの厚みを持った地業層で、池の埋め立てを行い幅を狭めている。東側市道の下に池底が延びて行く。
Ⅲ期 弘安年間(13世紀後)	Ⅱ期の引き続き更に埋め立てを行い、Ⅳ期の姿の近い輪郭を作っている。
Ⅳ期-3面(14世紀前半)	取水遺構を中心に埋め立てられ新たな池底を貼り増している。
Ⅳ期-2面(14世紀後半)	取水遺構周辺部を中心に、Ⅳ期-3面の汀線を約5m狭めている。
Ⅳ期-1面(15世紀以降)	池全体が大きく縮小して、景石なども僅かに頭をのぞかせているだけとなる。この状況は昭和63年度の北翼廊の調査で、Ⅳ期以降とした面にあたる。

今年度も諸先生、諸先輩から多くの貴重な御教授を受け、周辺住民の皆様の深いご理解とご支援を賜り、永福寺苑池の取水遺構の位置を確認し、また庭園北側から池中に、舌状に突き出す岩を組んだ岬まで確認するといった大きな成果を上げることができ、5ヶ月間に渡る調査を無事に終了することができたことを記して、深く感謝する次第である。

附編 史跡永福寺跡の花粉化石（平成7年度）

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

平成7年度の発掘調査においては、後期の取水口が検出され、その影響と推測されるが、砂の堆積が認められる。また、後期の堆積物は植物遺体に富み、ヒシの果実をはじめとして、微小な種実が多く認められる。このヒシは富栄養の池などに群落を形成しており、後期の苑池の水はかなりよどんでいたと推測される。このように、苑池においては取水が行われていた頃の水流の影響から、その後の止水環境への変化が予想され、池およびその周辺に生育する植物（水生植物）は大きくその影響をうけたことが推測される。こうしたことから、本年度においては水生植物に注目し、また、昨年度において行った各時期の花粉分析結果を補足する形で各時期の堆積物について花粉分析を行った。

また、流水から止水へと水の環境が大きく変わったことが推測され、これを検証する目的で珪藻分析を北海道大学の村田氏にお願いした。この珪藻は、幾何学的な模様を持つ珪酸の殻を有する単細胞藻類で、珪藻類全体の分布は淡水域から海水域のほぼ全ての水域環境にわたり、個々の種は様々な環境要因に適応をみせ、それぞれ特定の生息場所を持つ。また、珪藻の化石は顕微鏡サイズながら水成堆積物中から保存よく多産し、化石群集の種の組成は堆積環境をよく反映するため、古環境の復元の指標として数多く利用されてきたのである。

さらに、クロマツの球果やヒシの果実などの種実類も多く観察されたことから、大型植物化石分析（吉川純子（パレオ・ラボ）担当）を、また、半島状に池部につきでた部分などに認められた木材化石について樹種同定（藤根 久（パレオ・ラボ）担当）を行った。

1. 試料

花粉分析用試料は、図47に示した4地点（A～D）より柱状、およびスポットで採取した。図48には、そのうちA～C地点の土層断面を、また、図49には各地点の地質柱状図および試料採取層準を示した。以下に、各地点の土層記載を示すが、詳しい土層断面や記載については本論を参照して頂きたい。

A地点：C面（創建期）堆積層は土丹混じりの黒灰色砂質シルト（試料7）で、その下位も土丹混じりの黒灰色砂質シルト（8、9）であるが上位よりしまりがよく、最下部は暗灰色の砂レキ（旧二階堂川？）である。B面（13世紀中頃から後半）堆積層は黒灰色の粘土（5、6）で、下部はやや砂質となり、上位はA2面（14世紀後半以降）

の基底にあたる灰色粘土混じり土丹層である。A2面堆積層は、下部は暗灰色の粘土（3、4）、上部は黒褐色の泥炭質粘土（1、2）で、上位は攪乱層である。

B地点：C面堆積層は黒灰色の粘土～シルト（試料17～19）で、上位はB面の基底にあたる土丹地業層（暗灰色シルト混じり砂レキ）である。

B面堆積層は、下部は大型の土丹が散在する暗灰～黒灰色の砂質シルト

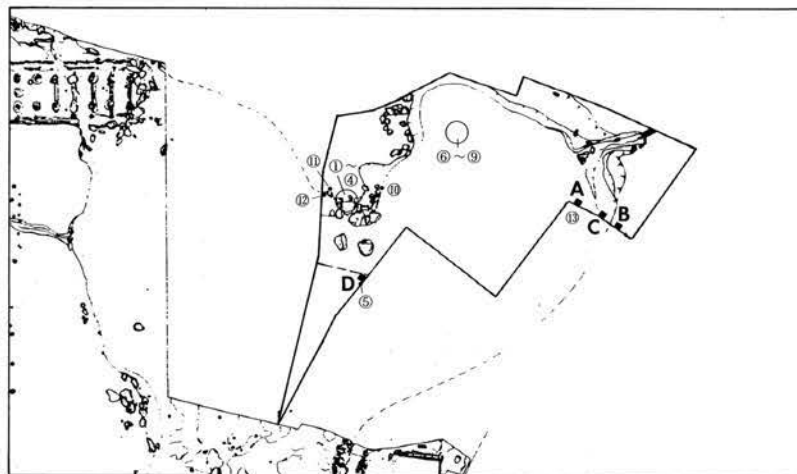


図47 試料採取位置図

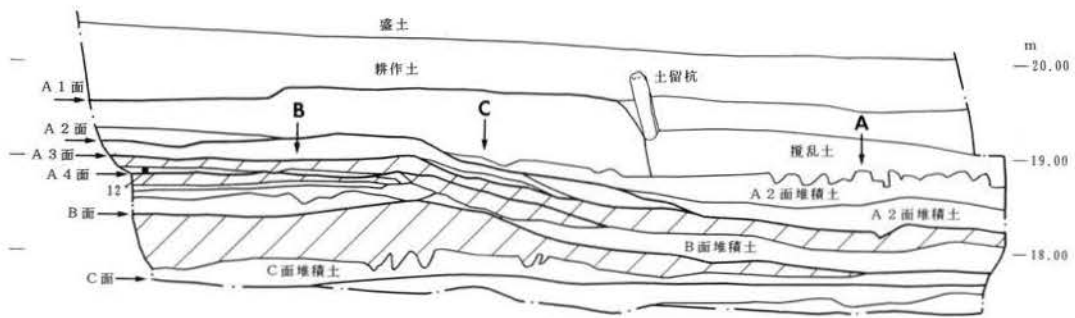


図48 深掘部の土層断面図

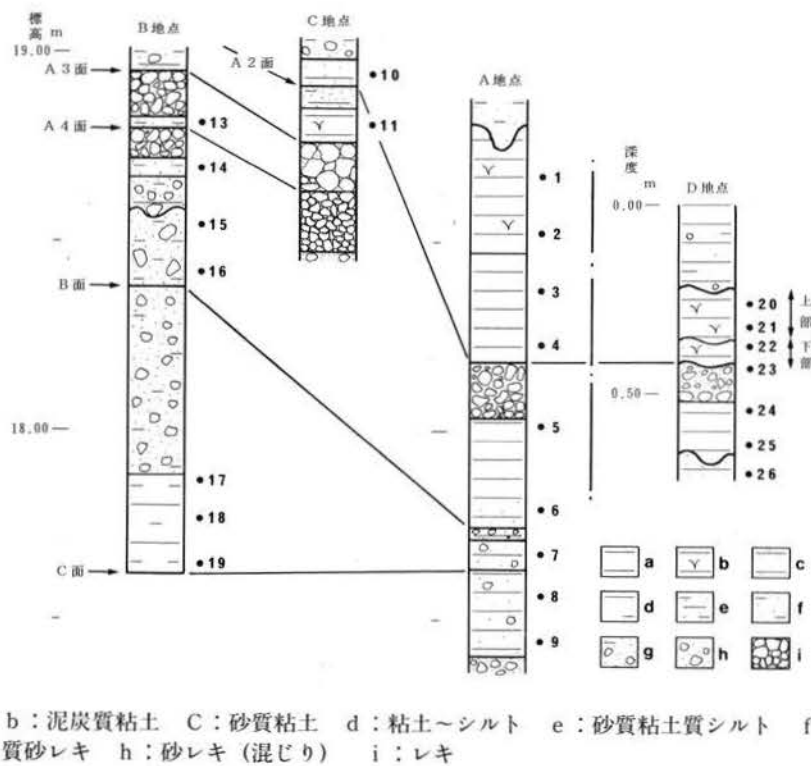


図49 試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準

(15、16) で、上位は暗灰褐色のシルト～粘土質の砂レキ、最上部は暗灰褐色の砂質シルト (14) で、その上位はA 4面 (14世紀初) の基底にあたる土丹層である。A 4面の堆積物としては暗灰褐色の砂質シルト (13) が認められ、同層準試料として同断面東端より試料12を採取した。さらに上位はA 3面 (14世紀前半) の基底にあたる土丹地業層で、さらに上位はA 2面の基底にあたる、土丹が散在する黒灰色の砂質粘土質シルトである。

C地点：A 4面およびA 3面の基底にあたる土丹地業層の上に、A 3面堆積層の黒褐色の泥炭質粘土 (試料11) が認められる。その上位はA 2面の基底にあたる、レキが多く認められる暗灰色シルト～粘土質砂である。A 2面堆積土は黒褐色の砂質粘土 (10) で、その上位はレキが多量に認められる黒褐色砂質シルト (A 1面 (～江戸～) 構成土) である。

D地点：最下部は暗灰色の砂質粘土（試料26）で、地山とみられる。この上位は軟らかい黒灰色粘土（24、25）で、BおよびC面堆積層である。この層を覆い土丹を多く含む砂レキ（A2面構成層）がみられ、上部（23）はシルト分が多くなっている。A2面堆積土は植物遺体が多く含まれ、下部は黒灰褐色の砂質泥炭質粘土（22）、上部は黒褐色の泥炭質粘土（20、21）となっている。この上位は攪乱層（黒灰色砂質粘土）である。このD地点試料を用いて珪藻分析（試料20～26）、大型植物化石分析（A2面堆積土の上部、下部）を行った。

2. 花粉分析

1) 分析方法

上記した26試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約1～3g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

2) 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉51、草本花粉38、形態分類を含むシダ植物胞子3、藻類1の計93である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表1に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図50(A地点)、図51(B、C地点)、図52(D地点)に示した。なお、分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本(花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート)を作成し各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

A地点：樹木花粉の産出傾向から下位より局地花粉化石帯I・IIを設定した。

I帯(試料7～9)はスギ属の優占で特徴づけられ、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属—マテバシイ属も多く検出されている。草本類のイネ科が非常に多く得られており、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属などが産出している。なお、試料9については樹木花粉の検出数が少なく、分布図としては示せなかったが、産出傾向は上位試料と同様と判断される。

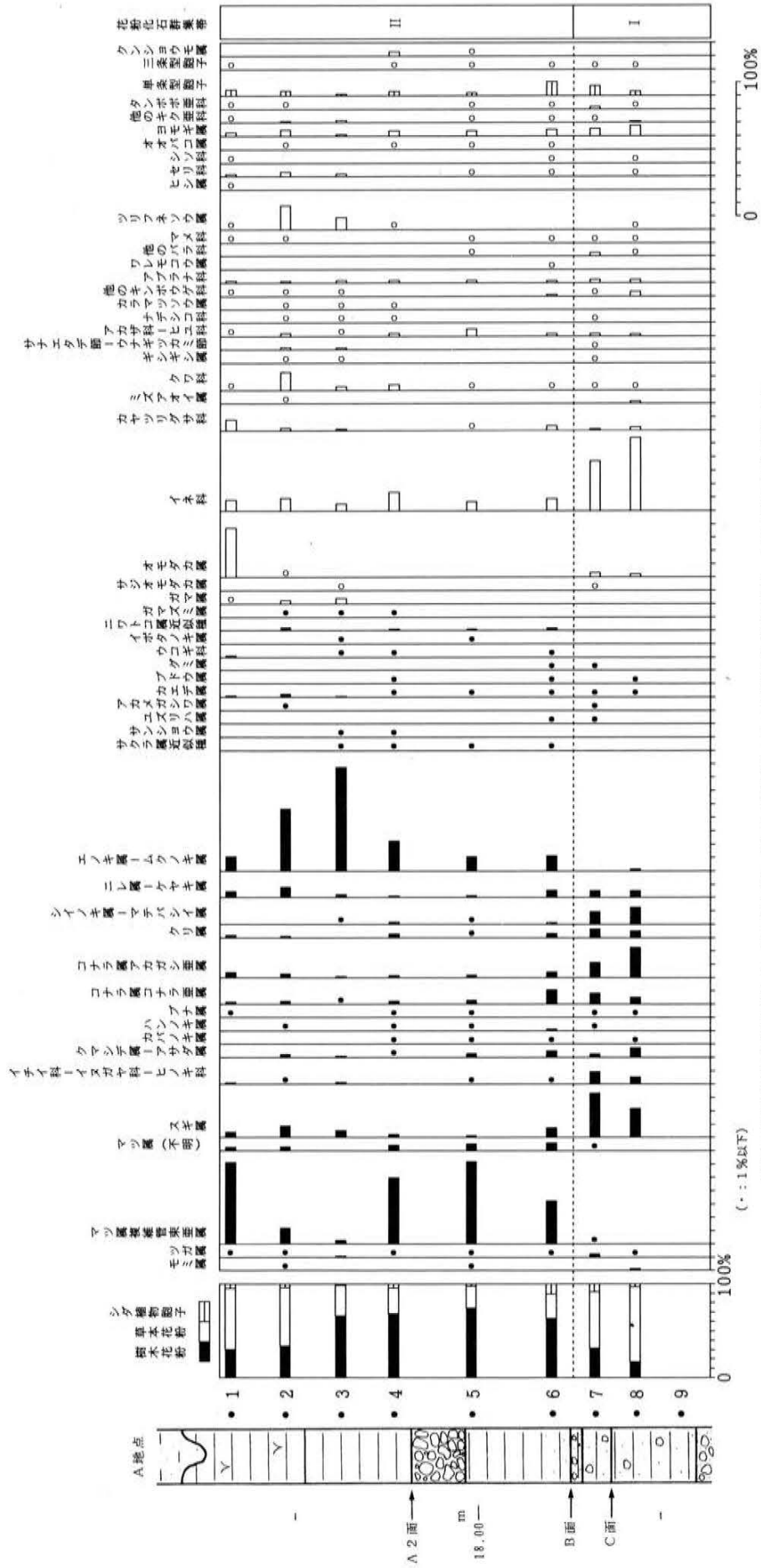
II帯(試料1～8)はマツ属複維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)とエノキ属—ムクノキ属の優占で特徴づけられ、ニヨウマツ類の試料2、3における出現率の減少はエノキ属—ムクノキ属花粉の多産による見かけ上の減少と思われる。草本類では、上部においてツリフネソウ属が多く検出されており、ガマ属にも同様の傾向がみられる。また、最上部の試料1ではオモダカ属が多産しており、ヒシ属も検出されている。

B、C地点：樹木花粉の産出傾向から下位より局地花粉化石帯I・IIを設定した。

I帯(試料19)はA地点と同様の傾向を示し、スギ属の優占で特徴づけられ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、アカガシ亜属、シイノキ属—マテバシイ属も多く検出されている。草本類のイネ科はA地点

草本花粉・シダ植物胞子

樹木花粉

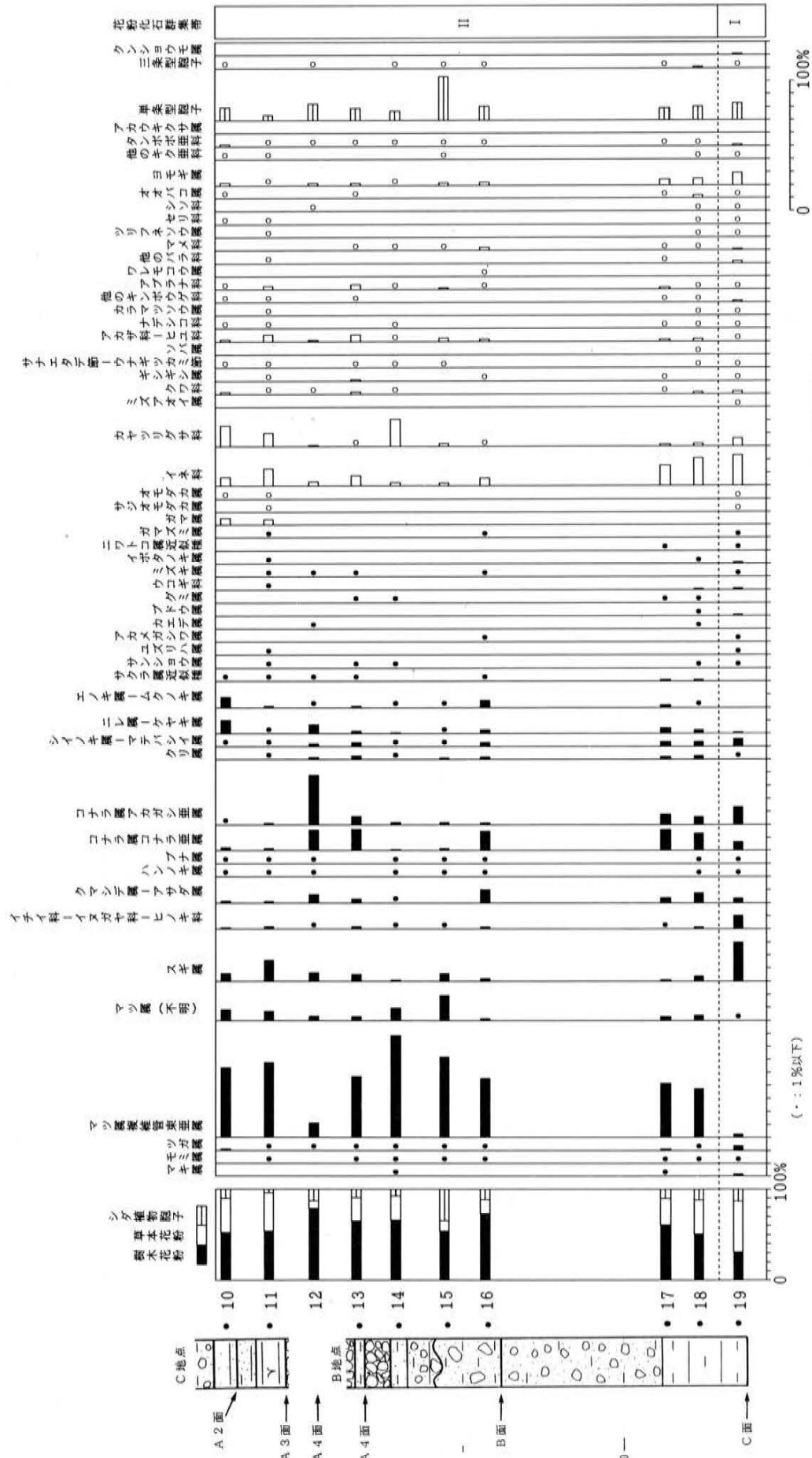


(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

図50 A地点の主要花粉化石分布図

草本花粉・シダ植物胞子

樹木花粉



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

図51 B、C地点の主要花粉化石分布図

草本花粉・シダ植物孢子

樹木花粉

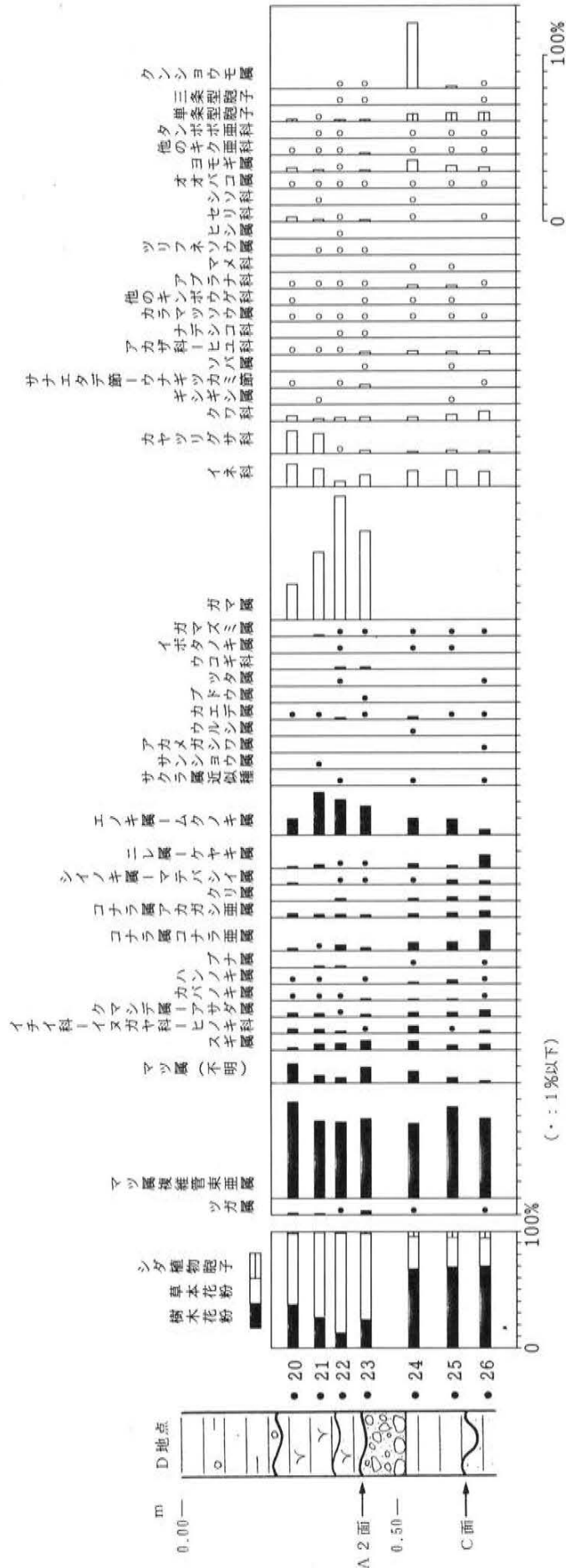


図52 D地点の主要花粉化石分布図

ほどではないが多く得られており、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属なども産出している。

II帯（試料10～18）はニヨウマツ類の優占で特徴づけられ、試料12、13については後述する。草本類では上部においてカヤツリグサ科が多くなる傾向が認められ、ガマ属も同様である。

D地点：全試料ニヨウマツ類が優占しており、エノキ属—ムクノキ属が上位に向かって増加している。草本類では上部においてガマ属が非常に多く検出されており、カヤツリグサ科も最上部2試料で多産している。その他、イネ科は安定して検出され、試料22よりヒシ属が得られている。また、クンショウモ属が試料24において特徴的に産出している。

3) 苑池を中心とした古植生

永福寺創建前後の周辺植生は、スギ属林や照葉樹林（アカガシ亜属、シイノキ属—マテバシイ属）が優勢であった（花粉帯I）。また、A地点においてはイネ属を含むイネ科花粉が多量に検出され、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属が比較的多く検出され、創建以前の低地部では水田稲作が営まれていた可能性があり、これは先の報告でも指摘されている（鈴木 1993）。なお、D地点の試料26は地山と考えられているが、ニヨウマツ類が非常に多く検出されている。土層観察では上位層との境界部はかなりうねっており、みかけより下部まで上位層の影響をうけている可能性が高いと推測される。

その後、B面堆積期（13世紀中頃から後半）になると突所としてニヨウマツ類が多産し（試料6）、増加するなど、周辺の植生はスギ属林や照葉樹林からニヨウマツ林へこの頃代わったと推測される。また、エノキ属—ムクノキ属も増加したとみられ、14世紀後半以降その傾向が一時的に高まったようである。

この14世紀後半以降においてヒシ属やオモダカ属などの水生植物が検出され始めているが、地点によりその様相が異なっている。すなわち、A地点ではガマ属からオモダカ属（抽水植物）の繁茂への変化が予想され、水深のあるところでは浮葉植物のヒシ属が生育し、水辺にはツリフネソウ属が一時多くみられた。また、C地点ではカヤツリグサ科やガマ属（抽水植物）、D地点でははじめガマ属だけの群落から、イネ科、カヤツリグサ科を交える群落への変化といった特徴がみられる。

なお、図50の試料12においては、14世紀初の堆積物と思われるが、ニヨウマツ類は少なく、アカガシ亜属が優占している。しかしながら、この頃の試料採取地点は池ではなく、よって、自然堆積物ではないように思われる。むしろ、池の改修にともなう浚渫により古い時代の堆積物がもたらされたのではないかと推測される。また、試料13も同様のことが推測される。

3. 珪藻分析

1) 分析方法

D地点から得られた計7試料について以下の手順にしたがって珪藻分析を行った。

土壌から珪藻分析用に採取した試料を風乾後、秤量する。この試料に約15%の過酸化水素水を加え加熱し、有機物の分解・漂白および一般堆積物と珪藻殻の分離を行う。反応終了後蒸留水を注ぎ、遠心分離をかけて上澄みを捨てることにより珪藻殻の濃集を行う。この操作を数回繰り返した後、適当な濃度に調整した珪藻懸濁液0.5ml程度をカバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥した試料上にプリユウラックス等の封入剤を滴下し、スライドガラスに張り付け永久プレパラートを作成する。

検鏡は、油浸1000倍で行った。珪藻化石群集の組成を把握するために、メカニカルステージを用いて

任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては計数・同定は行っていない。珪藻の同定については、Hustedt (1961~1966)、K. Krammer & Lange-bertalot (1985~1991)などを参考にした。また、古環境の復元のための指標としては、安藤(1990)の環境指標種群を参考にした。

2) 結果

すべての試料より淡水生珪藻の産出が認められた。そこで化石産出の層的变化からI~IVの分帯を設定した(図53)。さらに産出した環境指標種と珪藻化石種個々の生活型に着目し、古環境の復元とその変遷の推定を行った。以下に、帯ごとの特徴を記載する。

[I帯]：試料26にあたる。主要種としては、沼沢湿地付着生指標種群 [O] である *Cymbella aspera*、*Gomphonema gracile*、*Pinnularia gibba*、湖沼沼沢湿地生指標種群 [N] である *Fragilaria construens*、*Melosira lineata*、微量ではあるが中~下流性河川指標種群 [K] である *Melosira varians*の産出がみられた。群集構成主要種としては *Nitzschia plana*などがみられるが、これらはすべて浮遊から付着生活まで幅広い生活型を持つ種類である。また、完形形殻の出現率は80%程度と良好な化石保存度を示しており、安定した堆積環境が存在したことが推定される。

[II帯]：試料25にあたる。主要種としては沼沢湿地付着生指標種群 [O] である *Cymbella aspera*、*Gomphonema gracile*、*Pinnularia gibba*が産出した。これらの種は水深1 m前後の、水生植物の繁茂した水域を指標する。しかし種としての生態は好流水性のため、水生植物の繁茂による滞水環境が形成されていたとは考えにくい。また、完形形殻の出現率は82%程度と良好な化石保存度を示しており、I帯同様安定した堆積環境が存在し、さらに付着底生種による化石群集の構成から異地性遺骸の混入率は低いと考えられる。

[III帯] 試料22~24にあたる。主要種としては湖沼沼沢湿地生指標種群 [N] である *Fragilaria construens*、*Melosira lineata*、中~下流性河川指標種群 [K]

表5 苑池D地点における珪藻化石の産出状況

分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7
<i>Cocconeis placentula</i>	W	8	-	24	26	2	-	12
<i>Cymbella affinis</i>	W	-	33	12	12	-	-	12
<i>C. aspera</i>	O	32	38	-	-	-	48	28
<i>Diploneis elliptica</i>	Q	14	66	-	-	-	-	-
<i>D. ovalis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-
<i>D. subovalis</i>	W	224	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia sorex</i>	W	78	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i>	N	-	-	44	42	46	24	26
<i>Gomphonema clavatum</i>	W	-	-	-	-	12	38	4
<i>G. gracile</i>	O	-	-	-	-	28	20	8
<i>Melosira granulata</i>	M	-	-	-	-	48	-	-
<i>M. lineata (Dillwyn)</i>	N	-	-	38	48	12	-	24
<i>M. varians</i>	K	-	-	12	4	-	-	6
<i>Navicula</i> spp.	?	-	-	8	10	10	14	8
<i>Nitzschia palea</i>	W	-	-	12	8	-	-	8
<i>N. plana</i>	W	-	-	56	54	38	52	56
<i>Pinnularia braunii</i>	W	8	-	-	-	8	1	-
<i>P. gibba</i>	O	10	28	-	-	8	10	10
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	O	2	38	-	-	2	2	1
<i>Surirella tenera</i>	W	28	4	-	-	-	-	-
中~下流性河川 (K)		-	-	12	4	-	-	6
湖沼浮遊生 (M)		-	-	-	-	48	-	-
湖沼沼沢湿地 (N)		-	-	82	90	58	24	50
沼沢湿地付着生 (O)		44	104	-	-	38	80	47
陸域 (Q)		14	66	-	-	-	-	-
広布種 (W)		346	37	104	100	60	91	92
不明 (?)		-	-	8	10	10	14	8
珪藻殻数		404	207	206	204	214	209	203

各環境指標種群の分類は、安藤 (1990) に基づく

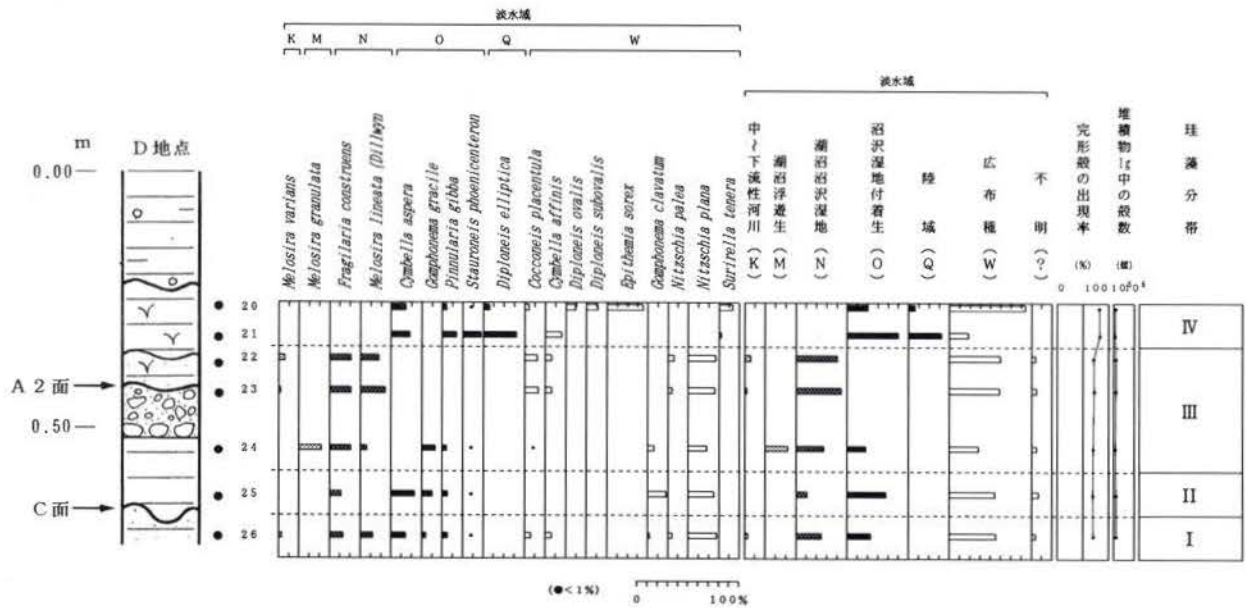


図53 苑池D地点における珪藻化石群のダイアグラム

である *Melosira varians* が産出した。群集の構成は浮遊から付着生活までできる適応範囲の広い種によって構成されており、群集構成は I 帯に類似するが、水域がより拡大し、同時に水深も深くなっていると考えられる。完形形殻の出現率は76~80%程度と淡水環境においては典型的な値を示すものの、他の分帯に比べると若干劣る。この現象は、堆積環境自体は安定しているものの、水域の拡大や水深の増大による水の循環に起因するものと考えられる。この現象を起こす水深限界は現在調査中である。

[IV帯]：試料20、21にあたる。主要種としては沼沢湿地付着生指標種群 [O] である *Cymbella aspera*、*Pinnularia gibba*、陸域指標種群 [Q] である *Diploneis elliptica* が産出した。陸域指標種群は一般的に陸生珪藻として知られる種群で、ミズゴケなどが生育する水域としては成立しない湿地帯を中心に分布する。しかし環境に対し広い適応性を示すため湿地以外の水域で産出することもしばしばある。しかし、そのような水域において産出する場合、群集構成比としては5%に満たないことが一般的であり、このような産出は湿地あるいは湿地に準ずるごく浅い水域環境を示唆していると考えられる。

3) 珪藻化石群集による堆積古環境の推定

これまでの結果から、苑池における水域環境の変遷は以下のように推定される。

1) 永福寺創建以前は水深1~2m前後の沼沢池に準ずる水域が存在した。この水域には水路が存在し、微弱ながらも淡水河川からの水の流入が存在した。

2) 創建直後頃と推測されるが、水生植物が繁茂し流水の影響が弱まり、水域自体も縮小した。この時期水路による周辺水域への連絡は閉ざされていたと考えられる。

3) 2面(14世紀後半)前後の時期になると、水域が拡大し、水深も3m前後まで深くなったと推定される。水路による淡水河川からの水の流入が存在した。

4) その後、水域は縮小し、水深も50cm未満の非常に浅い、所々陸化した湿地帯が存在したと推定される。

4. 大型植物化石

1) 分析方法

植物遺体が多く認められたD地点のA2面堆積層については、2層に分けられていたため、それぞれ上部と下部に分けて試料とした。表はそれらのブロック試料を0.25mm目と2mm目の2種類の篩で、表示した体積だけ水洗篩別し、産出した部位ごとの個数を表示した。また、現地とは現地で肉眼で確認された大型植物化石を取り上げたものである。

2) 産出した大型植物化石

下部からは木本ではスギをやや多く産出し、ほかにクロマツ、マツ属、アカシデ、エノキ、ケヤキ、イロハモミジを産出した。草本ではオモダカ、ヘラオモダカ、オモダカ科、ハリイ属、ミゾソバ、ギシギシ、タガラシ、セリ、シロネ属、エゾノタウコギ近似種を多く産出し、アギナシ、スゲ属A、イボクサ、キツネノボタン近似種を比較的多く産出した。ほかにはイヌビエ近似種、スゲ属B、ソバカズラ、アブラナ科、ツリフネソウ、セリ科B、イヌコウジュ属、キュウリ属メロン仲間、タカサブロウ、不明Aを産出した。

上部からは、木本ではスギを比較的多く産出し、ほかにモミ属、クロマツ、アカシデ、ケヤキ、イロハモミジを産出した。草本ではオモダカ、ヘラオモダカ、オモダカ科、ハリイ属、スゲ属B、ミゾソバ、ギシギシ、キツネノボタン近似種、アブラナ科、シロネ属、エゾノタウコギ近似種、不明Aを多く産出し、アギナシ、イヌビエ近似種、イグサ属A、タガラシ、セリ、タカサブロウも比較的多く産出した。ほかにはシャジクモ属、イネ、コゴメガヤツリ近似種、カヤツリグサ科、スゲ属A、イボクサ、イグサ属B、ヤナギタデ近似種、ソバカズラ、ツリフネソウ、セリ科B、イヌコウジュ属を産出した。

現地取り上げでは木本のクロマツ、クリ、サクラ属サクラ節、ミズキを、草本ではヒシを産出した。

3) 14世紀後半の池とその周辺の高環境

産出した大型植物化石の種類を上部と下部で比較すると、多少の違いや産出個数の違いはあるが、ほぼ同種のを産出している。従って上部と下部ではほぼ似かよった環境であったと思われる。

まず、池の水域の部分に生育していたと思われるのが、沈水植物であるシャジクモ属、浮葉植物であるヒシである。これらはある程度の水深がある場所に生育している。また、水深のやや浅い水域部分に生育していたと思われるのが抽水植物であるオモダカ、ヘラオモダカ、アギナシ、ハリイ属、イボクサ、イグサ属である。さらに時々冠水するような半湿地に生育するのがイヌビエ近似種、コゴメガヤツリ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、キツネノボタン近似種、タガラシ、ツリフネソウ、セリ、シロネ属、タカサブロウである。これらは比較的多量に産出しており、池が急に深くなるのではなく浅い場所から徐々に深くなる構造であったことがわかる。また、貧栄養の水域に産出するような水草は産出せず、ヒシ、シャジクモ属など比較的富栄養に強い種類があることから、当時の池は汚くはなかったが停滞気味の水域であったと推定される。

木本は湿地に生育する種類は産出されず、クロマツ、スギ、クリ、サクラ属サクラ節、イロハモミジなど植栽したと思われる種類を少しずつ産出した。また、ソバカズラ、ギシギシ、エゾノタウコギ近似種はやや乾燥した場所に生育しており、周囲から供給された種類が比較的少ないことから、人為的に開けた日当たりのよい状況をつくり、そこにまばらに庭園樹を植えていたと思われる。

表6 苑池D地点産出の大型植物化石一覧表 (ヒシのカッコ内は破片)

試料の種類 篩の大きさ 処理体積	部位	上部		下部		現地
		0.25 100cc	2.0 600cc	0.25 100cc	2.0 400cc	
木本						
モミ属	葉片		1			
クロマツ	葉片		7	7		
	球果					1
	雌花					1
マツ属	種子				1	
スギ	種子	16		2		
	葉片	20	1	13		
アカシデ	果実		4		1	
エノキ	内果皮片			1		
ケヤキ	果実		4		3	
クリ	果実破片					1
サクラ属	サクラ節 核					1
イロハモミジ	果実		2	1	1	
ミズキ	内果皮					1
草本						
シャジクモ属	卵胞子	1				
オモダカ	果実	52	15	40	9	
ヘラオモダカ	果実	124	4	100		
アギナシ	果実	12	3	5	17	
オモダカ科	種子	52		68		
イヌビエ近似種	穎果	12		6		
イネ	穎基部	1				
コゴメガヤツリ近似種	果実	1				
カヤツリグサ科	果実	8				
ハリイ属	果実	28		74		
スゲ属 A	果実	1	2	12		
スゲ属 B	果実	44		9		
イボクサ	種子		1	10	2	
イグサ属 A	種子	16				
イグサ属 B	種子	1				
ミゾソバ	果実	56	42	66	19	
ヤナギタデ近似種	果実	8				
ソバカズラ	果実		6		2	
ギシギシ	果実		75	7	26	
キツネノボタン近似種	果実	8	31	18	17	
タガラシ	果実	12	6	34	2	
アブラナ科	種子	48		5		
ツリフネソウ	種子		9	2	5	
ヒシ	果実					1(3)
セリ	果実	16	11	38	27	
セリ科 B	果実	1	1	5		
イヌコウジュ属	果実	8		7		
シロネ属	果実	40	23	84	2	
キュウリ属メロン仲間	種子				1	
エゾノタウコギ近似種	果実	52	46	94	130	
タカサブロウ	果実	12	2	1		
不明 A		44		2		

4) 産出した大型植物化石の形態記載

以下に池の堆積物より産出した大型植物化石の形態を記載する。写真図版でわかる外形などは省略する。

木本

モミ属 (*Abies*) : 葉片は先端のみで扁平、葉の中央は上面がくぼみ、下面は突出して、葉の先端は丸く中央がくぼんでいる。

クロマツ (*Pinus thunbergii* Parlat.) : 葉片は線状で断面は半円、葉肉内の樹脂道は葉の表面付近から離れて内部に通っている。球果の鱗片の先端は肥厚し、中央がくぼんでいる。

マツ属 (*Pinus*) : 種子は木質で表面は繊維質である。

スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn.fil.) D.Don) : 種子は中央が厚く、周囲は翼のように薄くなって、やや堅い。葉片は断面が四角く、堆積物中のものは柔らかく崩れやすい。

アカシテ (*Carpinus laxiflora* (Sieb.et Zucc.) Blume) : 果実は厚みがあり、やや堅く、表面には縦に数本の筋が入る。

クリ (*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.) : 果実破片は縦に筋が入り、茶褐色で内側に渋皮が付いている。

エノキ (*Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai) : 内果皮片は薄くやや柔らかい黄褐色で、完形には突出した白いへそがある。

ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) : 果実はやや堅く、しわが全面にある。

サクラ属サクラ節 (*Prunus* sect. *Pseudocerasus*) : 核は2面形で、堅く、木質で一側にしわが入る。花を愛でるヤマザクラなどもこれに属する。

イロハモミジ (*Acer palmatum* Thunb.) : 果実はやや柔らかく、丸く、表面は繊維質である。本来は長い翼が付いているが、ここではとれている。

ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) : 内果皮は堅く木質で縦に溝がある。

草本

シャジクモ属 (*Chara*) : 卵胞子は薄く柔らかい膜状で、螺旋状に鱗が付いている。

ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) : 果実には翼が無く、厚くスポンジ質で背面を見ると一本の溝がある。

オモダカ (*Sagittaria trifolia* Linn.) : 果実にはまっすぐ上に伸びる突出部のある、全体にぎざぎざの少ない翼がある。果実の膜は薄い。

アギナシ (*S. aginashi* (Makino) Makino) : 果実はオモダカより厚く狭い翼がある。

オモダカ科 (*Alismataceae*) : 種子は薄く柔らかい膜状でチューブが屈曲したようになっている。

イヌビエ近似種 (*Echinochloa* cf. *crus-galli* (Linn.) Beauv.) : 穎果は柔らかく、表面には細かい網目模様がある。

イネ (*Oryza sativa* Linn.) : 穎基部は護穎が磨耗した跡が残っている。

コゴメガヤツリ近似種 (*Cyperus* cf. *iria* Linn.) : 果実は3稜形で面の中央がややくぼみ、やや堅く、表面には小突起が全面に分布する。

ハリイ属 (*Eleocharis*) : 果実は鈍い3稜形でやや堅く基部から線状の刺針が数本出て、果実の先端には盤状の付属物がある。

スケ属A (*Carex* A) : 果実は薄く柔らかく、細かい網目模様が全面にある。

スケ属B (*Carex* B) : 果実はやや薄くやや堅く、細かい網目があるが、縦の筋が目立つ。

カヤツリグサ科 (Cyperaceae) : 果実は透明で柔らかい。

イボクサ (*Aneilema keisak* Hassk.) : 種子はやや柔らかく、湿ると濃い灰色、乾燥すると灰白色になり細かい網目がはっきりわかる。

イグサ属A (*Juncus* A) : 種子は紡錘形で薄く柔らかく全体に四角い網目模様がある。

イグサ属B (*Juncus* B) : 種子はイグサ属より長く全体の網目模様は薄く、縦の線が目立つ。

ギシギシ (*Rumex japonicus* Houtt.) : 果実は3室構造で大変大きなレース状の翼がある。

ミゾソバ (*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.) : 果実は膜質で大変柔らかく黄褐色で布質である。

ヤナギタデ近似種 (*P.cf. hydropiper* Linn.) : 果実は2面形で堅く黒色で光沢があり、表面には規則的な細かい網目模様がある。

ソバカズラ (*P. convolvulus* Linn.) : 果実は堅く、薄く稜の縁は翼状に薄くなる。

タガラシ (*Ranunculus sceleratus* Linn.) : 果実は扁平な円でやや厚く、表面は繊維質で黄褐色、同心円の内側がやや濃い褐色である。

キツネノボタン近似種 (*R.cf. silerifolius* Lev.) : 果実は扁平で偏円形、表面は繊維質で黄褐色、基部はやや突出し先端は鍵状に鋭く尖る。

アブラナ科 (Cruciferae) : 種子は楕円形扁平で、膜は褐色で薄く柔らかく透明、基部は破れたように裂けたものが多く、表面には細かく規則的な網目模様がある。

ツリフネソウ (*Impatiens textori* Miq.) : 種子は楕円球で基部が嘴状にやや突出し、表面は黒色で光沢があり、薄く膜状、とぎれた網目状に粗くうきでた模様がある。

ヒシ (*Trapa japonica* Flerov) : 果実は倒三角形で、やや柔らかい木質、基部は円柱状に突出し中央に穴がある。果実の両端に刺状突起がある。

セリ (*Oenanthe javanica* (Blume) DC.) : 果実は縦割りの半楕円球で中心に筋があり、外縁はコルク質で縦に隆起があり、浮きやすい。

セリ科B (Umbeliferae B) : 果実はセリに似るが、細くコルク質がない。

イヌコウジュ属 (*Mosla*) : 果実は球形の下端がやや突出し、やや薄くやや堅く、表面にはえぐったような網目模様がある。

シロネ属 (*Lycopus*) : 果実はやや柔らかく、浮きやすい。

キュウリ属メロン仲間 (*Cucumis melo* L.) : 種子はやや堅く、表面の微細な網目はキュウリ仲間と違い、正方形に近い。

エゾノタウコギ近似種 (*Bidens cf. maximowicziana* Oettingen) : 果実は陸上に長時間滞在していたようで、柔らかく薄くなっており、中央にはタウコギに見られる逆刺が認められないが、地域的にエゾノタウコギが生育していたことに疑問があるため、近似種とした。

タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (Linn.) Linn.) : 果実は厚みがあり、やや柔らかく、繊維質である。

不明A (Unknown A) :

5. 樹種同定

1) 方法と結果

試料は、永福寺跡の14世紀後半以降の堆積層から検出された13点である (図1)。

標本は、片刃カミソリを用いて試料の横断面 (木口と同義)、接線断面 (板目と同義)、放射断面 (柾目と同義) の3断面をつくり、ガムクロラル (Gum Chloral) で封入し、永久標本を作成する。樹種

の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に各標本の記載を述べる。

表4 永福寺跡出土木材の樹種

木材試料	樹種
①~④、⑥~⑨、⑬	マツ属複維管束亜属
⑤	ウツギ
⑩	クヌギ節
⑪、⑫	クスノキ

2) 記載

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1a~1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は内側に向かって著しく突出している(放射断面)。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で1~10細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科のマツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属は、本州・四国・九州に生育するアカマツ (*P. densiflora*) と海岸部に生育するクロマツ (*P. thunbergii*) がある。いずれも樹高30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版2a~2c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ (*Quercus acutissima*) と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ (*Q. variabilis*) がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 図版3a~3c.

中型の管孔が単独ないしは2~4個放射方向に複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、4~24細胞高、油細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、クスノキ科ニッケイ属のクスノキの材と同定される。クスノキは、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25m、幹径80cmに達する常緑広葉樹である。

ウツギ *Deutzia crenata* Sieb.et Zucc. ユキノシタ科 図版4a~4c.

角張った小型の管孔が均一に分布する散孔材で、放射組織が広く特徴的である(横断面)。道管のせん

孔は、10本程度の横棒からなる階段状である（放射断面）。放射組織は、異性で1~4細胞幅で背は非常に高い（接線断面）。

以上の形質から、ユキノシタ科ウツギ属のウツギの材と同定される。ウツギは、おもに暖帯から温帯にかけて分布する落葉低木である。

6. 苑池を中心とした永福寺周辺の古環境変遷

これまで花粉分析に加え、D地点では珪藻分析や大型植物化石分析を行い、それらの結果・考察を述べてきた。ここではそれらをまとめ、苑池およびその周辺の環境変遷について示す。

1) D地点の時代について

D地点の最下部試料からニヨウマツ類が多量に検出されているが、本試料は地山と考えられている。しかしながら、平成4年度に採取した地山試料においてはスギ属が優勢であり（鈴木 1993）、創建以前においてニヨウマツ類が多産した例はない。今回の分析においては創建後の13世紀中頃以降においてニヨウマツ類が多産しており、これまで行ってきた結果もほぼ同様である。こうしたことから、D地点の最下部試料は上位層の影響をかなりうけている可能性が高く、分析結果はむしろ創建後の環境を示している可能性が高いと判断される。

2) 苑池周辺の古環境変遷

創建以前の永福寺周辺丘陵部はスギ林や照葉樹林が優勢であり、これは12世紀末から13世紀初の頃まで続き、その後ニヨウマツ類が優占するようになった。また、低地部では水田稲作が営まれていた可能性が高い。

先にも記したが、D地点最下部試料は創建後の環境を示していると判断される。よって、創建後の初期苑池は水深1~2m前後と推測され、微弱ながらも河川からの水の流入が予想される。

その後、水域は縮小し、流水の影響は弱まり、水路による周辺水域への連絡は閉ざされていたと考えられる。

14世紀後半前後頃には再び水の流入が存在し、水深も一時よりは深くなったと推測される。この頃（A2面形成後）の水深がややある部には沈水植物のシャジクモ属や、浮葉植物のヒシが生育しており、浅いところには抽水植物のガマ属が繁茂していた。また、こうした水辺にはミゾソバ、タガラシ、ツリフネソウ、セリ、タカサブロウなどが生育していた。

さらに時代が進むと、苑池は縮小し、水深も非常に浅くなり、A地点付近ではオモダカ群落がみられるようになった。その他、ヘラオモダカ、アギナシ、ハリイ属、イボクサ、イグサ属などが生育し、イヌビエ近似種、コゴメガヤツリ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、キツネノボタン近似種、タガラシなどがみられる湿地的環境も存在するようになったと推測される。

引用・参考文献

- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p.73-109.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Susswasserflora von Mitteleuropa, 2 (1), p.1-876.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Susswasserflora von Mitteleuropa, 2 (2), p.1-596.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Susswasserflora von Mitteleuropa, 2 (3) , p.1-576.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Susswasserflora von Mitteleuropa, 2 (4) , p.1-437.

鈴木 茂 (1993) 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石. 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成4年度－, 鎌倉市教育委員会, p.29-37.



◀ 1. 第1調査区(北西より)



▶ 2. 第2調査区(北より)



◀ 3. 第3調査区(南より)



▲ 1. 第 I 調査区 A 面 全景(西より)



◆ 2. A 面 瓦溜り(北より)
▼ 3.





1. 第1調査区、B面全景

2. 第1調査区、B面全景(東から)



図版 4



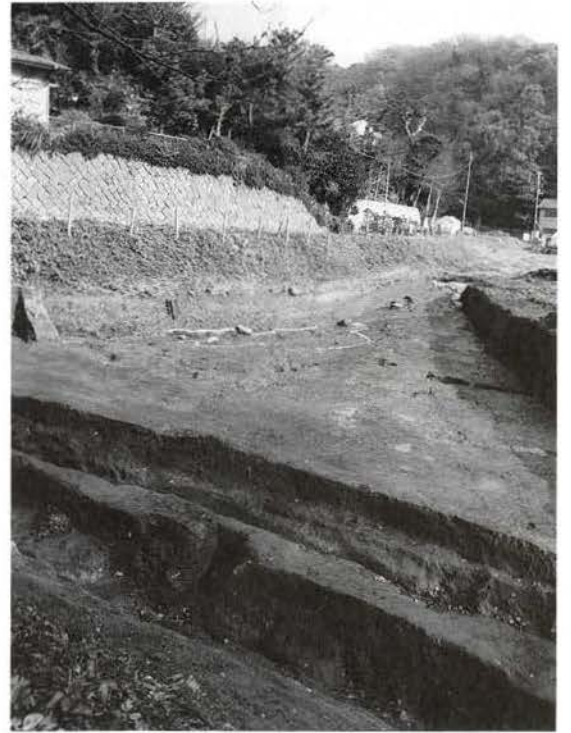
▲ 1. 西ヶ谷 入口部 岩盤上の溝



▲ 3. 遣水 流路 中程にある赤松の根株



▲ 2. 遣水 土層断面



▲ 4. 遣水 遠景(西より)



◀ 5. 遣水 東(下流)より



▲ 1. 2・3溝(北より)



▲ 2. 2・3溝(南より)



▲ 6. 2溝上流、五輪塔出土状況

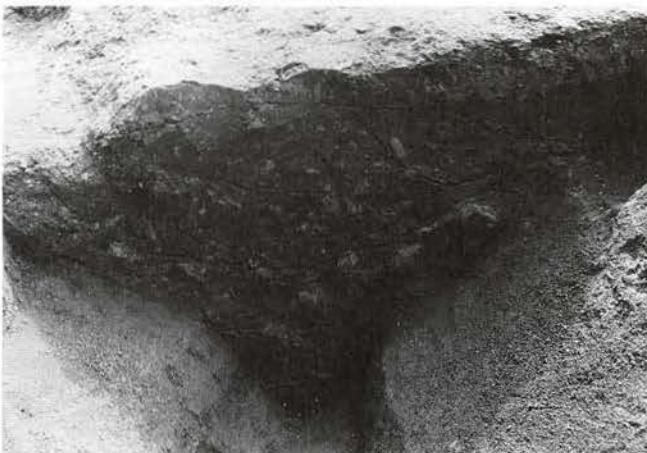


▲ 3. 2・3溝 上流 土層断面(南より)



▲ 4. 2・3溝 中央部 土層断面(南より)

▼ 5. 4溝 土層断面(北西より)

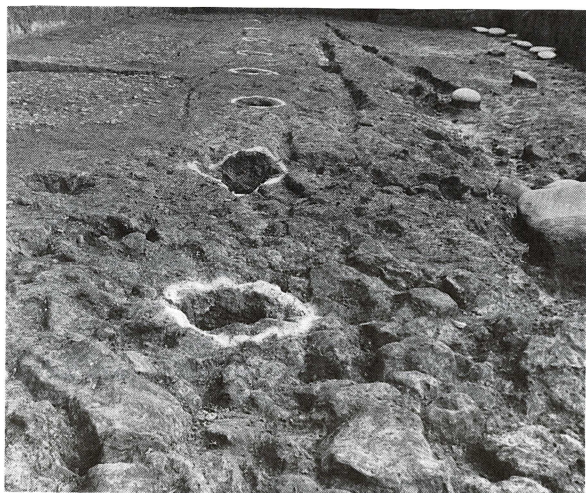




▲ 1. 目隠し堀(北より)



▲ 4. 第2調査区 全景(南より)



▲ 2. 目隠し堀(南より)

▼ 3. 道路(南より)



▼ 5. 複廊 雨落ち溝底石(北より)





▲ 1. 2 溝 東肩部(北から)



▲ 2. 2 溝 土層断面(北から)



▲ 3. 2・3 溝(北から)



◀ 4. 3 溝 土層断面



1. 第3調査区全景



2. 第3調査区全景(西から)



▲ 1. Ⅲ期苑池全景

▼ 2. 切石溝





▲1. 景石



▲4. III期の汀に沿って据えられた景石



▲2. 景石



▲5. 景石

▼3. 景石

▼6. 蓮華蕾(花卉部木質黒漆塗り萼部金銅製)





▲ 1. IV期苑池汀(西から)



◀ 2. IV期苑池汀(南から)



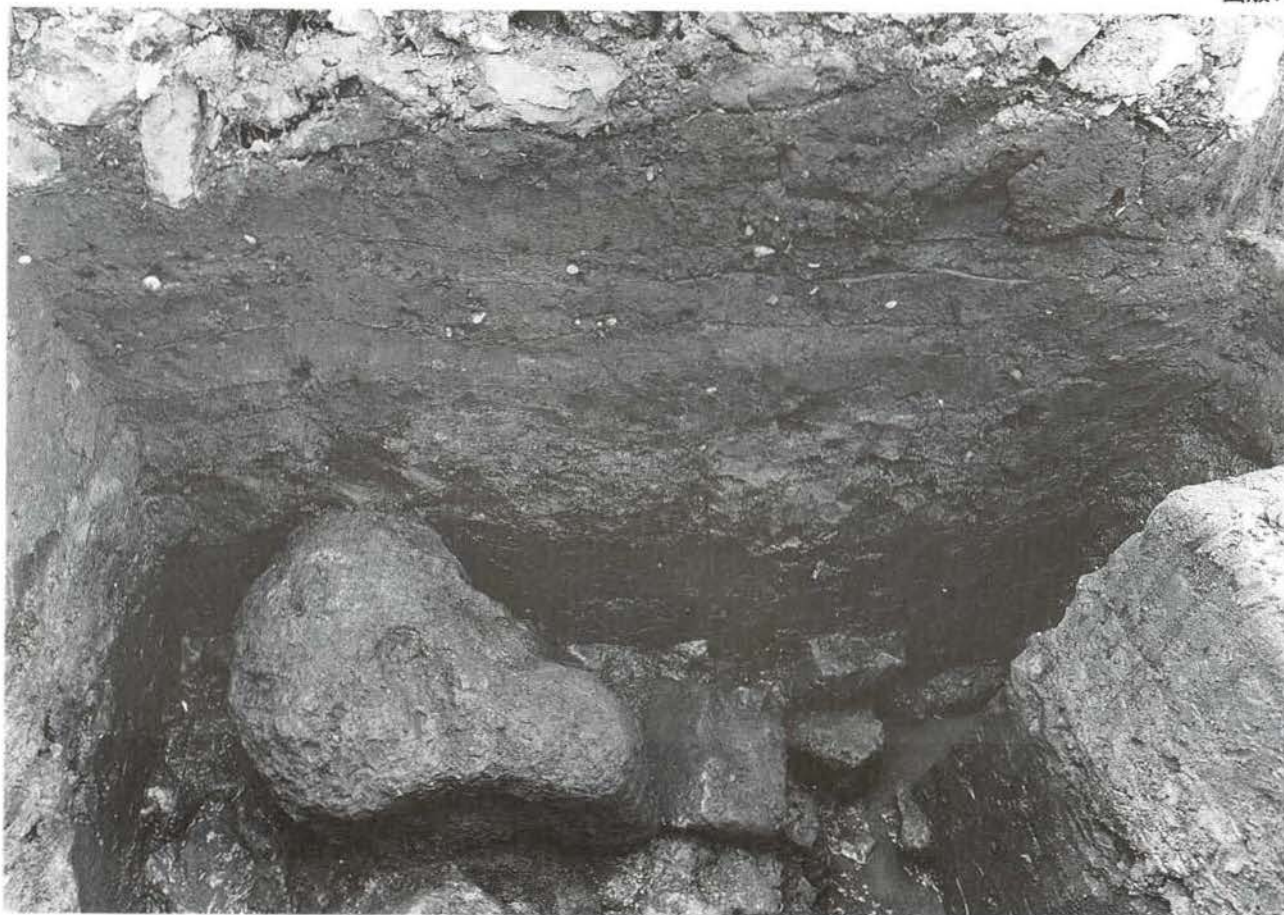
▲ 1. III期苑池汀(南西より)

▼ 2. III期苑池汀



▼ 3. 埋められたII期苑池汀





▲ 1. I期池底と土層断面

▼ 2. I期池底





图10-1



图10-10



图10-4



图10-5



图10-6



图10-2



图10-8



图10-3



图10-7

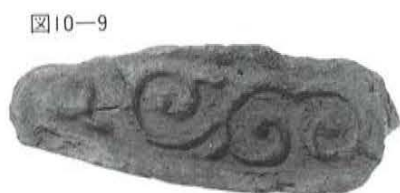


图10-9



图11-6



图11-7



图10-13



图10-15



图10-14



图10-11



图10-12



图11-5



图11-4



图11-1



图11-2

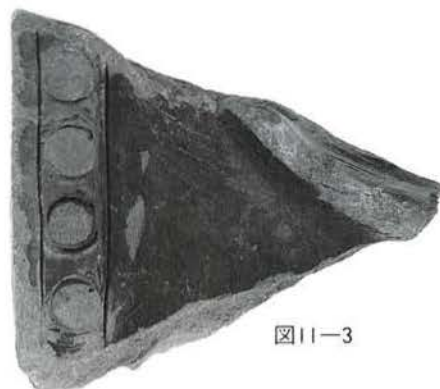


图11-3

第I調査区 A面上層遺物包含層 瓦



図12-5



図12-8



図12-1



図12-6



図12-2



図12-7

図12-3



図12-4



図12-9



図12-10



第1調査区 A面 瓦溜り



図13-3

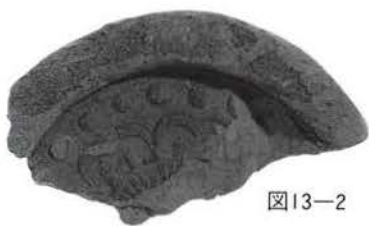


図13-2



図13-5



図13-1



図13-4



図13-6



図13-8



図13-7



図15-13



図15-19



図15-12



図15-17



図15-15



図15-16



図15-18



図15-14

第1調査区 A面構成土及びB面上層・2溝最下層 瓦



图13-9



图13-17



图13-12



图13-16



图13-18



图13-11



图13-10



图13-15



图13-14



图13-19



图13-13



图13-13裏



图14-1



图14-6



图14-3



图14-2



图14-5



图14-4

第1調査区 2溝上層 瓦



第1調査区 2溝最上層・3溝瓦



図16-1



図16-2



図16-5



図16-6



図16-3



図16-7



図16-8



図16-4



図16-11



図16-12



図16-14



図16-9

図16-13



図16-13裏面



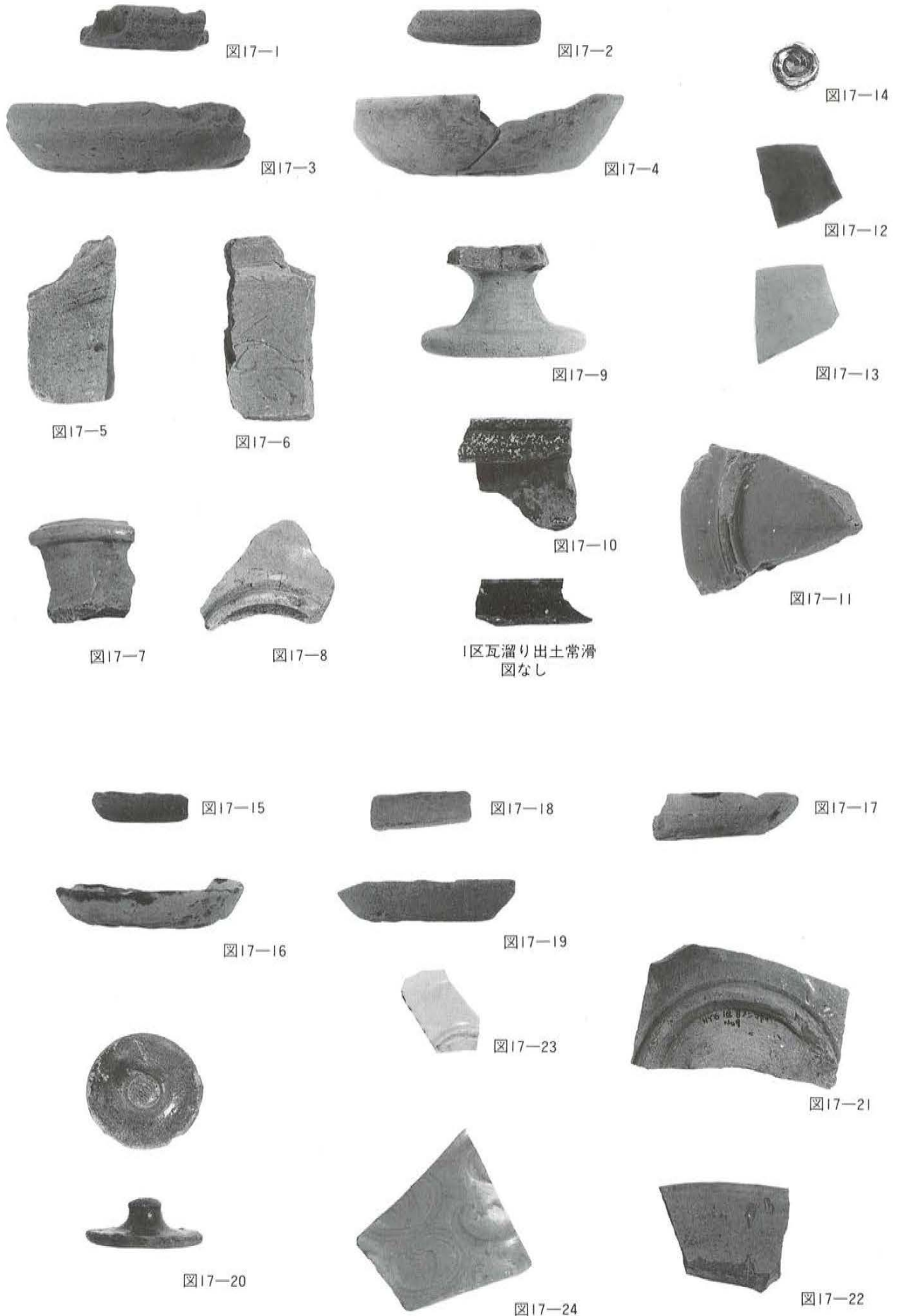
図16-10



図16-15



図版22



第I調査区 A面上層遺物包含層・A面構成土及びB面上層 瓦以外



図18-33



図18-34



図18-35

図18-32



図18-36



図18-37



図17-25



図17-26



図17-27



図17-28



図17-29



図17-30



図17-31



図17-32



図17-34



図17-35



図17-33

図18-2



図18-1



図18-3



図18-9



図18-4



図18-5



図18-6



図18-7



図18-8



図18-10



第1調査区 2溝(水溜遺構北)・2溝最上層・2溝上層 瓦以外

図版24



図18-11



図18-12



図18-13



図18-14



図18-15



図18-16



図18-17



図18-18



図18-19



図18-20



図18-21



図18-22



図18-23



図18-24



図18-25



図18-26



図18-27



図18-28



かわらけ 図なし



かわらけ 図なし



青磁 図なし

図18-29



図18-30



図18-31



青磁 図なし

第1調査区 2溝最下層 瓦以外



図19-1



図19-2



図19-3



図19-10



図19-4



図19-5



図19-6



図19-11



図19-7



図19-8



図19-9



図19-13



1区3溝 青白磁
図なし



図19-17



図19-12



図19-15



図19-16



図19-18



図19-14



図19-19



図19-21

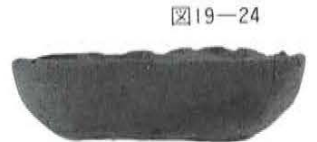


図19-24



図19-22



図19-20



図19-23

第1調査区 3溝・第2調査区 瓦以外



图20-1



图20-8



图20-2



图20-4



图20-3



图20-6



图20-9



图20-5



图20-7

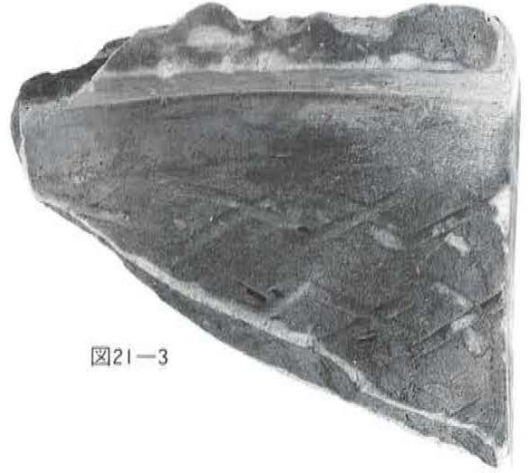
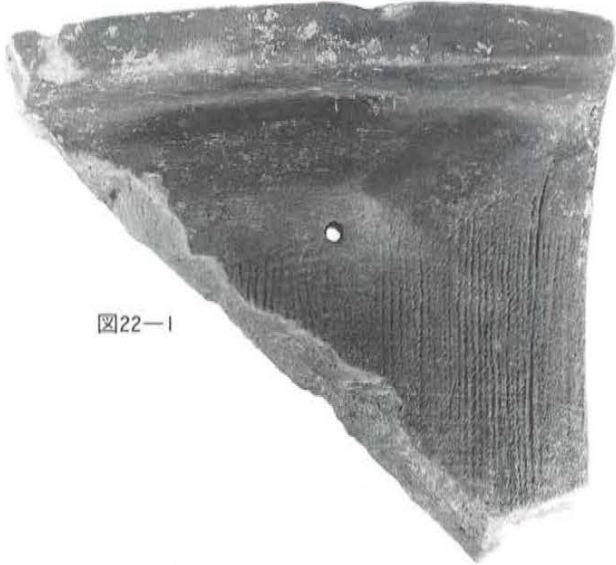


图22-1

图21-3



图21-1

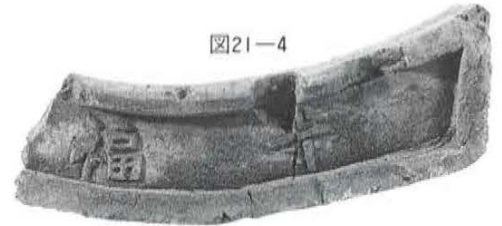


图21-4

图22-4

图21-5

图22-3



图21-2



图22-2



图版28



图23-1



图23-2



图23-3



图23-4



图23-6



图23-7



图23-8



图23-5



图23-9



图23-10

图23-11



图23-12



图23-13



图23-14

第3调查区 池中A面上层遗物包含层 瓦以外



図24-1



図24-2



図24-3



図24-4



図24-5



図24-6



図24-7



図24-8



図24-9



図24-10



図24-11



図24-12



図24-13



図24-14



図24-15



图25-1



图25-2



图25-4



图25-3



图25-5



图25-6



图25-7



图25-8



图25-9

第3調査区 木製品

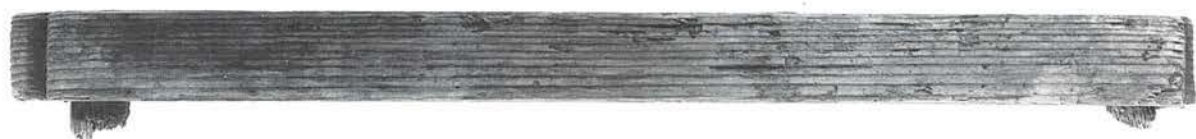


図26-1



図26-2



図26-3



図26-4

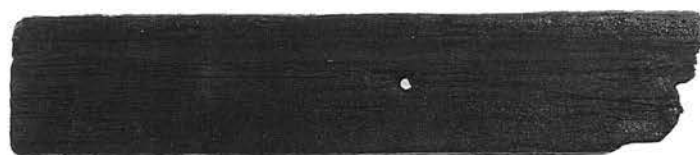


図26-5

第3調査区 部材

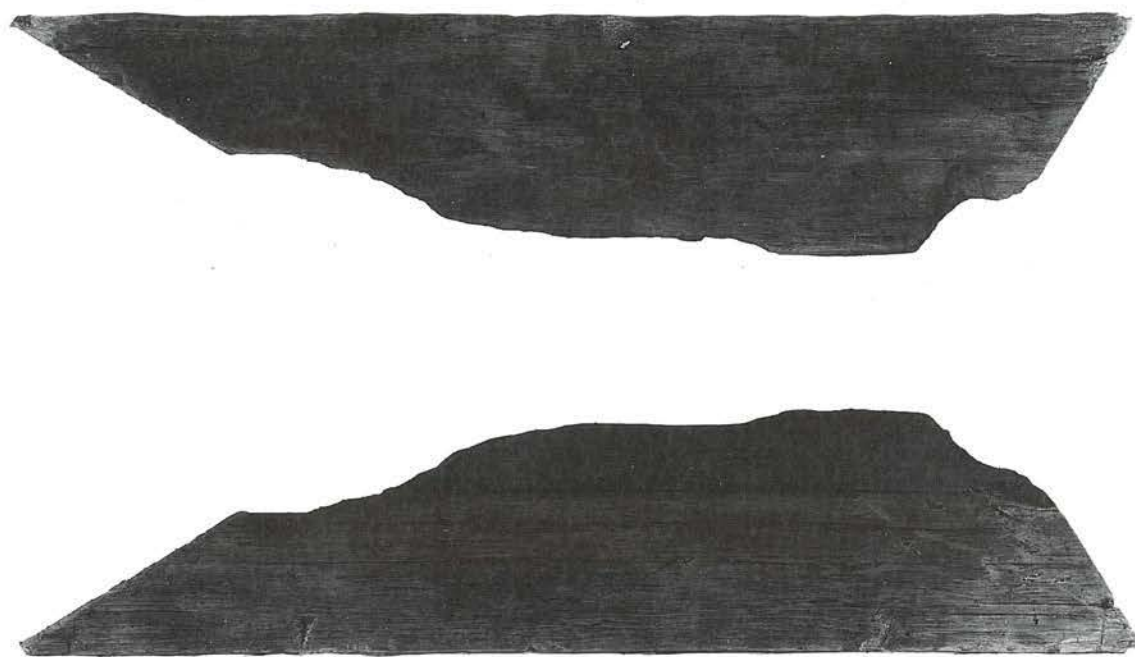


図26-6

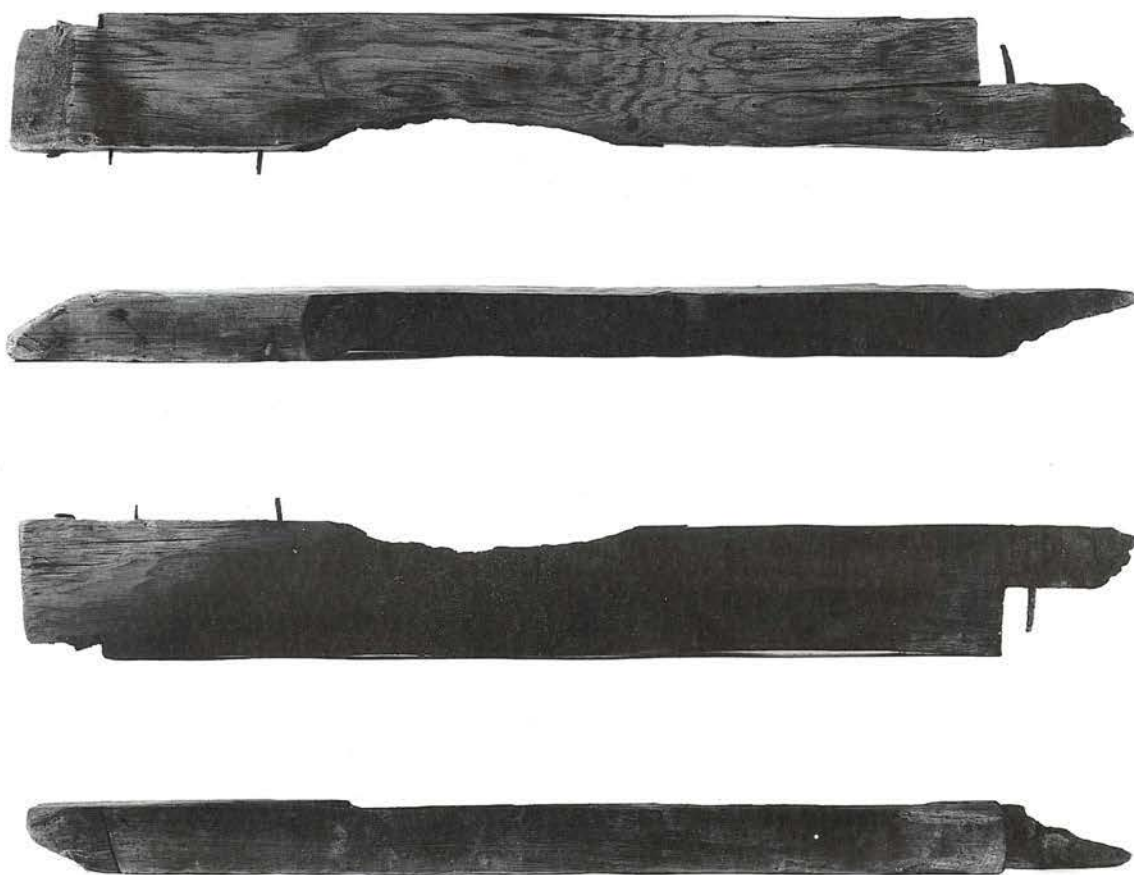
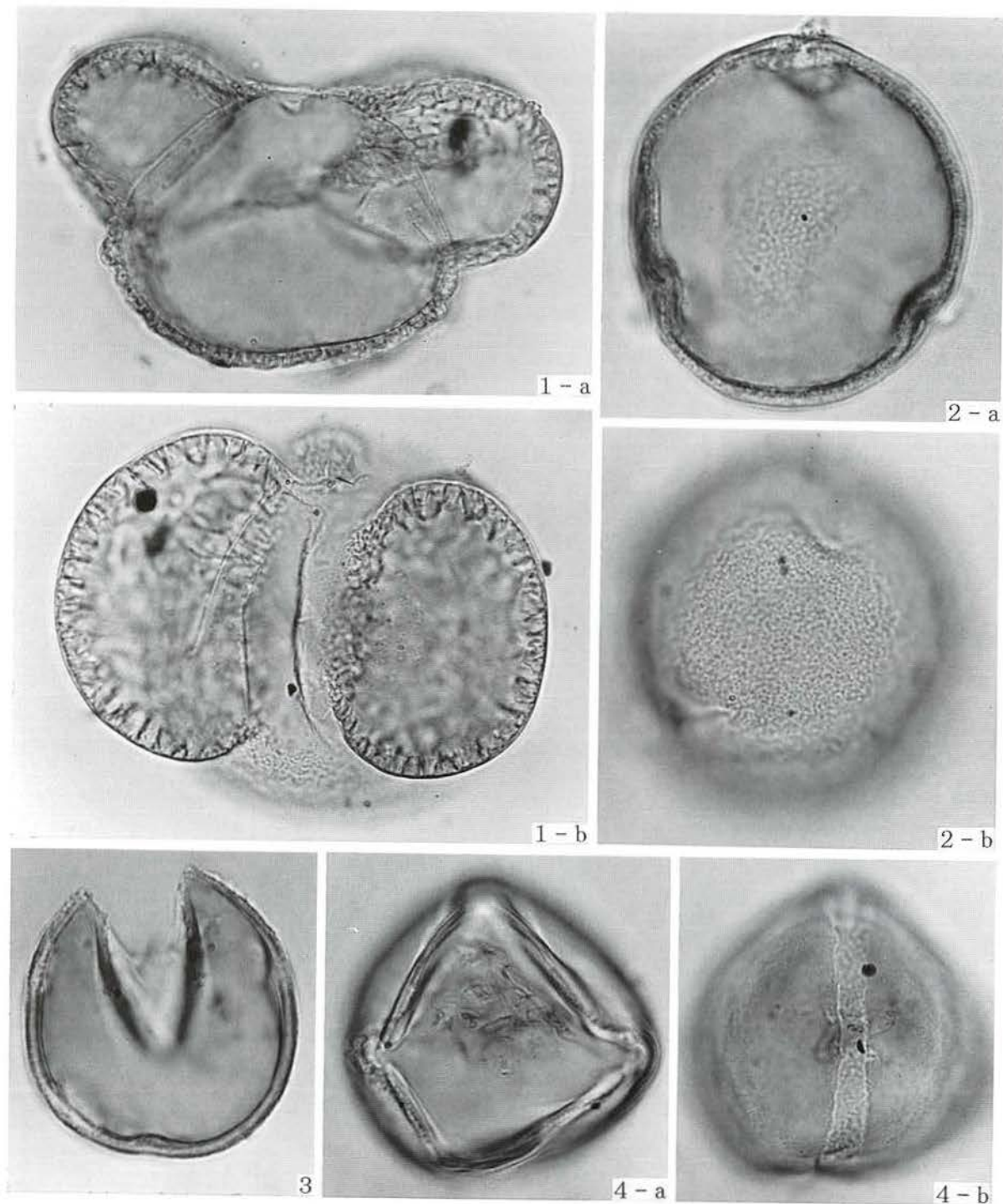


図26-7

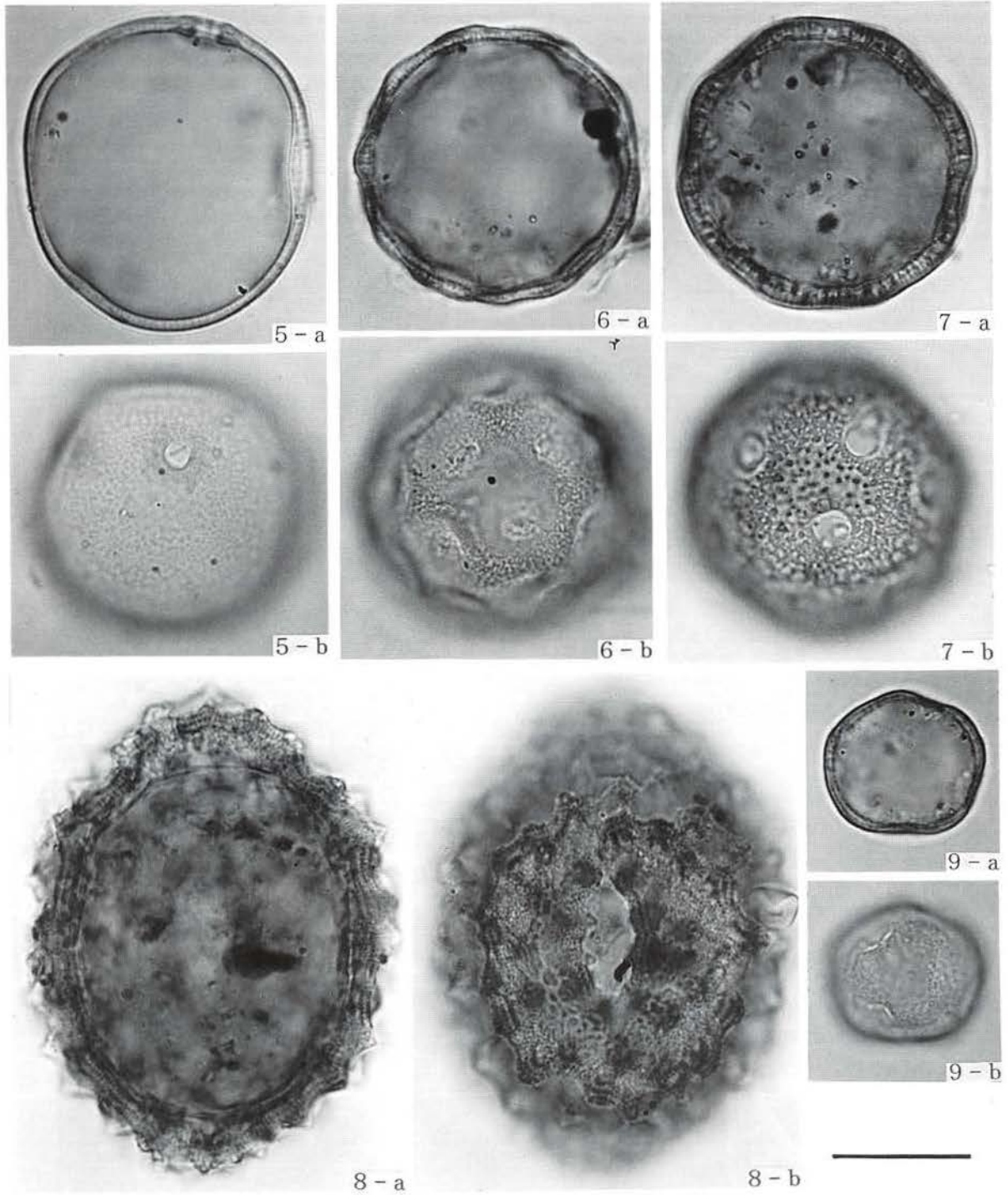
第3調査区 部材



2 ~ 4 : ————— 1 : ————— bar : 20 μ m

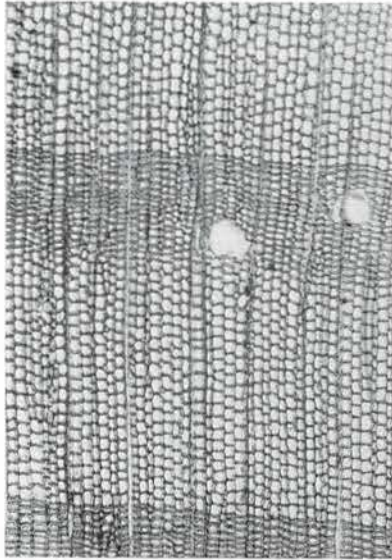
史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石

- 1 : マツ属複維管束亜属 PLC.SS 1607 試料7
- 2 : ブナ属 PLC.SS 1611 試料2
- 3 : スギ属 PLC.SS 1604 試料3
- 4 : カキ属 PLC.SS 1600 試料2

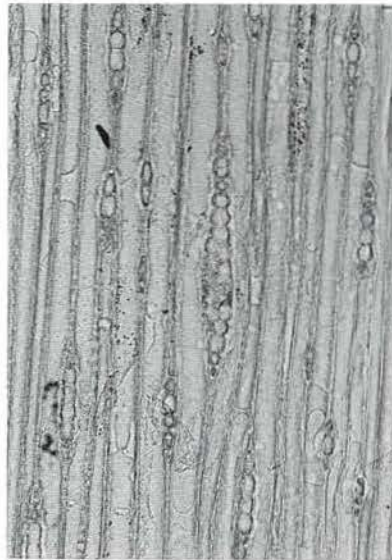


史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石

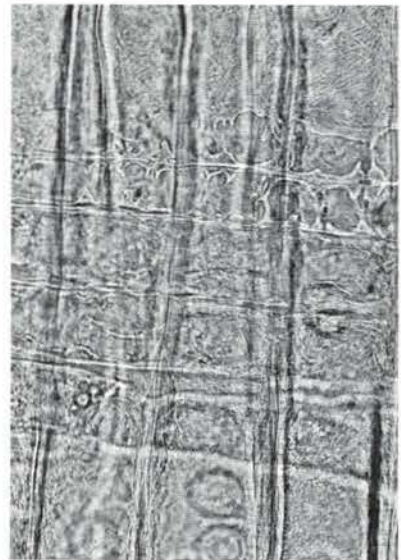
- 5 : イネ科 PLC.SS 1602 試料3
- 6 : サジオモダカ属 PLC.SS 1608 試料7
- 7 : ナデシコ科 PLC.SS 1599 試料2
- 8 : ペニバナ属近似種 PLC.SS 1606 試料3
- 9 : カラマツソウ属 PLC.SS 1605 試料3



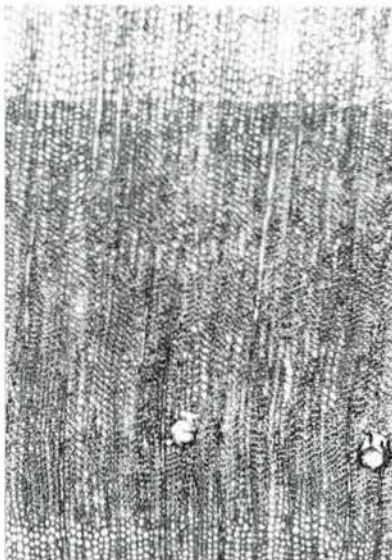
1a.アカマツ(横断面) 材9 bar : 0.5mm



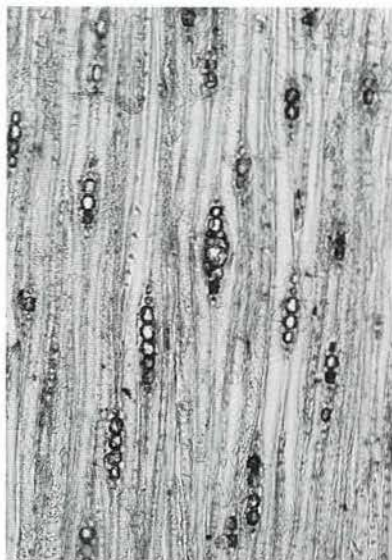
1b.同(接線断面) bar : 0.2mm



1c.同(放射断面) bar : 0.05mm



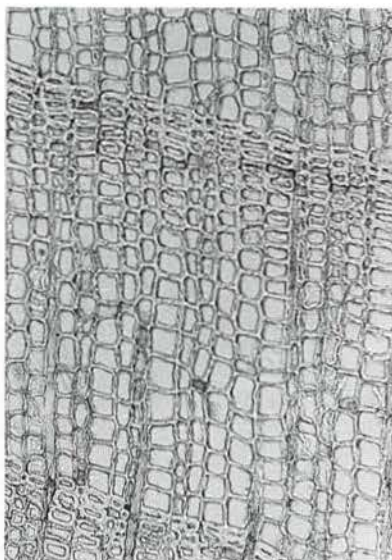
2a.クロマツ(横断面) 材10 bar : 0.5mm



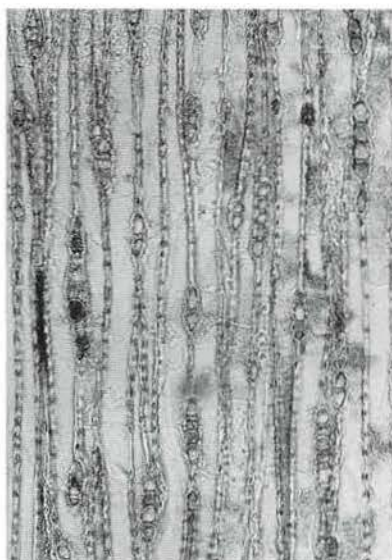
2b.同(接線断面) bar : 0.2mm



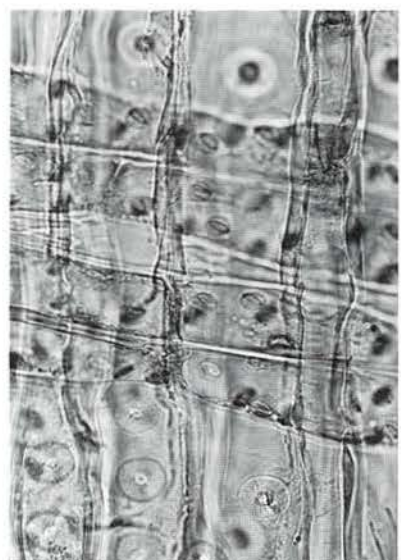
2c.同(放射断面) bar : 0.05mm



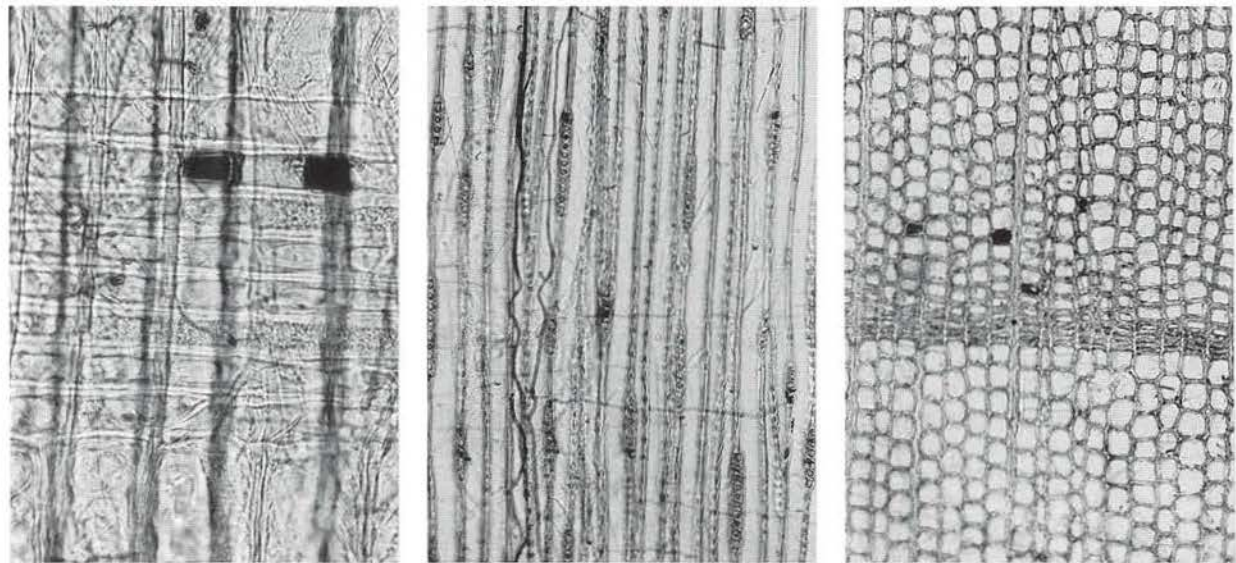
3a.スギ(横断面) 材5 bar : 0.2mm



3b.同(接線断面) bar : 0.2mm

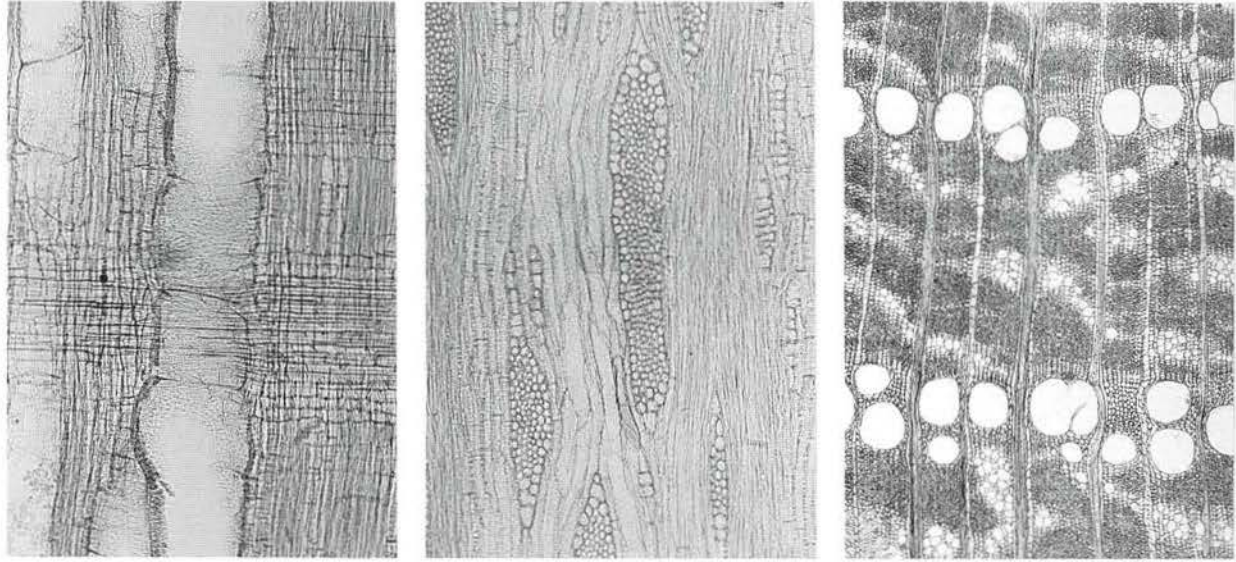


3c.同(放射断面) bar : 0.05mm



4a. *C. 杉* 属 (横断面) 材3 bar : 0.2mm

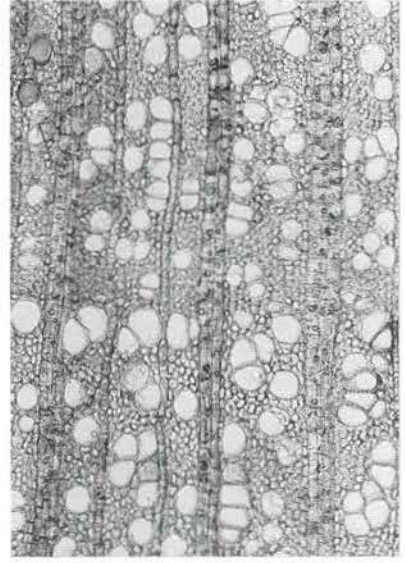
4b. 同 (接線断面) bar : 0.2mm



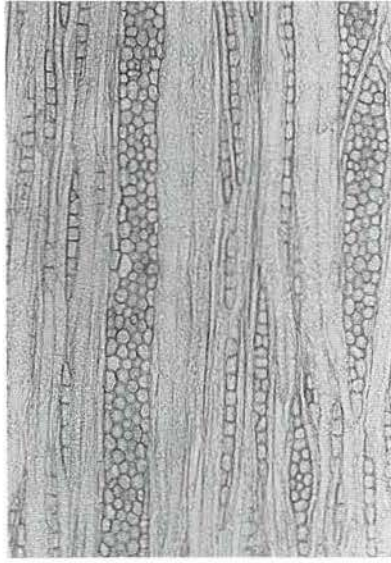
5a. *E. 工ノキ* 属 (横断面) 材2 bar : 0.5mm

5b. 同 (接線断面) bar : 0.2mm

5c. 同 (放射断面) bar : 0.2mm



6a. *S. サクヲ* 属 (横断面) 材4 bar : 0.2mm



6b. 同 (接線断面) bar : 0.2mm



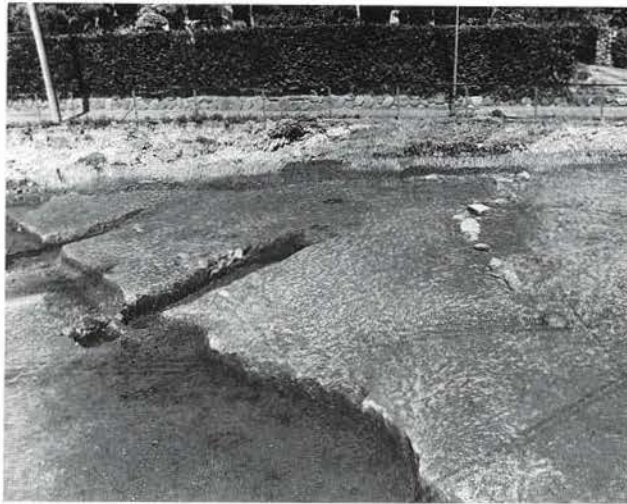
6c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



1. 永福寺跡全景(右下下が調査地)

2. 調査地全景

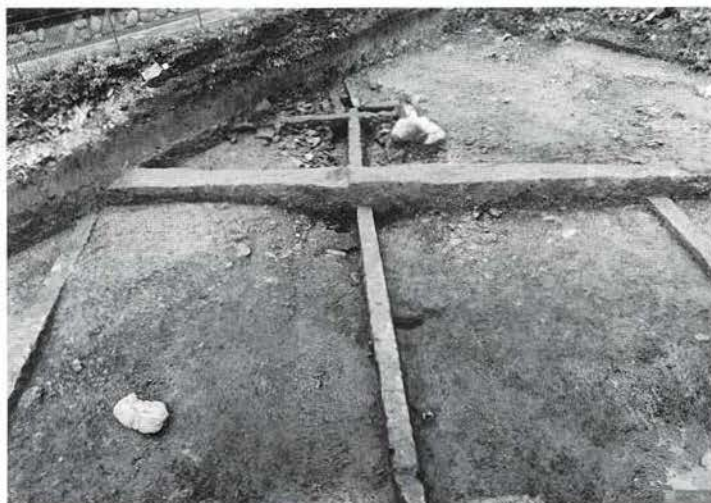




1. 宝永スコリア検出面(手前の段差は釣堀跡)



2. IV期-1面 取水遺構



3. IV期-2面 取水遺構検出状況

4. IV期-2面 取水遺構



6. IV期-2面 取水遺構周囲全景



5. IV期-2面 取水遺構





1. IV期-2面 岬部(東から)



2. IV期-2面 岬部石組



3. IV期-2面の岬部と二階堂、薬師堂との位置関係



4. IV期-3面 全景(西から)

5. IV期-3面 全景



6. IV期-3面 岬部(南より)



1. 岬先端部の景石



2. 岬東部の景石



3. 岬つけ根の景石



4. 岬先端部土層断面



5. 塔婆出土状況(Ⅳ期-2面)



6. 木製蓮出土状況(Ⅳ期-2面)



7. 笹塔婆「南無大日如来」(Ⅳ期・2面下)



8. T6・7、Ⅳ期-3面汀(西より)



9. T8、岬東部地山面(東より)



10. T1、土層断面(西より)



1. 調査地全景(西側の山腹より)



2. 調査地全景(南西より)



3. 岬部風景(北より)



4. 取水溝風景(北東より)



5. 取水溝風景(南より)

6. 取水溝、注ぎ口の景石



图版42





42-16



42-15



38-36



40-42



38-22



40-16



38-21



40-11



42-21



40-7



40-3



40-18



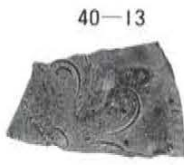
40-16



40-10



40-8



40-13



40-14



40-9



40-41



40-19



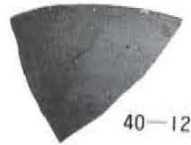
40-1



40-20



38-24



40-12



40-17



44-13



38-7



40-7



40-6



42-43



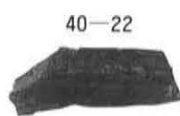
44-16



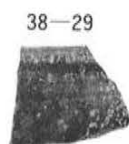
38-31



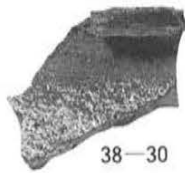
38-34



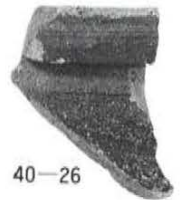
40-22



38-29



38-30



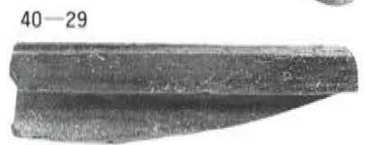
40-26



38-35



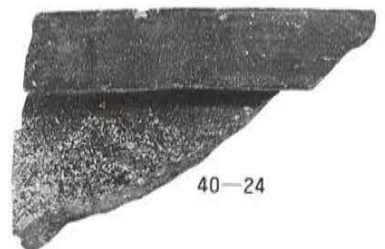
44-15



40-29

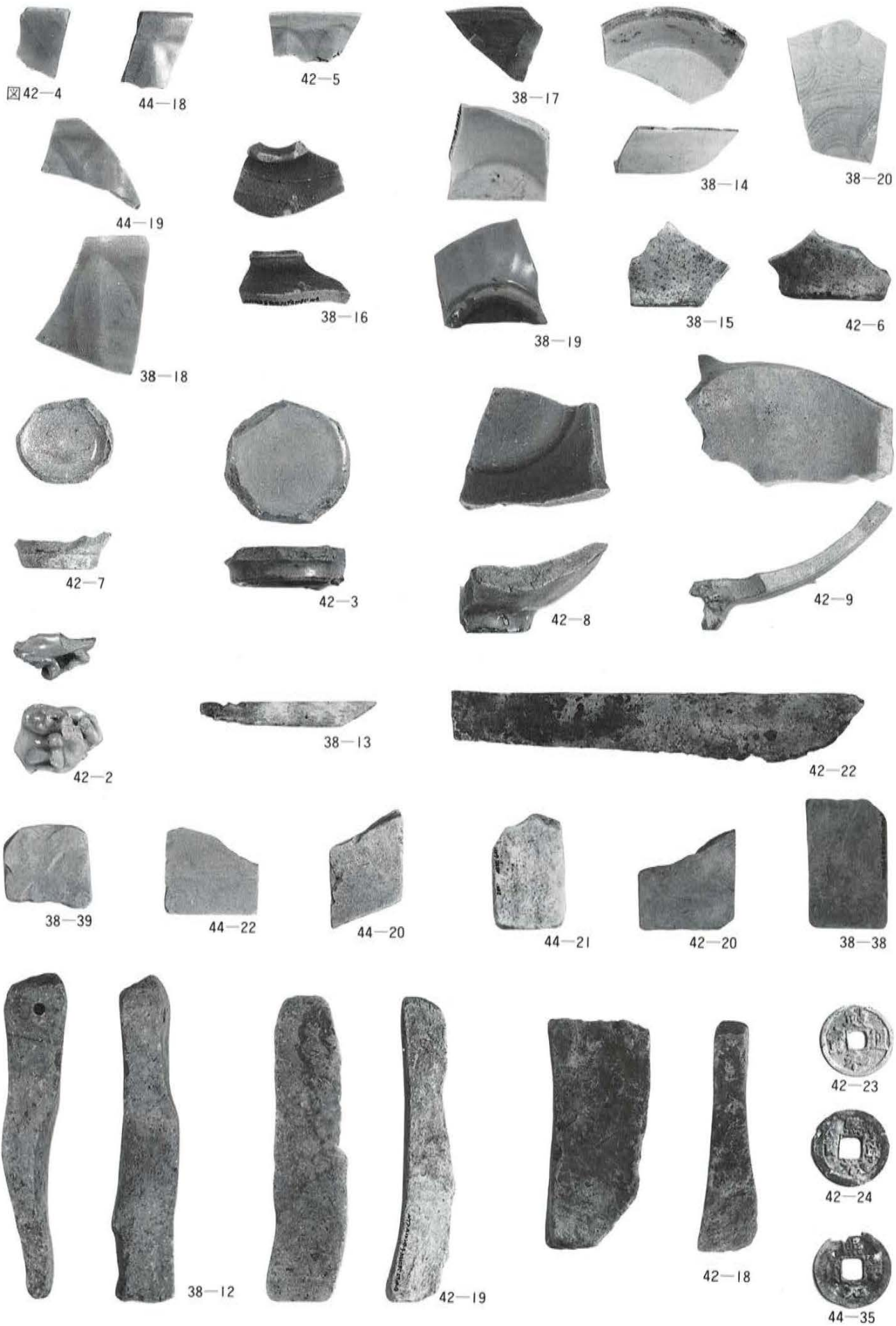


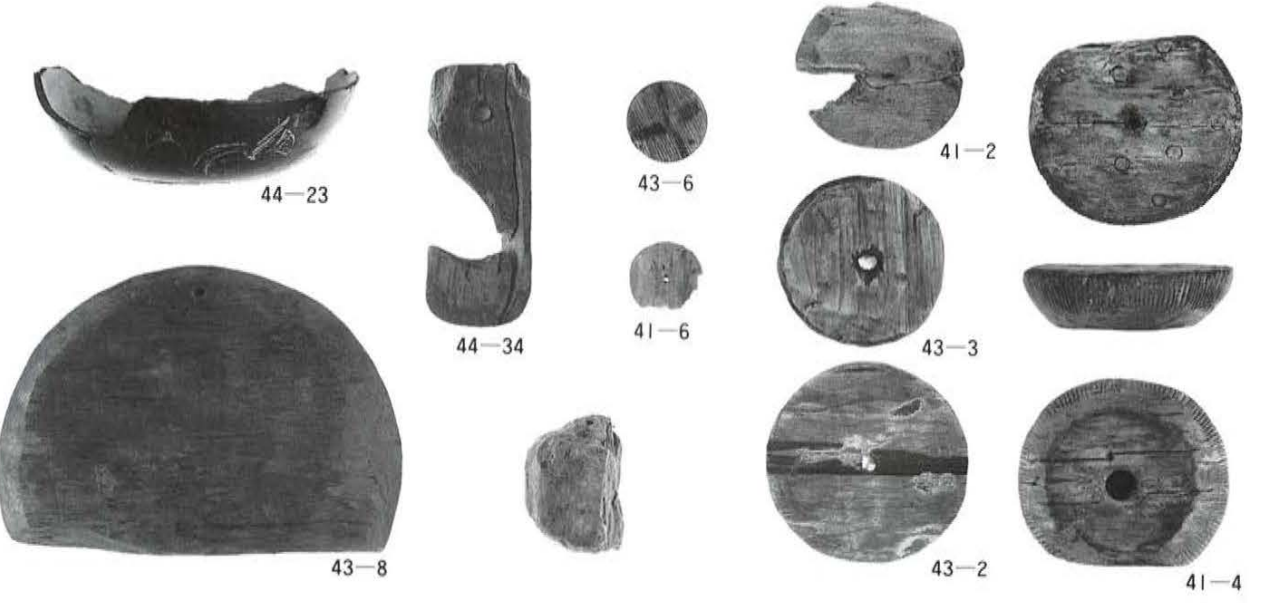
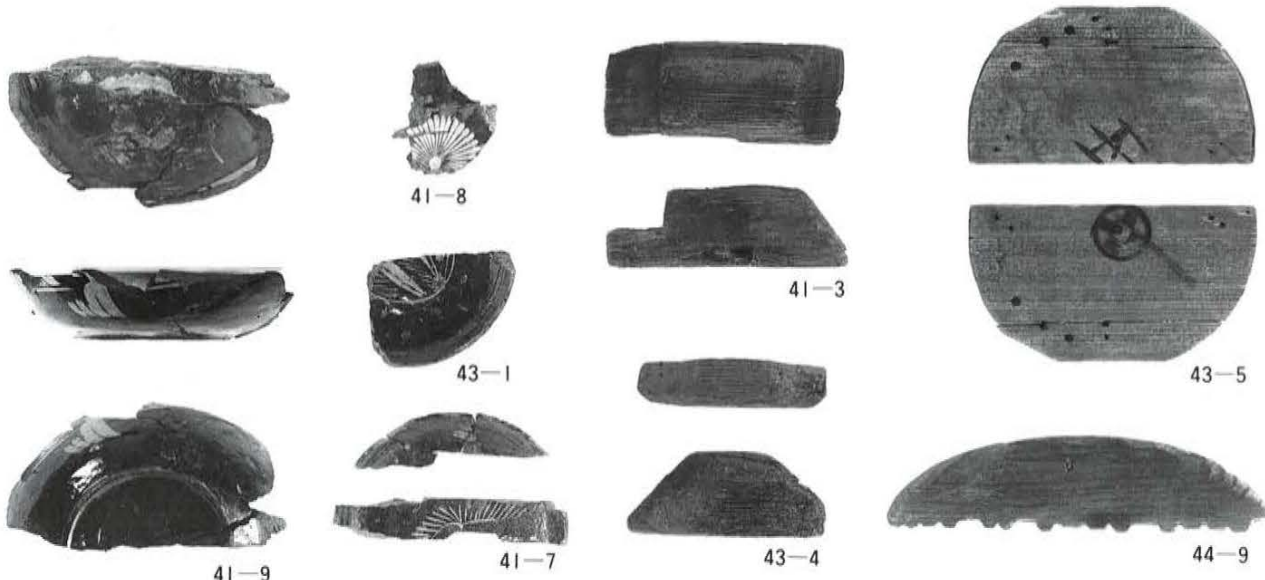
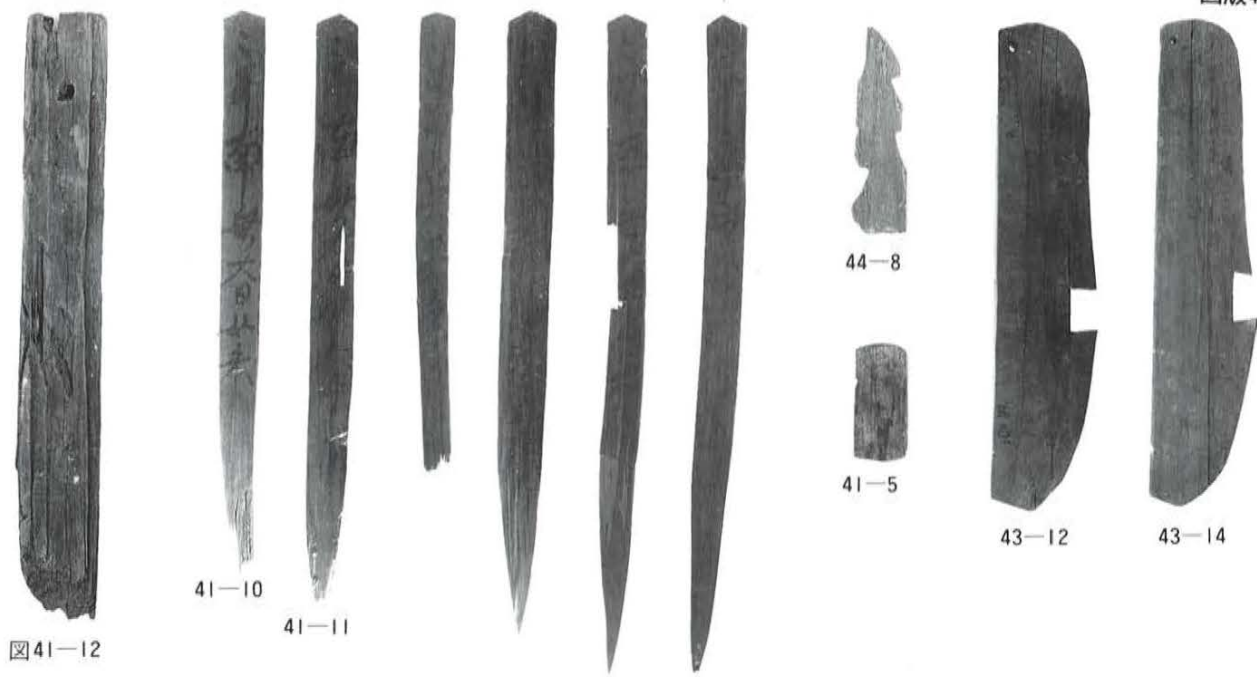
44-14

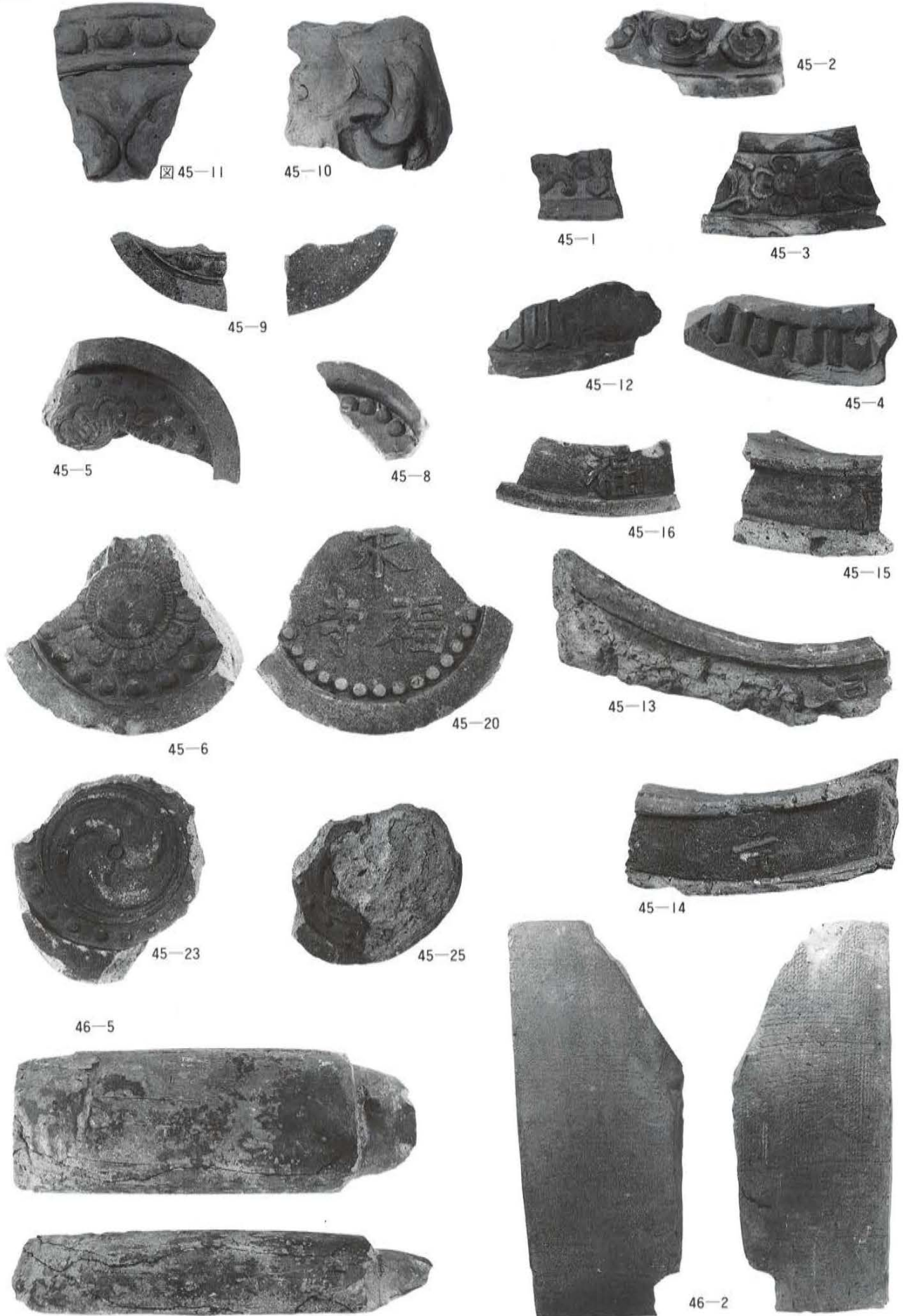


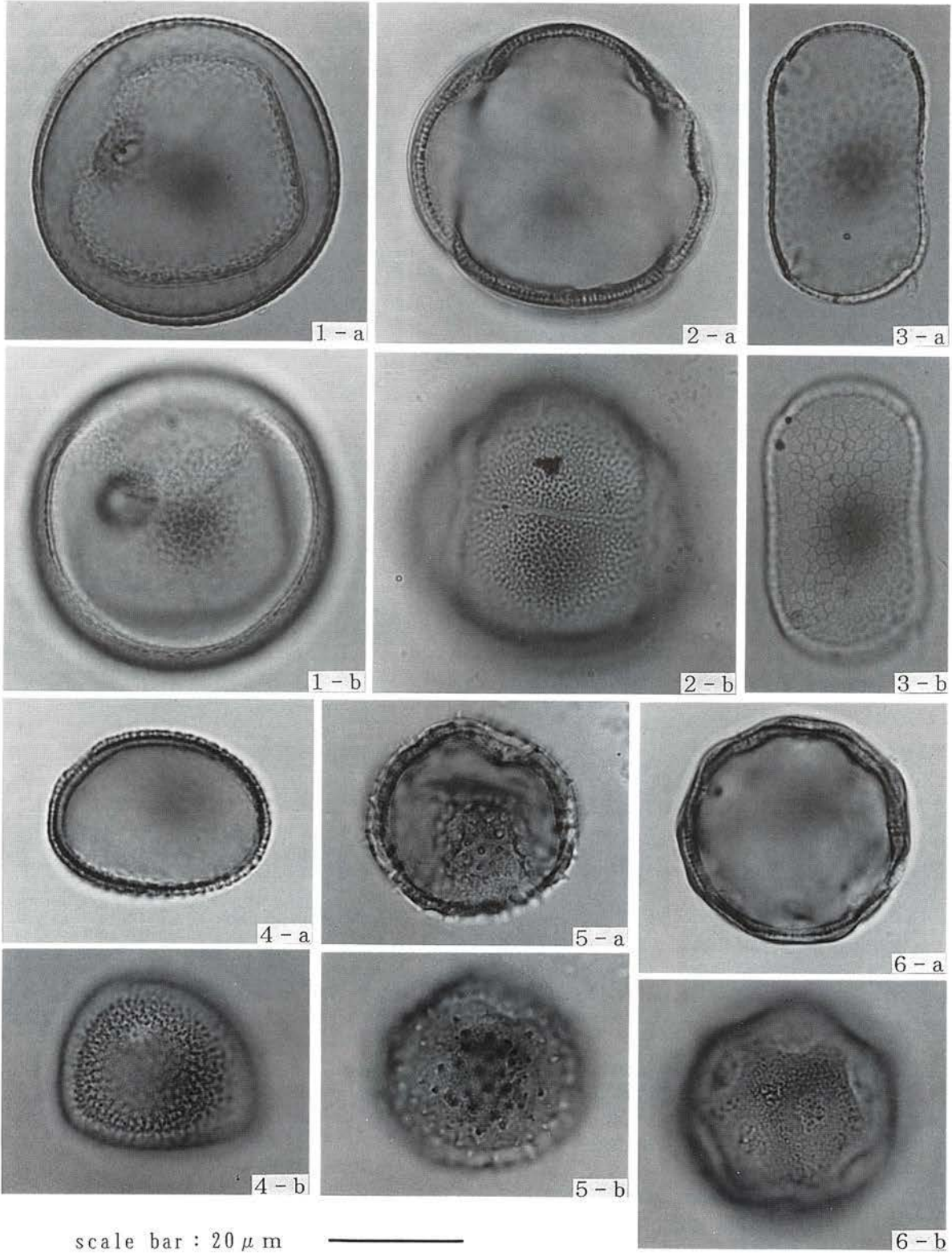
40-24

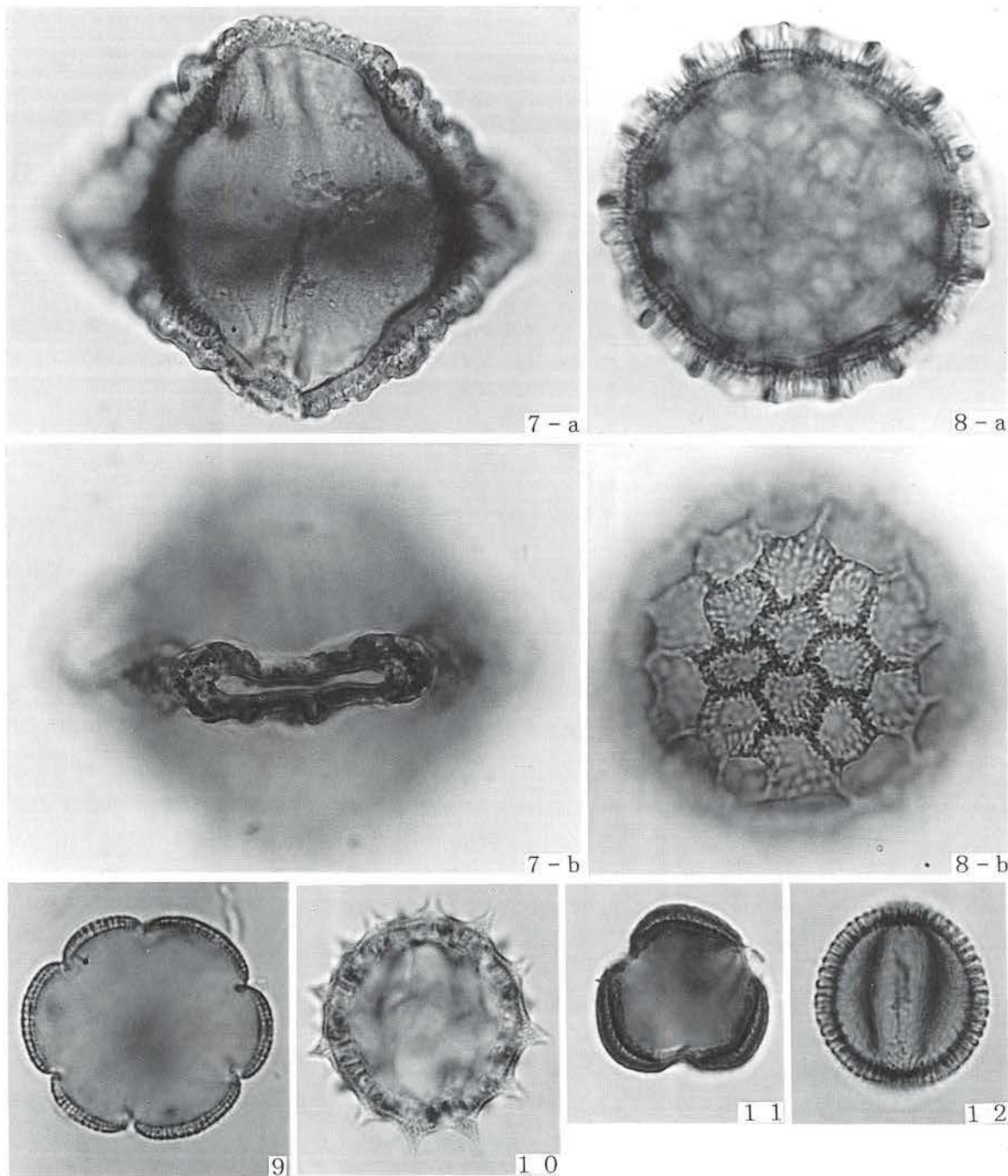
图版44











scale bar : 20 μ m

7 : —————

8 ~ 12 : —————

史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石

7 : ヒシ属 PLC.SS 1759 試料22

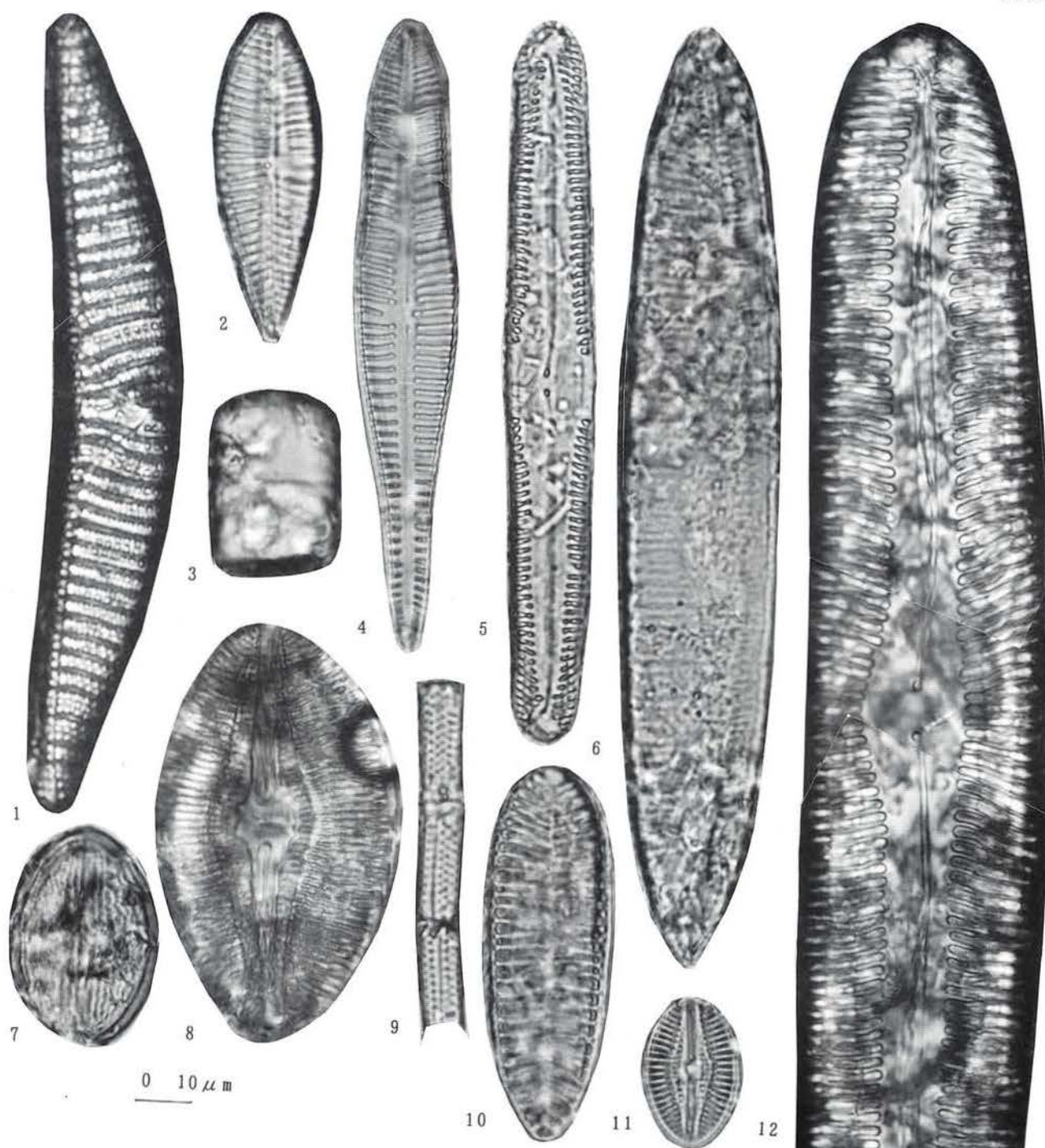
8 : サナエタデ節-ウナギツカミ節 PLC.SS 1762 試料22

9 : シソ科 PLC.SS 1761 試料22

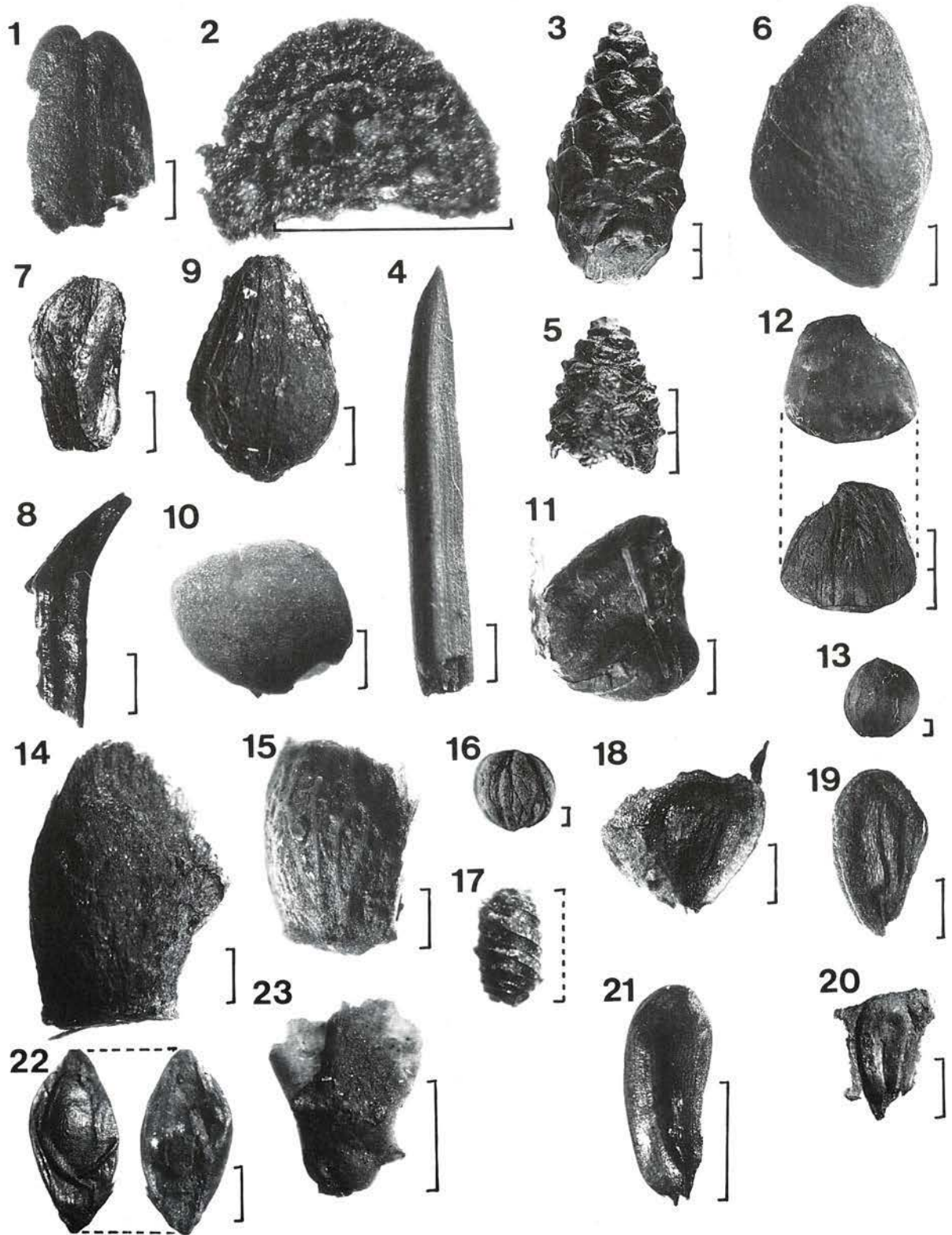
10 : キク亜科 PLC.SS 1752 試料20

11 : ヨモギ属 PLC.SS 1750 試料20

12 : アブラナ科 PLC.SS 1755 試料21

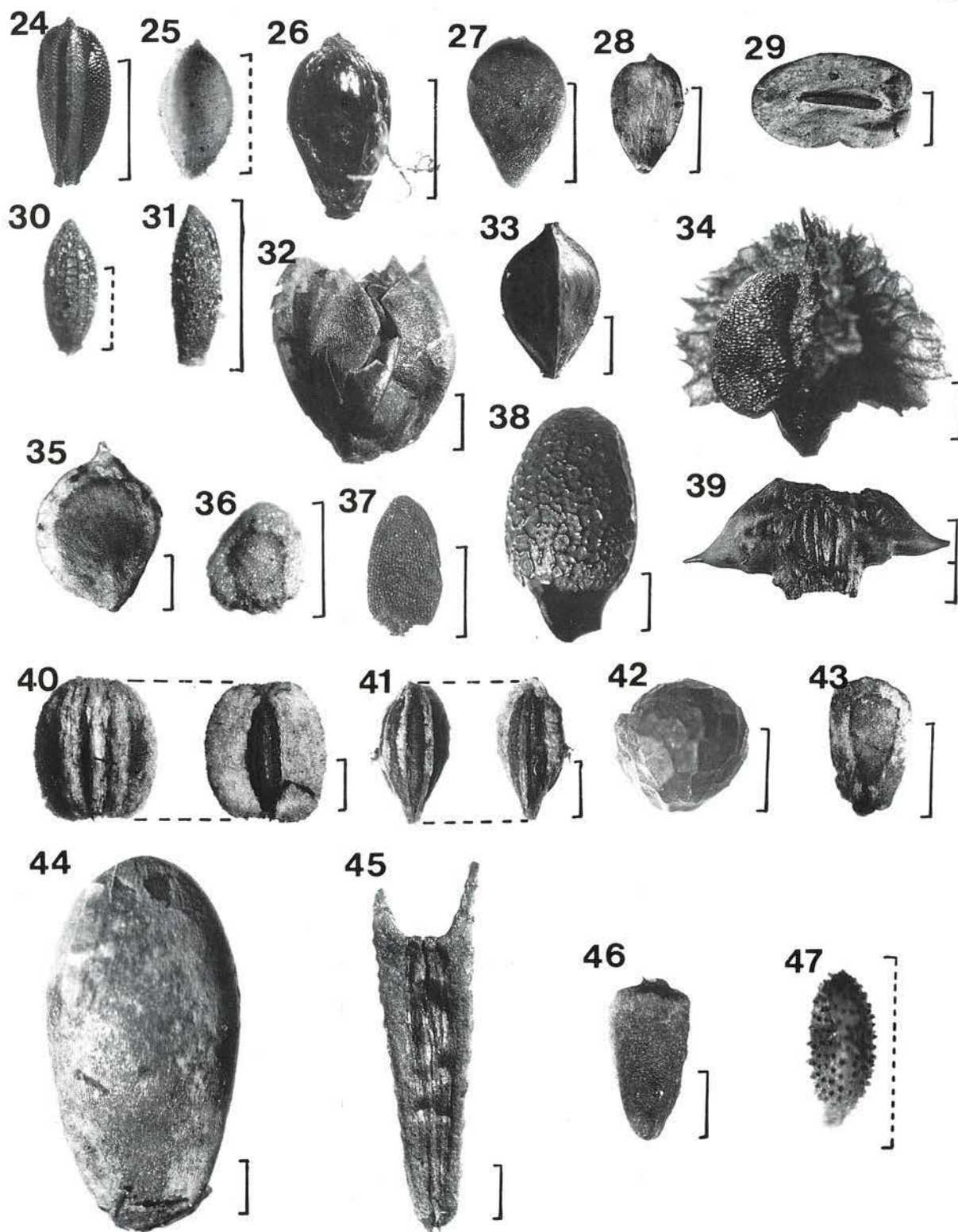


1. *Epithemia sorex* (sample no.1) 2. *Gomphonema gracile* (sample no.5) 3. *Melosira lineata* (sample no.3) 4. *Gomphonema clavatum* (sample no.6) 5. *Pinnularia braunii* (sample no.1) 6. *Nitzschia plana* (sample no.4) 7. *Cocconeis placentula* (sample no.3) 8. *Diploneis subovalis* (sample no.1) 9. *Melosira granulata* (sample no.5) 10. *Surirella tenera* (sample no.1) 11. *Diploneis elliptica* (sample no.2) 12. *Pinnularia gibba* (sample no.7)



永福寺池の大型植物化石1 (スケールは1mm、3、5、12は1cm、17は0.5mm)

1. モミ属、葉 2、4. クロマツ、葉 3. クロマツ、球果 5. クロマツ、雌花 6. マツ属、種子 7. スギ、種子
 8. スギ、葉 9. アカシダ、果実 10. エノキ、内果皮 11. ケヤキ、果実 12. クリ、果実破片 13. サクラ属サクラ節、
 核 14、15. イロハモミジ、果実 16. ミズキ、内果皮 17. シヤジクモ属、卵孢子 18. オモダカ、果実 19. ヘラオモダカ、
 果実 20. アギナシ、果実 21. オモダカ科、種子 22. イスビエ近似種、穎果、23. イネ類、基部



永福寺池の大型植物化石2 (スケールは1mm、39は1cm、25、30、47は0.5mm)

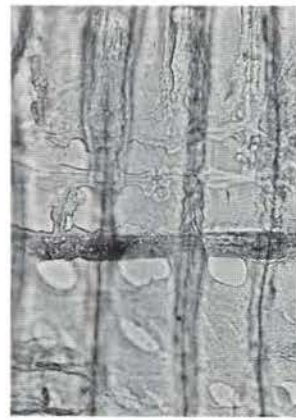
24. ヨゴメガヤツリ近似種、果実25. カヤツリグサ科、果実26. ハライ属、果実27. スゲ属A、果実28. スゲ属B、
 果実29. イボクサ、種子30. イグサ属A、種子31. イグサ属B、種子32. ミゾツバ、果実33. ソバカズラ、
 果実34. ギシギシ、果実35. キツネノボタン近似種、果実36. タガラシ、果実37. アブラナ科、
 種子38. ツリフネソウ、種子39. ヒシ、果実40. セリ、果実41. セリ科B、果実42. イヌコウジュ属、
 果実43. シロネ属、果実44. キュウリ属メロン仲間、種子45. エゾノタウコギ近似種、果実46. タカサブロウ、
 果実47. 不明A



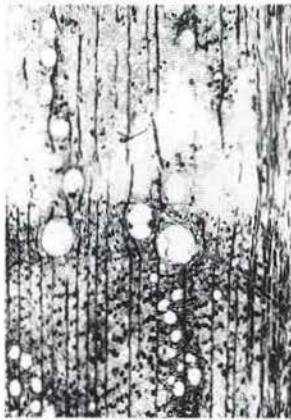
1a. マツ属複維管束 (横断面) ① bar : 0.5mm



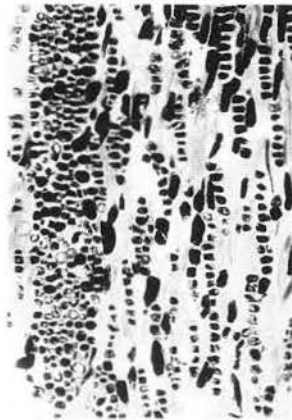
1b. 同 (接線断面) bar : 0.5mm



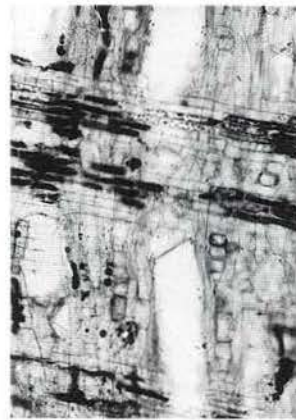
1c. 同 (放射断面) bar : 0.5mm



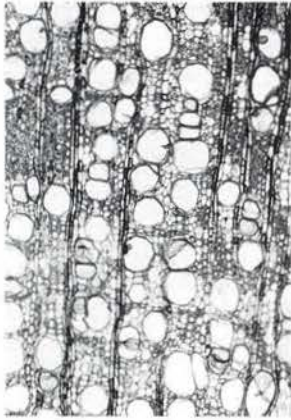
2a. クヌギ節 (横断面) ⑩ bar : 0.5mm



2b. 同 (接線断面) bar : 0.2mm



2c. 同 (放射断面) bar : 0.2mm



3a. クスノキ (横断面) ⑫ bar : 0.5mm



3b. 同 (接線断面) bar : 0.5mm



3c. 同 (放射断面) bar : 0.2mm



4a. ウツギ (横断面) ⑤ bar : 0.5mm



4b. 同 (接線断面) bar : 0.2mm



4c. 同 (放射断面) bar : 0.2mm

鎌倉市二階堂
史跡永福寺跡

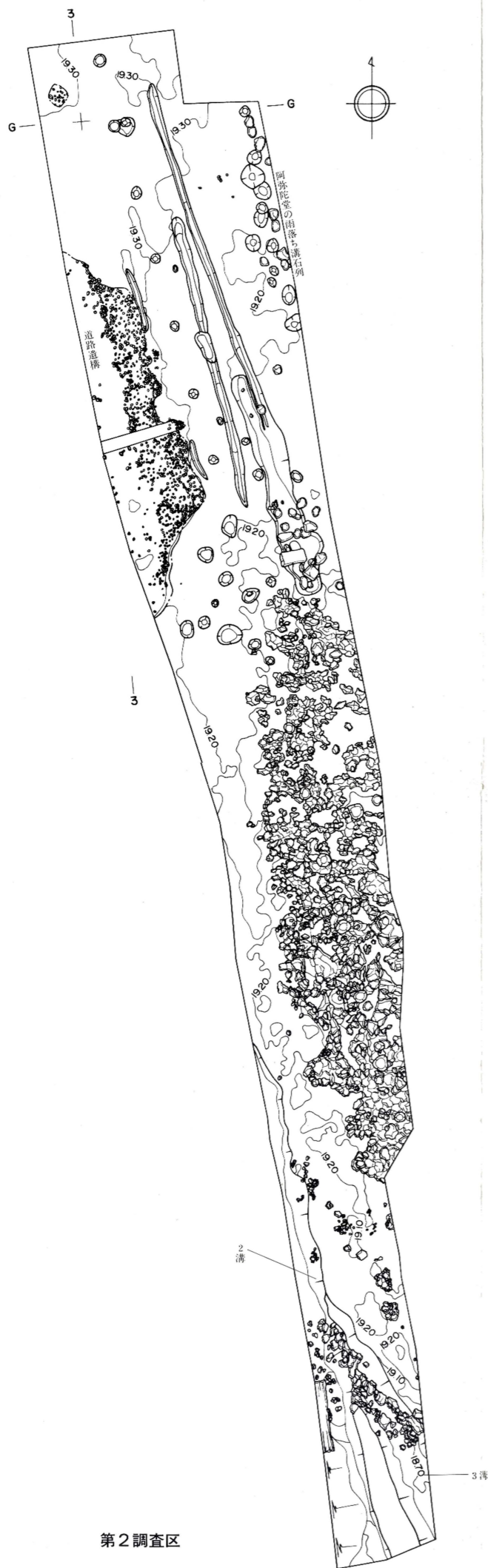
国指定史跡永福寺跡環境整備
事業に係る発掘調査概要報告書

—平成6・7年度—

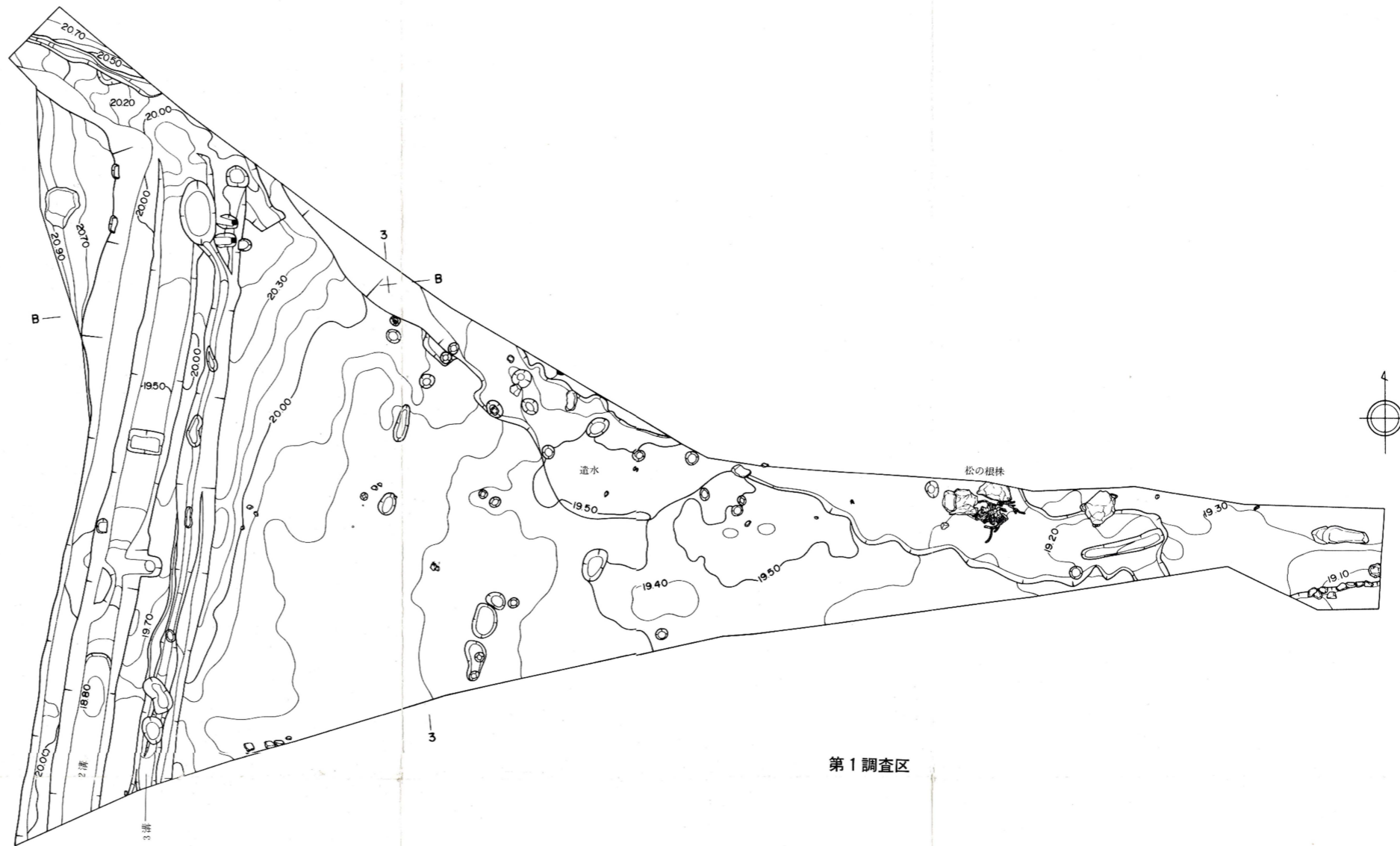
発行日 平成8年3月

編集
発行 鎌倉市教育委員会

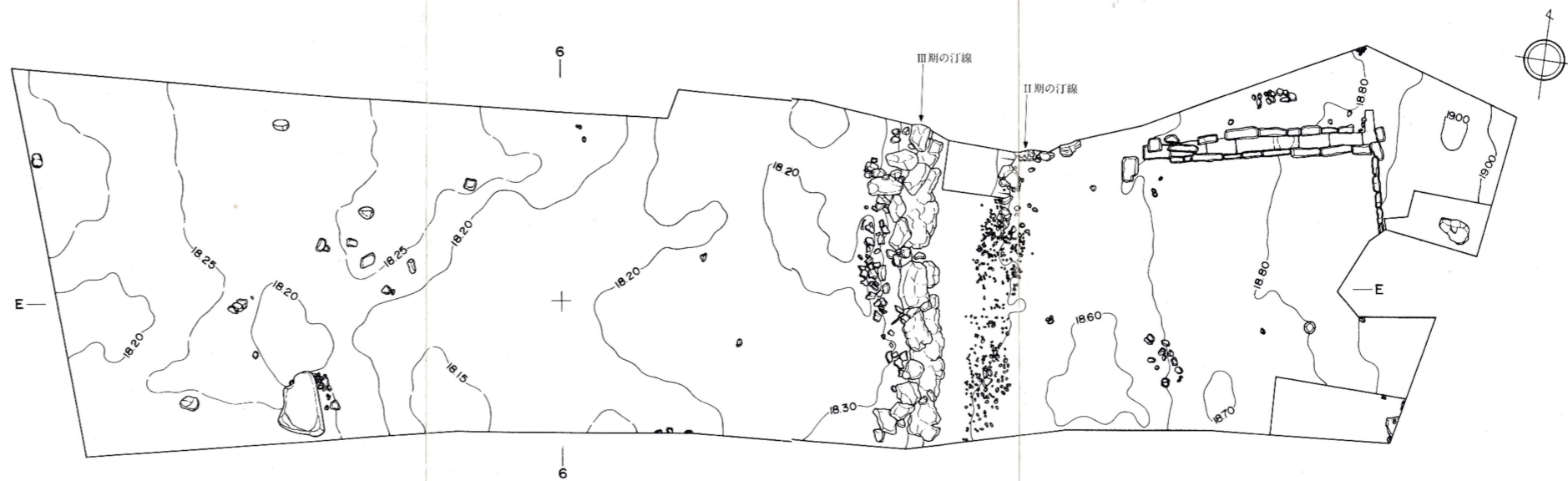
印刷 株 稲元印刷



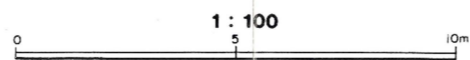
第2調査区



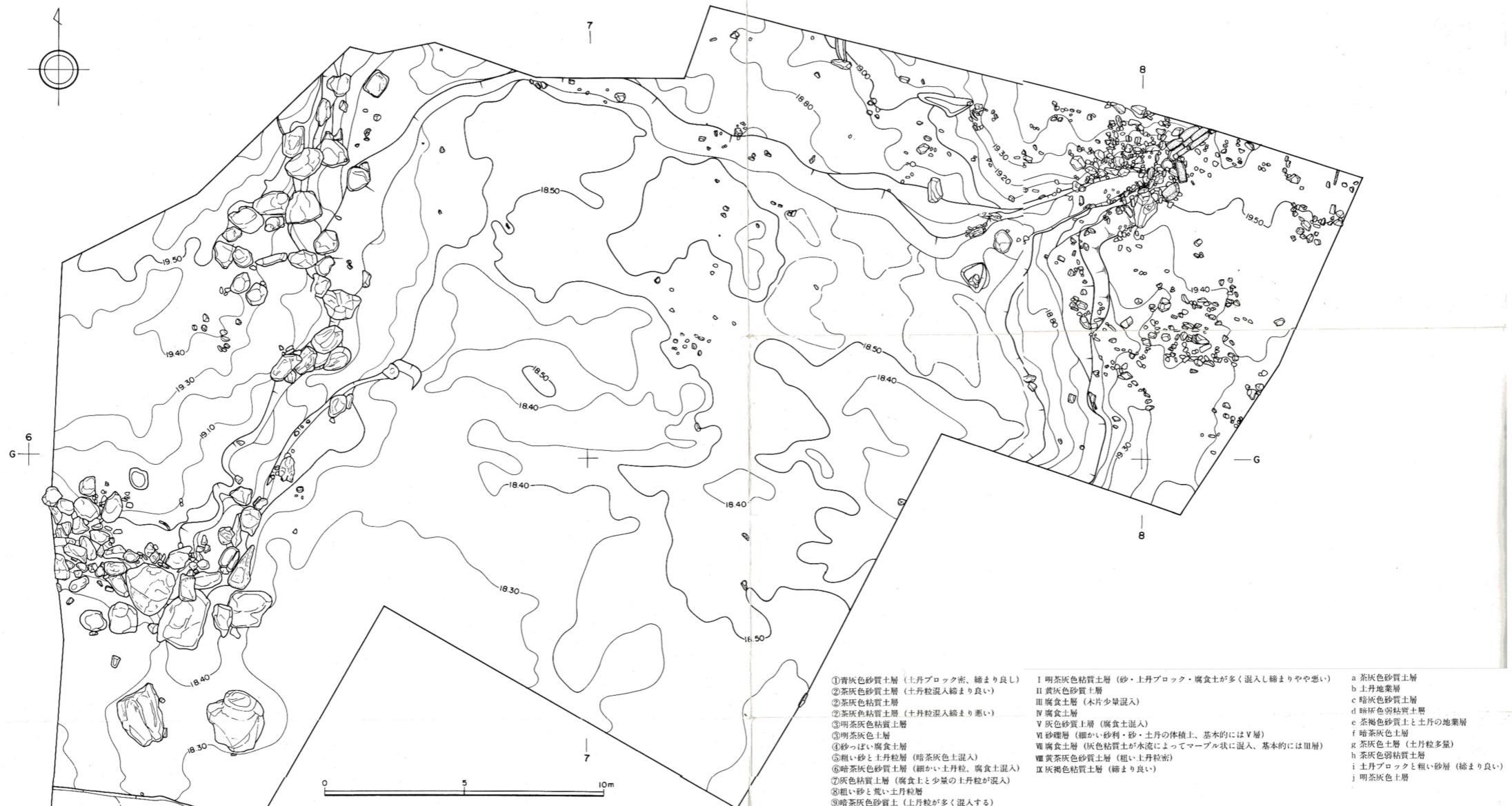
第1調査区



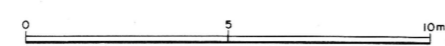
第3調査区



附図 平成6年度全測図



附図 平成7年度全測図



- ①青灰色砂質土層 (土丹ブロック密、締まり良い)
- ②茶灰色砂質土層 (土丹粒混入締まり良い)
- ③茶灰色粘質土層
- ④明茶灰色粘質土層 (土丹粒混入締まり悪い)
- ⑤明茶灰色土層
- ⑥砂っぽい腐食土層 (暗茶灰色土混入)
- ⑦暗茶灰色砂質土層 (細かい土丹粒、腐食土混入)
- ⑧灰色粘質土層 (腐食土と少量の土丹粒が混入)
- ⑨粗い砂と荒い土丹粒層
- ⑩暗茶灰色砂質土層 (土丹粒が多く混入する)
- ⑪黄茶灰色砂質土層 (土丹ブロック締まり悪い)
- ⑫暗茶灰色粘質土層
- I 明茶灰色粘質土層 (砂・土丹ブロック・腐食土が多く混入し締まりやや悪い)
- II 黄茶灰色粘質土層
- III 腐食土層 (木片少量混入)
- IV 腐食土層
- V 灰色砂質土層 (腐食土混入)
- VI 砂礫層 (細かい砂利・砂・土丹の体積上、基本的にはV層)
- VII 腐食土層 (灰色粘質土が水流によってマール状に混入、基本的にはIII層)
- VIII 黄茶灰色砂質土層 (粗い土丹粒密)
- IX 灰褐色粘質土層 (締まり良い)
- a 茶灰色砂質土層
- b 土丹地層層
- c 暗灰色砂質土層
- d 暗灰色粘質土層
- e 茶褐色砂質土と土丹の地層層
- f 暗茶灰色土層
- g 茶灰色土層 (土丹粒多量)
- h 茶灰色粘質土層
- i 土丹ブロックと粗い砂層 (締まり良い)
- j 明茶灰色土層

